十字架の時

――アメリカ黒人奴隷制の経済学

Time on the Cross: The Economics of American

Negro Slavery¹

(旧邦題:『苦難の時』)

ロバート・ウィリアム・フォーゲル& スタンリー・L・エンガーマン

山形浩生 訳(2022.06-10)

¹ © 1974 Little Brown & Co.

メアリー・エリザベス・モーガンの長女に捧ぐ: 彼女は昔から、ブラック・イズ・ビューティフルなのだと知っていた

出版社メモ

本書は『十字架の時』の本巻である。

一般読者や学生の便宜をはかり、『十字架の時』は二巻に分けてある。この本巻は「アメリカ黒人奴隷制の経済学」という副題で、『十字架の時』の全文と、重要なグラフ、地図、表、索引、謝辞を含めた。

『十字架の時』補巻は「証拠と手法」という副題で刊行された。この補巻は研究のあらゆる出所や参考文献に加え、『十字架の時』執筆の技術的、種横笛、理論的な根拠を詳細に論じた包括的な補遺を掲載した。

十字架の時	. 1
——アメリカ黒人奴隷制の経済学	. 1
Time on the Cross: The Economics of American Negro Slavery	. 1
出版社メモ	<i>ii</i>
目次	iv
プロローグ 奴隷制と数量経済史革命	. 1
第1章 アメリカ奴隷制の国際的な文脈	. 8
大西洋奴隷貿易の起源	. 8
アメリカ合衆国での奴隷制の推移1	12
奴隷解放への道1	18
第2章 職能と市場2	24
職能の構造	24
奴隷の地域間再分配2	27
奴隷の市場	33
第3章 利潤と見通し	37
課題	37
利潤の水準と奴隷制の資本主義的性格4	42
奴隷の飼育繁殖はウソである4	49
アメリカ独立革命後と南北戦争前夜の奴隷制の経済的有効性	54
都市部の奴隷制と「自然の制約」理論	59
奴隷保有階級の楽観的な経済見通し	64

第4章 収奪の解剖学	67
医療	. 74
衣食住	. 68
家族	. 79
処罰、報酬、徴発	. 90
第5章 奴隷制の経済的糾弾の起源	99
道徳性から経済学へ	. 99
ヒントン・ローワン・ヘルパー:マクロ的な証拠1	101
フレデリック・ロー・オルムステッド:ミクロ経済的な証拠1	106
クレイ、ヘルパー、オルムステッドの根本的な想定1	111
ジョン・エリオット・ケアンズ:経済学者による再定式化1	114
第 6 章 強制労働のパラドックス	121
奴隷農業の相対的な効率性1	121
奴隷労働の質と人種差別1	132
黒人は無能という嘘がしつこく残る理由1	141
人間に財産権を設定する経済的な意味1	148
南部における経済成長の道筋 1840-1860 年1	158
エピローグ 現代に向けての含意	165
謝辞	170
補遣 A:奴隷制解釈における科学 人道主義 イデオロギー	174

図目次

図	1	新世界における奴隷輸入の分布、1500-1870	9
図	2	時代と地域ごとの黒人奴隷輸入	10
図	3	黒人奴隷の主な輸入先、1451-1870 (単位: 千人)	11
図	4	4 地域における黒人の総人口比	13
図	5	アメリカ黒人人口の中の、外国生まれの黒人比率 1620-1860	14
図	6	10年毎の北アメリカの奴隷輸入 1620-1860年	15
図	7 5	実際の北アメリカ黒人人口と、西インド諸島の人口動態だった場合に予想され	いる
	Ë	黒人人口推移	16
図	8	1825 年黒人人口分布 (奴隷と自由黒人) と、1500-1825 年奴隷輸入分布との比	比較
			17
図	9	西半球の奴隷分布、1825年	18
図	10	成人男性奴隷の職業分布 (1850頃) と全成人男性の職業分布 (1870頃) の比較	24
図	11	奴隷人口の分布、1790年と1860年	28
図	12	地域間の奴隷の移動、1790-1860年	29
図	13	奴隷転入州の奴隷人口推移と、全国平均増加率の下での予想推移	29
図	14	ニューオーリンズ販売奴隷の年齢分布と、東西移住した全奴隷の年齢分布と	比較
			32
図	15	旧南部での年齢別男奴隷相対価格の平均	45
図	16	旧南部における年齢別男奴隷価格の分布	45
図	17	旧南部での年齢別男奴隷の年間純収入、1850年頃	46
図	18	年齢、性別の奴隷年間純収入、1850年頃、旧南部	47
図	19	年齢、性別の奴隷価格、1850年頃、旧南部	47
図	20	女奴隷価格を出産能力価値と畑仕事能力価値とで分ける、新南部	51
図	21	女奴隷価格を出産能力価値と畑仕事能力価値とで分ける、旧南部	51
図	22	年間純収入を、年齢ごとに出産能力と畑作業とで分けた結果、旧南部	52
図	23	アメリカの実質奴隷価格指数、1772-1810年	55
図	24	奴隷需要のトレンド指数、1772-1810年	55
図	25	綿生産のトレンド、1791-1861 年	56
図	26	綿価格のトレンド、1802-1861 年	57
図	27	綿価格のトレンド価値からの逸脱、1802-1861 年	58
义	28	綿の需要と供給指数の比較	59

図 29 南北戦争がなかった場合の奴隷価格の予想価格、1881-1890年	61
図 30 奴隷価格と南部三都市の奴隷人口の十年単位変化率	62
図 31 都市部と地方部の奴隷需要指数	63
図 32 奴隷所有者の楽観指数、1830-1860年	65
図 33 1860 年奴隷の平均日量食品消費と 1879 年総人口の日量食品消費量の比較.	70
図 34 奴隷食生活の栄養価値:1860 年奴隷の各種栄養素平均日量摂取量を現代	の推奨
日量摂取量の%で示したもの	71
図 35 大農園での奴隷人数、奴隷住戸一棟あたりの人数、1860年	72
図 36 アメリカ奴隷と各地の自由人の誕生時期待余命、1830-1920 年	78
図 37 初産年齢の分布、奴隷母親の年齢別	86
図 38 初産と、その後の出産の季節分布比較	87
図 39 奴隷の夫と妻の年齢差の分布 (夫年齢から妻の年齢を引いたもの)	87
図 40 ベネット・H・バロウ農園での 1840 年 12 月から 2 年間にわたる鞭打ち	回数の
分布	90
図 41 奴隷のライフサイクルにわたり、各年齢で接収された収入の平均蓄積個	晒値 (期
待現在価値)	96
図 42 南部州の農園と北部州の農園の効率性比較、1860年	122
図 43 規模別の南部農園効率性比較、1860 年	122
図 44 農園の規模別住民奴隷比率	123
図 45 旧南部州農園と、北部や新南部州農園との効率性比較	124
46 農園規模別の白人監督保有農園比率	127
表 1 奴隷解放年表 1772-1888 年	21
表 2 1907 年 NY 市社会福祉局が成人労働者向けに推奨した衣服と成人男奴隷	め「典
型的」支給衣服の比較	73
表 3 1850年大規模運営による収入損益概算 (単位 1850年百万ドル)	157
表 4 1840年と 1860年の地域別一人あたり所得 (1860年価格)	159
表 5 1860 年南部の一人あたり所得の相対水準	161
表 6 3 つの指標で見る 1860 年南部の工業化相対水準	164

長年にわたる黒人の奴隷化とそれを終わらせた南北戦争は、アメリカの十字架にかかった時代だった。アメリカの過去で恥の感覚を引き起こす側面があるとすれば、それは奴隷制だ。そして第一次世界大戦、第二次世界大戦を含め、我が国の歴史上で南北戦争ほどアメリカ人の命を奪い、経済を荒廃させ、国の存続を危うくした戦争はない。南北戦争前の緊張を生み出し、アメリカ史最悪のホロコーストへと爆発した、経済、政治、社会的な力をあらわにしようという学者たちの欲望は、容易に理解できるものだ。

奴隷経済の仕組みについては、莫大な文献が蓄積されている。何百人もの歴史学者が、この制度のほぼあらゆる側面を検討してきた。多くの点について学者間で意見の対立は見られるが、広いコンセンサスがだんだん生まれてきた。20世紀半ば頃には、このコンセンサスはあまりに繰り返されすぎて、もはや伝統的な解釈の地位を獲得してしまったほどだ。この解釈は、アメリカ国内のほとんどの高校や大学の講義で教えられている。そして本書の読者のほとんども、この見方を受け容れている。

だが奴隷制の伝統的な解釈は、計量的な手法を歴史問題に適用する訓練を受けてきた、歴史学者や経済学者たちによって、15 年近くにわたり激しい批判的な見直しを受けてきたという点は、あまり一般に知られていない。このレビューは、大量の数値データ処理を伴う。こうしたデータはかなり前からあったが、それを系統的に分析解釈するための手法は、第二次世界大戦終結までは完成しなかった。その後、経済学、統計学、応用数学の急速な進歩と、高速コンピュータの普及で、長きにわたりだれも知らない文書館にしまいこまれていた情報が、新世代の学者たちに使えるようになった。

こうした新しい手法と、これまで無視されてきた情報源に基づくレビューは、伝統的な 奴隷制の描かれ方における最も重要な主張を否定するものとなっている。過去の誤りを正 すのも重要だが、この新しい情報が黒人の拘束の条件に新しい光を当てたのも重要だ。検 討はまだ続いているが、奴隷経済の実際の仕組みをめぐる、主要な特徴が明確になるだけ の研究は完了している。そこから出てきた再現は、一般的な信念とあまりに対立するもの であり、その意味合いは当時の問題を理解するにあたり、あまりに核心的なものなので、こうした新しい発見はもはや、人目につかない学術誌のページにとどめておくべきではな いと思う。

以下は、奴隷経済の伝統的な描かれ方に対する主な訂正点となる。

- 1. 奴隷制は、自分の最高の経済的利益を理解できない、あるいはそれに無関心な農園 主たちが、不合理に温存していただけの仕組みではない。奴隷の購入は一般にきわ めて儲かる投資であり、工業におけるもっとも傑出した投資機会に比べても高い収 益率をもたらした。
- 2. 奴隷制は、南北戦争前夜でも経済的に滅びかけたりはしていなかった。戦争その他の政治的な介入がなければ、経済的な力だけで間もなく奴隷制は終わったはずだという証拠はない。その正反対だ。南北戦争が近づくにつれて、経済システムとしての奴隷制は、これ以上はないほど強力であり、トレンドはそれをむしろ強化しようとするものだった。
- 3. 奴隷所有者たちは、南北戦争に先立つ十年で、奴隷制の未来について悲観的になどなっていなかった。分離主義運動の台頭は、楽観論の波と共にやってきた。南北戦争前夜には、奴隷所有者たちは空前の繁栄時代が到来するものと予想していた。
- 4. 奴隷農業は自由農業に比べて非効率ではなかった。大規模耕作、効果的なマネジメント、労働と資本音集約的な活用で、南部の奴隷農業は、北部の家族農業システムに比べて35%効率が高かった。
- 5. 典型的な奴隷の農夫は、怠惰でも無能でも非生産的でもなかった。平均で見れば、白人の農夫よりもしっかり働いて、効率も高かった。
- 6. 都市部での奴隷制のたどった道は、奴隷制が工業システムとは相容れないとか、どれは工業レジームに対応できないとかいう証明にはならない。工業に導入された奴隷は、その勤勉さと効率性で、自由労働者より優れていた。都市部での奴隷需要は、下がるどころか、地方部にくらべてもっと大きく高まっていた。
- 7. 奴隷をはらませる、性的に収奪する、性的な乱れにより黒人家族が破壊されたというのはウソだ。奴隷制の下では、社会組織の基本単位は家族だった。農園主は奴隷家族の安定性を奨励するのが経済的に最も利益にかなうことだったし、ほとんどはそれを実践していた。ほとんどの奴隷販売は、家族をまとめて販売するか、あるいは通常は家を離れる年齢になった個人を売るものだった。

- 8. 奴隷たちの生活の物質的 (心理的ではない) 条件は、自由な工業労働者のものと比べて遜色なかった。これは現代の基準から見て生活水準が高かったという意味ではない。単に、19 世紀前半には、自由だろうと奴隷だろうと、あらゆる労働者はつらい生活を送っていたという点を強調するにすぎない。
- 9. 奴隷は確かに、生産した収入の一部が所有者により召し上げられたという意味では 収奪されていた。だがその収奪の比率は、一般に思われていたよりもはるかに低い。 生涯にわたり、平均的な奴隷農夫は、生産した収入の90%ほどを受け取っていた。
- 10. 南北戦争以前の南部の経済は、停滞するどころかかなり急成長していた。1840-1860年の間に、一人あたり所得は、全米平均よりも南部のほうが急上昇した。1860年には、南部は当時の基準では高い一人あたり所得を実現していた。実際、イタリアほどの先進国ですら、その水準の一人あたり所得を実現するには、第二次世界大戦後を待たねばならなかった。

各種訂正をこうして部分的にまとめただけでも、伝統的な奴隷制の解釈を作り上げた人々が、なぜこれほど見当違いをしていたのか、という疑問が生じる。いまや見方が批判されている歴史家たちは、良心的で真面目な学者だった。とても知的で理解力があり、南北戦争以前の南部の歴史について、ありのままに描き出そうと苦闘した。なぜそうした人々が誤解したのかという説明は、個人的な偏見などの個別の行動に関する話に向かうものではない——もちろんときには、そうした偏見が一役買ったときもあっただろうが。それはむしろ、相当部分がもっと広い手法的な問題によるもので、特に歴史分析における数学と統計の役割の問題が大きい。というのも、新しい研究の最も重要な改訂は、専門的な数学的論点を根拠にしていて、わかりにくいにも関わらず、奴隷経済の正しい記述と解釈にとっては不可欠なものなのだ。

アメリカ経済史において、数学と統計学の手法を適用した結果大幅な改訂を受けたのは、南北戦争前の奴隷制だけではない。奴隷制の再検討は、アメリカ経済発展の歴史をすべて、しっかりした定量的な基盤の上に再構築しようという、もっと野心的な努力の一部だ。この事業に取り組む人々は「新経済史研究者」「計量経済史研究者」「数量経済史学者」と呼ばれる。この新しいアプローチを初めてしっかり定式化した表現は、1957年にアルフレッド・H・コンラッドとジョン・R・マイヤーが書いた二本の論説で提起されている。この二人は当時、ハーバード大学の若き助教授だった。これらの論文の登場以来、数学や統計学

の手法を歴史に適用しようとする学者の数は、20人に満たなかったのが、いまや数百人にのぼる。その人数が増えるにつれて、彼らの偶像破壊的な発見も増えた。

数量経済史の研究者は、アメリカ経済の発達における技術変化の役割を引き下げた。西部の定住と開発に鉄道が不可欠だったという主張を疑問視した。1830年代から1840年代初頭にかけての好況と不況は、アンドリュー・ジャクソン大統領の政策よりも、むしろメキシコとイギリスでの出来事の結果だったと主張する。そして南北戦争がアメリカの工業化を大きく加速したという主張を否定した。

今日では、新経済史の知見や手法は、ハーバード大学、イェール大学、シカゴ大学、カリフォルニア大学など、この分野の博士号保持者の大半を生み出す先進大学の大学院では、ごく普通に教えられている。だからといって、数量経済史アプローチをめぐる論争が終わったということではない。まだ有力な経済史研究者の中にも、数学的手法の有用性について大いに疑問視する人々はかなりいる。

だが「数学狂い」の最も懐疑的な批判者ですら、数量経済史学者たちが、アメリカ経済発展の理解に直接的に関係した大量のデータを探し出し、系統的に整理したことで有益な貢献を行った点は認めざるを得ない。そして、この数字への情熱がどの分野よりも精力的に行使されたのが、奴隷制の経済学研究だ。

十年以上にわたり、何十人もの学者たちが、奴隷制の運用に関連して考えられるあらゆる情報源を検討してきた。この研究で彼らは、全米文書館や各地の州文書館の深奥にまで分け入り、1850年と1860年の国勢調査員たちが集めた情報の、オリジナルの手書き表が蓄積されているところにまで入り込んだ。こうした文書は、当時存在していたあらゆる農園について、きわめて詳細な情報が出ているし、そこで生まれ、暮らし、死んだ奴隷たちについての情報もある。数量経済史学者たちは、各種南部州や一部北部州の歴史協会の文書を漁った。そこには最大級の農園主たちの家族記録や事業記録が登録されているのだ。農園主の遺産についての遺言状などの法律文書は特に有益だった。何万人もの奴隷の価格が得られただけでなく、こうした記録は黒人家族の構造的な特徴を見極めるにあたって、主要な根拠となっている。こうした証拠を探す中で、やがてユタ州のワサッチ山脈のような場所にまで出かけることになった。そこには末日聖徒キリスト教会の系譜教会が、何百という郡の裁判所から集めた遺言確定記録のマイクロフィルムを貯蔵しているのだ。

こうした探索の結果、数量経済史研究者たちは、南北戦争以前だろうとそれ以後だろうと、この問題に興味を持った人が使えたどんなものに比べても、奴隷システムの運用についてずっと完全な情報を集めることができた。こうした大量の証拠こそが、彼らの多くの新発見の源なのだ。

こうした発見の一部は、最初は本書の読者諸賢に負けず劣らず、当の数量経済史研究者

たち自身にとっても信じがたいものだった。実際、これからの章で提示される発見は、最初はあまり本気にされず、ときには全面的に否定されたりした。だが、いくら頑張ってもその予想外の発見が覆せないと、こうした学者たちはアメリカ奴隷制についての、広範かつ徹底した再解釈を余儀なくされた。

本書は、心穏やかに読める本ではない。読者のみなさんとして自制が必要になるし、こ こに出ているのが、本当に起きたことを発見したいと願う学者たちの正直な努力の結果な のだと認めねばならない。そうした自制に見合うものは得られるはずだ。というのも、私 たちが論じる結果は、人種間の関係を腐食し、毒するのに貢献してきた多くのウソを暴く だけでなく、現代の最も緊急な問題の一部を、新しい視点で見るのに役立つはずだからだ。 本書で提示される証拠を考えるにあたり、読者諸賢は数量経済史手法の長所と限界につ いて、いくつか注意書きを念頭においておく必要がある。歴史への定量手法の適用が持つ 長所は、それがあらゆる問題に白黒はっきり決着をつけてくれる、ということではない。 あらゆる問題に白黒はっきりした答があるわけではないのだ。そして原理的には白黒はっ きりした答があるはずの多くの問題は、決定的なデータ群がないので、解決できない。一 部のデータの取得は高価すぎて現実的ではないこともあるし、あるデータ群の分析は、こ れまで開発されてきた数学や統計の手法では扱えない問題を引き起こすこともあるからだ。 たとえば、奴隷家族が地域間の奴隷取引により引き裂かれた頻度についてのデータのほ うが、奴隷家族の内部の暮らしについてのデータよりも得やすい。同様に、奴隷のいる家 一軒あたりの奴隷人数の証拠のほうが、そうした家の清潔さや健康状態に関する証拠より も、直接的かつ完全だ。そして数量経済史研究者たちは、奴隷制の下で黒人が暮らしてき た物質的水準については、かなり信頼できる指標を構築できているが、奴隷制が黒人の個 性や心理に与えた影響については、意味ある指数はまだ考案できていない。

つまり数量経済史は、重要な問題の分析にあたり、きわめて役に立つツール群を提供するものだが、それが対応できる問題は限られている。奴隷制の経済学における多くの重要な問題は、そうしたツールの埒外にある。だからといって、奴隷の家族生活の質や奴隷制が黒人の人格に与えた心理的影響といった問題を無視してよい、ということではない。だがこうした問題の議論は必然的に、奴隷の食事の栄養的な適切性や、奴隷投資の収益率や、奴隷労働の効率性といった問題の議論に比べ、不確実性の度合いが高い状態が続く、ということにはなる。

本書は、数量経済史学者の主要な発見を提示するだけではなく、それを解釈しようとする。以下のページでは、現在主流となっている奴隷体験の解釈や黒人史の解釈の様々な側面を、新しい発見に照らして見直している。読者諸賢は、数量経済史学者たちの主要な発見と、それを解釈しようとする私たちの試みとの区別をしっかり念頭においてほしい。発

見と解釈は、確実性の水準がちがう。解釈はときに、かなり断片的なこともある追加データや、もっともらしいながら現時点では確認できない想定を含む。だから、読者としてある主要な発見の正しさを受け容れた場合でも、私たちがそれに付与する意味合いには同意しないかもしれない。

まちがいのないデータなどというものはない、数量経済史学者が常に格闘する問題は、 自分の使う各種のデータ源にどんな性質のまちがいが含まれているか、ということであり、 そうしたまちがいを含むデータに基づく推計が、どんな偏りを生み出すかということだ。 この観点から評価すると、証拠は二つの分類(よい/悪い)に分けられるだけでなく、証拠の 多くの分類や様々な水準の信頼性がある複雑な階層に分けられる。

私たちの狙いは、この信頼性の階層のなかで、できる限り高いところにある証拠に基づいた主張をすることだった。私たちがいちばん信頼を置いていないのは、あるイデオロギー的な立場擁護を主目的とした、個人による検証不可能な印象に基づく断片的な証拠だ。断片的な証拠でも、「距離をおいた」観察者による印象報告など客観的な情報源ならもっと信頼できるが、それでもそうした証拠を系統的な統計検定にはかけられないから、信頼性の水準はやはり低い。

系統的な統計検定にかけられるデータ(「系統的データ」と呼ぼう)は、偏っている場合ですら、短編的なデータよりは有用な場合が多い。というのも、その偏りの性質や方向がわかっていれば、重要な歴史問題について有効な検証をもたらすような、統計手順を考案することが可能な場合が多いからだ。たとえば第 4 章では、大規模農園での奴隷の食事の栄養学的な中身の推計を提出している。推計手順の第一歩は、その農園において人間が消費できる食べ物の総供給を見極めることだった。次の一歩は、奴隷の消費と、農園に住む白人の消費を分けることだ。そうした白人の食事に関する系統的な情報はなかったので、そうした人々の個別食品の消費が、全国平均をかなり上回っていたと想定することで、この問題を解決した。この「食わせすぎ」で、白人は1日の推計摂取カロリーが5300キロカロリーになった――これは農園に住む、あまり動かない上流階級の白人として考えられる、どんな消費量よりも明らかに多い。この白人の「食わせすぎ」により、奴隷消費は過少に見積もられることになるが、この誤差はかなり小さいく(奴隷一人あたり消費の5%未満)。大規模農園では、白人が人口に占める割合は小さかったからだ。さらに、この小さな誤差を補正しても、奴隷の食事の栄養内容がかなり高いものだったという結論は変わらない。むしろその正反対で、この誤差を補正したら、結論はなおさら強化される。

断片的な印象論的証拠は二つの方法で使っている。まず、もっと厳密な手法により確立 された結果を例示してもっと赤裸々にするため。そして系統的データーからいまのところ は獲得できない、証拠のギャップを埋めるため。印象論的で断片的な証拠に基づく議論は、

その証拠の情報源がどれほど客観的であっても、比較的低い信頼水準と見なさねばならない。

数量経済史学者の発見について、できるだけ広い議論を奨励するために、なるべく専門的でないやり方でそれを提示しようとした。通俗化には費用が伴う。数量経済史の著作に馴染みがある人々は、その主要な成果が「感度分析」なのはご存じだろう。「感度分析」というのは、データや行動方程式や推計技法の想定に考えられる偏りが、結果にどんな定量的影響を与えるかを調べることだ。だが本文にそんな分析を入れようとしたら、すぐにあまりに専門的になってしまう。

かわりに、専門補遺を設けることにした (補遺 B)。ここでは、主要な結果の基になるデータについて論じ、またそのデータ分析で使った技法も説明する。専門的な問題のすべてを補遺 B に含めたわけではないが、最も重要な問題、少なくとも最も議論が分かれる部分については扱っている。もっと完全な情報を求める読者は、本書の元になった各種の学術論文を見てほしい。すでに、あるいは近々刊行される論文は補遺 B や C で参照し、参考文献一覧に挙げた。

補遺BとCおよび参考文献一覧、および歴史研究における価額の役割についての補遺は、 『十字架の時代』の補巻「証拠と手法:補遺」にある。

大西洋奴隷貿易の起源

奴隷制は、経済と社会組織形態として、最も古いばかりか、最も長命なものの一つだ。 それは文明の夜明け、人類が狩猟採集や遊牧放牧生活から原始農業に移行したときに生まれた。そして法的に認められた奴隷制は1962年に、その最後の拠点——アラビア半島——で違法とされたが、それでもアジア、アフリカ、南米の一部では奴隷制がいまだにこっそり続いている。

長年にわたり、奴隷制は浮沈を繰り返した。その頂点の一つは、ローマ帝国の最初の二世紀に生じたもので、一部の推計によると、イタリア半島の四人中三人——2100万人——が奴隷だったという。やがてローマ時代の奴隷制は農奴制に変わった。古い仕組みの過酷な部分を少し緩和した、隷属形態の一種だ。農奴は永遠に土地に結びつけられ、所属荘園の主たちに、一定量の労働サービスを負っていた。だが奴隷とはちがい、農奴たちは結婚したり、別の世帯を確立したり、私有財産を持ったりする権利はあった。さらに荘園主は、農奴に下せる処罰は限られており、縛られた者たちを殺す力はもはやなかった。

農奴制は中世におけるヨーロッパの労働条件として最も特徴的なものだったが、奴隷制が完全に根絶されたことはなかった。イタリア人たちは、13世紀には黒海のあたりからの奴隷輸入にご執心だった。そして果てしない宗教戦争の間につかまったムーア人たちはイベリア半島で、スラブ人やレバントからの捕虜と共に奴隷にされた。

黒人奴隷は中世から、北アフリカのイスラム諸国を通じてヨーロッパに輸入されていた。だがポルトガル人たちがアフリカ西海岸を探検するまでは、こうした輸入はかなり小規模だった。15世紀半ばあたりから、ポルトガル人たちはサハラ以南のアフリカ西海岸に交易所を設立し、黒人奴隷をかなりまとめて捕まえるか、購入しようとした。やがて、イベリア半島や、アフリカ沖合のイベリア支配下の島々(カナリア群島、マデイラ、カポベルデ群島、サントメ島)への平均奴隷輸入は、年千人程度に増えた。コロンブスが初の大西洋横断探検に乗り出すコトには、旧世界への黒人奴隷輸入は、累積でおそらく2万5千人超だったはずだ。黒人は18世紀初めまで旧世界に輸入され続けたが、奴隷の大市場となったのは新世界だった。

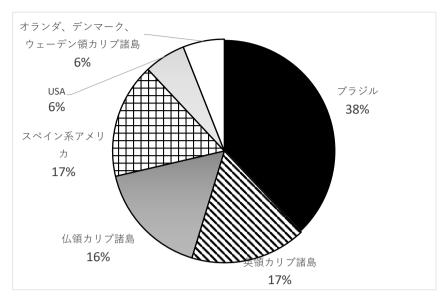


図1 新世界における奴隷輸入の分布、1500-1870

アフリカ人の新世界への輸送開始日は、スペイン植民地行政官たちの文書に初めて黒人への言及が登場した1502年に設定するのが通例だ。この貿易は、1860年代まで終わらなかった。この間に、950万人以上のアフリカ人たちが、強制的に大西洋を越えて運ばれた、この輸送で圧倒的に大きな参加者だったのはブラジルで、全体の38%を占める。英仏がカリブ海に持つ植民地と、はるかに離れたスペイン系アメリカ帝国があわせて50%を占めた。オランダ、デンマーク、スウェーデンの植民地がさらに6%を占めた。残り6%が、大西洋奴隷貿易でのアメリカ合衆国(または後にアメリカ合衆国となった植民地)の取り分だ。

奴隷制を綿花とタバコと同一視する人々にとって、奴隷貿易でアメリカが占める割合がこんなに少ないというのは、信じられないかもしれない。だが奴隷輸入の時間的な変動パターンを見ると、大西洋奴隷貿易の流れは、こうした作物の需要では説明できないことがはっきりわかる。奴隷貿易の時代変動パターンを図2に占めそう。これを見ると、奴隷の80%は1451-1810年に輸入されていることがわかる。これで奴隷輸送の支配的な要因は綿花ではないことがわかる。綿は1810年にはまだ栽培が始まったばかりだったからだ。図2はまた、18世紀には奴隷貿易の規模がすさまじく拡大したことも示している。この事実は、タバコが大きな役割を果たした可能性も否定する。というのも18世紀には、ヨーロッパへのタバコ輸入は平均で年350トンずつしか増えていないからだ。平均的な奴隷は、タバコ1トンほどしか生産できないから、18世紀の間に増えたタバコ貿易は全体で7万人の奴隷を必要とするだけだ。これは同時期に輸入された600万人の奴隷からすると、ほんのわずかな割合でしかない。

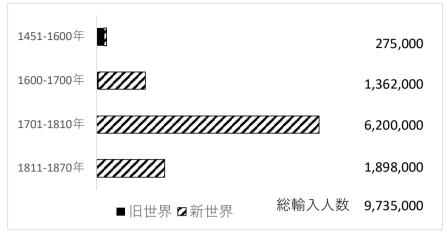


図2 時代と地域ごとの黒人奴隷輸入

大西洋の奴隷取引の規模を決めたのは、タバコ中毒でもなければ綿布への偏愛でもなく、 ヨーロッパの甘い物好きだった。奴隷作物のうち、最大のものは砂糖だ。大西洋航海を生 き延びた奴隷の 60-70%は、ヨーロッパの砂糖植民地のどこかにたどりついた。

こうした植民地の最初のものは地中海だった。砂糖は17世紀にアラブ人がレバントに持ち込んだ。ヨーロッパ人は、十字軍のときにその味を知った。それ以前には、ヨーロッパの甘味料はハチミツしかなかった。パレスチナのアラブ砂糖産業を則ったノルマン人やヴェネツィア人たちは、地中海のキプロス、クレタ島、シチリア島で砂糖生産を促進した。12-15世紀、こうした植民地はヨーロッパ全域に砂糖を輸出した。また、そこで生産された砂糖は、奴隷労働を活用した農園で栽培されていた。その奴隷は主に白人だったが、こうした島でヨーロッパ人たちは制度装置を開発して、それがやがて黒人に適用される。

ヨーロッパでの需要の急増で、スペイン人とポルトガル人は、砂糖耕作をイベリア半島に広げ、さらにはアフリカ沖合のイベリア所有の太平洋の島々に広げた。ここでも、地中海の倍と同じく、新産業の労働を提供したのは、農園で雇用される奴隷たちだった。こうした奴隷の一部は、カポベルデ諸島のように新たに征服された島々の原住民もいたが、ほとんどはアフリカから輸入された黒人だった。大西洋奴隷貿易の最初の一世紀で、輸入の規模は、ほとんどがカポベルデ諸島、マデイラ群島、サントメ島などの砂糖栽培者たちのニーズで決まっていた。1451-1550年の黒人輸入13万人のうち、90%はこれらの島に送られ、新世界に行ったのはたった10%だった。

16世紀後半に、砂糖生産と黒人奴隷の中心は大西洋を渡り西半球に移った。1600年にはブラジルがヨーロッパに対する最大の砂糖供給源となった。サトウキビはまた、メキシコ、ペルー、キューバ、ハイチでも大量に栽培された。旧世界の植民地も栽培は続けていたが、ヨーロッパ市場での絶対量と相対シェアは激減した。17世紀末には、砂糖生産はマデイラ

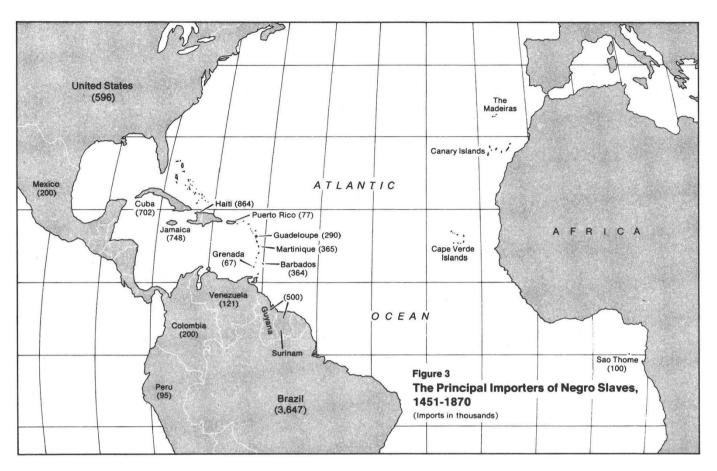


図3 黒人奴隷の主な輸入先、1451-1870 (単位: 千人)

群島、カポベルデ諸島、カナリア諸島、サントメ島からはほとんどなくなった。砂糖生産 の終わりは、こうした領土への奴隷輸入の終わりでもあった。

スペインとポルトガルの砂糖独占が敗れたのは、17世紀に英仏蘭がカリブ海での大勢力になったときだった。イギリスの砂糖生産参入は、17世紀第二四半期にバルバドスで始まった。1655年には、イギリスはスペインからジャマイカを奪い取り、その直後にそこでの砂糖農園開発を始めた。18世紀には砂糖生産は激増し、これらの植民地に限らず英領西インド諸島すべてに広がった。1770年には英領カリブ海諸島のサトウキビ年間収量は13万トン、同年のブラジルの三倍となった。

仏領カリブ諸島での砂糖栽培発達は、それにも増して劇的なものだった。ハイチ (当時はサンドマング)がフランスの主要な砂糖植民地だった。フランスは 17世紀初頭から 1794年のハイチ革命まで、この血で農園を促進した。1770年にハイチは年間 107,000トン、イギリスの生産量総計とほぼ同じくらい生産していた。他のところでの生産もあわせると、仏領カリブ諸島の砂糖生産量は、1770年には 151,000トンになった。オランダは、1770年の国際砂糖貿易でははるかに劣る 4位 (フランス、イギリス、ポルトガルの次)で、生産量は 15,000トン、そのほとんどは南米国大陸の北=中央海岸にある蘭領ガイアナだった。こ

こは現在、ガイアナとスリナムがあるところだ。デンマーク人たちは 11,000 トンの砂糖を生産しており、ほとんどすべてセント・クロイ島からのものだ。1770 年にスペインは、国際砂糖貿易からは押し出されていた。スペイン植民地で生産された砂糖はほとんど地元民が消費した。だがスペインは 19 世紀に、砂糖供給大国として再浮上する。これはキューバとプエルトリコの大きな農園開発によるものだった。

つまり、英、仏、蘭のカリブ海植民地につれてこられた奴隷たちの大半は、直接的にも間接的にも、砂糖産業に参加していた。ブラジルでは、輸入奴隷の 40%が砂糖栽培に関わり、スペイン領アメリカでは、その比率はおそらく30-50%だっただろう。砂糖に次ぐ労働需要を持っていた鉱山は、ブラジル奴隷の 20%ほどを占めていた。新世界に連れてこられた黒人の残りは、コーヒー、ココア、タバコ、インディゴ、大麻、綿、米など多様な作物の生産で活用された。アフリカ人のごくわずかな割合は都市活動を行い、ほとんどは通常は使用人や肉体労働者だったが、職人になった者もいた。だがおそらく、18世紀頃になると、年奴隷のほとんどはクレオール、つまり最近輸入されたのではなく、新世界で生まれた奴隷だった可能性が高い。

アメリカ合衆国での奴隷制の推移

アメリカ合衆国が他の奴隷輸入国と一線を画すのは、大西洋奴隷貿易に占める比率が比較的小さいからというだけではない。アメリカ奴隷制では、砂糖産業はあまり大した役割を占めなかった。ルイジアナ州での砂糖の商業生産は1795年まで始まらなかった。これはアメリカが国際奴隷取引から撤退するわずか十年前だ。アメリカがルイジアナを併合した頃には、砂糖生産はわずか5千トンだった。南北戦争以前のピークでも、砂糖は南部の作物としてはマイナーで、使役した奴隷労働力は10%未満だ。

砂糖栽培の不在は、アメリカ植民地での奴隷制発達に大きな影響を与えた。一つには、奴隷労働力の増加率に、絶対数からも相対的な重要性の面からも影響した。アフリカ人の労働力がヴァージニア州に入ってきたのはバルバドスより早かったのに、1700年には英領カリブ海諸島にいたアフリカ奴隷の数は、北アメリカ植民地の総数の六倍だ。最初の奴隷集団がヴァージニアに上陸してから80年ほどたっても、その植民地の黒人人口はたった16000人だし、他の北アメリカ植民地は全部あわせても、たったの11000人しか黒人がいない。英領カリブ海諸島では、イギリスがやってきてから30年で、奴隷人口は6万人になった。北米国植民地が絶対数でその水準になるには110年かかった。英領北アメリカの奴隷は、自然増加率がきわめて高かったし、一方でカリブ海では自然減がきわめて大きかったにもかかわらず、こうした差が生じている。

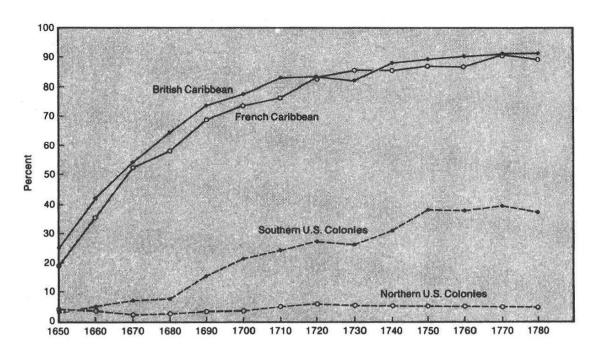


図4 4地域における黒人の総人口比

さらに驚くのは、植民地でニグロが総人口に占める割合だ。すでに 1650 年には、英領カリブ海諸島では黒人が人口の 25%を占めていた。1770 年にはこの比率が 91%になる。仏領カリブ海諸島でも同じ状況が見られた。これに対して、1650 年にはアメリカ植民地の総人口に黒人が占める割合は、たった 4%だ。そしてアメリカ独立革命前に、22%のピークに達した(訳注:グラフではわかりにくいが、南部と北部あわせて、という意味だろう)。北アメリカ植民地の南部では、1650 年と 1770 年の数字はそれぞれ 3%と 40%だ。だから植民地時代の間、黒人はカリブ海では人口と労働力の圧倒的多数を占めていたが、北アメリカ植民地の人口では常に少数派で、植民地時代のほとんどの時期には、かなり小さな少数派だ。植民地時代の半ばになっても、南部ですら、黒人の人口比率は 15%に満たなかった。

北アメリカ植民地に砂糖産業がなかったことで、奴隷たちが暮らす集団の大きさにも影響が出た。砂糖生産は当時の基準からすれば大事業だ。巨額の資本が必要なだけでなく、生産ユニットの最適な労働力規模はかなり大きかった。カリブ海の一部の農園は、奴隷500人以上を擁していた。ジャマイカの平均的な砂糖農園の規模は、18世紀末には奴隷180人だった。これに対して、当時のヴァージニアとメリーランドの平均的な保有は、13人に満たなかった。ジャマイカなどのカリブ諸島の黒人は、白人奴隷所有者のヨーロッパ文化とはほとんど接触がなかった。島の住民の白人比率が小さかったし、典型的な砂糖農園の規模が巨大だったからだ。だが北アメリカ植民地の黒人は、人口の少数派であることが多い、小さな集団で暮らしていたので、白人の主人たちとの接触があった。

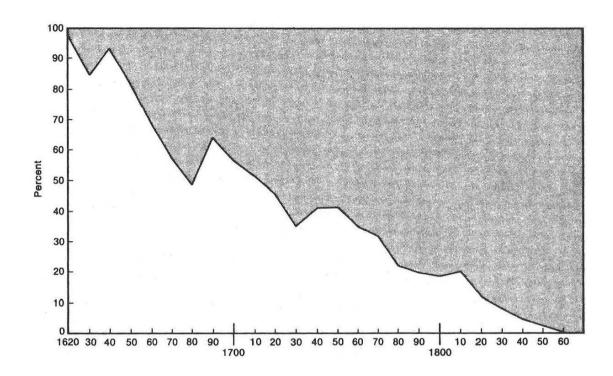


図 5 アメリカ黒人人口の中の、外国生まれの黒人比率 1620-1860

アメリカの奴隷は、ヨーロッパ文化との接触が密だったばかりか、カリブ海の奴隷に比べ、アフリカの起源からの隔たりも大きかった。18世紀末から19世紀にかけて、英仏カリブ海諸島の奴隷人口の大半はアフリカ生まれだった。実際、1800年という時期になっても、ジャマイカ、バルバドス、マルティニークの人口の1/4はアフリカ生まれで、十年以内に新世界へやってきたばかりだった。これに対して、1680年というはやい段階で、北アメリカ植民地の奴隷人口の大半は、そこで生まれた黒人たちだった。アメリカ革命の終わりには、黒人人口の中でアフリカ生まれの比率は20%に下がった。1780-1810年にはその比率にとどまったが、その後急速にゼロに向かう。1860年には、北アメリカ奴隷のうち現地生まれでないのはたった1%で、ほとんどの奴隷は二世代目、三世代目、四世代、五世代目のアメリカ人なのだった。

こうしたアメリカ人はアフリカを自分で体験したこともないし、そんな直接体験を持つ人にお目にかかったことすらないのが普通だった。自分たちのアフリカ起源について彼らの耳に入った言葉は、親、祖父母、曾祖父母の頭や感情を通じてフィルターがかなりかかったもので、しかもそうした人々もずっと北アメリカ大陸しか知らないのだ。だからといって、黒人文化形成にあたってアフリカの遺産の貢献を否定するものではない。ただ 1860年までに黒人文化が、土着アメリカ文化の影響に大きく曝されていたことを強調するものではある。もちろん、1860年には多くの面で、白人と黒人の文化はちがっていた。一つは、

黒人のアメリカ生まれ比率のほうが高かったということだ。

北アメリカの黒人人口の中で、アフリカ人の割合が 18世紀後半に激減したのは、奴隷の輸入が減ったからではない。アメリカ独立革命の十年間を除けば (この時期は国際通商すべてが一時的に減少した) 北アメリカへの奴隷輸入トレンドは、1620年から 1808年にアメリカが国際奴隷貿易への合法的関与から手を引いたときまで、強い上昇傾向だった。しばしば、アメリカ独立革命の終わりから 1810年には奴隷制が衰退していて、綿花栽培の台頭がなければ奴隷制は南北戦争を待たず、とっくに消えていただろうという主張がよく聞かれる。この主張がでた理由の一部は、ヘンリー・キャリーが提出した 1790-1810年についての、まちがっているが広く引用された奴隷輸入推計だ。改訂版の推定値を見ると、奴隷輸入は減るどころか、この時期にはそれまでのどの 20年と比べても奴隷輸入が多かったことがわかる。実は 1780-1810年の 30年間には、アメリカが奴隷貿易に関与したそれまでの160年間の輸入数と同じ人数の奴隷が輸入されているのだ。

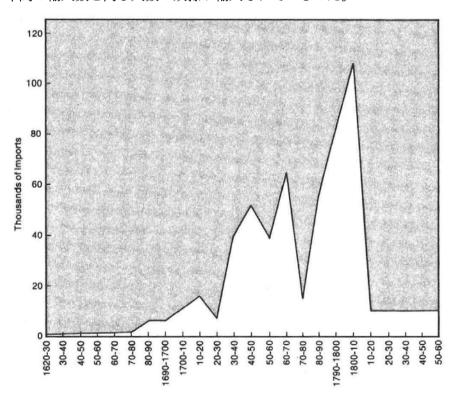


図 6 10年毎の北アメリカの奴隷輸入 1620-1860年

アフリカ人の輸入は確かに、北アメリカ植民地の奴隷人口増加に貢献はしたが、1720年 以降の増加の説明では二次的な重要性しか持たない。18世紀と19世紀には、自然増のほう が圧倒的に重要だった。これは、北アメリカの体験がラテンアメリカとはちがったもう一 つの面だ。英仏の西インド諸島や蘭領ガイアナとブラジルでは、奴隷の死亡率があまりに

高く、出生率があまりに低かったので、アフリカ人を大量に継続的に輸入しなければ、黒人人口の水準を維持できなかった。西インド諸島の自然減は、18世紀の大半を通じて 5-2%だった。やがて減少率はゼロに向かった。だが西インド諸島の黒人人口が、人口動態的に自分を維持できるようになったのは、19世紀にかなり入ってからのことだった。

北アメリカ奴隷たちの人口動態体験を、カリブ海よりもはるかに有利なものにした要因は何だったのだろうか?なんにでもよい面を見たがるアメリカ人にしてみれば、北アメリカ職員地では奴隷の扱いが比較的人道的だったのだ、という形での説明をしてみたくもなる。この見方を裏付ける証拠もないわけではなく、これは後の章で検討しよう。だが説明の相当部分は、ご主人たちの優しさや残虐さとは関係ない要因を重視する。食べ物の劣悪さと、労働スケジュールの過酷さが、カリブ海黒人の高い死亡率に貢献したのはまちがいない。だがこれらは単に、西インド諸島の奴隷たちが、もともと北の地域の奴隷たちよりもはるかにきびしい疫病環境に直面していたことで生じた弱さに拍車をかけただけだった。マラリア、黄熱病、破傷風、下痢、天然痘、その他数多くの病気が、温帯気候よりも熱帯気候のほうでは広まっていたし悪質だった。さらに、カリブ海では現地生まれよりアフリカ生まれの奴隷が多かったので、黒人の中でもアメリカの環境に広がっている病気に抵抗する免疫を獲得した比率はかなり低かった。カリブ海では白人ヨーロッパ人も高い死亡率に直面した。実際、西インド諸島のヨーロッパ兵の死亡率は、奴隷以上だったのだ。

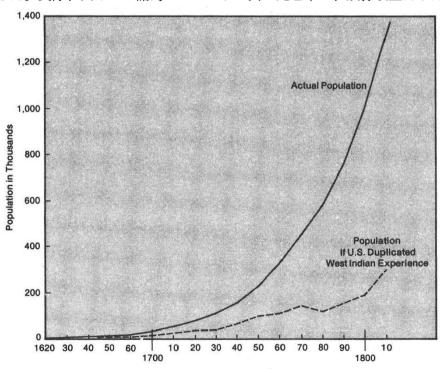


図 7 実際の北アメリカ黒人人口と、西インド諸島の人口動態だった 場合に予想される黒人人口推移

また奴隷人口の中でアフリカ人の比率が高かったのは、カリブ領での出生率低下に貢献した。というのも新世界に連れてこられた男女は同数ではなかったからだ。輸入のうち女性は 40%未満だった。アフリカ生まれの女性がクレオール女性ほど子だくさんだったとしても、アフリカ人の男女比不均衡は、かなり低い出生率をもたらしたはずだ。だがアフリカ女性の出生率は、クレオール女性よりはるかに低かった。だからクレオール人口は自己再生産できただけでなく、そこそこの増加率で増えていったのに対し、アフリカ出身の人口群にはそれができなかった。男女比不均衡と、低出生率の組み合わせにより、アフリカ出身者の出生率はきわめて高い死亡率を相殺するには低すぎた。アフリカ出身社の低出生率を説明するための、社会、文化、生理的要因の相対的な重要性ははっきりしない。感情的なショック、一般に乏しい健康、性病、堕胎、乳児殺し、男女比不均衡で生じた家族生活の歪みなどが考えられる原因として提案されてきた。

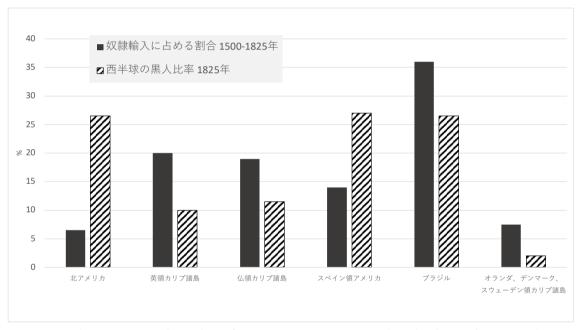


図 8 1825 年黒人人口分布 (奴隷と自由黒人) と、1500-1825 年奴隷輸入分布との比較

北アメリカ奴隷たちの有利な人口動態的経験をもたらしたのがどの要因だったにしても、その結果ははっきりしている。輸入比率が低く、当初はそのために北アメリカ奴隷人口はカリブ地域に遅れを取っていたが、やがて北アメリカ植民地は、西半球の他の地域の奴隷人口増加率を超えるにとどまらず、それをはるかに上回るようになった。1720年には、北アメリカの自然増加率は輸入による年間増加率を上回っていた。そして奴隷貿易への合法的なアメリカ関与の最後の半世紀では、絶対的な輸入水準は、以前の北アメリカに比べれば高かったとはいえ、黒人人口の成長への貢献を見ると、輸入は自然増の半分ほどでしかない。こうした主張ですら、優れた人口動態体験の影響を過小に述べている。というのもそれは、他のところの劣悪な人口動態体験を考慮していないからだ。1800年のアメリカ合

衆国には黒人が 100 万 2 千人いた。だが北アメリカが西インド諸島のような人口動態の動きになっていたら、その黒人人口はたった 186000 人にとどまっていたはずだ。

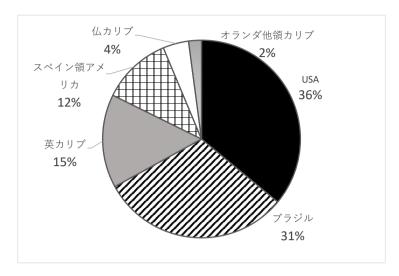


図9 西半球の奴隷分布、1825年

だからアメリカ合衆国は、西洋世界の奴隷列強となったのは、別に奴隷貿易に大いに肩入れしたからではなく、奴隷人口の自然増が異様に多かったせいだ。1825年には、アメリカ合衆国南部には奴隷が1,750,000人ほどいた。これは同年の西洋世界奴隷総数の36%超を占める。大西洋奴隷貿易では周縁的な役割しか果たさなかったのに、南北戦争に先立つ30年で、アメリカ合衆国は西洋世界における最大の奴隷列強国となり、奴隷制廃止に対する抵抗の橋頭堡となったのだった。

奴隷解放への道

三千年近く——ソロモン王の時代からアメリカ独立革命前夜まで——ほとんどあらゆる政治家、哲学者、神学者、著述家、批評家たちは、奴隷制の存在と正統性を受け容れていた。「受け容れ」という言葉は意図的に選んだものだ。こうした政治家や思想の形成者たちは、この制度について弁明したり宥恕したり許したり容認したりはしなかった。そんな必要はなかった。彼らは、奴隷制はまちがっているなどという見方を背負いこんではいなかった。奴隷制は、物事の自然なあり方の一部と思われていた。アリストテレスも述べている。「誕生の瞬間から、一部の者は隷属を運命づけられ、一部の者は支配を運命づけられている」

確かにキリスト教神学者たちなどは、隷属と「人間の友愛の聖なる律法」との間に対立 の可能性があることを懸念はした。だがこの一見した矛盾は、奴隷を魂ではなく身体の状

態に過ぎないと扱うことできれいに解消された。魂の領域では「あらゆる人は神との一体性において兄弟である」が、俗世の領域での奴隷は「罪の世界における必要な一部である」。したがって「奴隷は内面では自由であり魂の面では主人と平等だが、外面的には彼はただの家畜なのだ」

カトリック教会は、奴隷所有を合理化したのみならず、自分でも大量に奴隷を保有していた。イエズス会がアフリカ人の新世界輸入を奨励する以前から、キリスト教会は積極的に奴隷制を促進した。1375年には教皇グレゴリウス11世が、教皇統治に逆らうものへの正当な処罰として奴隷化を唱え、破門されたフィレンツェの人々を、捕まえ次第奴隷にせよと命じた。そして1488年に法皇イノケンチウス8世は、スペインのフェルディナンド王からムーア人奴隷百人の贈り物を受け取り、それを様々な枢機卿や貴族に配布した。また、社会階層の保守的な人々だけが人間の隷属を奨励したのではない。ヒューマニストの代表たるトマス・モアですら、奴隷制は「単純労働」「貧しい労働者」および犯罪者にふさわしい状態だと考えた。したがって彼は『ユートピア』のビジョンに奴隷制を含めている。

プロテスタント宗教改革を動かした問題の中には、奴隷制の正統性についての見解相違は含まれていない。「シュワーベンの農奴たちが 1525 年に、キリストは人を解放するため死んだと述べて解放を訴えたら、マルチン・ルターは正統ローマカソリックとまったく同じように震え上がった」。彼はこの要求が聖典の歪曲だと感じ、そんなことを許容したらキリストの魂の王国と俗物の世界とを混同することになると考えた。彼は聖パウロの「主人と奴隷はその現在の立場をわきまえるべきである、というのもこの世の王国は、一部の者が自由で一部の者が奴隷でない限り生き残れないからである」との金言を繰り返した。

奴隷制の受容は、宗教界のみならず世俗界でもごく普通のことだった。ジョン・ロックほどの「人間の不可侵な権利」擁護者ですら、「カロライナの根本的憲法」草案には奴隷制を定めた条項を入れたし、イギリスの独占的アフリカ奴隷貿易を享受した王立アフリカ会社に投資している。つまり、自然権としての自由の理論を構築し、後には多くの革命家や奴隷廃止論者を啓発した、自由を守るために武器を取る道徳的な責務があるという理論を樹立した人間が、一方では奴隷の頑固な擁護者でもあったわけだ。このパラドックスを、デヴィッド・ブライオン・デイヴィスは、ロックの次のような信念によるものとしている。

奴隷制の起源は、自由と財産の起源と同じく、完全に社会契約の埒外にある。だれかが恋にせよ過失にせよ、自分の命を他人に託したのであれば、その処罰が奴隷にされることで遅れても不正だとこぼすことはできない。奴隷の苦難がいつの時点であれ命の価値よりも大きければ、主人に抵抗して自殺し、ずっと当然受けるべきであった死を受け取ることができるのだ。

17世紀最終四半期と18世紀最初の3四半期は、奴隷制のあたりまえのような受容と、人間隷属の廃止に向けた協調的で成功した動きの開始との分水嶺となった。初期に公然と奴隷制を批判する者たちはあっさり黙殺された。1700年にはマサチューセッツの清教徒サミュエル・シーウォル判事が、『ヨセフの売り渡し』と題した反奴隷制論説を刊行したが、同時代人のほとんどからは預言者とは思われず、むしろ誠実さか、果ては正気かどうかも怪しい人物と見なされただけだった。何やら得たいの知れない理由で、聖典と自然秩序の両方の揚げ足をとろうとしている、とされたのだ。友愛協会(クェーカー教徒)は教義的な考察から、他の方面に比べると奴隷制廃止論に好意的だったが、それでも奴隷制反対論者は75年にわたり反駁された——1688年にジャーマンタウンのクェーカー教徒たちが、人間隷属を黄金律の侵犯として糾弾してから、1758年のフィラデルフィアにおける年次クェーカー教徒集会において、初めて奴隷貿易だけでなく奴隷制そのものが糾弾され、協会内でその取引に関わった人間をすべて要職から追放すると脅すようになるまでの間だ。

歴史的基準から見て、ひとたびイデオロギーキャンペーンが勢いを増すと、奴隷制という制度が奴隷制廃止論の攻撃に実に急速に屈したのは驚くべきことだ。奴隷廃止運動が、孤立した狂信者による一見すると何の役にもたたない長口舌から、大きな政治運動へと移行した瞬間を厳密に指定することはできない。それでも、イギリス友愛協会が奴隷貿易に関わるあらゆる会員を追放すると可決した年(1774年)は、奴隷制廃止への協調的政治運動の開始を記す、単独ではないにせよもっともらしい日付に思える。奴隷制が、アメリカ大陸での最後の橋頭堡ブラジルで廃止されたのは1888年だった。だからわずか一世紀強のうちに、三千年にわたり批判などものともしなかったシステムが、西洋世界のあらゆる場所で違法とされたのだった。

奴隷制廃止の闘争はしばしば暴力を伴ったが、奴隷所有者が奴隷廃止トレンドを止めるために全面戦争に訴えたのは、アメリカ合衆国だけだった。そして奴隷植民地すべてが流血革命を通じて解放を実現したのはハイチだけだ。他の暴力のほとんどは、奴隷解放そのものの結果ではなかった。コロンビアやベネズエラのような国では、奴隷解放は国家権力を握ろうとする革命家たちの道具にされた。こうした運動の多くの民族主義指導者たちは、豊かな地主階級や奴隷保有階級の出身だったので、奴隷廃止は一般に長引くプロセスになった。実際、奴隷たちの大半――アメリカ合衆国北部、英領植民地、プエルトリコ、キューバ、ブラジルなど――はおおむね平和的な条件下で解放されており、少なくとも、不承不承とはいえ奴隷所有階級の相当部分はそれに同意した。だからといって、奴隷制があっさり消え去ったということではないが、その消滅は奴隷廃止論者たちのイデオロギーと政治的な圧力の累積的な影響によるもので、軍事的影響ではなかった点は強調したい。

表 1 奴隷解放年表 1772-1888 年

1772	マンスフールド最高裁判事が、奴隷制は英国法では支持されていないと判決し、イングランドの 15000人の奴隷を解放する法的根拠を作る	
1774	イングランド友愛教会 (クェーカー教徒)、奴隷貿易に携わる会員すべての破門を可決	
1775	マデイラで奴隷制廃止	
1776	イングランドとペンシルベニアの友愛教会、会員に奴隷を解放するか破門かを迫る	
1777	ヴァーモント憲法が奴隷制を禁止	
1780	マサチューセッツ憲法、万人は生まれながらにして自由で平等であると宣言。1783年にはこの 条項が奴隷制廃止の効力を持つと解釈する司法判断	
	ペンシルベニア、段階的奴隷解放法を可決、1780年11月1日以降に生まれたあらゆる奴隷の子供 を28歳の誕生日に解放	
1784	ロードアイランドとコネチカットが段階的奴隷解放法を可決	
1787	イングランドで「奴隷貿易廃止協会」設立	
1794	フランス国民会議が全フランス領で奴隷制を廃止。1802年にナポレオンがこれを覆す	
1799 ニューヨークが段階的奴隷解放法を可決		
1800	アメリカ国民による奴隷輸出禁止	
1804	ハイチで奴隷制廃止	
	ニュージャージーが段階的奴隷解放法を可決	
1807	イングランドとアメリカ合衆国が国際奴隷貿易への参加を禁止	
1813	アルゼンチンで段階的奴隷解放法が可決	
1814	コロンビアで段階的奴隷解放が始まる	
1820	イングランド、海軍を使って奴隷貿易を弾圧	
1823	チリで奴隷制廃止	
1824	中央アメリカで奴隷制廃止	
1829	メキシコで奴隷制廃止	
1831	ボリビアで奴隷制廃止	
1838	全英領植民地で奴隷制廃止	
1841	ロンドン条約 (五国同盟条約) 締結、英仏露プロイセン、オーストリアは奴隷貿易弾圧の	
1011	ために公開で船舶捜索を行うと規定	
1842	ウルグアイで奴隷制廃止	
1848	仏とデンマークの全植民地で奴隷制廃止	
1851	エクアドルで奴隷制廃止	
	ブラジルで奴隷貿易廃止	
1854	ペルーとベネズエラで奴隷制廃止	
1862	キューバで奴隷貿易廃止	
1863	オランダの全植民地で奴隷制廃止	
1865	憲法修正第13条可決と南北戦争終結によりアメリカ合衆国全土で奴隷制廃止	
1871	ブラジルで段階的奴隷解放が開始	
1873	プエルトリコで奴隷制廃止	
1886	キューバで奴隷制廃止	
1888	ブラジルで奴隷制廃止	

奴隷所有者の財産の相当部分は奴隷だったことを考えると、説明されるべきなのはなぜ アメリカが公然と戦争に頼ったのかということではなく、なぜ他の奴隷保有国がそうしな かったのか、ということだ。この問題についての十分で堅牢な回答は本書の範疇を超える。 だが経済的要因は、奴隷所有者が奴隷制廃止に対して次第に屈した理由の一部として、決 して無関係ではない。

これと関連していえば、アメリカ合衆国南部以外の多く、いやほとんどの奴隷は、段階的な奴隷解放政策に基づいて解放されたことは記しておこう。こうした方式は通常は、成人奴隷ではなく、奴隷解放法施行後のどこかの日付以降に生まれた子供を解放する、というものだった。さらに奴隷の子供の解放は、18歳、21歳、ときには 28歳の誕生日まで遅らされた。こんな取り決めのもとだと、奴隷所有者たちはもはや子作り年齢をすぎた男女の奴隷については、まったく損をしない。新生児が 21歳や 28歳になるまでサービスを提供させられるということは、そうした奴隷を育てる費用の大半、場合によって全額は、彼らが生産年齢に到達してから、解放までの間に稼いだ所得でカバーされるということだ。だから奴隷所有者に課せられる主要な損失は、出産年齢がまだ残っている奴隷女性の価値が下がったということだ。第3章と補遺Bで説明した理由から、そうした女性の損失はおそらく価値の 15%を超えることはなく、そうした女性は労働力の三分の一ほどを構成していた。要するに、段階的な奴隷制廃止で、奴隷所有者にかかった兵権費用は、おそらく奴隷の初期価値の 5%未満だっただろう。平均的な損失は、実はかなりゼロに近かったかもしれない。

英領植民地のように、奴隷解放が比較的急速に実施された場合でも、いくつかの要因が 組み合わさって、奴隷所有者の損失を低い水準に抑えた。

イギリス議会の施行の下で、完全な奴隷解放は、法律可決後六年がかりで実施されることになっていた。西インド諸島での収益率を考えると、こんな比較的短い遅れですら、奴隷所有者は家畜の初期価値の 50%は回収できた。さらに奴隷所有者たちはイギリス政府から、奴隷解放の補償として奴隷の初期価値の 40%を受け取れた。ここでもまた。奴隷解放は、奴隷所有者の損失を、奴隷の価値の約 10%に抑えるように計画された。実際の損失はさらに、もっと奴隷を厳しく働かせて、奴隷の維持管理の手を抜くことでさらに引き下げられたかもしれない。こうした奴隷所有者の収入を増やそうという試みや、それが引き起こした抗議は、なぜ通称「見習い期間」なるものが 6 年から 4 年に短縮されたかを説明してくれる。

奴隷解放を求める圧力の高まりは、大きな成功を引き起こした。1830年には、西半球の 黒人の三分の一は解放されていた。最大の正かを挙げたのは、スペイン領と仏領のアメリ カだった。スペインの植民地や旧植民地で、まだ奴隷の者は25%しかいなかった。そして

ハイチの革命は、フランス支配の奴隷80%を解放していた。30年代が終わる前に、英領植民地の全奴隷が自由になった。奴隷制への情熱は、ブラジルですら衰えつつあるようだった。30年代のブラジルへの奴隷輸入は、20年代の65%にまで下がっていた。

だがアメリカ合衆国南部では、奴隷制の勢いは衰えることなく続いていた。実際、この地域は南北戦争前の最後の30年間に、ますます広く深く奴隷制に入り込んだ。まわり中で奴隷制が崩壊し、その特異な制度が北部の奴隷廃止論者からますます攻撃されるようになると、南部の政治家たちは自分のシステムに対する法的な擁壁を強化しようとした。11の州では、反乱に参加した奴隷には死刑が科せられた。13州では、自由人が奴隷に蜂起をそそのかすのは死刑となった。また奴隷の逃亡を助けたり、逃げたあとで匿ったりした者に対するもっと厳しい法律や刑罰が定められた。

同時に、自発的な農奴解放への各種障壁が設けられた。いくつかの州は、奴隷解放の有効化にあたり立法府の同意を櫃王とした。7 州では、解放奴隷がその州を去らねばならず、13 州は自由になった奴隷が移住できないようにした。州、郡、市の政府が解放奴隷に課した他の制約としては、武器を携行する権利、酒を売る権利、住んでいる郡の境界を越えて外に移動する権利、不動産所有権、公的集会で集まる権利への制約がある。

また、1830 年以降には、自由黒人人口の増加率が目に見えて下がっている。結果として、南部の自由な黒人人口比率は、1830 年に 8%強だったのが、1860 年には 6%未満となっている。こうした数字でもそうだし、また同時期の南部の経済統計でもそうだが、南部の奴隷制が自滅しかけていたという見方を裏付けるものはほとんどない。

訳者付記:ここの記述を見ると、アメリカ南部以外のところでは奴隷解放は粛々と進み、 奴隷所有者たちは多少猶予をもらったことで投資を回収してあとは腹をくくって損切りに 耐え、奴隷たちは天下晴れて自由になったかのようだが、実際にはそうではない。

フランスは、ハイチで奴隷の反乱が起きたら即座に艦隊を派遣し、奴隷所有者の損失分をすべて、新生独立ハイチの国家債務として負わせ (GDPの数倍)、1960 年代までその返済を強制してきた。イギリスも、政府から奴隷所有者への補填があったことは文中にある通り。またアメリカ南部も、南北戦争後に解放された奴隷は、(受益者負担のお題目のもとに!)自分の価値を元奴隷主に対して借金として背負う仕組みになっていた。

したがって、往々にして奴隷「解放」は、実は奴隷制の鎖から解放されて、借金のくびきにつながれただけ、というもの。奴隷所有者たちも手を尽くして解放奴隷分の資本を回収しており、ここでの記述が与える印象とはかなりちがう。詳細についてはピケティ『資本とイデオロギー』(原著 2020、邦訳近刊)を参照。

職能の構造

南北戦争前の30年には、奴隷は地方部都市部を問わず、南部の経済生活のほぼあらゆる側面に関与していた。畑を耕しただけでなく、ほとんどの技能工芸でもかなりの比率を占めていた。たとえばチャールストン市では、成人男性奴隷の27%は高技能職人だった。同市の最も重要な工芸品の一部——大工や煉瓦工を含む——では、奴隷のほうが白人より多いくらいだった。一部の奴隷は、建築や講学などの仕事へと上昇した。もちろん、奴隷のうち人口千人以上の都市や町に住む者は比較的少なかった(約6%)。だがこの事実から、奴隷が技能職に参加するのは都市環境だけのことで、したがって地方部に暮らす者にはそうした活動が見られないという結論に飛びついてはならない。

実際問題として、奴隷は地方部でも高技能職のかなりの割合を占めていた。大規模農園では、奴隷は工芸職人や下級管理職ではむしろ圧倒的な数を占めていた。驚くことだが、奴隷は下級管理職の7.0%を占めていた。また11.9%は高技能職人(鍛冶師、大工、樽職人など)だった。また7.4%は、準技能職や、家事関係または準家事関係の仕事についていた。作業監視人、運転手、庭師、給仕、家の使用人などだ。女性の職業機会はもっと限られていた。野良仕事以外に就いた20%の女奴隷は、家政婦や縫い子や看護婦といった準家事的

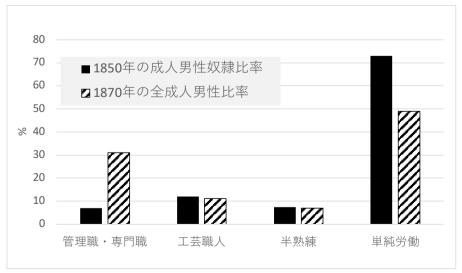


図 10 成人男性奴隷の職業分布 (1850 頃) と全成人男性の職業分布 (1870 頃) の比較

な地位にいた。

成人男奴隷の技能分歩と、南北戦争直後の全成人男性の技能分布を比べると、奴隷制が機会を制約していた方法がわかる。1870年の専門職や管理職の労働力比率は、全男性の場合に比べ、男性奴隷だとその1/5でしかない。これは奴隷たちが法律により、法律、政治、教育といった立派な仕事から完全に排除されていたせいもある。だがトップの職業分類に奴隷が入れなかった主要な障害は、奴隷が土地所有から排除されていたことだった。1870年の、管理職や専門職階級の全男性のうち四分の三は土地持ち農家だった。奴隷が職業ピラミッドのトップから排除されたことで、単純労働に押しやられる割合が増えた。単純労働は、1850年に働いていた男奴隷の73%を占めていたが1870年には全男性のうち単純労働をしていたのは、たった49%だった。

奴隷制が、奴隷の技能獲得機会を制約したのは明らかだが、それでも男奴隷の 25%以上が、管理職や専門職、職人、半技能労働者だったという事実は残る。だからあらゆる奴隷が卑しい肉体労働者だったという通年はまちがっている。奴隷社会は、一枚岩の同じ存在などではなく、複雑な社会階級を生み出しており、それは職業ピラミッドと密接に関係していた。この技能労働者階級の中から、奴隷コミュニティの多くのリーダーたちが現れた。平時は、奴隷管理職や職人たちは、奴隷区画における行動規範の確立と施行を率い、また黒人文化のパターン形成も行った。またご主人たちに対して各種の要求を交渉し、白人監督たちのやり過ぎを抑えるときに、奴隷コミュニティを代表した。この職業的な上層部は、多くの歴史研究者が主張しているように、抗議指導者、職場放棄者、放棄者や叛逆者たちを不釣り合いに多数生み出したのだろう。

5人に1人の奴隷が、水準の高い職能的地位を持ち、肉体的にそれほど疲れない、もっとおもしろい労働に従事し、しかもずっと高い実質所得を得ていたという事実を無視することで、別の盲点が生じる。つまり、奴隷という枠組みのなかでも、柔軟できわめて効率的なインセンティブシステムが存在下、ということが見えなくなってしまうのだ。奴隷所有者が、規律と効率性を促進するのに鞭だけに頼ったという発想は、きわめて誤解を招くウソだ。奴隷でも自由社会でも、物質的な報酬という形でのプラスのインセンティブは、経済社会統制の強力な道具だった。奴隷制は、黒人の経済社会的な移動性を制限はしたが、それを完全になくしたわけではない。

奴隷の大半は農業単純労働者だったが、こうした農夫たちがごくわずかな、きわめて反復的な仕事ばかりしていて、技能の蓄積がまったくなかったというのはウソだ。リソースの様々な使途や、作物や家畜のマーケティングといった、実業的な判断を除けば、奴隷は農業活動の全域に携わっていた。あらゆる種類の作物の作付け、栽培、収穫、さらに動物の世話、酪農、土地改良、設備や機械の使用とメンテナンス、建物建設などの活動がここ

に含まれる。様々な活動への参加は、例外というよりも常態だった。

農園の奴隷が主に、綿花摘みや栽培をやっていたという信念も事実に反する。このありがちな誤解は、部分的には広く引用されているがひどく誤解されている、1850 年アメリカ国勢調査監視員の主張のせいだ。それによると、当時の農業部門の奴隷 280 万人は、以下の比率で南部の主要作物を生産している畑に分配されているという。

綿	73%
タバコ	14%
砂糖	6%
米	5%
麻 (ヘンプ)	2%

この奴隷の農業人口分配はおおむね正しいが、そこから綿農園にいる奴隷 200 万人 (0.73 x 2,800,000) が、その労働時間すべてを綿花摘みと栽培に使っていたということにはならない。まず、綿農園の奴隷のほぼ 1/3 は十歳未満の子供で、普通は労働作業には使われなかった。残りの奴隷 140 万人のうち 20%は (すでに述べたように) 職人や準技能職や家事担当で、畑仕事には携わらなかった。さらに、残り 115 万人の作男たちの労働時間も、綿ばかりに使われていたわけではない。主要な商品作物が綿花だった畑ですら、奴隷たちの労働時間のほとんどは、綿栽培以外に使われていた。綿花はほぼ 100%が畑から外に出荷されたが、穀物、野菜、肉の生産のほとんどは農場内部で消費されていたのだ。

綿花はもちろん、大規模綿花農園では唯一最大の作物で、奴隷の労働時間の 34%が注ぎこまれていた。だが家畜の飼育 (およびその飼料栽培) も、奴隷の労働時間を同じくらい使っていた——25%ほどだ。人間が消費する穀物もさらに 6%使う。奴隷労働力の残り 34%は、土地改良、柵や建物の建設、他の作物 (大麦、ライ麦、小麦、ジャガイモ等)、家事、家庭内製造 (特に衣服生産) にあてられていた。

奴隷職能の構造をめぐる議論は、これまで南北戦争前の最後の30年に限られていた。それ以前の構造は、どのくらい似ていたのか、ちがっていたのか? データの制約から完全な答は出せないものの、一つ明らかな点がある。黒人の相当部分は、奴隷時代を通じてずっと職人だったということだ。いまのところ、18世紀の奴隷人口に占める職人などの非農業単純労働者の比率について、唯一の系統的な証拠は、逃亡奴隷広告の分析からくるものだ。1736-1801年に、こうした広告に登場する1138人の職能を分析すると、22%は職人や工芸家であり7%は家庭使用人だ。もちろん、こうした広告に挙がる奴隷はサンプルとして偏っているかもしれない。まず、所有者が広告に投資したがるかどうかは、奴隷の価値に影

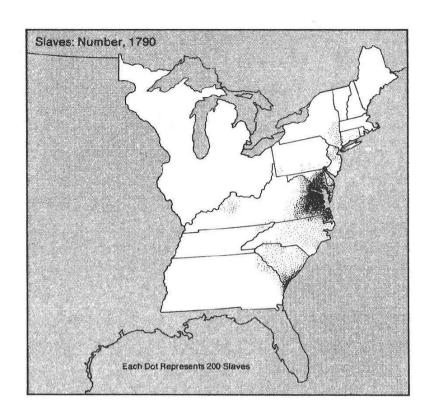
響されたはずだし、高技能奴隷のほうが逃げ出す可能性が高いかもしれない。それでも、 こうした統計は北アメリカへの訪問者が伝える間歇的な印象記と整合している。

おそらく、1790-1860年で最も顕著な奴隷職能の変化は、畑仕事の労働対象が変わったことだろう。綿は南北戦争前夜には、南部最大の農業作物だったが、18世紀末にはマイナーな作物でしかなかった。1790年の綿花生産は、2000人ほどのフルタイム労働を必要とした。これは 1850年に綿栽培に必要とされていた労働の、たった 0.5%でしかない。ワシントンの最初の大統領就任時には、タバコが筆頭作物だった。だがタバコから綿花への労働ふりかえは大きかったが、それが奴隷技能の発達に与えた影響を誤解してはいけない。タバコだろうと綿花だろうと、農園で働いた農夫たちは、ほとんどの時間を家畜、穀物などの食物栽培に使っていた。主要作物が一つの作物から別のものに移行しても、農夫の総労働時間のうち影響を受けたのはごく一部の利用だ。専門特化していた主要作物がなんであれ、農夫たちは奴隷時代を通じて、多種多様な農場技能を獲得していた。

奴隷の地域間再分配

タバコから綿花への切り替えに伴い、奴隷人口は驚くほどの地理的移動を見せた。奴隷時代のほとんどにわたり、黒人の圧倒的多数は、チェサピーク湾周辺の狭い地域に酋長していた。1690年には、メリーランドとヴァージニアは、総黒人人口の 2/3 強を占めていた。その一世紀後でも、ヴァージニアとメリーランドは奴隷人口の 56%を保有していた。奴隷人口がこのチェサピーク湾周辺への集中状態から、南部中央は南西部の州に移動したのは、19世紀初頭までそれほど顕著な動きではなかった。1820年には、ヴァージニアとメリーランドの奴隷比率は 35%にまで下がった。そして南北戦争前夜、この二つの州は全国の奴隷のたった 15%を擁するにとどまった。1世紀半にわたり比較的安定していた奴隷人口の中心が、ものの50年ほどで、チェサピーク湾近辺から、西ジョージアのあたりに移動したのだ。

この奴隷の急速な地理的再分配を引き起こしたのは、二つの要因の組み合わせだ。まず、世界の綿花需要が激増したこと。1790年にたった3千ベイルだったアメリカの綿花生産は、1810年には178,000ベイル、1860年には4,500,000ベイルに増えた。利潤の魅力に応えようとはやる農園主たちは、ジョージア、アラバマ、ミシシッピー、ルイジアナ、テキサスなど、メリーランドやヴァージニア、カロライナなどよりもはるかに綿花生産に適した西部地域に殺到した。第2の要因は、輸送手段の改善だ。河川蒸気船と鉄道の発達で輸送費が下がり、かつて商業利用には遠すぎると思われた肥沃な土地が、生産に使えるようになったのだった。



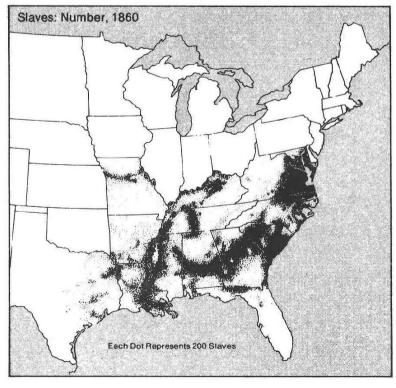


図 11 奴隷人口の分布、1790年と 1860年

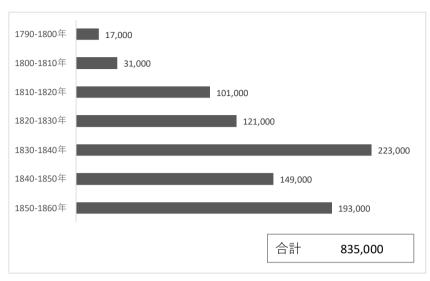


図12 地域間の奴隷の移動、1790-1860年

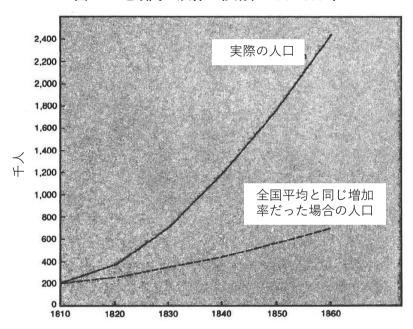


図 13 奴隷転入州の奴隷人口推移と、全国平均増加率の下での予想推移

1790-1860年にかけて、合計 835,000人の奴隷が転出州から転入州に移された。移民のテンポは次第に加速した。この70年間で、後半の移動は前半の三倍の量だ。転出州の主要なところはメリーランド、ヴァージニア、南北カロライナだ。この四州で転出者の85%を占める。一方その転入先はアラバマ、ミシシッピー、ルイジアナ、テキサスの各州で、あわせて転出した黒人の75%を受け容れた。奴隷の移転が、転出転入州の奴隷人口の増加率に与えた影響はかなり大きなものだった。1860年には、転出州の奴隷人口は、全国平均で増えたと仮定した場合にくらべて60%にとどまった。一方、転入州では、全国平均の増加率だった場合に比べて、3.6倍の水準になっている。

奴隷はどうやって東から西に移動したのだろうか? 地域間で移動する黒人のほとんどは、 東の奴隷所有者たちが奴隷商人たちに販売して、その商人たちが西の市場に輸送して再販 したのだろうか? それともほとんどの奴隷は、所有者といっしょに農場が丸ごと西に移動 するのに従って、まとめて地域間移動をしたのだろうか?

これはきわめて重要な問題だ。奴隷経済の伝統的な解釈のうち、いくつか主要な側面は、この問題の答にかかっている。伝統的な見方では、奴隷農園での非効率的な農法のおかげで、「旧南部」の州では土壌が衰えたのだという。そうした土壌は肥沃さを失い、もはや奴隷労働に基づく農業を儲かる形では支えられなくなった、というわけだ。だが、地域間の奴隷取引のおかげで、旧南部の奴隷制は息を吹き返した、という。19世紀半ばの有力なイギリス経済学者で熱心な奴隷廃止論者ジョン・エリオット・ケアンズの言葉を借りれば「奴隷取引により得られた利潤、それだけが」、「自業自得の結果から北アメリカの古い奴隷州での奴隷制が延命するのを可能とした」。彼によれば奴隷制は「南部の事業に新しい土壌」を開いた、「アメリカ量の莫大な拡張によって」救われたのだ。

農園主の問題は、一石二鳥で解決され、国内奴隷取引が始まった。奴隷制は、ヴァージニア州の土壌から最高の肥沃さを奪ったが、それでも優れた気候はあった――その気候は、南部のための培養場所として見事にふさわしいものにしてくれる。新州と旧州の間の分業が起こった。前者の土壌は大幅にやせていたが、気候はすばらしかった。後者では、気候は重労働を続ける人間の命には不適切だが、土壌はうなるほどの肥沃さだった。したがって旧州は、奴隷が肉体的に壮健となるまで育て養う部分を担当し、新州はそうして獲得された肉体的勢力を使い果たすことで、その処女地リソースの開発を行ったわけである。

この奴隷の地域間移動についての説明はしばしば繰り返されているが、まったく事実に基づいていない。手持ちの証拠を見ると、西への移動を行った奴隷の84%は、所有者といっしょに引っ越している。1810-1860年の半世紀にかけて、東から西に売り飛ばされた奴隷はたった127,000人だ。つまり年平均で2500人強でしかない。旧南部の農園主が意図的に奴隷の輸出向け培養を行っていたにしても、かなりマイナーな「作物」でしかない。1860年に東から西に売られた奴隷の総価値は、およそ300万ドルだ。あまりに小さすぎて、輸出州の農業総産出の1%にも満たない。こんなものが農園農業の成否を分けるものになったはずは絶対にない。特に、平均的な地域での壮年の奴隷売買では、価格のうち利益分は1/4でしかないことを考えればなおさらだ(残り3/4は育成費用の分となる)。言い換えると、販売州の奴隷所有者が、地域間の奴隷輸送で得た平均利益は、年4ドル以下ということだ。

もちろん、地域間奴隷輸送の伝統的な解釈は、経済問題に限ったものではない。多くの人にとって、奴隷取引の最も決定的な側面は、それが奴隷家族のまとまりに与えた腐食的な影響だ。奴隷制が黒人一家に与えた影響に関するほとんどの問題は後の章で検討しているので、ここでの議論は地域間の奴隷移動により、結婚が広く引き裂かれることになり、夫が妻から引き離され、子供たちが夫婦から奪われたりした、という主張だけに検討をしぼろう。

もちろん、地域間の奴隷取引のおかげで、奴隷同士の結婚破壊がまったくなかった、などということはあり得ない。だが問題は、それがどのくらい一般的だったのか、という話だ。地域間取引で圧倒的に最大の市場であるニューオーリンズで、取引記録のデータを見ると、奴隷の結婚破壊が奴隷貿易でよく起きるとか、ましては普遍的なできごとだったという通俗な見方とは、まったく反対の結果が出てくるのだ。

こうした記録は、1804-1862 年についてのものだが、14 歳以上の奴隷販売の 84%は未婚だったことを示している。既婚者のうち 6%は伴侶もいっしょだ。そして残りの少なくとも 1/4 は、伴侶に先立たれたか自発的に別れている。つまり、地域をまたがる販売により、結婚が引き裂かれたのは 13%未満だろう。そして、売却は地域間移動のたった 16%だったから、おそらく西に向かう奴隷の結婚のうち、移住プロセスで破壊されたのは 2%程度だ。また西行きの移民が結婚に与えた悪影響が、白人より黒人のほうで顕著だったというのもまったくはっきりしない。

ニューオーリンズの記録はまた、13 歳未満の子供の単独販売がきわめて多く、そうした子供が「取引においては目玉商品に近かった」という主張も疑問視させるものだ。というのもニューオーリンズの販売のうち、13 歳未満の子供はたった 9.3%なのだ。全米水準にこれを投影すると、子供の地域をまたがる販売は、年間たった 234 件ということだ。この子供販売の数の少なさは、ほとんど孤児だと考えれば容易に説明がつく。これはU・B・フィリップスなどの南部歴史研究者の主張通りだ。当時は死亡率が高く、13 歳の子供のうちおよそ 15.9%は孤児だった。だから 1850 年には、0-12 歳の子供のうち、孤児が 19 万人いたことになる。地域にまたがる販売が、810人に1人だと考えれば、この子供の販売がすべて説明できてしまう。

多くの読者は、こうした結果が一般に求められている事実からはあまりに遠く、これまでの学者たちが集めてきた大量の証拠ともあまりに整合しないので、信じられないだろう。だがよく見てみれば、そうした「大量の証拠」は非常に断片的で、きわめて弱いことがわかる。著書『旧南部での奴隷取引』が伝統的な見方の最も権威ある学術的な表現だが、その著者フレデリック・バンクロフトは、子供の販売がきわめて多かったというのを、議論の余地なき事実としている。そして U・B・フィリップスによる「幼い子供が (中略) 別売

りされることはほとんどなかった」という主張に対して、自称それを否定する圧倒的証拠なるもので反論している。だが、その「あふれるような」「議論の余地なき事実」というものは、実は 26 年間 (1834-1860 年) にまたがる 50 人ほどの孤立した取引の羅列でしかない。

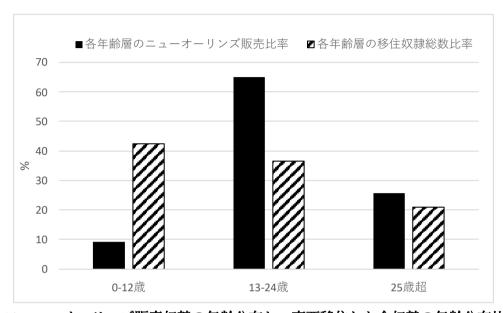


図 14 ニューオーリンズ販売奴隷の年齢分布と、東西移住した全奴隷の年齢分布比較

これまでの奴隷取引の見方は、南部奴隷州で直接の目撃者たちの証言をもとに、歴史家たちが構築したものだ。そうした目撃者たちは、実際にこの貿易の範囲や性質を見極めるために必要なしっかりしたデータを持っていなかったので、印象を伝えることしかできなかった。残念ながら、こうした印象は均質にはほど遠い。1830年以降には、奴隷制から距離をおいた客観的な目撃者はあまりいなかった。ほとんどの目撃者なる人々や旅の目撃談は、実は奴隷制への支持または反対の論客たちなのだった。こうした対立し矛盾する論考の間で選択するとき、伝統的な奴隷貿易の見方を構築した歴史家たちは、南部著述家の印象は一貫して単なる奴隷制擁護だと拒絶し、北部またはヨーロッパの批判者の見方が正確だとして受け容れた。もちろん、真実は正義の側にあるはずだと信じたくなるのは人情だし、だから一部の記述を受け容れて、他のものは却下するための客観的な基準が見あたらない以上、そうした学者たちはそういう人情に導かれた可能性はある。

歴史学者たちがこれまでニューオーリンズのデータを使わなかったのは、その存在が知られていなかったせいではない。データ量があまりに多すぎて、現代の統計手法の訓練を受けていない学者には、まともに取り組めなかったのだ。またこうした記録は、奴隷の年齢、性別、出身地について、まちがった情報を回答者が与えそうな状況や目的で取られた

ものではない。こうした記録は、あらゆる奴隷販売の記録を求める法律により作られたもので、それは所有者が所有権に法的な力を与えるのに必要とされた。つまりこうした記録は、今日ならば不動産の登記に必要なものとして維持されているものとかなり似ている。もちろん、南部の他のところから類似のデータが出てくればよいとはいえ、ニューオーリンズの州をまたがる販売の年齢構成や性別構成画、他の南部中心と目に見えてちがう、と信じるべき理由はない。さらに、ニューオーリンズは他のどの歳寄りも、地域間の奴隷取引を支配しており、年に州の間で販売される奴隷の1/3ほどを扱っていた。

ニューオーリンズのデータは、奴隷所有者たちは黒人家族を引き離すのをいやがったことを示しているが、なぜいやがったかという理由はこれではわからない。初期の歴史学者たちは、黒人の結婚の破壊という、ドラマチックで強力ながら、かなり稀な事例に過度にこだわったため、ご主人階級が家族という制度にどれほど重要な役割を付与していたのかを理解できなかったのだ。この役割については第 4 章で触れる。ご主人たちが、家族を競売にかけたくてたまらなかったのだという誇張した見方にこだわったせいで、奴隷生活の困難にもかかわらず、黒人家族が獲得した強さと安定性を獲得していたことを、歴史学者たちは認識できずにいたのだ。

奴隷の市場

奴隷市場には大きく二種類あった。一つは購入市場だ。奴隷は一般に、長期にわたり労働力を調達したい個人が買った。だが、奴隷の労働が比較的短期間しか必要とされないときもあった——1日、一週間、1か月、一年など。短期間だけ奴隷労働を雇用したい人々は、雇用あるいは賃貸市場に参加すればいい。他の高価な長期耐久資産と同じく、奴隷にもきわめて活発なレンタル市場があった。

これまで見た通り、市場での販売は、地域や企業の間で奴隷労働を再配分する手段の一つにすぎない。そして地域間の動きでは、家族全体や農園全体が移住するのに比べると、販売ははるかに重要度が低かった。

ここから、市場メカニズムはどうでもよかったという結論に飛びついてはいけない。というのも、東西での取引はドラマチックに描けるために、歴史学者がやたらに注目してきたとはいえ、国内奴隷販売のごく一部を占めるにすぎないからだ。ニューオーリンズのデータを見ると、そこで販売された奴隷のうち、輸出州からの奴隷はわずか 25%にすぎなかった。クレセントシティ (ニューオーリンズ) で販売された奴隷の約 68%は、ルイジアナ州(訳注:つまり地元)の住民が所有していた。残り 7%は、ルイジアナ州と同じく奴隷の純輸入州だった西部の州の所有者だ。1830-1840 年の 10 年間にわたるメリーランド州での奴

隷取引研究によると、総販売数 (地元および州をまたがる販売) は毎年、奴隷の総人口の 1.92%だった。この比率を全国に適用すると、1820-1860 年の総奴隷販売は、年間 5 万件程度となる。言い換えると、ある年に奴隷を売りに出す奴隷所有者はたった 22 人に 1 人で、そのうち 1/3 は死亡者の遺産処分だ。

この低い販売率は、南部の農園主の間では奴隷の投機的な売買が普通だったとか、奴隷は一時的な価格の変動に便乗するために売買されたとか、植民者が日次、週次、月次の綿花や鉄道会社債券価格の変動に乗じたのと同じように頻繁に奴隷を売買したとかいう通念とは、まったく対立するものとなっている。そもそも綿花や社債と比較するのがまちがっているのだ。倉庫にある綿や鉄道社債の投機費用は、奴隷で投機しようと思ったときにかかる費用とは比べものにならないくらい低い。価格が一時的に上がったからといって手持ち奴隷を売ろうとする農園主は、通常の仲介手数料にくわえ、奴隷価格が再購入を正当化するほど低くなるまでに、遊休となったり使用率が下がったりする土地、建物、設備を遊ばせておく費用も負担しなくてはならない。奴隷価格の週ごと、月ごとの変動が、そんな費用をカバーできるほど大きかったことはめったにない。さらに、奴隷は「中位」短繊維の綿花のような、均質な資産とはとてもいえない。壮年の農夫(18-30歳の健康な男性)ですら、強さ、知能、活力の個別の開きのため、数百ドルの価格の開きがあった。ある奴隷をこちらの所有者にとってきわめて有益にした特徴、たとえばその農園の規定作業へのなじみ具合や、動機に影響するような個人的なこだわりは、あちらの所有者には大して価値がなく、したがって、奴隷商人への売却を通じてその価値を回収するのもむずかしい。

奴隷は一般に、投機のためではなく、使役のために購入されたという事実は、事業継続する農園からの販売がきわめて少なかったことからはっきりわかる。購入された奴隷が売りに出されることはほとんどなかったし、そうした農園で生まれた奴隷が売りに出されることもめったになかった。こうした結論は、奴隷総数3900人となる、農園19ヶ所の奴隷誕生、購入、販売の記録を分析した結果として得られたものだ。1865年までの90年間で、こうした農園から売られた奴隷はたった7人だ。このうちこれらの農園で生まれた物は6人、1人は購入した奴隷だった。この期間にこの19ヶ所の農園で生まれた奴隷は、全部で3300人いたので、誕生と出生の比率はたった0.2%だ。少なくともこうした農園では、市場で売るために奴隷を培養するなど、明らかに行われていなかった。

では、売られる奴隷の多くはどこからきたのか? メリーランド州の研究によれば、全販売数のうち半分くらいは、農園主が死んで、遺族が家族の事業を継げない/継ぎたくないため、遺産を精算した結果だ。残りの奴隷売却の背景については、証拠はないも同然だ。一部はまちがいなく、破産などの財務的な苦境から仕方なく行ったものだ。だが農業での破産率はかなり低かったので、そうした財務的問題による叩き売りはごく一部にとどまった

はずだ。一部の奴隷は、その農園の規定作業に適応できない、またはそうしたがらないために売りに出された。ときどきは、奴隷が家族の元に戻りたいと願ったので売り出されたり、何らかの理由で別の農園に行った方が頑張って働く気がある場合に売り出されたりした。また、政府による販売もあった。というのも裁判で有罪となった奴隷たちは、その郡や州の外で売却するのが要件となっているのが通例だからだ。これは本来なら死刑となる罪を犯した奴隷にすらあてはまる。処刑して奴隷の資産価値を失うのを嫌って、法定はしばしば死刑を減刑して、短期間(6か月など)の懲役刑に鞭打ち、焼き印、州境の外での売却あるいはときに国外での売却が宣告された。ナット・ターナー反逆(訳注:1831年に、ナット・ターナー率いる奴隷たち70人ほどがヴァージニア州で蜂起し、無差別殺人を繰り広げた事件)のような場合ですら、経済的な動機のために多くの死刑判決は国外退去命令に変えられた。

仕事や地域の間で、永続的、または長期的な労働の再配分の必要性が生じた場合、調整は売買と移住の両方により行われた。労働の需要の一時的な変化への対応は、借り上げ市場を通じて行われた。歴史学者たちは、レンタル奴隷というやり方があったのは十分に知っていたが、著作の中ではこれまでまともな扱いがされていない。奴隷制のこの段階は、販売がときどきもたらした、永続的な家族の引き離しほど撹乱的ではないと感じたせいかもしれない。さらに、レンタル奴隷は、自由な労働の雇用とあまりに似ていると思われて、奴隷制の中心的な特徴として扱うには、あまりに周縁的、あるいは異常なものだとすら思われたのかもしれない。このレンタル奴隷は特に、自分の意志でしばしば己を貸し出した、奴隷職人に顕著だった。こうした奴隷は実質的に、自由な普通の職人と同じ形で活動していた。自分の仕事を自分で宣伝し、自分で契約交渉して、自分でお金を受け取り、借金を返済して、自分の住居と仕事場を手に入れた。こうした奴隷と自由な職人との主なちがいは、奴隷は所有者に所得の一定割合を支払わねばならなかった、ということだ。

雇用/レンタルは、奴隷制の中でマイナーな特徴でもないし、どうでもいいものでもない。 アメリカ国勢調査の手書き表データを検討すると、都市の奴隷労働者のうち 31%は、雇用 されていることがわかる。リッチモンドなど一部の都市では、その比率は 50%を超えてい る。地方部の奴隷レンタル比率はもっと低く、一般に 6%程度だ。つまり奴隷労働力全体 として見れば、平均するといつも 7.5%ほどが雇用されていたということだ。一年以上の雇 用契約はめったになく、ずっと短い期間の契約が圧倒的に多かったので、おそらく奴隷雇 用が奴隷の数に対して占める比率は 15%以上だっただろう。つまり、雇用取引は、奴隷の 販売に比べて五倍も多かった。

多くの奴隷の雇用は、所有者と借り手との間で直接行ったり、奴隷自身が借り手と交渉 したりしていたが、「一時雇用」の提供を専門に行う業者もいた。リッチモンドだけでも、

地元住民や、周辺の地方部の人々、周辺都市の人々に対してレンタル提供をする業者が 9 つもあった。

奴隷の借り手は、新線敷設などでいつもよりもたくさんの労働力を必要とした鉄道会社、 事業が急激な周期性や季節性を持つ製造業者、収穫時といったピーク時に労働力を必要と する農家などだった。また、たまに必要性のある人々——屋根を修理したい家主や、婚礼 で追加の召使いが必要な一家など——も奴隷をレンタルした。

もっとも頻繁に行われたレンタル契約は、年次契約だったようだ。こうした場合の契約は、借り手の義務についてかなり詳細な規定が行われている。借り手は適切な衣食住と医療を奴隷に提供しなくてはならなかった。そしてしばしば、雇用期間が終わるときには、奴隷に新しい服を 1 着、新しい靴を一足提供しなくてはならなかった。奴隷が逃げたり病気になったりしたら、その喪失時間分はすべて借り手が負担する。借り手の過失で奴隷が逃げたり死んだりしたら、借り手はその奴隷の価値全額を負担させられる。借り手が、その契約の条項を真剣に受け止めていたことは、レンタル奴隷の死亡率に関する断片的な証拠からもうかがえる。この比率は、その対応する年齢分類の全奴隷で見られる比率を上回るものではないようだ。

つまり、19世紀を通じて公言され、今日でも実に広く受け入れられている主張、人間の所有は資本主義社会の変動する労働需要とは相容れないという発想は、事実に基づくものではない。南北戦争前夜の南部は、各種の南部企業や地元の急変する労働需要に、様々な仕組みで見事に対応した。直接的な比較が可能な一面、つまり地域間の移動では、どうやら東西の移住は自由人より奴隷のほうが少し多かったようだ。また、人に所有されていたことで、黒人が比較的近代的な経済に求められる技能のほとんどを身につけられなかったというのも事実に反する。奴隷制は奴隷による財産所有を認めなかったため、黒人が実業的な名経験を得る機会は大幅に下がった。奴隷制はまた、法曹、教育などの多くの職業から黒人を排除した。こうした制限で、黒人の機会がどのように制約されたかを検討するのはもちろん重要なことだ。だが、黒人が獲得できた技能についてもっと知るのも重要なのだ。

課題

奴隷所有者の利潤の源泉と規模は、これまでいささか謎だった。しっかりしたデータがないので、専門歴史研究者たちの間で論争が生じて、それが75年近くも続いている。ごく最近まで、この論争で支配的だったのは、アーリック・B・フィリップスの見方だった。南部生まれで、ウィスコンシン大、ミシガン大、イェール大で教授を務めたフィリップスは、長年にわたり南北戦争前夜の南部に関する著作の大御所だった。奴隷制の経済性解釈は、まず1905年の論説で提示され、後に1918年と1929年の著書で深掘りされた。フィリップスは南部の文書館を、奴隷農園の運営に関する定量的、定性的な情報を求めて探し回った。その探索は、それ以前の学者のだれよりも、そしてその後の学者のほとんどよりも徹底していた。それでも、彼が見つけてきた証拠は典型的な利益マージンの計算には不十分だった。最終的に彼は、奴隷の価格と綿の価格について集めたデータに主に頼ることで議論を構築した。

フィリップスの見方では、奴隷労働は非効率だった。それが儲かる投資になったのは、 三つの条件が揃ったときだけだ。

- 1. 自由労働が極度に不足し高価になった
- 2. 単純な反復作業に就く奴隷を厳格に感得できる農業組織システムと作物群
- 3. 奴隷の低価格。

フィリップスは、このすべてがアメリカ独立革命以前の南部植民地には存在し、だから こそ奴隷制は、そこに根づいて繁栄したのだ、と論じる。

彼はまた、奴隷制にとって有利な条件は、1783年のイギリスとアメリカとのパリ講和条約に続く十年で崩れ始めたのだと論じる。特に、農園作物の世界市場が崩れたことで二番目の条件が怪しくなってきた。フィリップスによると、タバコ価格があまりに下がって「タバコ栽培に新しい畑を開墾したら、古い畑を同じだけ潰すことで相殺された」。「インディゴ生産は衰退しつつあり、米栽培は痛々しい移行期にあった」と彼は続ける。綿繰り機が発明されなければ、奴隷制は消えていたかもしれない。だが綿花栽培の台頭で、黒人

奴隷制は息を吹き返した。世界の綿市場の爆発で、国内奴隷の需要が刺激され、奴隷貿易は復活した。

フィリップスによれば、議会が 1808 年に新規の奴隷輸入禁止措置を施行したことで、奴隷制継続に新たな危機がやってきたという。この行動の影響が市場に波及するまでにはしばらくかかった。だがやがて、それまでの奴隷価格の低位安定期が終わり、奴隷価格の上昇期がやってきた。フィリップスは、奴隷価格の上昇が綿価格上昇よりはるかに急激だった点を強調した。彼にとっては、綿価格と奴隷価格の比率は、奴隷投資が賢明かどうかを見る決め手だった。それは株式投資が賢明かで、PER が重要なのと同じことだった。

フィリップスが集めたデータでは、奴隷・綿価格比は 1805 年から 1860 年にかけて六倍 に上がった。この規模の大きさはフィリップスにとって、南北戦争前夜の十年までに、奴隷の価値が高くなりすぎているという明らかな証拠だった——つまり、投資が通常の利益率をあげるには高すぎるということだ。

何がこのような奴隷綿価格比の上昇を引き起こしたのか? フィリップスによれば、それは奴隷維持費の低下では説明できない。また奴隷生産性の上昇でも説明できない。というのも「仕事の能力の面で、1800年の壮年奴隷は、1860年の奴隷にかなり近いか、ほとんど同じ価値しかなかったからだ」。

フィリップスの結論では、この上昇は投機の結果なのだ。奴隷供給は、奴隷貿易の閉鎖により「追い詰められた」。だから「価格が競り上げられて、過大な価値評価になるのも必然であった」。この投機圧力は、他の二つの傾向に後押しされた。まず綿花生産の規模の経済がある。だから農園主たちは絶えず、大規模運営の恩恵を受けるために、奴隷労働力の規模拡大を目指していた。第 2 に奴隷は生産目的のみならず、社会的地位と富のシンボルとして求められていたのだという。

フィリップスは、投機、規模の経済、顕示的消費が奴隷=面価格比の上昇をもたらした という証拠は一切出していない。この点は強調しておきたい。単に、それが正しい説明要 因なのだと主張しただけだ。

奴隷制がほとんどの農園主にとって儲からないという主張は、奴隷制が内部の経済的矛盾により死にかけていたか、少なくとも衰えつつあったことを示唆する。フィリップス自身はこの理論を提唱はしなかったが、「フィリップス学派」とでも呼ぶべき多くの歴史学者たちは、これを強力に唱えた。こうした学者たちは、やがて奴隷制の自縄自縛につながったはずの経済的な力を導き出そうとした。奴隷経済の三つの特徴がそこから挙げられた。

まず、南部の農園主たちは綿の過剰生産に向けた抑えがたい傾向に囚われていたと想定された。この理論の主要な著者は、テキサス大学のチャールズ・W・ラムスデルだ。ラムスデルは、過剰生産への傾向は、1858年以降の綿花栽培の急拡大と、その後の綿価格低下

で明らかだと論じた。この論点を裏付けるため、彼はこの十年の最後の数年と、その最初の数年に見られた条件とを比べた。ラムスデルは、50年代は綿の価格が高く、生産水準は普通だったことを指摘する。1850年から1857年にかけて生産量はゆっくり増え、価格は比較的安定して1ポンド10セントから13セント超の間で変動した。だが1858年に綿生産の急増が始まり、同時に価格が低下し始めた。ラムスデルは、綿収穫の規模は1859-1860年で倍になったと強調する。そしてその増加の70%は、1857-1860年に起きた。

なぜ産出がいきなり増えたのか? ラムスデル曰く、それは「一部は南部全域に 1850 年代終わり頃から急速に鉄道が建設され、それが新しい土地を市場の到達範囲にして、綿の作付面積を増やしたのが理由だ。だがもう一つの理由は、テキサスで新しい畑ができたことだ」。ラムスデルによると、そうした状況は明らかに、産出が将来的に増えることを示していたし、価格は当然下がるはずなのだという。彼は続ける。「戦争が間に入らなければ、あらゆる理由から見て継続的な過剰生産が起きて、きわめて低い価格が 1860 年代から 1870 年代まで続いたはずだ」。

だがラムスデルの信念の「あらゆる理由」というのは具体的には何なのだろう? テキサ スの処女地が綿花生産に使われるようになり、綿の産出増加が価格を下げるというラムス デルの思いこみしかない。ラムスデルは、この予測を裏付ける証拠を一切提示していない。 奴隷制の経済的自縄自縛を主張する二つ目の議論は、「自然の限界」理論として知られ るようになった。この理論は、二つの従属的な主張から導かれる。一つは、気候と土壌が 綿花栽培の地理的な広がり、ひいては奴隷農業の範囲を制約した、という。チャールズ・ ラムスデルは、この見方の主要な論者でもあり、この自然の限界が実は1860年までに到達 されていたのだ、と主張する。もう一つの議論は、奴隷制が儲けを出し続けるためには、 絶えず畑を拡張し続ける必要がある、というものだ。奴隷制は急激な土壌の栄養枯渇を招 くので、適切な奴隷生産性水準を維持するためには、たえず新しい土地を生産に取り込む 必要がある。結果として、土壌と気候の自然の限界により拡大が不可能となったら、奴隷 制賛成の水準は、間もなくシステム存続が不可能な水準まで下がったはず、というわけだ。 奴隷制が持つ致命的な内部の経済的矛盾論としては、奴隷制と都市社会が相容れないと 称する発想がある。この理論はジョン・ケアンズ、フレデリック・ダグラス、チャール ズ・H・ウェスリー、ルイス・C・グレイ、チャールズ・ラムスデル、リチャード・C・ウ ェイドなど数多くの著者が支持してきた。一部の著者はこの見方を、奴隷が「原始的すぎ」 て都市生産と生活の複雑性にうまく適応できないという人種差別的な考え方に根拠づけて いた。他の人々は、都市環境で奴隷を統制するのが困難だという脅威のせいだと考えてい た。ストライキ、財産攻撃、その他の犯罪、逃げやすさはどれも、奴隷の警備費用を大き

く増やす。また都市の人口密度が高まると、統制費用は単純な比例を上回る勢いで上昇す

るのだとされてきた。奴隷制という「特異な制度」は、都市奴隷制の低利潤と、社会のた ゆみない都市化傾向に板挟みになるのは必定、ということだ。

一部の著述家は、都市化が奴隷制に与える腐食的な影響の証拠を、10年ごとの国勢調査に見出した。人口報告を見ると、1820年から1860年にかけて、南部の十大都市における奴隷比率がますます急速に減少している。実際、南北戦争前夜の最後の十年には、絶対数でも減少している。

フィリップス学派の全員が、奴隷制は儲からないという主張から、奴隷制は自らの重みで崩壊するはずだという結論に飛躍はしなかった。最も目立つ例外はユージーン・ジェノヴェーゼだ。マルクス主義系の学者だったジェノヴェーゼは、フィリップスの分析から人種差別的な側面を抜いて、フィリップスの研究や発見が含意している真の階級関係だと思ったものを前面に打ち出そうとした。

フィリップス学派の他の人々同様、ジェノヴェーゼは奴隷制が経済的に非効率で、土壌を枯渇させ、製造業の発達を制約し、都市化と対立し、畑の拡大に向けた容赦ない動きを生み出すという点には同意した。だが収益制の問題については言葉を濁し、ときには厳密な商業ベースでみると奴隷への投資は儲からなかったかも、と述べ、また別のときにはやはり儲かったかもしれないと述べる。またジェノヴェーゼは、これは解決すべき問題だとは思っていなかった。その正反対だ——彼は先人たちが収益性の問題にこだわっているのを糾弾し、それにより奴隷システムや奴隷所有階級の中心的かつ圧倒的な特徴が目に入らなくなっていると述べた。

ジェノヴェーゼによると、農園主たちは「前資本家的」貴族であり、「反ブルジョワ精神」を抱いていて、このため利潤動機など名誉、奢侈、安楽、達成、家族の二の次になっていたのだ、と述べる。「北部では、人々は事業とお金の誘惑そのものに従ったのだが、南部ではある特定の財産形態は名誉、名声、権力の目印となったのだった」。こうした非経済的な目的のため、奴隷所有者たちは工業のもっと大きな利潤を蹴って、物理資本のほうが収益率が高かったのに、奴隷に注ぎこんだ資産を維持する道を選んだのだった。

結果として、農園主たちが利潤低下のためだけに奴隷制を放棄したはずだという発想はバカげている、とジェノヴェーゼは述べた。奴隷所有者は利潤を無視はしていなかったものの、権力維持や道徳的価値、社会的環境のほうをそれ以上に重視していた。こんな見通しがあったため、農園主たちが「北部の資本家たちが、収益率が低迷したときに手持ちの鉄道株や社債を売却するほど簡単に奴隷を売り払う」と信じるべき理由はない、というのだ。ジェノヴェーゼは、利潤低下に直面した奴隷所有者たちは、経済的苦境に政治的な解決策を求めると考えた。彼の見方では、南北戦争というのは、南北戦争前夜にご主人階級が直面していた危機の増大に対する、彼らの解決策だったのだ。奴隷主義は、「大胆な一

撃で、政治的独立を完成させ、それを経済的、社会的問題への拡張主義的な解決策の提供 に使おうと」願ったのだった。

フィリップス学派を構成する侮れない軍団に対し、奴隷所有者が高い収益率を稼いでいたと信じる者たちは、最近までは劣勢を強いられた少数派でしかなかった。この少数派の学者は、奴隷制が経済的に十分成り立つシステムだと考え、経済的な力だけでこの仕組みがすぐに消えたはずだという見方を否定した。だがこうした点での合意は、奴隷労働の効率性や、主人たちが奴隷から利益を得た各種の収入源がそれぞれどの程度重要だったのか、という点についての共通見解にはたどりつけなかった。

南部農業の有力な歴史書を描いたルイス・C・グレイは、奴隷が非効率で非生産的だったという主張を拒絶した、現代の奴隷制研究者としてほぼ唯一の存在だ。彼は、奴隷は製造業では劣った労働形態ではあったが、農業では「かなりの技能を示す」ことも多く、さらに自由労働よりもがんばって、責任感も強いことが多かった、と論じた。グレイは、主要商業作物の生産においては、奴隷は明らかに自由労働者よりも効率的だった、と述べている。その優越性があればこそ、奴隷労働者は綿、砂糖、米、タバコで自由労働に取って代わったのだ、と彼は言う。グレイは、奴隷の繁殖が大きな収益源だったはずはない、と述べる。「奴隷を販売のために育てるだけでは、儲からなかった。というのも奴隷が増えてもそれだけでは、かなり慎ましい資本収益にしかならないからだ。(中略) したがって、土地を耕作する以上の大きな労働力を抱えておくのは儲からなかった」

その一方で、フィリップスへの最も系統だった反論を執筆したケネス・スタンプも、奴隷は儲かると考えた。だがそれは、奴隷が自由労働よりも効率的だったからではなく、その労働コストが低いからだ。奴隷のコストが低いので、それで自由労働の効率性の高さが相殺されたのだという。結果として「奴隷は所有者たちに対して、バラツキはあるが維持費よりかなり大幅に高い稼ぎをもたらしていた」。またスタンプは、グレイよりも奴隷の繁殖や飼育を、収入源としてもっと重視した。「無数の細かい証拠を見れば、奴隷は市場販売を目論んで飼育されたことがわかる――つまり国内奴隷取引は『純粋に偶発的』ではなかったということだ」。多くのご主人は「自然葬を資本投資に対する利潤の一部として計算していた。この利潤を実現するために、追加の耕地を耕作することもあれば、奴隷貿易商と取引してそれを実現することもあるのだ」

反フィリップス学派の中で、奴隷飼育に極度の力点をおいたのは、フレデリック・バンクロフトだ。「奴隷飼育は、即座に南部北のあらゆる奴隷保有農民や、多くの農園主にとって、最大かつ唯一の定常収入源となった」。バンクロフトは、「農園における奴隷の年間価値自然増」を、奴隷投資の 4-8%としている。「これはしばしば、農園主が作物で得る利潤の数倍にのぼった。(中略) 実際、単に農業的な結果を見ると、黒字よりも赤字の場合の

ほうが多いのだ」

利潤の水準と奴隷制の資本主義的性格

奇妙に思えるだろうが、奴隷に対する平均的な投資収益率の検討的な調査は、U・B・フィリップスがこうした問題を提起してから半世紀以上たつまで行われなかった。1930 年代と1940 年代には、こうした問題についてちょっとした取り組みはあったが、各種理由でかなりお粗末なものでしかなかった。一般に、こうした初期の取り組みの著者たちは、利益率計算の問題がいかに複雑かを理解できていなかった。計算で使われる方程式の性質をきちんと考えず、推計すべき収入と費用がいくつもあることを考慮せず、推計のもととなった散在する不完全な記録が、どれほど代表的なものかもきちんと考えなかった。

アルフレッド・H・コンラッドとジョン・R・マイヤーの研究は、利潤の問題を扱う取り組みで、決定的な転回点となった。「奴隷に投資をする事業家の観点からすると、収益性を決めるのに関係してくる基本的な問題は、分析面では各種の資本投資に対する収益を決めるときに直面するものと同じである」。こうした形で問題を提起することで、コンラッドとマイヤーはもちろん、単にフィリップスの示唆を採用していたにすぎない。というのも、奴隷と株式市場の類似制を強調したのは、もともとフィリップスだったからだ。だが、フィリップスは自分の問題着想から、奴隷投資に対する収益率計測に向かう方法を知らなかったのに対し、この2人の経済学者はそれができた。

コンラッドとマイヤーは、男奴隷と女奴隷について、別々の収益率推計を堕した。男奴隷の収益率計算のほうが単純だった。まず、奴隷の平均的な資本費用を計算した。これは奴隷の価格だけでなく、奴隷が使う土地、動物、設備機器の平均的な価値も含まれる。次に、年間総稼ぎの推計が、綿の価格や奴隷の肉体的な生産性のデータから構築された。純収入(利益)の数字は、この総稼ぎから維持費や監督費用を差し引くことで得られた。この純収入ストリームの平均的な持続期間は、死亡率表から求めた。こうした推計を元に、コンラッドとマイヤーは男奴隷の収益率を計算したが、南北戦争前夜の農園の大半で、収益率は5-8%ほどだという結果が出た。これは農夫ごとの物理的な収穫や、綿農場の市場価格などで変わってくる。北部寄りの、貧しい松林地域や、東海岸ぞいの枯渇した土地だと、収益率はたった2-5%だ。だが「新南西部の最高の土地、ミシシッピー川堆積地域、サウスカロライナ州やアラバマ州の農園のよいほう」では、10-13%にも達した。

女奴隷の収益率計算は、少しややこしかった。コンラッドとマイヤーは、畑の女性の生産性だけでなく、彼女の子供が生まれてから販売されるまでに見せる生産性や、出産、育児、保育の費用、平均的な子供の数といった追加の要因を考慮しなければならなかった。

生まれてから売られるまで生き延びる子供が、5人未満の女性や10人以上の女性はきわめて少ないという想定で、コンラッドとマイヤーは、収益率の上限と下限を計算した。すると、それぞれ7.1%と8.1%になった。つまり、南部の北にある枯渇した土地の農園主は、男奴隷では4-5%の収益しか得られなかったが、活動全体だと他の機会と同じくらいの収益率を達成できたことになる。これは、女奴隷の子供を西の農園主に売ることで実現された収益だ。おかげで、奴隷労働力の女性側で、7-8%を稼ぎ出せたのだ。こうした取引の証拠は、当時の記述に見つかるし、また奴隷人口の年齢構成からもわかる。それを売る側の州は、15歳未満と50歳以上の人数比率がずっと高かったし、買う側の州は、壮年の労働年齢の奴隷が圧倒的に多かった。

コンラッドとマイヤーの研究は、収益制をめぐる論争に決着をつけるどころか、油を注いだ。だが彼らの研究のおかげで、論争は以前よりずっと的をしぼったモノになった。彼らは計算に関わる重要な変数をはっきりと同定し、計算をどんな方程式に基づいて行うべきかも示した。大量の学者によるその後の研究は、関連する変数の推計値を修正し、計算方程式を改善するのに向けられた。

コンラッドとマイヤーに対する批判の第一波は、おもしろいことにほぼすべてが、彼らの結果を特定方向に歪めている要因についてだけだった——どの指摘も、彼らの収益率推計が高く出てしまうまちがいの指摘だったのだ。あらゆる奴隷が、平均的な寿命だったという想定が利益率を高く見積もってしまうことが指摘された。また、18歳になるまで生き残る女奴隷の子供の数も課題に推計した。そして、奴隷に必要な資本設備の量も過少に推計した。さらに医療、管理職員の雇用、移植などの変動費も少なかった。

論争が展開する中で、コンラッドとマイヤーは逆方向のまちがいもしていたことがわかった。壮年農夫 (18-30 歳の健康な奴隷) の平均生産性は大幅に過小評価されていたし、男と比べた女奴隷の生産性も低すぎた。同時に、出産費用や、若者と老人の農夫に必要な土地、設備、家畜の量も過大に推計していた。さらに、各奴隷が死んだときに、それまで使っていた土地や物理資本も消え去るというまちがった仮定もおいていた。

このきわめて技術的な論争のあらゆる紆余曲折をたどるのは、本書の範囲を超える。中でも重要な専門的ポイントは、補遺 B で論じた。ここでは単に、各種の補正の結果として、収益率に関するコンラッドとマイヤーの推計は、下がるどころかむしろ上がった、と指摘するにとどめる。平均で、奴隷所有者は奴隷の市場価格に対して 10%ほどの収益をあげていた。男女奴隷の収益率はほぼ同じだった。また地域的に見てもだいたい同水準だった。もちろん、平均を中心にバラツキはあった。だが以下で詳しく見る理由から、1820-1860年には収益率の水準が平均から離れるような実際のトレンドは存在しない。

奴隷の高い収益率とその安定性の発見は、奴隷価格がおおむね顕示的消費のせいだとい

う理論に、深刻かつ修復不能な打撃となる。顕示消費が奴隷の市場価格を、事業判断だけから出てくるものよりも高く押し上げてしまうなら、奴隷投資の期待収益率は、他の投資で得られる収益率よりも低くなるはずだ。コンラッドとマイヤーの修正計算結果は、そんな低い収益率を示していない。正反対だ。計算は、各種の非農業事業で得られる平均と同じか、それ以上の平均値を示した。たとえば、1844-1853年で、ニューイングランド地方で最も成功した繊維企業9社が稼いだ平均収益率は、10.1%だった。そして、南部鉄道12社の平均収益率は、1850-1860年の十年で8.5%だ。

奴隷の投資収益率がかなり高かったからといって、一部の農園主が奴隷を買うのにプレミアムを払う気がなかったとか、一部の奴隷が時価で過剰な奴隷を持っていたことがないとかいうわけではない。だが、これらの奴隷所有者の総需要があまりに限られていて、通常のビジネス基準から導かれるもの以上に市場価格を引き上げるほどではなかったことはわかる。つまり、顕示的消費のために奴隷を持ちたがる人は、奴隷の総需要の中ではかなりわずかだった、ということだ。

奴隷が顕示的消費のために広く保有されていたという理論を主張する人々は、その断言について決定的な証拠を一度も提示していないことは思い出そう。この理論はしっかりした証明が要らないように思えた。というのも奴隷投資が儲からないという想定は、奴隷所有者が「過剰」な価格を払う意思を正当化する理由として、顕示的消費をもっともらしく思わせたからだ。この文脈では、奴隷の所有に伴う名誉を示唆するような証拠を挙げるだけでも十分に思えた。だが、名誉は所有者に高い収益率をもたらす、価値の高い様々な資産をもたらすことで得られるのはまちがいない。奴隷所有と名声に正の相関があったと示すだけでは、因果関係の問題は解決しない。奴隷価格が高いのは、奴隷所有者が名声を得るためだったのか、それとも奴隷価格が高いから、それを持っていると名声が得られたのか?この二つで電卓を行うには、奴隷の期待収益率が、他の収益より高いか低いかを知る必要がある。まさにこの点で、顕示的消費理論の主張者たちはまちがえたのだ。

奴隷投資がきわめて収益性の高いものだったという実証は、顕示的消費説を否定するだけでなく、南部の奴隷所有者たちが、利潤よりも権力、ライフスタイル、「父権的なこだわり」を重視する、「前資本家的」「非商業的」な階級だったという主張にも疑問を投げかける。ここでのポイントは、奴隷主義が権力やライフスタイルや父権的なこだわりを重視したかどうか、ということではない。ただ、そうした目的の追求が、一般的に利潤の追求と対立する、あるいはそれを大幅に阻害するものだったか、ということだ。

父権主義は別に本質的に資本主義の活動と対立するものではない。また利潤最大化の障害にもならない。IBM やコダックは父権主義を実践している。彼らの体験は、父権的なこだわりがむしろ、あまり博愛的な管理の下よりも、労働がもっと効率的になるよう仕向け

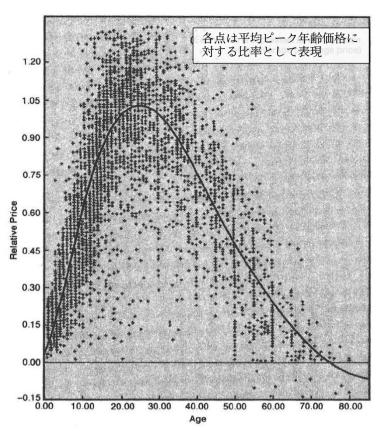
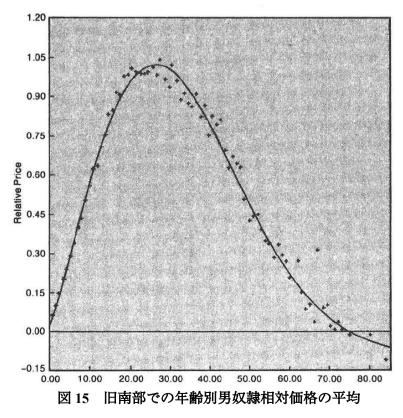


図 16 旧南部における年齢別男奴隷価格の分布



ることで、利潤を引き上げる可能性すら示唆する。温情主義が、奴隷所有者にとってもそ

ういう働きをしなかったと決めつけるべき理由はない。だれも温情主義を実践したご主人たちが、平均で奴隷たちの厚生を無視したとか冷酷だったとかいうのを証明した人はいない。

その逆に、奴隷所有者は計算高いしっかりしたビジネスマンで、奴隷を含む各種資産を、どんな北部資本家にも負けないほど利にさとい形で値づけした、という証拠は大量にある。この論点を見事に示したのが図 15 で、これは男性奴隷 5 千件以上の価格を示したものだ。各年齢毎にバラツキはある (奴隷は健康状態、態度、能力の点で差があったから当然だ) が、分布の示すパターンはかなりはっきりしている。平均では、価格は 20 代後半まで上がり、その後は下がる。年齢別の価格の動きが示す基本パターンは、図 16 のほうがはっきりしている。ここでは、それぞれの観察値はその根慰霊の価格すべての平均を示す。図 15 と 16 はまた、価格と年齢の間の関係を最もよく示す曲線またはプロフィールも示している。

価格の年齢パターンは何で説明できるだろうか? 経時的な奴隷価格のトレンド説明で持ち出された、顕示的消費や金銭とは無関係な議論は、これを見ると明らかに破綻している。 26歳が10歳の二倍の値をつけているのは、高齢の奴隷を持つほうが幼い奴隷を持つよりも二倍の栄誉や名声をもたらしたから、というのはかなり考えにくい。

年齢と価格の関係は、奴隷のライフサイクルの中での稼ぎパターンを考えるほうがうまく説明できる。確かに、年齢と価格のプロフィールは、それに対応する稼ぎのプロフィー

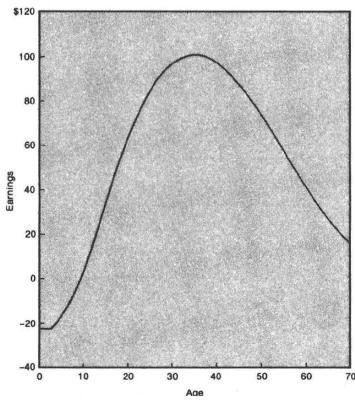


図17 旧南部での年齢別男奴隷の年間純収入、1850年頃

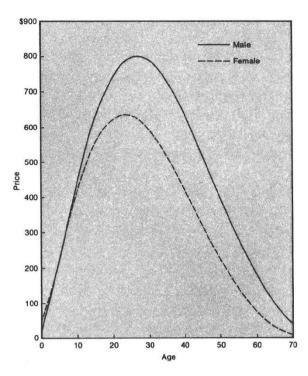


図19 年齢、性別の奴隷価格、1850年頃、旧南部

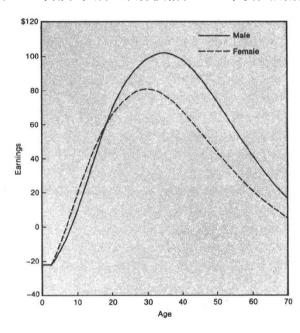


図18 年齢、性別の奴隷年間純収入、1850年頃、旧南部

ルを含意している。図 17 は、それぞれの年齢について 1850 年頃の平均的な純収入または 利益を示している。純収入は 8 歳くらいまではマイナスだ。それからプラスになり、35 歳 あたりでピークに達する。おもしろいことに 65 歳でも収入はまだプラスだし、平均で奴隷 として、所有者にティーン半ばの子供と同じくらいの稼ぎをもたらしている。だからとい って、あらゆる 65 歳の奴隷が、所有者にプラスの純収入をもたらしたということではない。

高齢者の一部は純損失になった。だが高齢者の中でも肉体的に頑健な者の稼ぎは、働けなくなった者による負担を補って余りあるものだった、ということだ。奴隷の平均純収入は、70代末になるまでプラスが続いた。それより高齢になっても、平均的名負担はかなり低かった。というのも80代まで生き延びた奴隷のかなりの部分は、まだプラスの純収入を稼いでいたからだ。

だから、奴隷所有者たちは奴隷を若いうちに死ぬまで働かせ、晩年の維持費用負担を避けようとした、というありがちな主張は根拠がない。奴隷所有者は一般に、奴隷たちを生涯にわたり儲かる形で雇用できた。農園主たちは高齢問題を、奴隷の能力に応じて仕事を変えることで解決したのだった。高齢者でもできる仕事は農園にたくさんあった。畑で働くには高齢すぎる女性は、奴隷の子供の世話をしたり、病人相手の看護婦になったりできる。また縫い子、綿紡績や布織りにも使える。高齢男性は家畜の世話をしたり、器具の管理責任者にしたりすればいい。庭師になったり、家の召使いになったりする者もいた。この高齢者の労働を活用できる能力は、おそらくは奴隷制そのものの性質というよりは、奴隷制が圧倒的に農業的な性格のものだったおかげだろう。高齢者をどうすべきかという問題の台頭は、都市化した工業化社会の登場に伴うものだ。田舎ではこの問題はめったに出てこない。

図 18 は、男奴隷と女奴隷の価格を比較したものだ。9歳まで両者の価格はほぼ同じだが、その後は女奴隷の価格は、男奴隷ほどは急速に上がらない。27歳だと、女奴隷の価格は男の80%ほどだ。50歳ではこの比率が60%に下がり、70歳では半分以下になる。

またもや、このパターンの説明は男女の純収入のライフサイクルに関係してくる。それを示したのが図 19 だ。生涯のほとんどの年数で、女性の稼ぎは男性の 20-40%低い。おもしろいことだが、18 歳以前だと、女性の稼ぎのほうが男を上回る。このちがいは、ティーン女性が産んだ子供の生み出す収入では説明できない。これから示すが、そうした年月における子育てからの収入はかなり小さい。女性の稼ぎが初期に高いのは、男性よりも女性のほうが急速に成熟するから、ということらしい。

奴隷所有者の市場行動に関する証拠がないので、歴史学者たちがロマンチックなほうに 肩入れして、温情主義か利潤追求かという二律背反を提起するのは簡単だった。温情主義 の証拠を見て、彼らは奴隷所有者が利潤を犠牲にして他の目的を追求したはずだ、と暗に 主張した。いまや奴隷制の収益性と、奴隷所有者の市場行動における圧倒的なビジネス重 視が確率したからには、温情主義が奴隷制擁護論者のでっちあげだと考えるべきだろう か? そういう結論は、いま却下したものと同じくらい、ロマン主義的でおめでたいものと なる。所有者と奴隷との間に深い個人的なつながりがあったという証拠はあまりに多く、 これが奴隷制の事実だったということは否定しようがない。あるルイジアナ州の農園主は、

主任奴隷管理人の死にあたって次のように描いている。「心がほとんど折れそうだ。哀れなレヴェンを失った。この世に生を受けた、最も忠実な黒人だ。誠実で正直であり、一点の欠点も見つけられない。三年にわたりこの農場を監督し、ここで働いたどんな白人よりずっとよい成果を挙げ、おかげで私は静かに暮らせた」

レヴェンが非効率、不正直、問題だらけだったら、こんな愛情表現は出てきただろうか?奴隷への愛情が稼ぐ能力だけに比例したと言うつもりはないが、愛情と生産性が、対立するよりもお互いを強化しあうほうが多かっただろうとは主張したい。南部農園では、残酷さと愛情の両方が存在していたのだ。

奴隷の飼育繁殖はウソである

市場で販売するために、奴隷が**系統的**に飼育繁殖させられており、それが特に旧南部での奴隷所有者の純収益で大きな割合を占めるのだという理論は、反フィリップ学派のほとんどの人々により、大なり小なり主張されている。この主張にかなりの後押しを与えたのは、コンラッドとマイヤーの研究だ。彼らは旧南部で、男性より女性のほうがかなり高い収益率をあげていることを発見したのだった。彼らの結論は「奴隷が南部全体にとって儲かるものだったのは、綿花ベルとでの継続的な労働需要のため」、「海に近い地域や州境地域など、あまり生産的でない土地でも、飼育繁殖活動への収益が」確実に高いものとなったからだ、というものだ。

前の段落で「系統的」と「市場」ということばを強調したのは、飼育繁殖理論で言われているのが、単に大規模奴隷家族を奨励する一般的なインセンティブがあったという以上の話だということを強調するためだ。「市場のための系統的な飼育繁殖」というのは、二つの相互に関連した概念が関係している。

- 1. 奴隷たちの通常の性的習慣に介入して、女性を特に精力の強い男とつがわせるなど、 家畜に見られるような仕組みを使って女性の妊娠を最大化すること
- 2. 販売を主眼として奴隷を育てるという、牛や馬の飼育と同じようなやり方。

市場用に飼育繁殖させるという理論を支持するために提出された証拠は、ずいぶん乏しいものだ。コンラッドとマイヤーが挙げた、収益率の差以外には、証拠の大半は奴隷廃止論者が行った裏付けのない非難と、一部の人口動態データだけだ。だが、その後のコンラッドとマイヤー研究の修正により、奴隷の収益率は男女ともに同じくらいだということがわかった。そして、歴史学者が何千時間もかけて農園記録を探しても、奴隷廃止論者の文

献で主張されている「種馬」奴隷農園のまともに裏付けられた事例は、一件たりとも見つかっていない。

奴隷の飼育繁殖の実在についての人口動態的な議論は、二つの主要な観察に基づいている。まず、奴隷輸出州は、奴隷輸入国に比べると 15-29 歳の奴隷が少なく、幼いか老年の奴隷が多い。第2に、出生率(15-49歳の女性の生後一年以内の子供の比率として計測)は、輸出州の方が輸入州より少し高い。こうした人口動態的な事実は、どちらも市場向けに飼育繁殖が行われたというのを証明するには不十分だ。輸出州と輸入州で見られる年齢分布のずれは、奴隷だけでなく、自由人でも見られた。だからこれは、自由人と奴隷の両方が東から西へ移住したという証明でしかない。だがこの点は、別にだれも疑問視していないのだ。疑問視されているのは、奴隷の移住は農園全体の移転によるものではなく、市場取引を通じて起こったものだ、という主張だ。

第2章で示したように、奴隷の地域間移動のうち、市場取引を経由して起こったものは、たった16%だ。このわずかな動き、年平均でたった2500人程度の移動は、旧南部の農場主に1860年でたった300万ドルの売上をもたらしただけで、純所得はその四分の1でしかない。旧南部の奴隷制の運命が、農家の売上の1%にも満たないものに依存していたとは、なかなか考えにくい。そんな主張をするくらいなら、サツマイモが農家に不可欠だったという主張をするほうが楽だ。というのもサツマイモは奴隷所有者たちに、奴隷の地域間販売よりも多くの収入をもたらしたからだ。

同じくらいまちがっている主張として、土壌の質が悪かった旧南部でのみ、農園主たちは出産を奨励するインセンティブがあった、というものがある。新南部では、土壌の収益率は高いので、「女奴隷が妊娠で身動きできなくなったり、子供の世話で手一杯になったりするよりも、畑で働かせるのを」好むようになった。実際これは、新南部よりも旧南部のほうが出生率が高かったのかを説明するために持ち出される合理化だった。

図 20 と 21 は、この分析を否定している。これを見ると、絶対価値でも総価格に占める比率でも、女性の出産能力は、旧南部より新南部でのほうが高い評価を得ていたことがわかる。たとえば 20 歳の女奴隷で見ると、出産能力は 1850 年のルイジアナ州では 170 ドルの現在価値があったが、旧南部では 80 ドルしかなかった。だから新旧どちらの南部でも、出産を奨励する経済的な動機はあった。そして子育てを奨励するインセンティブは、むしろ西部のほうが東よりも大きかった。旧南部が子育てに専念し、新南部が畑での生産に集中していたという主張で提起された、経済的な根拠は、事実に根差したものではないと私たちは主張する。

では、旧南部のほうが少し出生率が高いのをどう説明しようか? 出生率は、比率だというのをお忘れなく。その分母は、既婚女性だけでなく、独身女性も含まれる。だから、地

域間の移動において、子供のいない独身女性の比率が残留した女性の中で占める比率より も高ければ、出生率は高くなる。第2章で見た通り、まさにその通りのことが起きている。

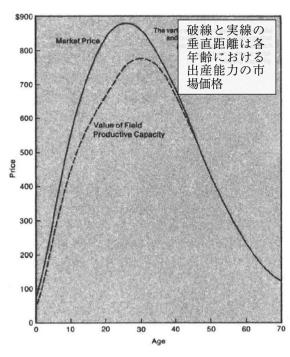


図 20 女奴隷価格を出産能力価値と畑仕事能力価値とで分ける、新南部

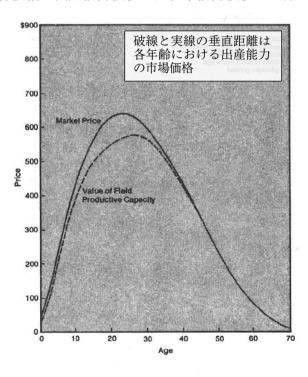


図 21 女奴隷価格を出産能力価値と畑仕事能力価値とで分ける、旧南部

奴隷飼育繁殖理論の主張者による、さらに根本的なまちがいは、出生を増やすために通

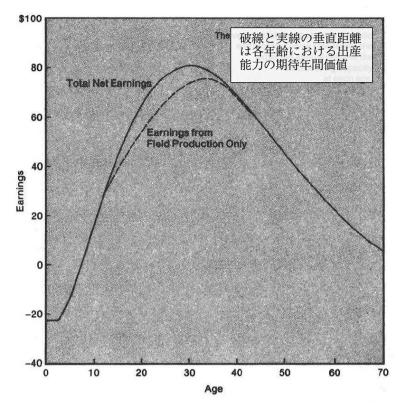


図 22 年間純収入を、年齢ごとに出産能力と畑作業とで分けた結果、旧南

常の家族生活を邪魔することで、利潤に大きな正の影響が出る、というそもそもの想定だ。 選択的な繁殖を行い、乱交や一夫多妻制を実施することで出生率が増えるという想定は裏 付けられたことがないし、アメリカ国勢調査に描かれた手書き表を見ると、その正反対の ことがわかる。奴隷の男女比で男が多い農園は、男女比が等しい畑よりも出生率が低い。 さらに、どの年齢の女性でも、同じ畑の男と夫婦になったほうが、同じ年齢で伴侶がいな いまま畑で暮らした女性より出生率が高い。たとえば、24歳の女性だと、伴侶がいたほう が、いない女性よりも修正率が42%高い。

さらに、出生率を最大化するために選択的繁殖が効いたとしても、それが利潤を最大化 したかどうかはわからない。この主張は、二つの怪しげな想定に基づくものとなる。

- 1. 女性の出生率が大きく増えると、農園の収入も大きく増える
- 2. 奴隷の性生活を邪魔しても何の費用も発生しない

図 22 を見ると、前者がまちがっていることは明らかだ。平均で、育児による純収入は、 子育て期に女性が稼ぐ純収入の 10%ほどでしかない。結果として、女性の出生率が 25%上 げられたとしても (通常、生物学的な上限とされる水準とされる)、年間の純収入増加は、

女奴隷一人あたり 2.5%にも満たない。というのも、稼ぐ女奴隷全員が出産可能年齢にいるわけではないからだ。さらに、女性は奴隷の収入寄与分のうち、たった 40%でしかない。だから働く奴隷一人あたりの純収入は、出生率をどう操作しようと頑張ったところで、1%未満しか増えない——つまり年間に奴隷一人あたり 1 ドルに満たない (1850 年ドル)。こんなわずかな純収入増加は、選択的な繁殖が労働者の士気に与える影響で、簡単に潰されてしまう。たとえば、逃亡、仕事の遅延など奴隷規律の低下が、年に 3 日分の損失につながったら、出生率を生物学的上限まで押し上げた潜在的な利得は全部消えてしまう。

繁殖理論の提唱者たちは、人間と動物のちがいを認識しそこねたために、道を誤ってしまったのだ。優生学的な操作が動物の出生率を増やすからといって、それが人間に同じ影響を与えるとは限らない。乱交は性病を増やし(動物の種付けではそんなことは起きない)、それが出生率を下げるし、人間の受胎には情緒的な要因がかなりの重要性を持つ。こうした情緒的な要因はもちろん、仕事のほうにも波及する。取り乱して不満を抱いた奴隷は、仕事もまともにできない。

だから、ほとんどの農園主は奴隷の生活道に直接介入するのを避け、プラスの経済インセンティブの仕組みを通じて、出生パターンに影響を与えようとした。これは今日の多くの政府がやっているのと似たようなことだ。たとえばアメリカは、結婚や出産に税制優遇を与える。フランスは育児に直接の補助金を出す。ソ連は補助金と栄誉賞を組み合わせる――異様に子だくさんの母親は「ソ連の英雄」となる。農園でも同じだ。

農園主はまず何よりも、訓戒と経済的な誘因を通じて家族形成を促進した。ジェイムズ・H・ハモンドは自分の農場監督にこう書く。「結婚は奨励しなさい。それはそれを執り行う者たちに、落ち着き、幸せ、健康を増すからです。さらにそれは、人数の増加も保証してくれます」。結婚の経済的な誘因としては、一般には家、家族が自分で工作してよい専用の耕作地、そしてしばしば、現金や家財などの褒賞が与えられた。子作りの主な報酬は、仕事の軽減、人夫や母親に与えられる特別な世話だった。妊娠五ヶ月以降の女性の畑仕事割り当ては、通常は40-50%減らされた。臨月になると、通常は畑仕事は完全に免除され、縫い物や紡績といった軽作業に向けられた。乳幼児を抱える母親は、仕事に出る時間を遅らせることが認められ、授乳用に日中も3-4時間暇が与えられた。もちろん、もっと長期的な便益もあった。異様に多くの子供を産んだ女性は「農園の英雄」となり、畑仕事をすべて免除された。

これまでの議論のポイントは、優生学的な操作の試みがまったく存在しなかったとか、 己の情欲のはけ口として奴隷を使ったご主人がいなかったとか、監督が管轄下の奴隷女性 たちをハーレムがわりに使うことがまったくなかったとかいうことではない。また奴隷所 有者の息子たちが、極度に幼い娘たちを誘惑することがなかった、というのでもない。そ

ういう性的な濫用は、奴隷女性たちに法的な救済の権利を与えず、奴隷の私生活を操作する権利を奴隷所有者たちに与える法制度により、まちがいなく促進されていたことだろう。だがここでの問題は法制度の影響ではない。経済的な力の影響だ。奴隷制の経済学が、広範な乱交や一夫多妻制を奨励した状況はあった。これは第 4 章で述べよう。だがアメリカ奴隷制が創り出した経済インセンティブの主な力は、優生学的な操作や性的濫用を防ごうとするものになっている。そうした行為を行う者たちは、経済的な利益のためにそれをやったのではない。あえて経済的な損失を被ってもそれをやったのだ。奴隷所有者が農場監督に与えた指示は、しばしばこの対立を認識したものとなっている。奴隷の規律や士気を低下させかねない「不当な親密性」について、はっきりと戒めているのだ。ある主要なルイジアナ州の農園主はこう各。「我が女性使用人とのつながりを持とうものなら、ほぼまちがいなく我が雇用からの追放を招くことになり、どんな弁明もあり得ず、聞き入れられることはない」。明示的または暗黙のうちに、選択的繁殖や乱交を奨励するような監督への指示は、これまで一度も見つかっていない。

アメリカ独立革命後と南北戦争前夜の奴隷制の経済的有効性

南北戦争前夜、経済的な力が奴隷制の破壊に向かって作用していたという証明に持ち出される大きなエピソードが二つある。フィリップスは、こうしたエピソードの片方を米国独立革命の終わりに続く十年で見出した。ラムスデルは、もう一つを南北戦争前の十年で見つけている。

フィリップスは、農園主による断片的な苦境報告に基づいて議論を進めた。「奴隷価格は到るところで、あまりに不穏な形で低下しており、1794年末にはジョージ・ワシントンが友人に、奴隷を他の資産形態に転換するように助言したほどだ(後略)」。だがフィリップスは、彼があんなに頑張って構築した奴隷価格についての時系列データでこの主張を検証することはできなかった。そのデータが1759年までしかさかのぼらなかったからだ。彼はその苦労のバラバラな報告を「1783年の講和であらゆる農園地区に不景気がもたらされた」という証拠としてあっさり受け容れ、その不景気が十年以上続いて、それまでは儲かった奴隷投資が重い負担になったと主張したのだった。

確かに、奴隷価格は独立革命後に少し弱含みとなったが、持続的で激しい不景気はなかった。奴隷価格は独立革命最後の数年では暴落していたが、1780年代半ばには独立革命前の水準にだいたいリバウンドしたし、その後 1780年代末までかなり高どまりしていた。1784-1794年で奴隷価格は、革命前の水準の89%だった。1794-1795年にはさらに5%ほどの低下が見られたが、これは1798年にすぐに戻った。

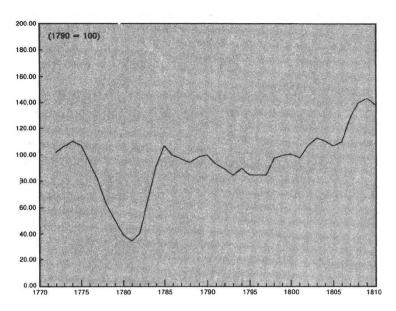


図 23 アメリカの実質奴隷価格指数、1772-1810年

さらに、1790 年代初頭の価格低迷も、その後の一時的な下落も、必ずしも奴隷需要が下がっていたことを意味するものではない。単に、奴隷の供給が需要よりも急速に伸びたことを示すだけかもしれない。そして、どうもその通りらしい。第1章で見たように(図6、図7参照)、1790年代には空前の奴隷人口増大が生じた。自然増も多かったし、奴隷輸入一一79000人超——はそれまでのどの十年よりも多い。実際、1790年代の輸入は、十年単位で見ると、それまでの半世紀で続いていた水準の二倍近かった。

独立革命後の価格低迷にもかかわらず、奴隷の需要は 1781 年以降もきわめて強い上昇傾向にあった (図 24)。ジョージ・ワシントンの陰気ぶりは、他の奴隷所有者には共有されていなかった。集団としての奴隷所有者たちは、奴隷保有を減らすよりは増やしたがっていた。独立革命後に価格がどん底だった 1796 年でも、奴隷の需要は 1772 年より 50%高かっ

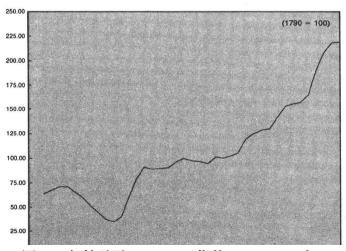


図 24 奴隷需要のトレンド指数、1772-1810年

た。

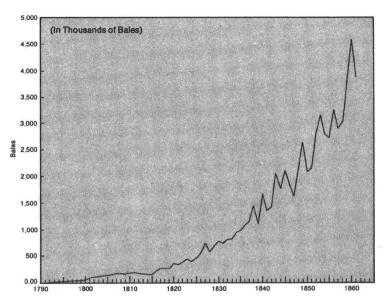


図 25 綿生産のトレンド、1791-1861年

1791 年以降の需要低迷は、ハイチ奴隷反乱で生じた恐怖のせいだったかもしれないし、また北部州での各種奴隷解放運動への反応だったかもしれない。その一方で、ハイチ革命はこの時期におけるアメリカの奴隷供給急増の原因だった可能性もある。西インド諸島の奴隷所有者の多くが、奴隷をアメリカの買い手に売ったり、奴隷と一緒に逃げ出して本土で新しい農園を設立したりしたという記録がある。南部の供給は、北部の奴隷所有者たちが奴隷解放の影響から逃れるために膨れた可能性もある。

いずれにしても、アメリカへの奴隷の流入増大は、奴隷が綿花栽培で崩壊寸前から救われた、という理論に反する。奴隷が 1780 年代や 1790 年代に一般に儲からなくなっていたなら、奴隷輸入も止まったはずだ。各種の危機が本当に深刻だったなら、奴隷の流入は逆転しただろう。アメリカは、奴隷の純輸入国から純輸出国になったはずだ。アメリカの農園主たちは、奴隷がまだ儲かるところに手持ち奴隷を売ったはずだからだ。

ラムスデルが指摘したエピソードは、奴隷価格の変動ではなく、綿の生産費用と綿花の価格の変動に基づくものだ。彼は、奴隷価格が 1850 年代には上昇し続けていたのを知っていた。それでもラムスデルは、農園主たちはどうしても綿花の過剰生産に惹かれてしまったと信じており、この定義しがたい力こそが、奴隷制の終焉を告げつつあったのだ、と主張する。彼は 1850-1860 年の空前の綿花産出増加こそ、過剰生産傾向の明白な証拠だと考えた。この十年間の生産増加は、それ以前の 1 世紀の増分よりも大きかった。さらに、綿花生産の増加率は、この十年の後半に入るとさらに加速した。1857-1860 年だけでも、綿花

生産は 150 万ベイル増えた。この驚異的な増加は、綿繰り機の発明からジャクソン政権の 終わりまで続いた 40年の増分よりも多い。

ラムスデルにしてみれば、この綿花にリソースを移行するという強迫観念は明らかだった。綿花価格は低迷するのが見えていた——やがては、あまりに低迷しすぎて、奴隷制が儲からなくなるはずだった。未来の様子はすでに見えていて、1858-1860年の産出激増は、予想通り価格低下を引き起こしていた。だから奴隷制の「破壊を望む者は、少し待てば済んだはずだ——1世代か、おそらくそれ以下だ」

1850 年代の綿花生産の増加が劇的だったことは、確かに否定できないが、それが不合理で商業的に見合わない行動の反映だという結論は、反論の余地がある。産出の激増も価格低下も、それだけでは過剰生産の証拠ではない。たとえば綿布の生産量は、1822-1827年に三倍になった。同時期に、綿布の価格は 35%下がった。だがだれも北部の布製造業者たちを、過剰生産への抗しがたい傾向を持っていたなどと糾弾はしない。その正反対で、布の市場が活況を呈したのに反応したダイナミズムは、みんなどこでも誉めそやす。そして布製造業者の価格引き下げ余力は、向上システムの活力の証拠とされてきた。

1857-1860 年の綿価格のわずかな低下は、別に何らおかしなものではない。実際問題として、生綿の価格の全般的なトレンドは、1802 年から一貫して低下し続けていた (図 26)。もちろんこのトレンドには上下変動はあったが、平均すると年に 0.7%の価格低下が見られている。この長期トレンドの基本的な原因は、生産性の着実な向上だ。綿花栽培をますます効率的にした発展としては、綿花の種子の変種が改良されたこと、綿繰り機の導入、輸送費などマーケティング費用の低下、綿花生産が新南部のもっと肥沃な土地に移ったこと、

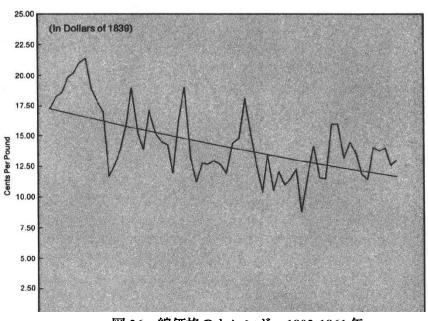


図 26 綿価格のトレンド、1802-1861 年

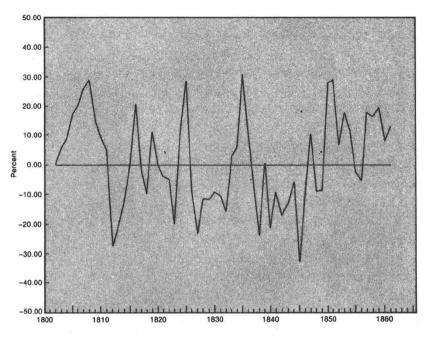


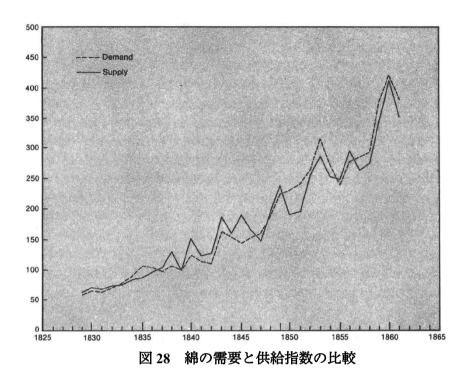
図 27 綿価格のトレンド価値からの逸脱、1802-1861 年

などがある。

だから、生産が増えてそれに伴い価格が下がるのは、当然のことだった。生産性の改善は費用を引き佐方から、農園主たちの利益は、綿の価格が下がっていても、むしろ増えていたかもしれない。すると重要なのは、価格の絶対水準ではなく、利益の水準だ。利益の動きの近似として、綿価格が長期トレンドからどれだけ逸脱したかを見ることができる。綿価格が長期トレンド価値よりも高ければ、農園主の利益もおそらく通常より高かっただろう。価格がトレンド価値よりも低ければ、綿花生産の利益も通常より低かっただろう。

図27を見ると、1850年代は綿花農園主にとって、高い利益が続いていた時期だったことがわかる。これは1830年代の、伝説の繁栄すら上回る時代だった。この十年のほぼあらゆる都市は、通常よりも多い利益をもたらした。さらに、この利益は1850年代最後の4年を通じてずっと高く、価格はトレンド価値の平均15%上だった。1850-1860年で綿花生産が倍増したのも当然だ。1857-1860年で綿花生産を50%以上も増やすのは、明らかに合理的な経済的反応だった。農園主たちがまちがえたとすれば、それは綿花生産を増やしすぎたことではない。正反対だ。あまりに慎重すぎたのだ。生産拡大は、価格をトレンド価値に引き下げ、利益を通常の(均衡)水準にするには不十分だったのだ。

1850年代を綿花農園にとってこんなに繁栄したものにしたのは何だったのか? その一つ の答は図 28 にある。これによると、世界的な綿需要が 1846年から激増を始めたことがわ かる。その後 15年にわたり、需要の年間平均増加率は 7%ほどだった。図 28 はまた、綿花の供給変化は一般に、需要変化より遅れていたことを示している。結果として、価格と利



益は需要が増えているときには通常より高くなり、需要が減ったり停滞したりすると、通常より低くなる。

まとめよう。1857 年移行の空前の綿生産は、アメリカ綿の世界需要激増によるものだった。綿花供給が需要より遅れたことで、綿価格は通常の水準よりずっと高くなり、農園主たちに異様に大きな利潤をもたらした。農園主たちはこのインセンティブに反応したが、綿の価格や利益が通常の水準に戻るほどの勢いでは生産を増やさなかったのだ。

つまり、綿の過剰生産に向けた抗いがたい傾向に囚われてしまった、非商業的な農園主というお話は、まったくのおとぎ話でしかない。それは南北戦争前夜の南部をロマン主義的お話に仕立てたい人々にとって、奴隷を飼育繁殖させる農園主というお話が奴隷廃止論者の評論家たちに対して果たしたのと同じ役割しか果たしていない——ただの都合のいいでっちあげだ。

都市部の奴隷制と「自然の制約」理論

多くの著述家は、奴隷制は南北戦争がなくても消滅していたはずだと論じる。それは綿栽培が自然な地理的制約を受けているからであり、また都市化がもたらす圧力のせいでもある。この二つの障壁が、万力のあごのように、1860年から十年か20年もすれば、奴隷制を締め付けて潰していたはずだ、という。この「自然の制約」理論によれば、奴隷労働が土地面積に対する比率が上がると、やがて奴隷の価値がさがって、奴隷を生き延びさせる

費用よりも低くしてしまうという。労働と土地比率の上昇は確実に思えた。というのも綿 栽培に適した土地は限られているし、奴隷労働は奴隷人口増大によりまちがいなく増える からだ。都市はこの余った分を吸収してはくれない。というのも都市は厳しい環境であり、 奴隷制がそこで続くのは不可能だからだ。

この自然制約論は、検討だに値しないと思いたくもなる。これは、奴隷が綿の生産にしか使えないという想定に基づいているように思える。奴隷なんて他の仕事は覚えられないという偏見は論外にしても、この想定は明らかに綿裁判と奴隷制が同じものだと誇張している。第2章で指摘した通り、奴隷の6%は市街地で働いていたし、農園で暮らす奴隷の20%は各種の職人や準技能労働者として雇われていた。それでも、奴隷の60%は綿生産に何らかの形で携わっていた。綿栽培は奴隷制と同義ではないにしても、奴隷の最も重要な職能ではあった。自然制約論の粗雑なものを変えて、あらゆる奴隷が綿栽培に雇用されねばならないと論じるのではなく、綿栽培に関連する奴隷比率が南北戦争前夜の水準で維持されねばならないと論じることはできる。奴隷が他の生産分野に流入できないという理由としては、別に黒人への誹謗中傷を持ち出す必要はない。労働組織としての奴隷システムはあまりに硬直的で、南北戦争前夜に実現された以上の奴隷を非農業活動に効率的に振り向けられなかったのだ、という議論を出せばいい。いずれにしても、自然制約理論の支持者はかなり大きな集団を占めているから、それを客観的に検証してみる価値はある。

補遺 B には、そうした検証を可能にする方程式を載せた。この方程式は、綿価格、綿の生産量、綿栽培に使われる労働力の規模、奴隷維持費、市場金利をもとに奴隷価格を予測できる。南北戦争後のこうした変数の価値はすべてわかっている——ただし綿花生産に使われるであろう奴隷労働力と、奴隷維持費はわからない。ただしこの道の数字は、自然制約理論自体から出てくる。綿花生産に使われる労働力の比率は一定だという要件と、労働参加率が一定だということを考えると、綿に使われる奴隷労働の成長率は黒人人口の増加率と等しくなる。さらに、自然制約理論は、暗黙のうちに奴隷たちの絶対的生活水準、いや少なくとも相対的な所得シェアがかなり一定であることを受け容れている。したがって、維持費は総収入と比例して変化したことになる。

検証結果を図 29 に示す。奴隷価格は、下がるどころか上がったはずだということがわかる。実際、1860-1890 年の平均年間上昇率は 1.4%で、戦前のトレンドより少し低いくらいだ。つまり 1890 年の壮年作男は 1860 年よりも 52%高値だったはずだということだ。この驚異的な結果は、自然制約理論の提唱者たちがまったく予想もしていなかったものだった。これは二つのしっかりした事実に基づいている。一つは、アメリカ綿への需要が供給より少し急速に高まり、それが 1890 年代で止まらず第一次世界大戦直前まで続いたということだ。だから綿の実質価格は、1860年より 1890 年のほうが高かった。第2に、綿栽培に使わ

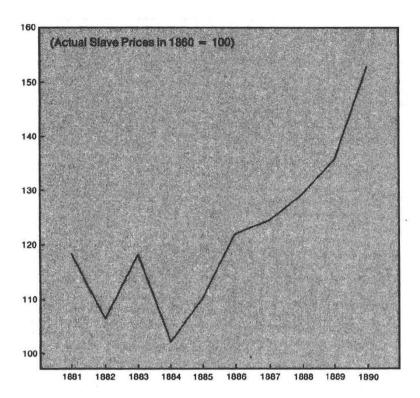


図29 南北戦争がなかった場合の奴隷価格の予想価格、1881-1890年

れた土地は 1859 年の水準で横ばいにとどまったりしなかった。それどころか、黒人労働力の増加率よりも高い年 2.06%の割合で増えていった。つまり、綿栽培に使える追加の土地が 1860 年にはほとんど消えたという説はまちがっている。1860-1890 年で、綿栽培に使われる土地はほぼ倍増した。1890-1925 年にはそれがさらに倍増以上となった。

自然制約仮説が広く受け容れられたという皮肉は、それがその主要な構築者としてあげられる人物により棄却されたということだ。というのも上で述べたように、ラムスデルの奴隷制崩壊予想の主要な根拠は、綿の土地労働比率が減るのではなく増えるという信念だったからだ。

残っているのは、奴隷は都市環境では長続きしないという主張だ。上辺だけ見れば、南部十大都市の国勢調査による奴隷人口がこの因習的な見方を裏付けているようにも見える。1820-1860年で総奴隷人口は160%増加を見せたが、十大都市での奴隷人口増加率はその半分だった。1850-1860年には低下しているが、これは相対的だけではない。南北戦争に先立つ十年で、十大都市の奴隷人口は9千人、つまり12%減った。一部の都市では、絶対数の減少は1850年だけではなかった。ボルチモア、セントルイス、ワシントンはみんな、1820年より1860年のほうが奴隷人口が少なかった。

こうした数字は確かに、「奴隷制は南部の都市では崩壊しつつあった」という主張を裏付けるように見える。奴隷制が「都市環境に触れると、どこでも必ずこの制度は困ったこ

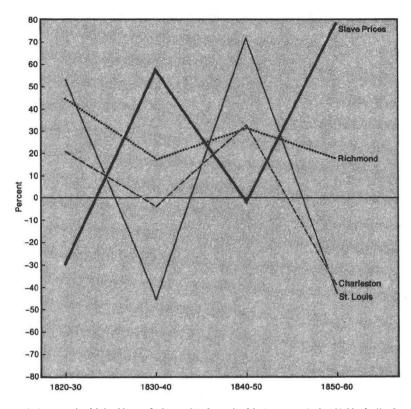


図 30 奴隷価格と南部三都市の奴隷人口の十年単位変化率

とになる」というのももっともらしい。また、都市環境が奴隷制に適していないと論じる様々な主張、たとえば奴隷制と工場生産手法との相性の悪さ、都市部での奴隷を統制する費用が高くて増える一方だったという話、自由な都市部労働者が奴隷からの競争を快く思わなかった、奴隷反乱の恐れが高まった、といった説の裏付けにもなっているようだ。

だがもう少し深掘りしてみると、この議論は弱まってくる。都市部からの奴隷脱出は、そんなにあたふたと行われたものではないようだ。たとえば、その次の南部都市十ヶ所の奴隷人口は、1850-1860年で減っていない。むしろゆるやかに増えている。また、十大都市でもすべての都市で減ってはいない。そのうち四都市では、40年の間にかなり大幅な奴隷数増大が見られている。この増えたところを見ると、奴隷人口増加率は、全国平均に匹敵するどころか、それを50%も上回っている。

「州境の都市では、この制度 [奴隷制] はほぼ消え去った」という主張と、ルイスヴィルの奴隷人口 200%増加の事実や、主要な州境の 4 都市の奴隷人口が、実は 1820-1860 年で穏やかな増加を見せているという事実で、どうやって折り合いをつけられるだろうか? ここでも、南部の他のところで都市奴隷制が一般に「規模としても勢いとしても低減した」というのは、モービル、サヴァンナ、リッチモンド、モンゴメリー、メンフィスといった都市にはまるで当てはまらない。これらの都市では、奴隷人口は大いに増加していたのだ。

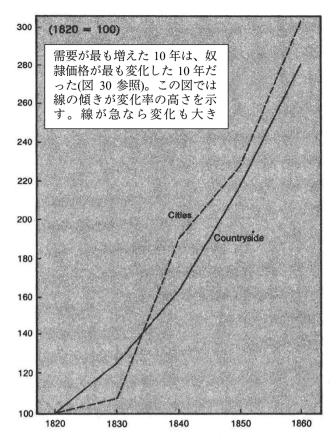


図 31 都市部と地方部の奴隷需要指数

また、従来の都市奴隷制衰退に関する扱いでは見すごされてきた、細かい細部もある。 たとえば、都市の人口変化ははっきりと波状のパターンを示しており、上がる十年もあれ ば下がる十年もある。同じ波状のパターンは奴隷価格でも見られる。だが、価格のパター ンは奴隷人口の波とちょうど正反対になっている。つまり都市奴隷人口は、価格上昇が最 も鈍いときには最も急速に増える。奴隷人口が最も急速に増えるときには、奴隷人口は減 る(または増え方が最も鈍い)。

もう一つ無視されている細部は、奴隷人口の減少が最も激しかった年は、白人移民労働の流入が最大だったということだ。集団として見ると、奴隷人口減少都市は、奴隷人口増加都市に比べ、技能労働者、高齢奴隷、女奴隷の比率が高かった。だから、奴隷人口が都市部で変化したパターンは、伝統的な見方で示唆されているものよりも複雑だ。19世紀が進むにつれて奴隷と都市化がますます相容れなくなってきたという理論は、主要都市センターの半分近くで見られる、驚くほどの奴隷人口増加率を説明できない。なぜ奴隷が都市から出ていったかを説明するために持ち出された力は、なぜ高技能奴隷ではなく低技能奴隷のほうが田舎に去った比率が高いかを説明できない。またこうした力は、転出の波状のパターンも説明できない。人口の上下変動は、反乱率の変動や、特別都市税の変化や、都

市内の奴隷移動制限の周期のせいとは関係ないはずだ。

経済学用語に翻訳すると、奴隷が都市から追い出されているという伝統的な見方は、都市における奴隷需要低減の理論だ。都市奴隷制の「崩壊」を説明するために持ち出された主要な要因——統制費用の増加、白人労働者の反発、奴隷所有者たちの反乱への怯え——はどれも、都市部での需要水準を引き下げただろう。だが、需要のトレンドを計測すると、そんな減少トレンドは見られない。むしろ反対で、都市での奴隷総需要は、1820年から1860年のどの10年を見ても増えている。都市部の奴隷需要低下は珍しいできごとだった。十大都市の場合、それが起きた事例は4回しかない。1830年代のセントルイス、1840年代のニューオーリンズ、1850年代のボルチモアとチャールストンだ。他の十年で、これら4都市とも奴隷需要は増えている。残り6都市は1820-1860年のどの10年でも奴隷需要は増えている。

伝統的な理論の主張者たちが気づき損ねたのは、需要に影響する要因が実に多様だということだった。白人移民労働からの競争激化といった状況は、都市の奴隷需要を減らす方向に動いた。他の力は正反対に作用した。南部都市の自由人人口急増や、一人あたり所得上昇は、都市の奴隷需要を増やした。総合すると、都市部の奴隷需要を増やす要因のほうが、それを抑える方向に働く力よりずっと強かった。

では、なぜ都市部の奴隷人口は減ったのか? 奴隷供給の増加は自然増加率に限られてしまったので、都市部は地方部と奴隷をめぐって競争しなければならなかったからだ。地方部と都市部の奴隷需要合計が、供給よりも急速に増えているときには、奴隷価格は押し上げられた。都市部と地方部はどちらも価格上昇に反応したが、その反応は根本的にちがっていた。地方部では、奴隷労働に近い代替物は存在しなかった。経済学者の擁護では、地方部の奴隷需要はきわめて「非弾性的」だった。だが都市部では、自由労働、時に移民労働が、きわめて有効な代替物となった。おかげで都市部の奴隷需要は「弾性的」だった。結果として、都市部と地方部の競争が奴隷価格を自由労働の価格に比べて高くすると、都市部は相対的に安い労働のほうに流れた。言い換えると、奴隷が都市部から地方部にシフトしたのは、別に都市部が奴隷をほしがらなかったからではない。奴隷価格が上がったら、都市では田舎よりも、使い物になる低コストの奴隷労働代替物が見つけやすかったからだ。奴隷需要は都市部より地方部のほうがずっと「非弾性的」だったという点は、きわめて重要な発見だと私たちは考える。この情報は、奴隷の都市人口減少の謎を解決するだけでなく、第6章で示すように、強制労働のパラドックス解決にも中心的な役割を果たす。

奴隷保有階級の楽観的な経済見通し

多くの歴史的問題において、奴隷所有者たちが自分の経済見通しをどう予想していたかという問題は、彼らが実際にどんな現実に直面したかという話と同じくらい重要だ。彼らの期待は、経済的な現実から乖離していただろうか?奴隷所有者たちの間で「1850年代に派経済見通しについて大きな恐れが存在していた」と言われる。綿花市場が大活況だったのに、奴隷所有者たちは長期的な経済状況について深い不安を抱いていたというのだ。彼らを悲観的にさせた長期的な問題としては、既存の綿花栽培地の急激な枯渇と、新しい開拓地を確保する必要性、国際面市場の不安定な状態、北部とイギリスの利権が共謀して国際市場を操作し、南部を不利に追いやっているという恐れだったとされている。

奴隷保有者が未来について悲観的だったという主張を検証するには「楽観指数」を構築すればいい。この指数を構築するための方程式は補遺 B に載せた。この指数は主に、奴隷の平均購入価格と、平均年間雇用率との比率に大きく左右される。年間雇用率は、その後の 1 年について、市場が奴隷の生産価値をどう評価していたかを反映している。購入価格は、史上による奴隷の生産価値評価に基づくが、単に翌年だけでなく、その奴隷の生涯にわたる価値を見ている。だから投資家たちが、未来は現在より儲かるようになると考えたら、奴隷の購入価格は年間雇用率に比べて上がる。経済状況が将来劣化すると思えば、購入価格は年間雇用率に比べて下がる。

奴隷所有者の楽観指数を、新旧の南部について図32に示した。こうした指数のいくつかの特徴は指摘しておこう。まず、奴隷所有者がいつも楽観的だったわけではない。奴隷所有者たちが、現在の収益性の動きから正当化されるよりも楽観論に走った時期はあった。

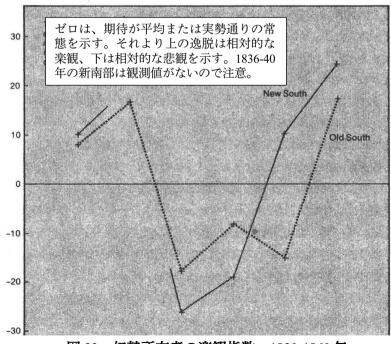


図 32 奴隷所有者の楽観指数、1830-1860年

第3章 利潤と見通し

だが悲観論のため、奴隷価格が収益よりも急速に低下したこともあった。悲観論が旧南部の奴隷所有者の行動を支配したのは、1840年代と 1850年代の前半だ。1836-40年と 1841-45年の急南部で生じた平均奴隷価格の急落は、60%以上が奴隷所有者たちの、期待稼ぎが実際より急速に下がった結果として生じている。

第二に、この期間全体として、期待収益は、実際の収益よりもほんの少し急速に高まっただけだった。全体として「楽観指数」変化がプラスなのは、1850年代後半の期待が上向きだったせいが大きい。1830-35年と1851-55年には、新旧どちらの南部でも楽観指数は下がった。

第三に、期待は旧南部より新南部のほうが変動が激しい。新地域での期待は、稼ぎが下がるときには旧南部より急落するし、稼ぎが増えるときには急上昇する。

最後に、どちらの地域の奴隷所有者たちも、この固有の制度が来たるべき政治カタストロフで廃止されるとは予想していなかった。1850年代には、楽観論はかなり急速に高まっていて、旧南部の奴隷価格上昇の40%、新南部での上昇の75%はこの期待のおかげだ。奴隷所有者たちは、自分たちの社会秩序が続くと思っていたばかりか、これから繁栄の時代がくると思っていたのだ。

投資家たちが悲観論と楽観論の時期を経てきたからといって、奴隷価格が派手な投機で決まっていたという主張を支持するものと思ってはいけない。悲観論も楽観論も、一般に体験に基づくものだった。1840年代初期の悲観論は、綿価格が70%近く低下して1ポンドあたり5.6セントという史上最低の価格に落ち込んだ、需要低迷の十年がもたらしたものだった。同様に、1850年代の楽観論は、綿需要の高騰で、綿生産の記録的な拡大にもかかわらず、商品価格が維持され続けた時期を反映している。こうした行動は、不確実な未来をなんとか見通そうと最善を尽くす、冷静なビジネスマンにありがちなものだ。無謀な投機家というステレオタイプを指示するよりは、むしろそれを否定するものだ。一部の歴史的な描き方では、この投機家イメージが支配的だったりする。

経済問題をめぐる奴隷所有者の楽観論があっても、彼らが 1850 年代末に広まった、政治危機の急展開に気がつかなかったと思ってはいけない。だが政治危機は必ずしも経済危機を意味しない。たとえば株価は、政治的緊張とともに上がることが多い。これは投資家たちが、戦争が利潤に与えそうな影響を考慮するからだ。図 32 に描かれた指数は、1850 年代末に奴隷所有者たちは、リーダーたちが追求する政策は、戦争の可能性も含め、経済ポジション改善につながると見ていたことを示す。南部にももちろん、不吉な予言をするカッサンドラたちはいた。だが 1855-60 年に、奴隷所有者たちは全体として、南北戦争に続くこの固有の制度が完全に崩壊するとは予想していなかったのだ。

『ウェブスター・ニューインターナショナル辞書』第 3 版は、個人の収奪について二つの定義を挙げている。

- 1. 他人を自分の利益や儲けのために、不当または不適切に利用すること
- 2. 公正または等価な対価を提供することなく他人の労働力を使用すること

奴隷はこの両方の意味で収奪されていた。ご主人様の利益のために鞭打たれ、競売にかけられ、愛した者から引き裂かれ、教育もうけられず、脅され、強姦され、売春を強要され、人間に絶えられる限界を超えて働かされた。奴隷の労働力はまた、奴隷に相当する対価を与えることなく使われていた。奴隷収奪のこの側面は、雇用の場合に最も明らかだ。奴隷を借りた人物は、奴隷のサービスに対して市場価値全額を支払ったのに、奴隷はその支払いの一部しか受け取っていない。奴隷の収入は、貸し手が奴隷にかけたメンテ費だけで、奴隷が生み出した価値の残りは、レンタル料という形で奴隷の所有者の懐に入った。

収奪が存在したことは疑問の余地がない。だが、その収奪がどの程度のものだったかは、 それほどはっきりしない。奴隷に対する邪悪で不適切な利用はどれほどひんぱんに起きた のか、そしてその邪悪さはどれほどひどいものだったのか? 奴隷が生み出した収入のうち、 どのくらいが彼らから奪われていたのか?

こうした疑問の提起はまったく無意味に思えるかも知れないし、悪意に満ちたものにすら思われかねない。多くの人にとっては、250年にわたり奴隷制の下で収奪が行われていたことを認知して、その恐ろしさを強調するだけで十分なのだろう。その収奪の度合いについてあれこれ詮索すること自体が、人間隷属の苦悶に対する軽視を示すものであり、道徳的問題の重要性を減らそうとしているように取られかねない。

もし問題となっているのが、奴隷所有階級の歴史的なイメージ改善だけなら、収奪の度 合いという問題は無視できる。奴隷所有者はとっくに歴史の舞台から追われているし、奴 隷所有者の子孫は一般に、先祖たちの邪悪な側面をあまりほじくり返したくはない。この 問題が重要なのは、黒人の正しい歴史的イメージに到達することが重要だからなのだ

というのも一般的に広く思われているのは、ほとんどの奴隷が暮らしていた農園レジームはあまりに残酷で、その収奪はあまりに激しく、抑圧はあまりに全面的だったから、黒

人たちはそれにより完全に気力を失っていたという話だからだ。この見方からすると、黒 人は 1865 年に自由を獲得するまでは文化的に存在しないも同然だったということになる。 黒人文化や人格のよい方向への発達は、奴隷制の容赦なき収奪の中では一切不可能だった。 そして発達が起きたとしても、それはほとんど悪い方向のものだったとされる。鞭の支配 下で、黒人は自己改善のインセンティブが皆無であり「できるだけ怠けるというひどい習 慣にはまった |。栄養不良か、食べるものもろくにない飢餓状態で、身体能力も精神的な スタミナもなくて極度の単純作業しかできず、それですらまともにはできない状態だった。 乱交を強制または症例されたことで、性的関係はやたらに放埒となった。そして性的なラ イバル関係のために「多くの奴隷区画は絶えず大混乱だった」。「貞節など考えられなかっ た」し、多くの少女は 12歳、13歳、14歳で妊娠した。奴隷側の性的な乱れが、ご主人様 による各種の方針と組み合わさって、黒人一家を「文化的混沌」へと陥れた。「深く持続 的な愛情 | を奪われた父母は、子供に「無関心 | となったばかりか、病気のときも無視し て、子供殺しすら行っていた、という。この見方によれば、どんな個性であれ、人によっ ては強制収容所や監獄にも比肩するというこれほどの過酷なレジームに影響を受けずには いられない。こんな「完全な」収奪を日常的に行うことで、ご主人も監督もスタンリー・ M・エルキンスが「サンボ」と名付けた独特の「奴隷的人格」を作り上げたという。

サンボは、典型的な農園奴隷であり、おとなしいが無責任で、忠実だが怠け者で、つつましいが慢性的なウソつきで泥棒だった。その行動は子供じみた愚かしさだらけで、そのしゃべり方は子供じみた誇張で大げさになっている。ご主人との関係は、完全な依存と子供じみた執着だ。彼の存在の鍵となっていたのは、まさにこの子供じみた性質なのだ。

つまりこれが、南北戦争前夜に関する現在の歴史に含まれている描かれ方だ。ご主人も 奴隷も、貶められた野蛮人として描かれる。ご主人たちは、容赦なき収奪の下手人なので 忌まわしい存在であり、奴隷はその犠牲者だから忌まわしいというわけだ。この描かれ方 は、どこまで実際に忠実なものなのだろうか?

衣食住

普通の奴隷がまともに食わせてもらえなかったという信念は、まったく根拠がない。このまちがった見方が出てきたのは、ご主人が監督に対して出した指示が誤解されたせいかもしれない。というのもこうした文書はしばしば、黒人に分配されるべき配給を概説する

ときに、トウモロコシと豚肉しか挙げていないからだ。通常描かれている配給量は、成人一人あたりトウモロコシ2ポンド(約1キロ)と豚肉半ポンド(200グラム強)だ。誤解が生じたのは、他の食べ物が言及されていないので、奴隷の食生活がほとんどトウモロコシと豚肉だけだったということにちがいない、という間違った思いこみのせいだ。

だが監督への指示は、本一冊に及ぶマニュアルではない。通常は、手書きメモ数ページ (通常、全体で千語から三千語) にすぎないし、おおむね主人としてやってほしい定型作業 の要点だけを概説するにとどまる。網羅的な文書ではなく、農園マネジメントにおいて、 その所有者が得に重要と思った点を強調するだけのものだ。こうした広く引用される指示 書が不完全なものだというのは、子供への配給量、小麦などトウモロコシ以外の穀物作物 の扱いや、ニワトリなどの昇華地区、乳製品の生産や扱い、各種家畜に使うべき飼料について、何も書かれていないことが多い点から見てもわかる。監督への指示書が有用なのは、 農園の定型作業の完全な記述になっているからではない。定型作業の中で、どの側面が農 園所有者の頭の中で最重視されていたかを伝えてくれるからだ。

奴隷所有者がトウモロコシと豚肉の割り当て量を強調した理由は二つある。まず、トウモロコシと豚肉が奴隷の食事のすべてではなかったが、ほとんどの農園ではそれが食生活の中心ではあった。果実や野菜など、奴隷に決まった季節しか与えられない食べ物とはちがい、トウモロコシと豚肉は毎日、毎週、毎月割り当て量が決まっていた。第二に、牛肉、鶏肉、乳製品、ジャガイモは屠畜や収穫の直後に消費しなくてはならなかったが(後の利用のために保存しておくのがむずかしいため)、豚肉とトウモロコシは一年中保存しておけた。冬、特に一月と二月はブタを殺し、保存し、燻製にする季節で、その後は燻製室に封印して必要なときまでとっておけた。豚肉とトウモロコシの在庫が一年ずっと保つようにするのが、監督の主要な責務の一つであり、だからこそこの二つの主食の配布についての明示的な指示がよく見られるのだ。ある主人の指示書では、監督は「[トウモロコシの]棚や燻製室や、その他私に属するあらゆる財産が保管されている建物の鍵を、自分自身で保管しなくてはならず、食べ物の配布は自分自身で確認しなくてはならない」。別のご主人の手紙では、全員員「たっぷり」食わせるべきだが「何も無駄にしてはいけない」

農園の文書をもっと慎重によめば、奴隷の食事はトウモロコシと豚肉以外にもいろいろ含んでいたことがわかる。奴隷が消費した農園の産物としては、牛肉、羊肉、鶏肉、牛乳、蕪、豆、スカッシュ、サツマイモ、リンゴ、プラム、オレンジ、カボチャ、桃など様々だった。ほとんどの農園で栽培されていない一部の食品も、奴隷の消費用に購入されることが多かった。塩、砂糖、糖蜜などだ。それほど頻繁ではないが、魚、コーヒー、ウィスキーも奴隷用に購入された。配られる食べ物に加え、奴隷たちは程度の差はあれ、狩猟や釣り、また自分に割り当てられた菜園で育てた野菜で食事を補った。

残念ながら、現存する農園記録は不完全で、奴隷用に購入されたそれぞれの食品の平均的な量や、狩猟や釣りで奴隷たちが手に入れた肉や魚の量までは確定できない。だが 1860年国勢調査の手書き表から得たデータに基づくと、綿花ベルトの大規模農園に暮らしていた奴隷たちの、主要食品 11 種類の平均消費量が計算できる。その 11 種類とは、牛肉、豚肉、羊肉、牛肉、バター、サツマイモ、ジャガイモ、豆、トウモロコシ、小麦、雑穀だ。短い一覧とはいえ、奴隷のカロリー摂取の 80%くらいを占めるはずだ。魚、ホロホロ鳥、野生動物、砂糖、明記されていない各種の野菜や果物は好まれたが、19 世紀那波かには、白人も黒人も、食生活の大きな部分を占めるものではなかった。

図33を見ると、奴隷の平均日量食生活はかなりのものだったことがわかる。食事のカロリー数は、1879年の自由人を10%以上も上回っている。奴隷に割り当てられた肉の量もほとんど差がない。平均で、1日6オンス(170グラム)の肉を食べていて、自由人たちの食べていた平均の肉量より1オンス(28グラム)少ないだけだ。奴隷の食事では、自由人に比べて豚肉の比率が多かったが、その差は一般に思われているほどではない。奴隷は自由人口の牛肉消費の70%を食べている。牛乳の消費は自由人の基準からすれば少ないが、それで

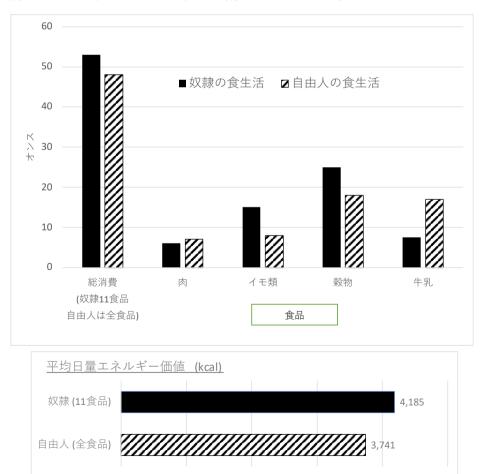


図 33 1860 年奴隷の平均日量食品消費と 1879 年総人口の日量食品消費量の比較

も奴隷一人あたり、1日コップ一杯だ。

重量で見ると、穀物とイモ類が、自由人と奴隷の両方について食事の大半を占める。奴隷が消費した主要穀物がトウモロコシで、自由人の食生活では小麦が主要穀物だったという点については、やたらに指摘されてきた。だが栄養学的な観点からすれば、どちらも優れた食品で、高いエネルギー価値とかなりのタンパク質も含む。小麦はカルシウムと鉄分が豊富だが、トウモロコシのほうがビタミン A は多い。これまで完全に見すごされてきたのは、奴隷も自由人も大量のイモ類を食べていたが、奴隷はほぼサツマイモだけで、自由人が消費するイモはほとんどジャガイモだったという点だ。この対立で重要なのは、食品としてサツマイモのほうがずっと優れているという点だ。サツマイモはビタミンAとCがとても豊富で、カルシウムもかなり多い。

奴隷が肉、サツマイモ、豆を大量に消費していたことで、図 34 の驚異的な結果も説明しやすくなる。奴隷の食事は十分だったどころか、現代 (1964) の主要栄養素の日量推奨摂取量を上回っている。平均で、奴隷は日量タンパク質摂取水準を 110%も上回っており、カルシウムは 20%、鉄分は 230%上回っていた。驚くことに、柑橘類がないのに、奴隷たちはビタミンC推奨水準の 2.5 倍を摂取していた。そしてサツマイモの大量消費のおかげでビタミンA摂取は、治療に使うほど高い水準で、ビタミンCもそれに近かった。もちろん、奴隷の食事の日量滋養内容が平均でよいからといって、それがすべての奴隷についてよかった、ということにはならない。そして最高の食事を得ている奴隷ですら、南北戦争前夜の食品保存技術には限界があったから、季節的な変動は体験しただろう。

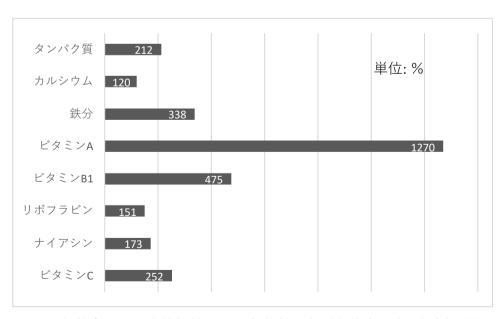


図 34 奴隷食生活の栄養価値: 1860 年奴隷の各種栄養素平均日量摂取量を 現代の推奨日量摂取量の%で示したもの

第4章 収電の解剖学

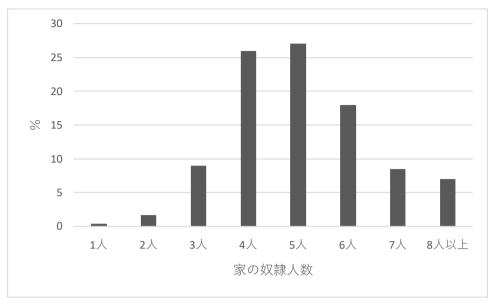


図 35 大農園での奴隷人数、奴隷住戸一棟あたりの人数、1860年

奴隷の住宅に関するデータは、奴隷の食生活のデータよりもずっと少ない。もっとも系統的な住宅情報は1860年代の国勢調査によるもので、奴隷の家の数を数えている。この国勢調査データによれば、大規模農園では平均で一戸奴隷が5.2人いた。1860年の自由人の世帯人数は平均で5.3だった。だからほとんどの奴隷は自由人と同じく、1世帯住宅に住み、家を奴隷数世帯が共有するのはあまりなかった。たまに、とても大きな農園では、未婚男女用のドミトリーがあった。だがこれは例外だ。単世帯住戸が基本だ。

残念ながら、国勢調査は奴隷の家の大きさや質については情報を集めていない。農園記録や旅行者の記述は断片的だ。それらを見ると、住宅の室にはかなりのばらつきがあったようだ。最高のものは、3-4室ある小屋で、木造かレンガ造か石造で、広さ最大800平方フィート(およそ80㎡)、外には大きなポーチがあった。こうした小屋はレンガや石の煙突とガラス窓もついていた。その反対の極は、一室だけしかない丸太小屋で、窓がない。煙突は小枝と粘土でできていた。床は土間か、土に直起きの板だ。

実際に見た人たちの記述を見ると、南北戦争前夜の末で最もありがちな奴隷の家は、18x20フィート(6x6.7mほど)だ。通常、一室か二室だ。子供たちがロフトで寝るのもかなり多かった。窓ガラスはなく、木製のシャッターで閉じる。また裏口のある家もあった。煙突は通常、レンガ造か石造だ。建材は通常、丸太か板材だ。丸木小屋のすき間は、木片や泥で埋められていた。床は板張りで地面からは持ち上げられている。

こんな家は、現代の基準からするとかなり劣悪だが、南北戦争前夜だと、こんな奴隷の家でも、自由人たちの家とくらべて遜色ないものだった。1850年代には、アメリカ地方部の相当部分は丸木小屋に住んでいたのを忘れてはいけない。そして都市労働者たちは、混

雑した汚い共同住宅に住んでいた。今日のアメリカ労働階級世帯が暮らす、かなり広々とした住居を頭に浮かべて誤解してはいけない。これが実現したのはごく最近のことだ。1893年という時期になっても、ニューヨーク市の労働者の住宅調査を見ると、一人あたり寝室空間の床面積の中央値はたった35平方フィート(約3.3 m²)。良いカルト、南北戦争前夜の晩期に見られた「標準的」奴隷の小屋は、おそらく半世紀後のニューヨーク市の労働者たちが使えたよりも、一人あたり寝室空間が多かった。

衣服について最高の情報は、大農園の記録からくる。これらを見ると、成人男性へのかなり一般的な年間支給品は、シャツ4枚(綿)、ズボン4着(綿2着、ウール2着)、靴が1-2足だ。成人女性は年にドレス4着、あるいは4着作るのに必要な材料が与えられた。防止も、だいたい年に1つ(女性はバンダナ)だ。毛布は2-3年に1枚支給される。靴下や下着の支給にはずっとばらつきが大きかったらしい。いくつかの記録では女性へのペチコートの支給が挙がっているが、ほとんどでは見られない。男性も靴下や下着の話はあまりない。冬用に男は上着、ときにはオーバーコートをもらえたようだが、その支給頻度ははっきりしない。子供用の衣服は農園ごとにかなり変動があるが、最も一般的に支給されたのは、やたらに長いシャツのように見える、ワンピースの服だ。

奴隷の衣服は通常、粗いが耐久性のある布で作られていた。奴隷の靴の革は高品質だったが、ファッションとなるとまるで無視された。家の給仕や優遇された奴隷には、もっと立派な服が提供された。奴隷たちはまた、自分で服を買って標準支給服を補った。以下で

表 2 1907年 NY 市社会福祉局が成人労働者向けに推奨 した衣服と成人男奴隷の「典型的」支給衣服の比較

ニューヨーク市の労働者		「典型的」な好	「典型的」な奴隷支給品	
帽子/キャップ	2	帽子	1	
コート(2-3年ごと)	1	コート	?	
スーツ	1	上着	1	
ズボン	1	ズボン	4	
オーバーオール	2			
シャツ	5	シャツ	4	
カラー	6			
ネクタイ	4			
ハンカチ	4			
夏用と冬用の下着		下着	?	
長ズボン	6	長ズボン	?	
靴	2	靴	1.5	
靴の修理				
手袋 (指あり/なし)				

^{*} 奴隷自身による衣服購入は含まない。この一覧が載ったNY市調査ではNY労働者の平均衣服支出は推奨水準より低いとのこと。

示すように、多くの奴隷はかなりのお金を稼いでいた。この多くは、ハンカチや、ドレス 作り用の華やかな色の布などを買うのに使われた。

医療

奴隷に対する医療の質は、現代の基準からすれば貧相だが、農園奴隷に一般的に提供された医療については、収奪の証拠は見られない。医療が不十分だったのは、別にわざとではないし、ご主人のやる気がなかったからではない。南北戦争前夜では医学知識や技術がまた未発達だったせいでしかない。

奴隷の健康の適切な維持が、ほとんどの農園主の中心的な狙いだったというのは、監督への指示書など、農園主の各種の記録や手紙などで繰り返し強調されている。J. A. S. アックレンは監督宛にこう書く。「黒人たちの健康の保全と、その病気時の世話こそがお前の何より注意すべきことである。そしてこの特定分野におけるお前の責務を果たす最高のやり方を知らなければ、それはお前が就いている役職にふさわしくないということである」。P. C. ウェストンは監督に「何よりも彼の第一の目標は、どんな状況下においても、黒人たちの世話と厚生なのだということを、何にも増してはっきり理解せよ」と命じた。従って

あらゆる病人は、最初に苦情を申し立てたときから、また働けるようになるまで 昼夜問わず入院させるべし。看護婦たちは病人が家を離れないよう見張る責務を負い、寝台、機器道具類などを清潔に保つべし。看護婦は、監督または医師が命じない限りどんな薬も投与してはならない。農園看護婦以外の女性が一人、重病人すべてを看護する役を負うべし。少しでも深刻そうな病状についてはすべて医者を呼び、その医者の命令には厳格に従うべし。医師の指示する治療には何ら変更を加えてはいけない。

農園主たちは、仕事をさぼるために仮病を使う奴隷がいないか懸念はしたが、一般には本当に病気なのに無視されて、奴隷が死んだり健康を損ねたりするほうがずっと心配だった。だからルイジアナ州で最大級の農園所有者ベネット・H・バローは、仮病だと思った場合ですら、その奴隷が本当に病気であるかのように扱った。そしてこの態度はバローだけではない。農園主たちは病気記録の中で、生産活動から外した奴隷の病気について「なにもなし」「苦情」「病気というより怠惰でイカレているだけ」と表現している。ジェイムズ・ハモンドは、「あらゆるまともな苦情にはすぐに対応すべきであり、どんな目に見える、または一般的な病気の症状についても、どれがどんなに些末なものであれ黒人は少な

くとも1日かそこらは横になっていることが許される」と主張した。「明らかな仮病でない限り、黒人は働けないなら1日休みを与えるべきである。ちょっと休ませるほうが、深刻な病気の予防になるので得になる」

病人治療施設は、農園の規模によって一般に差があった。大きな農園はかなり大きな病院を維持した。奴隷 168 人を擁するある農園では、病院は二階建てのレンガ造で、巨大な部屋が 8 室あった。そうした病院は一般に、男女に別々の部屋を用意した。一室以上は「外来」患者治療のための「クリニック」だった。こうした部屋には、病院の診察治療に必要な各種施設に薬局もあった。もっと小さい農園だと、「病院」は単なる病院専用の普通の小屋だった。場合によっては、ご主人たちは自宅の何室かを病院用に提供した。奴隷の入院の理由は二つあった。病人が、単に休息と薬だけでなく特別な食事も含む特別手当を受けられるようにすること。そして病人を健康な奴隷から隔離して、感染の可能性を最小化すること。多くの農園主は奴隷が病気だとわかったら即座に、小屋から連れ出して病院に入れろと命じた。

フルタイムで専用の医師を抱えられるほど大規模な農園はほとんどなかった。だが中規模、大規模な農園はほぼすべて、フルタイムの看護婦が最低一人 (通常は高齢奴隷) いて、多くは経験豊かな助産婦も抱えていた。看護婦と助産婦は、農園主や監督の直轄だった。農園主は、最新の医療手順や医薬品とその処方について十分に知識を得ようとしたし、監督はそうした知識を備えていることが求められた。医師が定期的に農園に往診にきて、看護婦や助産婦、監督、農園主では適切に治療できない健康問題を抱えた奴隷を診察した。一部の農園主は一年契約で医師のサービスを買い、契約でカバーされる人数に通常は比例する、定額報酬を支払った。または実際の稼働ベースでサービスの対価を払う場合もあった。いずれにしても、奴隷の面倒を見る医者は通常、農園主の一家を診察するのと同じ医者だった。こうした医者の請求書を見ると、一回の往診で、奴隷と農園主の一家との両方を診察治療していることが何度もある。

一般に農園主が、奴隷に比較的高い水準の医療を提供するつもりだったからといって、 実際に提供冴えた医療が高い水準だったというわけではない。南北戦争前夜の医学知識や 技術はかなり原始的な状況だったし、当時主流の病気の理論により、患者の回復をかえっ て阻害するような治療が行われることもしょっちゅうだった。病気は「腐敗する動植物から発する瘴気」により引き起こされると考えられていた。そしてそれは「不純な空気や水」 で人間に感染すると思われていた。だから身体からそうした毒を除去するため、医者は瀉血、膿だし、浣腸に頼っていた。赤痢、コレラ、肋膜炎では、瀉血と浣腸が主要な治療だった。いずれの場合も当然、回復に不可欠な体液まで身体から除去されてしまった。この 治療法はまちがいなく、医者にかからなければ助かったはずの患者まで、たくさん早めに

墓場に送ることとなったことだろう。

奴隷がかかった多くの病気、特に肺炎や食道消化器系の病気は、黒人の死因として最大級の高さだったが、医師たちの治療は役に立たないか、むしろ有害だった。医者が有効な医薬的武器を持っていたのは、天然痘やマラリア (1820 年以降、キニーネの硫化物が一般に知られるようになった) のような限られた場合だけだった。それ以外は、医師の薬棚に置かれた薬品の有用性は、アヘンやパレゴリック、ドーヴァー粉末、ロードナムといった鎮痛剤だけだ。これらは治療はしなかったが、ひどい苦しみを緩和はしてくれた。医者は、ちょっとした手術が必要な場合には役に立った。たとえば膿瘍を開いたり、歯を抜いたり、骨接ぎをしたり、といった場合だ。また、奴隷にかなりよく見られたヘルニアにも対処できた。ヘルニアそのものをなおすだけの手術的な知識はなかったが、コルセットの使用を奨めることはできた。

当時主流の病気理論は、一つだけ有益な影響をもたらしはした。多くの農園主は、衛生的な環境を遵守するようになったのだ。奴隷自身の清潔さにとどまらず、その服、寝床、小屋の清潔さも確保しろという監督への指示ほど、指示書で強調されているものはないほどだ。指示書では、監督たちは自ら

彼らが衣服をつくろい、清潔に保つようにして、衣服は少なくとも週に一度は表せ、そのために週の後半にしっかり時間を確保しなくてはならない。日曜日には衣服が清潔であり、汚れたボロボロの格好でそこらをうろついたりしないように見張ること。そして家知念を通じて月曜の朝ごとに清潔な格好で出てくるようにさせ、この点でいかなる失態も見せないこと。

監督はまた奴隷たちの家を清潔にして、庭は雑草や汚物がないように見張らねばならない。

一部の農園主はもっと徹底していた。ハモンドは、年に二回は奴隷の小屋を大掃除させた。春と秋の大掃除で、小屋のあらゆる中身は外に出して日干しして、壁はすべて粗い、マットレスは詰め直し、床下の地面は石灰を撒くこととされた。年に一度、すべての家は「中も外も白塗りする」。自分の清潔さを保たない奴隷に対する処罰は、作業監視人とその他黒人二人により、強制的に身体をこすられることだった。別の農園主は、小屋の床下地面を毎月はかせ、小屋を年に二回白塗りさせた。アラバマ州の最大級の農園主チャールズ・テイトは、自分の奴隷の小屋を四年毎に新しい場所に移転させ「汚物の蓄積とコレラやジフテリアの防止」に務めた。

奴隷のヘルスケアは、妊婦に最も手篤かった。「妊婦は大いに気を使い、家の近くで軽

作業だけやらせなさい」とある農園主は書いている。「軽作業」というのは一般に、通常の仕事の 5-6 割で、あまり体力的にきつくないものとされる。臨月が近くなると、仕事はさらに減らされたが、多くの農園主は P・C・ウェストン同様に「妊婦もずっと、臨月ギリギリまで、単に畑まで歩いてそこにとどまるだけにしても、何かしら仕事をするべきだ」と考えていた。大農園では、女性は通常は農園病院の「横臥」棟に入れられた。通常は、出産は助産婦が行った。だが出産で何か問題がありそうならば、医者が呼ばれた。入院期間は通常は 4 週間ほどで、この期間の一部で母親は助産婦か看護婦の付き添いがあった。その後は、二週間の軽作業が奴隷区画周辺で続くことが多かった。女性は子供の世話をするものとされ、したがって、その後年内はずっと、比較的軽い作業に割り振られた。出産から 6-8 ヶ月まで、労働時間の間に四回の授乳があり、授乳育児中の母親は通常水準の 5-6割しか働かないものとされた。1 年目の残りには、乳児は通常、仕事中の日中に二回は授乳された。

人口データを見ると、農園ルールや手紙、日記に含まれた出産前後のケアの記述を強く 裏付けるものとなっている。1850 年国勢調査データに基づく計算では、主要な出産年齢で ある 20-29 歳の女性の妊娠による平均死亡率は、たった千件に 1 人だったとされる。これ はつまり、この年齢層の中で出産した 167 人中の 1 人しか死亡しなかったということだ。 出産時の奴隷死亡率は、絶対水準から見て低かっただけでなく、南部の白人女性が経験し た母体死亡率よりも低い。

幼児死亡率は、母親よりは劣る。1850年に生まれた奴隷千人のうち、一歳前に死んだのは平均183人だ。同年の白人幼児の一年死亡率は146人だった。言い換えると、奴隷の幼児死亡率は白人より25%高かった。この結果を見ると、幼児奴隷の劣悪な処遇が広まっていたという非難が裏付けられるように見える。だがそうなると、妊婦や新母親をとても厚遇した農場主が、その子供には冷酷だったという変なパラドックスが生じる。

1850年と1860年の人口データ分析は、このパラドックスを完全に解決できるほどは進んでいない。奴隷たちの比較的高い幼児死亡率が投げかける問題の多くに対する明確な答は、少なくともあと何年かしないと得られそうにない。だがこれまでの研究は、ご主人たちが幼児の世話を怠ったという非難をまったく裏付けるものではない。奴隷の幼児死亡率と自由人の幼児死亡率の差は、南部のほうが北部より不健康だという事実によるものがほとんどらしい。1850年の南部幼児死亡率は千人あたり177人——これは奴隷の幼児死亡率と実質的に同じだ。するとこの面で言うなら、奴隷の収奪が起きたのは、奴隷が南部に限定されていたからで、奴隷は住む場所を選べなかったからということになる。

おおむね、生後一年未満の奴隷死亡率は、自由人の子供と同様に、百日咳、クループ、肺炎、コレラ、各種消化器系の病気のせいだ――これは南北戦争前夜の人々がまったく理

解できておらず、対処のしようもなかった病気だ。死因の中で明らかに対処できるもののうち、窒息が最も多い。1850年に死んだ奴隷幼児の9.3%は。これが死因だったとされる。白人のうち、窒息した幼児は1.2%しかいない。白人に比べた奴隷窒息率の多さは、奴隷誕生の千人中15人近くに相当する。

歴史研究者の間では、幼児の窒息の多さをめぐってかなりの論争がある。一部はこれが幼児殺しのせいだと主張した。奴隷にとって人生はあまりに耐えがたく、多くの母親は子供を奴隷として育てるより殺したほうがマシだと思ったのだ、という。だがこの議論は、祖霊の間で自殺率が極度に低いという事実により疑問視される。1850年には、奴隷は一万人あたり1人しか自殺していない。これは白人の自殺率のたった1/3だ。また、窒息は奴隷の母親による子供のネグレクトが広範だった証拠だとする論者もいる。窒息がその母親たちのネグレクトの反映だという可能性は、否定派できないものの、生まれた奴隷100人のうち、この理由で死ぬ幼児は2人に満たないという事実も残る。だから死亡統計は、子供の面倒をしっかり見た母親もたくさんいた、ということも示すことになる。

また、奴隷窒息の統計を額面通りに受け取るべきかもわからない。それまで熱のような 当時受け容れられている症状以外のものが、正体不明の感染で引き起こされたら、窒息と 解釈されていた。そうした死が、白人より奴隷について窒息と報告される率が高かったの は、国勢調査員に死亡統計を報告した監督たちの歪んだ見方のせいかもしれない。

1850 年、1860 年のいずれの国勢調査も、罹患率についてのデータは集めていない。現在手に入る唯一のデータは、農園 15 τ 所にくらす農夫 545 人の標本をもとに解釈されている。この標本は、労働時間 2274 人年にわたる罹患率の情報を提供してくれる。これを見ると、平均でそれぞれの奴隷は、仕事を休むくらいの病気になるのは年にたった 12.0 日程度だっ

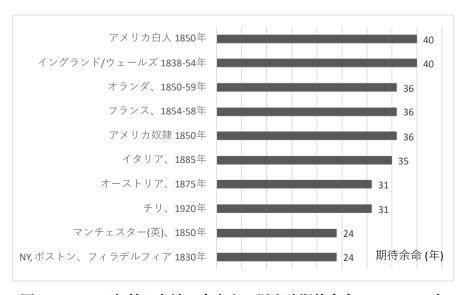


図36アメリカ奴隷と各地の自由人の誕生時期待余命、1830-1920年

たということを示す。この低い病気の率は、奴隷がよく面倒を見てもらっていた、という 印象を支持するものだ。また奴隷がいつも仮病を使っていたという、広く主張される説も 疑問視するものだ。最低でも、この休業率の低さから見て、仮病が広まっていたにしても、 奴隷はご主人様をだますのがずいぶんへ夕だったということになる。

多くの人にとって、肉体的な厚生の究極の指標は期待余命だ。図36は、1850年のアメリカの奴隷と、1830-1920年の各地の自由人の期待寿命を比較している。1850年奴隷の期待余命は平均白人アメリカ人を12%下回っているが、19世紀に自由人たちが体験していたものの範囲に十分おさまっている。たとえば、フランスやオランダといった先進国の期待余命とほとんど同じだ。さらに、アメリカ奴隷はアメリカとヨーロッパ両方の、自由な都市部の工業労働者に比べ、ずっと長い期待余命を持っているのだ。

家族

ほとんどの大規模農園の管理は二つの組織に基づいていた。農作業はグループ(ギャング)が中心だった。これは、農園主たちが他の農業でとても比肩できないほどの、専門特化と効率性を実現できた仕組みだ。この農園の側面については第6章で検討する。

もう一つ中心的な重要性を持つ組織が、家族だった。農園主たちは、奴隷家族に三つの機能を割り振った。まず、それは衣食住の分配のための管理単位だった。すでに見た通り、大規模農園ではドーミトリーではなく単世帯住宅が普遍的な居住形態だった。農園主の記録を見ると、食事が共同厨房で調理された場合でも、個別家族の家で調理された場合でも、配給の割り当ては一般に家族単位で行われていた。衣服についても同様だ。

家族はまた、労働規律を維持するための重要な装置でもあった。強い家族への帰属感を 奨励することで、奴隷所有者は個別奴隷が逃げ出す危険を抑えられた。家族が家や家具、 衣服、庭の畑、小家畜を実質的に所有できるようにすることで、農園主たちは奴隷がシス テムの中に経済的な利益を創り出したのだった。さらに、その利益の規模は変動できた。 一部の家族は、他ほりもずっと高い所得や実質資産の水準を実現できた。家や服の割り当 てや庭の畑の大きさ割り当ては家族毎にちがっていた。

第三に、家族はまた奴隷人口の増加を促進するための主要な道具だった。農園主たちは、家族が強ければそれだけ出産率も上がると信じていたにとどまらない。育児も家族に頼った。乳幼児は、母親たちが畑で働く間は保育所に入れられたが、これは家族を置きかえるよりも補うものだった。この家族が奴隷育成に果たした中心的な重要性は、1930年代にWPAが集めた元奴隷の談話を見るとよくわかる。自分の幼少期と影響を語るとき、元奴隷たちはしばしば親に教わったことについては語る蛾、保育所を運営していた女性の名前は

めったに出てこないどころか、ほぼ見られない。

奴隷家族の安定性を促進するため、農園主はしばしば、奨励に賞罰システムを組み合わせた。賞のほうは、結婚したカップルには独立住戸、世帯用の財のプレゼント、現金ボーナスだ。結婚を荘厳な出来事にするために、それをしっかりした儀式に埋め込むことも多かった。一部の結婚式は教会で行われ、また一部は農園主が「お屋敷」で行った。いずれにしても、結婚式には祝宴がつきもので、ときにはそれが全員の休日となることもあった。罰のほうは、不倫と離婚に対するものだ。多くの農園主にとって、離婚は罪人たちの鞭打ちが必要な罪だった。また一部の農園主は離婚を思いとどまらせるために、鞭打ちで脅した。

だから、奴隷の結婚の存在は各州の法制度の下では明示的に否定されていたが、農園のコードの下では認知されていたどころか、積極的に推進されていた。奴隷結婚の法的な根拠は、その農園の範囲内におけるコードから導き出されたものだということは、南北戦争前夜の南部における法制度構造において、かなり無視されてきた特徴を指摘するものだ。州のかなり広い制約の範囲内において、奴隷の法的行動に関するコードの定義と、そうしたコード違反に対する処罰のコードの定義は、農園主に移譲されていたのだ。こうした法的構造の二重性は、南北戦争前夜の南部に限ったものではなかった。中世ヨーロッパでも、荘園内の法と王の法の二重性として存在していたし、アメリカ植民地のレジームの特徴でもあったし、程度は劣るが、大規模な組織機関(たとえば大学内の規定)といった形で今日でも存在する。

南北戦争前夜の南部における二重の法制度構造が重要なのは、州が農園主に移譲した裁量がかなり大きかったからだ。ほとんどの奴隷にとっては、重要なのは州の法律ではなく、その農園の法律だった。州の法執行機関の世話になるような奴隷は、きわめて少なかった。彼らの日常生活は農園法が律していた。結果として、多くの農園主が奴隷家族は神聖なものだと強調したことと、農園の法の下で奴隷家族に与えられた法的な地位は、簡単に無視してよいものではない。

南部の法制度構造が二重になっていた点を認識すると、一部の歴史学者が強調した南北戦争前夜社会の「前ブルジョワ」的性格についても、かなりちがった見方が生じる。この社会を前ブルジョワ的にしていたのは、農園主たちに商業的精神がなかったことではなく、州が彼らにきわめて広い法的な権限を移譲していたということなのだ。ヨーロッパでは資本主義の台頭は、荘園の権限を弱めてその権力を中央集権化した国家に移すという、決然とした闘争が伴っていた。このプロセスは南部では極度に抑えられた。南部はきわめて資本主義的な農業形態を発展させたし、その経済行動は北部にひけをとらないほど強力な利潤最大化に支配されていたが、支配階級と隷属階級との関係は、中世の暮らしを強く思わ

せる、父権温情主義的な特徴に支配されていた。北部の工業事業者とちがい、農園主の権限はビジネス実施にとどまらず、奴隷の家族生活、公的行動、衣食住の提供、健康管理、 魂の保護にまで及んでいたのだった。

農園主たちが、奴隷家族を純粋なビジネスの道具としてしか見なかった、と言いたいわけではない。農園主階級はヴィクトリア朝的な態度が主流だった。そうした態度の自然な結果として、強く安定した家族の強調と、家族に対する性的活動の制限が生じていたのだ。その道徳性とよいビジネス慣行が一致したというのは、ほとんどの農園主にとっては意外でもないし、驚くことでもなかった。

もちろん、あらゆる農園主やその監督たちが当時の道徳コードを遵守していたわけでは ない。そうした男たちの多くが妻のベッドの範囲外でセックスを求めたのは疑問の余地が ない。そうした欲望を満たすため、彼らは愛人や妾を囲い、幼い少女たちを誘惑し、売春 婦を買った。そうした性的収奪は、南部に限ったものではなかった。そして南部の中でも、 白人男性の性的収奪は、黒人女性だけが対象ではなかった。

ここで問題にしているのは、ご主人や監督による奴隷女性の性的収奪が存在したかどうか、ということではない。それがあまりに頻繁すぎて、黒人家族が無意味になったり破壊されたりしたか、ということだ。もっと直裁な形で質問してみよう。白人男性が黒人女性に対して行った収奪が、白人女性に対するものよりも大きかったと考えるべき理由はあるのだろうか?こうした形で問題を提起するのは、白人女性に対する性的収奪も横行していたのに、そうした収奪が白人の家族制度を破壊したと主張する人はほとんどいないからだ。黒人家族と白人家族に対する、性的収奪の影響として想定されるものの非対称性は、手持ちの証拠で正当化されるだろうか?

南北戦争前夜に奴隷制を批判した人々は、これに対して正当化されるのだと答えた。奴隷所有者や監督たちが、農園を自分のハーレムに仕立てた、と糾弾した。法が奴隷所有者に奴隷女性の陵辱を許していたから、この習慣はきわめて一般的だったにちがいない、と言う。また、黒人女性は、白人女性より淫蕩か、少なくとも性的に放埒だったと決めつけ、したがって男が言い寄ってきたら、相手が白人でも黒人でもあまり拒まなかった、と述べた。さらに白人男性による黒人女性の陵辱は、奴隷家族を荒廃させた性的収奪の唯一の側面ではなかったという。意図的な奴隷の繁殖飼育の方針があり、そのため農園主たちは黒人同士の乱交的な関係を奨励していたという。こうして農園主側の経済的な貪欲さと性欲、さらには奴隷側がそれに屈しやすかったことで、黒人女性の性的収奪があまりに極端なものとなって、白人女性の状況とは比べものにならないほどだった、というわけだ。

こうした想定や結論の根拠となった証拠は、きわめて限られたものだった。南部の様々な旅行者の中で、意図的な奴隷の繁殖飼育が行われているのを目撃した者はいない。だが

みんな、その噂は耳にしている。一部の旅行者は、自分の農園で大量の奴隷に子供を産ませたという男性との会話を発表している。また別の旅行者たちは、ある農園主がムラートの子供に特別な気遣いを見せたという話を書き、その気遣いが強い親子関係を思わせたと述べている。また、奴隷の競売で特に美人の女奴隷の熱い愛と、そうした女性が特に高値で売られ、その値段が畑仕事で正当化されるには高すぎて、妾か売春婦としての価値だと考えねば説明がつかない、といった記述もある。

こうした報告がすべて本当だとしても、全部でせいぜいが数百件だ。これらだけでは、数百万人の人口に対してあまりに少数過ぎるため、黒人女性の性的収奪の証拠というよりむしろ、それがいかに少なかったかという証拠にさえなってしまう。本当の問題は、そうした事例がどこにでもあってほとんど報告されなかったのか、それとも珍しいできごとだったのでやたらに報道されたということなのか、という点だ。ムラートがたくさんいるので、南北戦争前夜の北部の一般人のみならず、今日の歴史研究者たちも、こうした報告された収奪のそれぞれの事例について、何千件も闇に葬り去られた事例があったにちがいないと確信してしまっている。南部への旅行者たちは、奴隷たちの相当部分はギニア海岸からの深い黒人ではなく、黄褐色、黄金、白、あるいは白に近い肌をしていたと報告していたのだ。これは白人男性による黒人女性の収奪が常態だったか、あるいは黒人女性が放埒だったか、あるいはその両方だったという、疑問の余地なき証拠ではないか?

だが一見すると反駁しがたいこの証拠も、決定的にはほど遠い。疑問視されるべきは、この南部への旅行者たちの目ではなく、統計的な意義だ。というのも、ムラートは黒人人口の中で均等に存在していたわけではないのだ。都市部の、特に自由人の間に多かったのだ。1860年国勢調査によると、南部都市の解放自由奴隷の39%はムラートだった。都市奴隷の中でムラートの比率は20%だった。言い換えると、南部都市にいる黒人の4人に1人はムラートだった。だが地方部の奴隷(全奴隷の95%)では、1860年のムラートはたった9.9%だ。だから奴隷人口全体としてムラート比率は、1860年には10.4%、1850年には7.7%にすぎない。だから南部への旅行者たちは、黒人人口をきちんと代表していない標本と接触したために、異人種混合の度合いについて大幅に誇張してしまったらしい。田舎でかなり孤立している奴隷たちではなく、都市部の解放自由奴隷や奴隷たちとずっと多く接触したらしいのだ。黒人女性の収奪が常態だったと示すどころか、ムラートについての手持ちデータを見ると、その発想をほぼ否定するものとなっている。

1620年から 1850年まで、奴隷と白人が接触して 230年がたっているのに、奴隷のうちムラートが 7.7% しかいないという事実は、平均して見るとどの年でも、奴隷の父親が白人だった比率はきわめて少ないということを示唆している。南北戦争前夜の最後の 10年で、ムラートの弘津が 7.7%から 10.4%と三分の一も増えたという事実も、これと矛盾するもので

はない。というのも忘れてはいけない点だが、ムラートは白人と純粋黒人の落とし子に限らず、ムラートと黒人との子供もムラートになるのだ。一般的な定義では、別の人種の血が 1/8 入っていればムラートだ。だから白人の血が 1/8 入った奴隷同士が結婚したら、その子供はムラートに分類される。また祖父が白人だった奴隷が子供を作れば、相手がどんな先祖の持ち主だろうと、ムラートに分類される。

専門補遺に示した奴隷人口の人口動態モデルによれば、国勢調査のムラートに関するデータだけでは、奴隷の子供の相当部分が白人によってはらまされた結果だという主張は裏付けられない。そして、元奴隷のWPA調査など他の証拠を見ても、こうした主張は疑問視される。そうした調査の中で自分の先祖について述べた者たちを見ると、両親のどちらかが白人だったと述べた者は4.5%しかいない。だが遺伝子プールについて遺伝学者が調査したところ、この数字ですら高すぎるらしい。今日の南部地方部黒人における「白人」と「黒人」の混合を計測すると、奴隷農園で白人が生ませた黒人の子供のシェアは、平均で1-2%くらいらしい。

こうした結果が驚くべきものに思われるのは、法律でご主人が女奴隷を蹂躙することが許されているなら、ご主人たちはその権利を行使したはずだ、という想定が広まっているせいが大きい。ある学者が最近述べたように「この[奴隷制という]制度と関係していたあらゆる[白人の]母親や妻は、実際に、または潜在的に、家の男性を女奴隷と共有していたのである」というわけだ。この見方の問題は、それが成文法以外に人間行動に作用する力を何一つ認識していない、ということだ。法の文言や司法判断が許容した多くの権利は、経済的な力や社会的な力が強く反発するので、広く行使はされなかったのだ。

この問題を少しちがった形で考えよう。ご主人たちや監督たちは、しょっちゅう黒人女性を陵辱したはずだ、と思われているが、それはそうした性的快楽に対する彼らの需要が高く、その需要を満たすための費用が低かったと考えられているからだ。こうした議論は、奴隷区画で性的快楽を求めるご主人や監督たちが直面する、現実の潜在的にかなり大きなコストを見すごしている。奴隷の娘や妻を誘惑すれば、農園主たちが大いに苦労して実現しようとした規律が崩れてしまいかねない。影響を受けた家族に怒りと不満を引き起こすだけではない。大農園主の権威は超然とした謎めいた雰囲気を彼らが維持したおかげで成立していたのに、その雰囲気の相当部分が崩れてしまう。また、自分の農園の奴隷区画における農園主の評判だけが問題ではない。農園主は、夜のアバンチュールの報せを自分の家の中では抑えておけるかもしれないが、奴隷が他の農園の奴隷にゴシップを流すのは防ぎようがない。

大農園所有者が、婚外の性的関係を求めたのであれば、自分の奴隷区画にこだわる必要 もない。50人以上も奴隷を保つ農場主は、当時の基準からすれば大金持ちだ。この階級の

平均年収は7500ドル超。これは1860年一人あたり平均所得の60倍以上だ。今日(訳注:1964年)これに匹敵する所得となると、税引き後で24万ドル、税引き前で60万ドルの年収が必要だ。こんな金持ちなら、町に愛人を囲うくらい簡単だ。そのほうが自分の農園の混雑した奴隷区画などよりも秘密を保ちやすいし、自分の経済敵成功を左右する労働規律を乱す可能性もはるかに小さくて済む。

監督はといえば、奴隷区画で性的な活動に及べば、バレたらクビになるというすさまじいコストがある。そうなったら、他で監督として雇われるのも容易ではない。こんな重要問題で自制心を失うとわかっている人物を、自分の農園の監督として雇いたがる農園主はなかなかいないからだ。チャールズ・テイトは子供たちにこう書いている。「黒人女性と同衾するような監督は決して雇ってはいけない。道徳性の問題以外にも、ここで述べるにはあまりに多すぎるほどの邪悪があるのだ」

また、白人男性が黒人の性的パートナーを求めるにあたっては、人種差別の影響をみくびってはいけない。一部の白人は黒人の淫蕩さというおとぎ話に惹かれたかもしれない。ちなみにこのおとぎ話は、南北戦争前夜の南部より今日のほうが強いかもしれないほどだ。だがはるかに多くの男性は、人種差別的な忌避感のためそんな方面に手を出そうとはしなかったはずだ。売春に関するデータはこの考えを裏付けている。売春婦の統計がある南部の都市はナッシュヴィルだけだ。1860年国勢調査を見ると、同市の売春婦のうち、黒人はたった4.3%だ。市の総人口のうち、黒人は1/5を占めていたのにこの数字だ。さらに、黒人売春婦全員は自由人で肌の色が薄かった。純粋黒人の売春婦もいないし、奴隷売春婦もいない。黒人売春婦が人口比率より大幅に少なく、黒い肌の黒人がまったくいないという事実から、不貞のセックスを望む男性は白人女性のほうを圧倒的に好んだようだ。

ナッシュヴィルの売春宿が奴隷女性を雇用しなかったというのは、ことさら興味深い。 というのもそれは、需要だけでなく供給面での配慮も奴隷の売春婦利用の制限につながったことを示唆しているからだ。国勢調査によると、ナッシュヴィルの売春婦の半数は文盲だった——読み書きが苦手というものではなく、読むか、書くか、その両方がまったくできないということだ。言い換えると、売春婦の供給は、貧しい教育のない女の子から選ばれ、未熟練労働の賃金しか稼げないということだ。こんな供給しかないなら、奴隷所有者は奴隷を売春に出すのとためらうのに、ヴィクトリア朝の道徳観など持ち出す必要もない。明らかに、畑で働かせたほうがもっと稼げるし、「世界最古の商売」に伴う高い疾患率や死亡率にもさらされることがない。

奴隷家族が黒人の間に広く見られた乱交のために破壊されていたという主張は、ご主人たちが女奴隷を何の制約もなしに性的に収奪したという理論と同じくらい根拠が乏しい。 奴隷の間での乱交が白人よりも多かったなどという糾弾を裏付けるような証拠は、白人評

論家たちの糾弾以外はほぼまったく見つかっていない。するとこういう問題が出てくる。 「そうした糾弾は、黒人の行動の現実を反映しているのか、それとも評論家たちの先入観 を反映しているだけなのか?」

こうした糾弾がもっともらしく見えるのは、それが南部の奴隷制擁護者だけでなく、この制度の批判者からも出てきたからだ。南部人の糾弾はただの弁明として一蹴できるが、奴隷廃止主義者など奴隷制の敵のことばは、そう簡単に無視できない。この性的乱交の問題について、反奴隷制勢力は擁護論者たちと、その存在を否定しなかったことではなく、それがどこまで広がっていたかについて意見が分かれていた。批判者たちは、奴隷制が黒人の性的本能を抑えるところか、むしろ拍車をかける方向に働いたと信じていた。

残念ながら、奴隷制廃止論者などの反奴隷制著作者たちは、道徳的闘争の旗印をかかげていたからといって、人種差別から逃れられていたわけではなかった。黒人たちから物理的に遠いところにいたこともあり、こうした著述家たちはしばしば、ある種の人種的ステレオタイプについて、奴隷所有者よりもだまされやすく、鵜呑みにしやすいことが多かった。これから見るように、この問題が彼らの奴隷労働の効率性軽視においては大きな役割を果たす。さらに、こうした著述家の多くは上流階級出身だったので、あらゆる労働者たちの行動について、奴隷所有者たちと共通の思いこみを抱いていた。だから歴史学者がよく奴隷の家族生活について引用するファニー・キンブルは、アイルランドの貧農やイギリスの製造業労働者、アメリカの黒人すべてが、人間の繁殖について同じ「無謀さ」を持っていたのだと見ている。

奴隷に関する人口学的な証拠を見ると、彼らの性生活や家族行動は、こうした糾弾から伝わるものとはまったくちがっていたことが示唆される。最も雄弁な情報の一つは、18-30歳の母親たちの出産間隔パターンだ。死産だったり三ヵ月以内に生まれた子供が死んだりした女性の場合、次の子供が生まれるまでの間隔は、1年強だ。だが子供が一歳になるまで生き延びた子供だと、次の子供までの間隔は2年強だ。これは、避妊を使わない人々の間で、子供が生まれて最初の一年は母乳で育てている場合に当然予想される間隔だ。というのも母乳の影響の一つは受胎の可能性を下げることだからだ。言い換えると、奴隷の子供の感覚は、母親による子供の授乳育児が普通に広まっていたことを示唆している。

この発見は、奴隷の母親が子供に無関心だったとか、ネグレクトが普通だったとか、嬰児殺しが広く行われていたとかいう糾弾をまったく裏付けていない。その正反対で、一年にわたる授乳の普及と、奴隷や南部白人との乳児死亡率がほぼ同じこと、さらに窒息などの事故が乳児奴隷の死因としてきわめて少ないことを考えると、黒人の母親はおおむね子供の世話をかなりしっかりやっていたことが示唆される。

これにも増して雄弁な情報は、生き残った最初の子供を出産したときの母親の年齢だ。

第4章 収電の解剖学

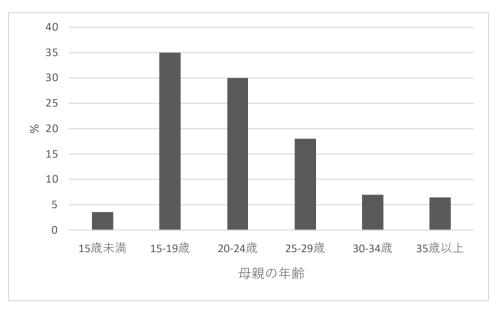


図 37 初産年齢の分布、奴隷母親の年齢別

この分布は図 37 に示したが、黒人少女がしばしば 12-14 歳といった幼い時期に妊娠させられたという糾弾とは矛盾している。12 歳での妊娠はほぼないも同然で、ティーン前半での妊娠もかなり珍しかっただけでなく、初産の平均年齢は 22.5 歳だ (中央値は 20.8 歳)。だから、女奴隷の高い出産率は、白人や黒人の男によるきわめて若い未婚女性の手当たり次第の種付けの結果ではなく、第一子の受胎後も繰り返し妊娠した結果なのだ。奴隷の子供の圧倒的多数は、かなり成熟していただけでなく、既婚の女性が産んでいるのだ。

初産の母親の平均年齢が高いことは、奴隷の親たちは娘を男との性的接触から厳重に保護したということを示唆している。食事も十分で避妊もしておらず、また結婚後に女性がかなり太ってしまう人口群においては、ティーン後半での出産が比較的少ない理由としては、性交渉が控えられているとしか考えられない。言い換えると、人口学的な証拠から見て、奴隷たちに主流の性的な規範は、乱交ではなく慎重だったということだ――奴隷制廃止論者の奴隷所有者たちの両方から出てきて、伝統的な歴史記録で受け容れられているステレオタイプとは正反対ということだ。

元奴隷から集めた談話を見ても、家族生活の執り行いにおける謹厳さが一般的だったことが裏付けられる。ルイジアナの農園で育てられたエイモス・リンカーンは回想する。「ありゃ道徳的な時代だったね。娘っこが結婚するときには21歳だよ。いつだって、ふらふらうろついたりなんかしなかったね。母ちゃんたちはみんな、娘の居場所を知っとった。最近の連中ときたら、抑えがきかなくて心が弱いね」

結婚が奴隷の性的行動を変えたというのは、初産の季節パターンと、第二子以降の季節パターンの差にはっきり表れている (図 38)。農園記録から集めたデータを見ると、代二子

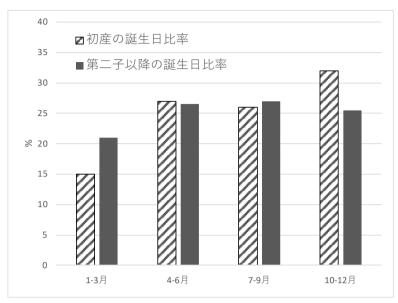


図38 初産と、その後の出産の季節分布比較

以降の出産だと、四半期毎に生まれる子供の数はだいたい同じだ。だが初産の季節パターンを見ると、年の最終四半期に明らかなピークがある——まさに結婚の大部分が、収穫の直後に行われた農業社会で予想されるパターンだ。一年の第四四半期——つまり地域と作物にもよるが、収穫後9ヶ月から13ヶ月——で、第一四半期の倍近い出産が起きている。このパターンは、単に奴隷が冬の休耕期には暇が多くて、性交の機会も多かったというだけのせいにはできない。もしそれだけの話なら、一年の最終四半期で誕生がピークになるのは、初産だけでなくその後の子供でも同様のはずだ。

さらに奴隷の結婚は、ご主人がいい加減に割り振ったものだから、しばしば年の差婚——若者が老婆と結婚したりその逆など——を引き起こした、という主張もまちがっている。

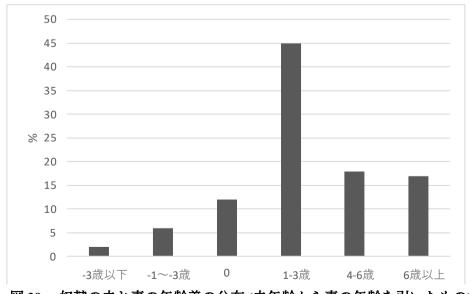


図39 奴隷の夫と妻の年齢差の分布(夫年齢から妻の年齢を引いたもの)

図 39 を見ると、ほとんどの結婚はかなり年の近いパートナーの間で行われたことがわかる。 夫と妻の平均的な年齢差はたった 3 歳だ。ほとんどの場合、夫は妻と同じ歳か少し上だ。 姐さん女房はかなり稀だった。

奴隷の人生が安定した核家族を中心にめぐっていたからといって、黒人家族が単なる白人家族のコピーだったというわけではない。もちろん黒人のアフリカ的な伝統や、特殊な社会経済的状況は、白人世帯より黒人のほうによく見られる、各種の特徴をもたらしたことだろう。たとえば、各種の細かい証拠を見ると、白人家族に比べて黒人家族では、妻のほうが強い役割を果たす傾向が強かったらしい。こうした特徴の慎重な選り分けとその発生の同定は、まだきちんと記述されていない作業だ。だがすでに手元にある証拠を見ると、いまの歴史書に満ちている多くの一般論ははっきり否定される。

「典型的な奴隷家族は母権主義的な形態」だとか「夫はせいぜいが妻の助手でしかなかった」とかいうのは正しくない。また「男奴隷が家族内で果たす唯一の重要な機能は、子供の種付けだけ」などというのもまちがっている。良かれ悪しかれ、奴隷社会での支配的な役割は女ではなく男が果たした。奴隷に提供された管理職に就いたのは、ほとんどすべて男だった。女性監督や女性監視人はごくわずかだ。ほとんどの職人も男が占めていた。大工、樽づくり、鍛冶師などだ。1848年チャールストン市では、奴隷職人706人すべてが男性だ。畑では男女が並んで仕事をしたが、その役割は厳密に決められていた。開墾の鋤チームの女性の話はずいぶん喧伝されたが、そうした参加はかなり珍しいものだった。鋤チームはほとんど男だけで、特に若い男性がほとんどだった。耕作期になると女性は高齢男性や子供といっしょに鍬チームで仕事をしたが、ここは力があまり問題にならない。女性が「どんな男」にもひけをとらないのは収穫期だけだ。というのも綿つみにおいては、強さよりは敏捷性のほうが決定的な要因だからだ。農園の一部の仕事が男限定だったのと同様、女性限定の仕事もあった。男はほぼ決して糸紡ぎや布織り、縫い子、看護婦にはならなかった。男と女の役割分担は、農園の家内スタッフにも存在したが、区分はそれほど明確ではなかった。庭師や監視人は男性の仕事だ。洗濯女や調理人は女性の仕事だ。

また奴隷家族の中でも男女分業があった。その分業は求愛から始まる。少なくとも表面的には、求愛期間を開始するのは男だ。そして、農園主から結婚の許可を確保するのも男だ。結婚後、調理、一般的な掃除、選択、子供の世話は母親の役割だ。奴隷家庭の自宅菜園での仕事や、追加の食べ物のための狩猟と釣り、薪切りは父親の仕事だった。

農園主たちは、夫を家長と認識していた。奴隷家族が記録簿に掲載されるときには、夫が世帯主として筆頭にくる。家は夫の名前で割り当てられ、半年に一度の家族への衣服支給は夫の名義で行われた。庭園区画は夫に割り当てられ、その作物販売で得られたお金は彼の名義で保管された。奴隷がこうした口座から現金引き出しを行いたいときには、男に

対して支払いが行われた。奴隷による衣料の購入 (男用だろうと女用だろうと子供用だろうと) は夫の名前に対して課金され、バケツ、鍋、特別な食べ物の購入も同様だ。

道徳的な信念とよいビジネス慣行の両方から、通常は農園主たちは安定した核家族の発達を奨励したが、黒人家族が純粋に、あるいは主にですら白人のご主人がでっちあげたものだと思うのはまちがっている。黒人家族を形成する外的要因と内的要因の正確な相互作用はまだわかっていない。だが各家族という形式は単に、奴隷に押しつけられたのではないというかなりの証拠が存在する。奴隷たちがアフリカの家族形態を放棄したのは、それが先祖の暮らした条件や社会とまったくちがうところで暮らし働く黒人のニーズを満たせなかったかららしい。各家族が黒人の間で根づいたのは、それがそうしたニーズを満足させたからだ。家族が奴隷たちにとって持っていた意味を示すものとしては、家族が競売にかけられて引き裂かれたときに通常述べられる、深い悲しみと苦悶がある。オクラホマに暮らしていた元奴隷ナンシー・ガードナーはこう語る。「いやヤツらはメンフィスんとこまで連れてって、わたしらウシみたいに売られたんよ。あたしとかあちゃんをまとめて、とうちゃんと男の子たちをまとめて売ったのよ。向こうはミシシッピー州に送られ、わたしらはアラバマ州に売られて。ああとうちゃん、かあちゃんは、もう、とうちゃんのことで死ぬほど悲しんだ! その後は長生きしなかったよ」

経済的な力のせいで、農園主が奴隷家族を維持できずに破壊することとなった、比較的珍しいケースでは、家族を維持しようとする奴隷たち独自の苦闘が大きく注目された。テネシー州の元奴隷ジョージー・ジョーダン夫人は、彼女の母親が「クラークさんの所有する子供二人を持っていて、クラークさんはとうちゃんとかあちゃんと、その子たちをいっしょに行かせてくれなかったんです。それでかあちゃんはすごく惨めになってしまいました。とうちゃんは、なんとかなだめようとしましたが、かあちゃんはひたすら赤ちゃん、アンとロイバンを求めて泣き続けて、やがてロウリーさんがクラークに、月に一度二人にかあちゃんを訪ねるお許しをもらってあげたんですよ」

こうした苦闘の証言は、農園主たちが逃亡奴隷の捕獲を求めて出した新聞広告にも見られる。こうした広告はしばしば、その奴隷は最近引き裂かれた家族といっしょになろうとしているはずだ、という農園主の信念を述べている。

黒人家族についての奴隷廃止論者の見解は、歴史学者たちがあまりに鵜呑みにしてしまっているが、驚くほど一貫性がない。奴隷制に対する感情をかきたてるために、奴隷家族が無理矢理引き裂かれたときに生じた苦悶については正確に描きだしたが、同時に奴隷制は黒人家族からあらゆる意味を奪ったと主張している。この後者の見方が赤裸々に表現されているのは、ファニー・キンブルの日誌だ。奴隷の両親と子供との関係は、「動物とその子供とのつながり」に還元されているのだ、と彼女は書く。彼女の見方では黒人家族は

彼女がイギリス上流階級世帯には存在するという「あらゆる無言の優しさや荘厳さ、あらゆる存在理由、あらゆる精神的な優雅さと栄光を」奪われている存在なのだった。奴隷制の下では、育児は「単なる繁殖、忍耐、授乳、そしてそれだけの存在」に成りはてたのだ、と彼女は結論する。競売台での苦悶や、引き裂かれた家族と再会しようとする黒人の苦闘は、奴隷家族に満ちていた愛情を示唆するが、ファニー・キンブルを始めとするほとんどの白人評論家はそれを完全に見すごしてしまった——それは人種的、階級的な偏見のヴェールが彼らの目をくもらせ、黒人家族生活の本当の中身が見えなくなってしまったせいかもしれない。

処罰、報酬、徵発

奴隷制の持つ収奪的な性質が最も露骨なのは、賞罰体系においてだ。過ちを犯した奴隷に対する処罰としては、鞭打ちがおそらく最もありがちだった。他の処罰形態は各種特権 (たとえば町への外出)の剥奪、さらし台、収監、売却、焼き印、死刑などだ。

鞭打ちは、どのように処方するか次第で、軽いこともあれば厳しい刑にもなる。一部の 鞭打ちはあまりに強烈で、受刑者は死んだ。実際、殺人のような場合には、通常なら死刑 になった奴隷の刑罰は、しばしば激しい鞭打ちと、別の州や外国への追放との組み合わせ に変換された。というのも、第 2 章で示したように、死刑を鞭打ちと追放と組み合わせる ことで、州は処刑したら失われてしまう奴隷の価値の相当部分を回収できるからだ。場合 によっては、鞭打ちは今日の家庭で一般に行われているような、穏やかな体罰として優し く処方された。

鞭打ちの頻度に関する信頼できるデータはきわめて限られている。長期にわたる系統だった鞭打ちの記録として現存するのは、ベネット・バロウの日記だけだ。彼はルイジアナ

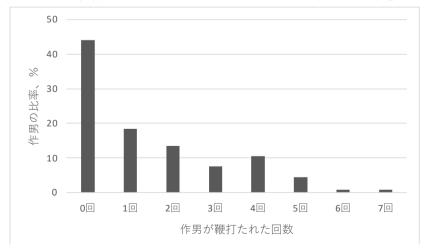


図40 ベネット・H・バロウ農園での1840年12月から2年間にわたる鞭打ち回数の分布

の農園主で、鞭を控えたら奴隷が怠けるだけだという信念の持ち主だった。彼の農園は奴隷が200人ほどいて、うち120人が労働力だった。記録によれば、二年にわたり全部で160回の鞭打ちが行われ、作男一人あたり年に0.7回鞭で打たれている。作男の半分は、この時期に一度も鞭打たれていない。

19世紀の初めまでは、規律を強制するために鞭打ちを使うのは、ごく当たり前のことだった。長年にわたり、鞭打ちは処罰としてまったく問題ないものと思われていたことを忘れてはいけない。それは犯罪者に対してだけでなく、何らかの形で仕事をさぼった正直な男女に対する罰としても普通に使われた。妻を鞭打つのは、聖書の一部の版では神さまのお許しさえ得ている。欽定版聖書以前の、マタイ版聖書では、ペテロ第一の手紙3の付記で、もし妻が「従順でなく夫に対して助けようとしないのであれば、神への恐れを殴りつけることで女の頭に叩き込み、それにより己の責務を学んで実施する気になるように仕向けなさい」と書かれている。17世紀と18世紀の大半を通じ、鞭打ちは南部と同じく北部でも、処罰としてごく普通に使われていた。自由国家で鞭打ちが急速に人気を失ったのは、18世紀末から19世紀初頭にかけてのことだ。

南部での鞭打ちの継続を、ご主人たちの邪悪さのせいにするのはあまりにおめでたい。確かに一部のご主人は残虐で、サディスト的ですらあったが、ほとんどはそうではなかった。WPAの談話を提供した元奴隷の圧倒的多数は、この問題について語るとき、ご主人がよい人だったと述べている。そうした人々は、賞罰体系における鞭打ちの適切な役割について悩んでいた。中には、それを完全に廃する農園主もいた。ほとんどはそれを受け容れつつも、鞭打ちが効力を発揮するためには、抑制を持って、冷静な計算ずくで行う必要があることも理解していた。たとえばウェストンは、監督たちに対して、罪状が発覚してから24時間が経過するまでは、いかなり処罰も科してはいけないと戒めている。砂糖農園主ウィリアム・J・マイナーは、管理人たちに「処罰のときは皮膚を破ってはならず、怒りにまかせて処罰してもいけない」と指示している。多くの農園主は、自分自身か、自分が在籍しているときでなければ奴隷を鞭打つのを禁じている。また、自分の許可なしに行ってよい鞭打ち回数を制限した人もいた。

南部以外での、労働規律の道具としての鞭打ち衰退は、経済的な配慮に大きく影響を受けたらしい。資本主義台頭により、直接的で個人的な処罰に変わり、個人的でない間接的な処罰がますます使われるようになった。市場における自由労働者の雇用で、労働者の管理職は、強力な新しい規律化の武器を手に入れた。怠惰で、やる気がなく、その他職務をサボる労働者はクビにできる——自分の目に入らないところで、雇用者に経費をかけることもなく、勝手に飢えてしまえばよい。興味深いことに、奴隷に規律を強制するにあたり、食事を採りあげるのはめったに行われなかった。というのも栄養失調で生じる病気と無気

力は、奴隷が畑で働く能力を引き下げてしまうからだ。農園主たちは収監よりは鞭打ちのほうを好んだ。鞭は奴隷の労働時間をあまり長期に奪うことはないからだ。言い換えると、南部で鞭打ちが続いたのは、飢餓と収監を鞭のかわりに使う費用が、北部の自由労働雇用者に比べ、南部の奴隷所有者にとって高くついたからだ。労働者が自分の人的資本を所有しているときには、その資本の価値を毀損または低下させる処罰形態は、すべてその人自身の負担となる。奴隷制の下では、ご主人が望んだ処罰形態は、奴隷に費用を課しつつも、ご主人が所有する人的資本の毀損を最小限にとどめるものだ。鞭打ちは一般にこの条件を満たした。

鞭打ちは、賞罰システムにおける不可欠な一部だったが、このシステムのすべてではない。農園主がもとめていたのは、恨みや不満を抱いて、鞭打たれないギリギリのことだけをやるような奴隷ではない。熱心で頑張る責任ある奴隷で、自分の成功をご主人の成功と同一視してくれる奴隷が欲しかったのだ。農園主たちは奴隷に「プロテスタント」的な職業倫理を叩き込み、その倫理を心の状態から高水準の生産へと変換しようとした。ベネット・バロウはこう書く。「私の黒人たちはご近所で実に評判が高い。他のだれよりも生産し、自分がやることは他のだれにも勝ると考えている」。こうした態度は、鞭で奴隷に叩き込めるものではない。当人たちの中から引き出さねばならないのだ。

農園主たちの経営的な関心の相当部分は、作男たちの動機づけ問題にあった。望む反応を引き出すために、彼らは広範な褒賞体系を開発した。一部の報酬は、短期業績の改善を狙ったものだった。ここに含まれるのは、その日や週で最も多くの綿花を摘んだ個人やグループに対する賞だ。その賞は、衣服、タバコ、ウィスキーなどだった。ときには現金が与えられることもあった。よい目先の業績はまた、予定外の休日や週末に町へ出かけられるといった報酬が与えられることもある。奴隷が通常の休息時間に働いたら、追加の報酬がある――通常は現金で、その地域で雇用労働に支払われる相場が払われた。よい業績を挙げている奴隷は、残業して自分のためにこけら板を作ったり籠を編んだりという作業を行うことが許された。そうして作った商品はご主人に販売したり、近所の農夫に売ったりできるのだ。

一部の報酬は、中期的に行動に影響を与えるためのものだった。この区分に入る報酬は通常、年末に支払われた。年末ボーナスは、現物や現金で与えられたが、かなりの額に上ることも多かった。たとえばベネット・バロウは、1839年と1840年に、奴隷1世帯あたり平均で15ドルから20ドルの贈り物を配っている。個別奴隷が受け取った金額は、その業績に比例していた。20ドルといえば、1840年の一人あたり国民所得の1/5に相当する今日(1964年)で相対的にこの規模のボーナスといえば、千ドルくらいにもなる。

ご主人たちはまた、よい業績を挙げた奴隷の世帯には、数エーカーにも及ぶ土地を与え

た。奴隷はこうした土地で商品作物を栽培し、その売上げは自分が得た。ジュリアン・S・デヴローのテキサス州の農園では、そうした土地を耕作する奴隷たちは、最大で畑一つあたり綿花 2 ベイルも生産した。デヴローは自分の作物といっしょにそれらの作物も売り出した。よい年だと、一部の奴隷は家族のために年百ドル以上も稼いだ。デヴローは口座を開いて、売上はそこにつけた。奴隷たちは現金が必要なときや、デヴローに衣服、鍋、フライパン、タバコなどを購入してほしいときには、その口座からで引き出した。

ときに農園主たちは、奴隷たちとの利益共有のための入念な方式を考案することさえあった。アラバマの農園主ウィリアム・ジェミソンは、奴隷たちと以下の合意を取り交わしている。

お前たちは、農園で生産されたトウモロコシと綿花の 2/3 を得るし、耕作した報酬として獲れただけの小麦も与える。また今年の食糧は与えよう。作物を収穫したら、1/3 は私のために取っておくこと。そして、監督にその仕事分の支払いをし、私が提供する家の分を払い、自分の衣服を買い、自分の税金を支払い、医者の診察料と、農場のすべての経費を払いなさい。お前たちは私にとって一切の経費負担になはならないが、産物の三分の一と私が貸したものの支払いをしなさい。在庫と農園の道具は使ってよろしい。元通りの良好な状態で返却し、農園を適切な修繕状態とし、残ったお金については、お前たちの間で平等に、それぞれの作男が提供したサービスに応じて適正で公平な割合で分けなさい。また休憩時間の会計もつけておくので、最も稼ぐものが最大の休暇を得られる。

三種類目の報酬がある。これは長期的なもので、しばしば報われるまでには十年かそれ以上の経過が必要だ。つまり、奴隷は隷属下で存在する社会的、経済的なヒエラルキーの中で上に挙がる機会が得られるのだ。作男は職人や監視人になれる。職人は農園から町に移って、自分を雇ってもらえるようになる。監視人は主任監視者や監督へと昇進できる。経済的なはしごを上れば、社会的な地位だけでなく、もっと自由も得られる。さらに住まいも衣服もよくなり、現金ボーナスもある。

これまで、農園主が職人や管理職に就く奴隷をどうやって選ぶのか、という点にはまったく注意が払われていなかった。ときには、大工や鍛冶師などの職人にティーン前半から見習いで入ることもある。これは白人で一般的に行われるのと同じだ。奴隷の場合、これはむしろ例外的なことだったらしい。遺言や農園記録から得た職業データの分析によれば、奴隷職人の年齢分布はかなり異様だ。20代の奴隷が異様に少なく、40代、50代の奴隷がやたらに多いのだ。この年齢パターンは、その仕事の訓練を受ける奴隷の選択が、しばしば

その奴隷が二十代末か、ヘタをすると三十代になるまで遅らされた、ということを示唆している。

通常ならこれは不経済な方針だ。というのも職業訓練への投資は早めにやっておくほうが、その投資を回収するための年月が長くなるからだ。奴隷制は、職業投資を決める権限を両親からご主人にシフトさせることで、このパターンを変えた。自由な社会では、新世代のどのメンバーが技能職の訓練を受けるか決める基準は、血縁関係だ。だが奴隷所有者は、親が持つ既得権益を持っていない。だから、技能職への参入を、家族の出自とは無関係に最もふさわしい者に与える賞として扱うことができた。若い作男がこの仕事を目指して競争し、追加の努力をしてくれるようなら、職業投資が分割償却される年数が短縮されたことで収益が減っても、その分は十分に埋め合わせがつく。この奴隷の間の世代を跨がる技能移転に、血族が何も影響しなかったと言いたいのではない。単に、その役割が自由社会と比べれば大幅に減らされていると強調したいだけだ。

別の長期的な報酬は、解放による自由だ。この報酬を実現する可能性は、もちろんかなり低かった。国勢調査を見ると、1850年には解放率は、奴隷千人につきわずか 0.45 人だった。解放は、ご主人の慈善か、奴隷が自分自身を買い取れるようにする合意を通じて実現可能だ。時には、ご主人の存命中に自由の贈り物が与えられた。もっと多いのが、遺言状の中にそれが書かれている場合だ。自己購入は、奴隷が自分自身を自分のための仕事で稼いだお金により購入するか、高技能都市奴隷なら、職人がご主人に支払う収入の比率を引き上げることで購入するという取り決めが必要になる。一部の高技能奴隷は、十年以内に自分を買い取るだけの資本を蓄積できた。人によっては二十年以上もかかることもあった。そうした取引が行われるときの価格については、現在はほとんど情報がない。自己購入をした奴隷が、市場価値より高い金額を支払わされたかどうかはわからない。

ここまでの話で、奴隷たちがまるで均等な所得水準で暮らしてはいなかったことは明らかだ。農園主が作った入念な報酬システムは、奴隷の生活水準にかなりの幅を作り出した。奴隷の所得配分の全貌について、ある程度の精度をもって再現できるまでには、かなりの作業が必要となる。だが1850年の奴隷の「ベーシックインカム」を推計することはできた。これと、奴隷の高い所得に関する断片的な証拠をあわせると、少なくとも当時見られた所得の幅について見当は得られる。

「ベーシックインカム」というのは、奴隷に与えられた衣食住と医療の価値を指す。 1850年における成人男性についてのこれらの平均支出は48ドルだ。作男が得る追加収入に 関する最も完全な情報は、いくつかのテキサス州の農園のものだ。こうした所領の最高の 作男は、しばしば自分に与えられた農地で育てた綿花などの作物販売を通じ、ベーシック インカムより年間40-110ドルの追加収入を得ていることが多い。あるアラバマ州の農園で

は、八人の作男が作った綿花は、平均でそれぞれに 71 ドルの稼ぎをもたらし、中でも最高の男は 96 ドルを手にしている。また別の農園では、最高の作男十三人の平均追加収入は 77 ドルだった。こうした散在する事例から見ると、作男たちの中で、高い稼ぎの者はベーシックインカムの 2.5 倍ほどを得ていたらしい。

職人たちの収入も考慮すると、奴隷の稼ぎの幅はさらに広がる。職人の中で最高の所得の者が稼いでいる額は、ベーシックインカムの数倍にものぼったはずだ。これは、職人が自分を買い取って自由になるときに払わねばならなかった高い価格から示唆される。壮年鍛冶師の平均価格は、1850年には約1700ドルだった。だから、十年で自分を買い取れた30歳の男は、年間に生存水準を170ドル上回るくらいの稼ぎを得ていたはずだ。これは職人の稼ぎがベーシックインカムのおよそ4.5倍だったということだ。

作男の追加収入として見つけられた最高の単年度額は 309 ドルだ。アラバマ州の奴隷アハムは、桃、リンゴ、綿花の販売でこれだけの金額を稼ぎ、長年にわたりかなりの資本を蓄積したので、1860年には貸金の総額が2400ドル以上にもなった。アハムの農業所得はベーシックインカムの7.4倍だ。アハムがこの貸している分に対して6%、つまり144ドルを金利で得ているとすれば、この比率は10.4にまで挙がる。ベーシックインカムを超える最大の職人所得では、500ドルが最高だった。この場合、稼いだ金額とベーシックインカムの比率は11.4になる。

報酬構造は、奴隷システムの中では一般に思われているよりもかなりの上昇可能性を創り出したとはいえ、その機会の大きさをあまり誇張してはいけない。最高水準の機会はどうしようもないほど奴隷には閉ざされていた。アハムのような奴隷が明らかに持っていた実業の才能を使い、大実業家になるといった話は、奴隷でいる限りはあり得なかった。どれほど才能があっても、奴隷は政治家にはなれなかった。またいかに勉強家でも――かなり博識な奴隷はいたのだが――奴隷でいる限り南部大学の教授陣には任命されることはない。実業面での天才は、依存しているご主人の庇護の影に隠れたままでいるしかなかった。学者肌でも、博愛的で啓蒙的な農園主の子供の家庭教師になるのがせいぜいだった。この奴隷制という制度の剥奪が最も重くのしかかったのは、奴隷社会の中で才能あるてっぺんの人々に対してだった。おそらくだからこそ、北部ヤンキーの進軍が南部反乱軍の拠点を侵食するようになったとき、まっさきに北部に逃げ出したのが、一般の作男たちではなく、監視人や職人だったのだろう。

すでに述べたように、奴隷が生産した収入の一部は接収 (ピンハネ) された。奴隷全体の ライフサイクルにわたりこの接収の平均年額がどのくらいだったのか、というのはきわめ て複雑な話となる。というのも接収率 (ピンハネ率) は奴隷毎にちがったし、年ごとにもち がっていたからだ。その計算と手順をめぐる問題については補遺 B で論じた。その結果を

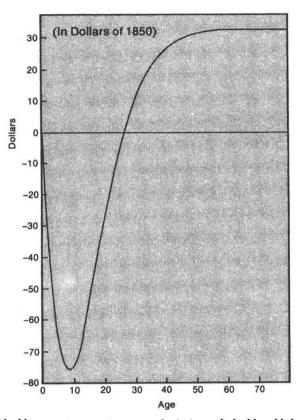


図 41 奴隷のライフサイクルにわたり、各年齢で接収された 収入の平均蓄積価値 (期待現在価値)

示したのが図 41 となる。この図は、平均の蓄積価値、あるいは経済学者用語を使うなら、 ライフサイクルの各年齢において接収された収入の「期待現在価値」を示したものだ。26 歳までは、奴隷に対する農園主の累積支出は、農園主が彼らから取った平均蓄積収入より も多い。その後はそれが逆転する。ライフサイクル全体で見ると、その接収された金額の 蓄積価値または現在価値は、平均で総計 32 ドルとなる。この 32 ドルという数字は、奴隷 たちが生涯にわたり稼いだ収入の平均現在価値の 12%に相当する。言い換えると、奴隷の 生産した価値のうち、ご主人が接収したのは 12%だ。

農園主の累損が解消する年齢がかなり遅いという点はきわめて重要で、もっと議論が必要となる。この遅さには二つの要因が関係している。まず、南部では資本コストが高かったことだ。農園主は、奴隷の労働から収益を得るまでに、長年にわたり奴隷を育てるための費用を捻出するために資本を拠出しなければならなかった。第二に、南北戦争前夜には黒人も白人も死亡率が高かったので、累損解消年齢までに生き延びる奴隷は半数に満たなかった。奴隷のうち、4割は19歳を待たずに死んだ。だから後年になるまで生き延びた奴隷から奪われた所得の相当部分は、接収ではなく、壮年まで生き延びられなかった子供たちを育てるための費用をカバーするための支払いだったのだ。さらに、この子育て費用を

カバーする金額よりはるかに小さいとはいえ、生産的な奴隷から奪われた収入からはさら に、生産性の低い高齢奴隷や、各年齢で働けなくなった奴隷を維持する費用も取られる。

こうした世代間の所得移転はもちろん、奴隷社会に限った話ではなかった。自由人も同じことだ。というのも、自由人は子供を育てる費用を負担しなくてはならないし、中には生き延びられない子もいる。さらには病人や老人の世話も費用がかかる。だが自由人の場合、世代間移転パターンをめぐる意思決定は、ご主人ではなく親が行う。すると出てくる問題は「奴隷が自由だったときに予想されるものと比べて、ご主人たちは世代間移転のパターンをどのように変えたのか?」というものとなる。この問題は、尋ねるのは簡単だが答えるのははるかにむずかしい。私たちもこの問題への答えは持ち合わせていない。だが、二つの思いこみについては警戒するよう呼びかけておきたい。

この問題についての意志決定者が、親から農園主に置き換わったことで、世代間移転のパターンに大きな影響があったとは必ずしも言えない。また、読者諸賢として、農園主が移転パターンに加えた変化のすべてを、よくないものとして考えるべきだとも言えない。たとえば南北戦争に続く数十年で親となった解放奴隷たちに比べると、農園主たちは奴隷の子供たちに対して多額の(稼ぎの比率として高い)支出を行っている。

累損解消年齢が高いことで、なぜアメリカの農園主たちが奴隷女性の妊娠出産を奨励したのに、西半球の他の地域の奴隷所有者がそれを抑えようとしたのか、という説明も出てくる。問題の核心は、子育てが儲かるのは、誕生時の奴隷の期待余命が累損解消年齢より大きい場合だけ、というところにある。アメリカでは、奴隷の期待余命は五年以上も累損解消年より長かった。だがジャマイカのような植民地では、現存する証拠を見ると、期待余命は累損解消年よりも、おそらく5年以上は短かったらしい。

結果として、18世紀のほとんどを通じて、ジャマイカのような植民地のご主人たちは、家族形成と高い出生率にいい顔をしなかった。奴隷を育てるよりも、成人奴隷をアフリカから買う方がいいと考えたのだ。一般的な方針として、男女比を不均衡に保ち4:3くらいにしておくのが通例だった。さらに安定した家族の基盤を減らすため、ジャマイカなどの農園主たちはお気に入りの男たちに第二、第三の妻を娶らせるというごほうびを与え、一夫多妻を奨励した。だからそれ以外の人口で見れば、男女比は13:8くらいになっていた。こんなに男女比が偏っていると、家族の外での性的活動が奨励され、出生率は下がる。アメリカ南部に比べると、乳幼児への世話はかなり乏しいものだった。母親たちは、育児をあまり奨励されなかった。育児中の母親の仕事量を40-50%減らすなどというアメリカ南部のやり方は、ジャマイカでは行われなかった。妊娠女性に対するネグレクトのさらなる証拠は、死産率がきわめて高いことだ。ジャマイカ最大級の農園では、4年間で345件の出産があったが、そのうち75件が死産だった。また、堕胎が奨励され、広く実施されたという

糾弾もある。

奴隷の収入に対する 12%の接収率は、現代の労働者に対する税率よりはるかに低い。貧困水準の労働者所得から、推定で 30%が売上、不動産、所得税で召し上げられると推計されている。その一方で、そうした労働者は平均で、その税負担をはるかに上回る支払いやサービスを政府から受けている。奴隷隊値は、接収された収入を相殺するようなサービスを受け取っていただろうか? 答はイエスだが、現在ではそれを信頼できる形で定量化できない。奴隷たちは農園主が行う大規模購入の便益を共有していた。たとえばその衣服は、個別に買っていたらずっと高くついただろう。おそらく、もっと重要な便益は金利面での節約だ。ご主人たちが間に入ったおかげで、奴隷たちは実質的にはプライムレートで借入ができた。南北戦争後の時代に、黒人の分益小作人たちを苦しめた高金利と、彼らの実に多くがはまった借金返済のための半奴隷状態を考えると、金利水準は決してつまらない話ではない。相殺サービスについてもっと厳密な計測ができるまでは、奴隷収入に対する純接収率の平均は 10%程度と考えておくのがよさそうだ。

だが接収だけが唯一の収奪形態ではなかった。第 6 章で示すように、他の収奪形態により奴隷に押しつけられた経済負担は、おそらくこの接収で取られた分をかなり上回るものだったはずだ。

第5章 奴隷制の経済的糾弾の起源

道徳性から経済学へ

当初、奴隷制に反対する救世軍たちは、道徳的な根拠にもとづいて攻撃をしかけた。「神はあらゆる国民を一つの血とした」ので、奴隷制は単に「地獄のような慣行」にとどまらず、ただの「汚らわしい罪」でも「万死に値する罪」でもなく、「この世で最大の罪であり、地獄の性質そのものである」とのこと。それどころか、奴隷制こそまさに「地獄のはらわた」なのだった。こんな燃えるような断罪ぶりだったから、人間隷属に対する攻撃を率いた急進派クェーカー教徒たちは、仲間たちに対して物質的考察などキリスト教の原理の後回しにしろと呼びかけるのをまったくためらわなかった。彼らの活動は、最初は激しい反発にあったが、やがて急進的な見方が主流となった。1754年フィラデルフィアにおけるクェーカー教年次会合の手紙にはこうある。「暴力と残酷さにより私たちの配下に置かれたものの苦行により、安楽で豊かな生活を送るというのは、キリスト教と整合するものではないし、普通の正義でもないし、それが天国の不満を引き起こすと信じるべきよい理由があるのです」

奴隷廃止論者の攻撃は、決してこの道徳的な熱狂を失うことはなかった。だが南北戦争までの時期が進むにつれて、奴隷制に反対するイデオロギーキャンペーンは、もっと入念で多面的なものとなった。もはや奴隷制が、ある人間集団に別の人間集団に対する大きな力を与えるので、それ自体が罪深いのだ、と言うだけでは不十分となった。力点はシフトして、そうした権力を手に入れた者は、まちがいなくそれを濫用する、という主張になった。1830年以降、奴隷廃止論文献の多くは、奴隷所有者が行使する恣意的な権威のために生じる濫用の記録に向けられた。反奴隷制雑誌は、競売における尊厳を破壊する販売の事例、引き裂かれた家族、食事も与えられないネグレクトされた子供、誘惑や合巻、拷問と殺人の話を繰り返し語った。

1820 年代末から、別の主題が勢力を増してきた。一部の批判者たちは、奴隷が南部の経済に有益だったどころか、むしろ有害だったのだという議論を採用し始めたのだ――黒人にとって有害だっただけでなく、白人にとっても有害だというのだ。そして非奴隷所有者のみならず、奴隷所有者にも有害だったという。だから奴隷制に対する攻撃は、もはや平等性の要求にとどまらなくなった。奴隷制は不道徳という「だけ」ではない。奴隷制は非

第5章 奴隷制の経済的糾弾の起源

効率で無駄の多い経済システムで、労働を貶め、投資の誤分配をもたらし、技術進歩を抑え、工業化を阻害し、都市化を邪魔した。1840年代になると、こうしたバラバラの経済的批判は、全面的な糾弾になっていった。

カシアス・マーセルス・クレイは、奴隷の経済的糾弾を早い時期に構築した人物の一人だ。クレイは、ヘンリー・クレイ上院議員のいとこで、有力な反奴隷政治家であり、ケンタッキー州レキシントンの新聞『トゥルー・アメリカン』紙編集者だった。彼の見方をホレース・グリーリーが『ニューヨーク・トリビューン』に印刷したことで、局地的な意義以上のものが生じた。クレイによる奴隷制の経済的批判は、1843 年に『トリビューン』が掲載し、その後グリーリーにより「奴隷制:その邪悪と対処法」と題した短いパンフレットとして再刊された、手紙の中で簡潔に述べられていた。

クレイの経済的糾弾には主に二つの要素があった。彼の主張だと、奴隷制は経済組織の 形態として非効率だった。なぜ非効率かというと、奴隷制は「土壌を痩せさせる」。それ は奴隷は白人と比べると「あまり技能がなくエネルギーもないし、何よりも自分の利益と いう刺激がない」からだ。300万人の奴隷たちは「北部の同数の白人に比べて実質的に半 分の仕事しかしない」。そして奴隷は「自由人より生産量が少なく」、「消費する量は多い」。 奴隷制は「怠惰の源であり、あらゆる産業を破壊する」ものだ。そして奴隷は「貧困者」 たちを貶めて「労働を毛嫌い」させ、同時に「大量の奴隷所有者」たちを「怠惰者」にし てしまうのだという。クレイのもう一つの糾弾は、奴隷制が経済成長に与える影響だった。 クレイは、奴隷制は教育を制限し、資本を奴隷購入にまわして「死荷重」にしてしまい、 「機械的」技能の発達を阻害し、製造業の発達の足を引っ張るので、経済成長と発展をダ メにしてしまう、と主張した。

クレイがこうした特徴づけを行ったときは、いまここに書いたのと同じくらいの手短さで行っている。彼が提示したのは、一連の仮説でしかない。その仮説を支える証拠は決して出さなかった。クレイは経済学者でもないし学者ですらない。政治家、論争家、イデオローグなのだった。彼の狙いは、奴隷経済の働きを最もうまく特徴づける行動モデルを発見することではなく、世論を反奴隷制の旗印のもとに結集させることだった。

この証拠の欠如を埋めようとした人々のうち、最も影響力があったのは、ヒントン・ローワン・ヘルパーとフレデリック・ロー・オルムステッドだ。どちらも当時の思想に遠大な影響を与えた。どちらも、クレイが主張した仮説からあまり逸脱しなかったが、いくつか変種を編み出して、それが有効だという証明を提示したように見えた。オルムステッドの証拠は、個別農園の直接観察から導かれたものだった。だからミクロ的な性格のものだ。ヘルパーの証拠は、1850年連邦国勢調査や各種の州文書や先進学術誌で発表されたデータから導いたもので、マクロ的な性格のものだった。どちらの種類の証拠も、奴隷制の非効

第5章 奴隷制の経済的糾弾の起源

率性と経済成長への悪影響について同じ結論に達したということで、この別々の結果の信頼性は高まったように思われた。

ヘルパーとオルムステッドの影響は、南北戦争前夜の終結により終わりはしなかった。 彼らの著作は今日に到るまで歴史学者の考え方に深い影響を与えているし、奴隷経済尾伝 統的解釈形成に大きな役割を果たした。この理由から、ヘルパーとオルムステッドが提示 した議論と証拠はある程度詳しく検討する必要がある。

ヒントン・ローワン・ヘルパー:マクロ的な証拠

ヘルパーは、ノースカロライナ州西のヤドキンバレーにある、白人貧農の息子だった。 彼は店員、失敗した黄金採掘者、つまらない本を一冊書いてから、問題の本を書いて名声 を得た。その『来るべき南部の危機』は1857年に出た。グリーリーが『ニューヨーク/ト リビューン』に8コラムにおよぶ書評を書いたことで、初年度の売上は13000部にも登っ た。そして1859年に共和党がヘルパーの本を、大統領選での巨大なイデオロギー上の武器 に仕立てた。要約版が出て、共和党はそれを一万部もばらまいた。『来るべき南部の危機』 は激しい政治闘争の中心となり、議会でも大論争となって下院議長の選出が二ヶ月も遅れ た。

奴隷制が南部の経済成長を遅らせたと証明するため、ヘルパーは 1790 年と 1850 年について、三対の州を比べた。彼の説では、当初ヴァージニア州は全米有数の商業州で、ニューヨークを上回っただけでなく「ニューイングランドの州すべてを合計したよりも」大きかった。だが 1850 年になると、ニューヨークは人口がヴァージニア州の二倍、輸出は 30 倍、輸入は 45 倍、製造業産出は 8 倍だった。今度は彼は、マサチューセッツ州とノースカロライナ州を比べた。この二つは彼によれば「商業および製造業事業にとって、同じくらいのキャパと長所を備えていた」。だが 1850 年になるとボストンは全米第二位の商業都市だった。ビューフォートはボストンに比肩する港湾を持っていたが「だれもビューフォートなど効いたこともないだろう。1850 年にマサチューセッツ州は、ノースカロライナ州製造業産出の 9 倍、個人資産は二倍だ。マサチューセッツの農場ですら、総価値でノースカロライナ州のものを 50%も上回っている。ペンシルバニア州とサウスカロライナ州の比較によれば、ペンシルバニアは輸入でサウスカロライナ州の 13 倍、製造業は 22 倍、農場の価値は 5 倍、不動産と個人資産は 2.5 倍、公共図書館は 15 倍、新聞部数は 12 倍だ。

ヘルパーはさらにこうした対にした比較を繰り出し続けた。自由州と奴隷州の比較だ。 この対比はこれまでほど劇的なものではなかったが、それでも総資産、製造業生産、鉄道 や運河への投資、新規発明の特許件数、さらには農業生産の価値ですら、自由州のほうが

奴隷州を大幅に引き離していることが示された。

ヘルパーは、南部の冴えない業績を引き起こしたのは経済的な非効率性だと述べた――そしてその非効率性はすべて奴隷制が存在するせいなのだ、と言う。彼によれば「南部の進歩と繁栄を阻害した原因はすべて、一つの原因にたどれる……奴隷制だ!」 ヘルパーが見つけた奴隷制の非効率性に関する証拠は、農園主たちが得ている低い資本収益率だった。彼はサウスカロライナ州の住民の談話として、多くの綿花農園は投資収益率が 1%に満たないことを挙げた。だがこれが単なる伝聞証拠だとしても、国勢調査統計を見れば、南部の非効率に関する否定しがたい証言がある。1850年の北部の乾草生産(1トンあたり 11.20ドル)ですら、南部の綿花、タバコ、米、藁、大麻、砂糖の総生産を上回っているのだ。

さらなる証拠としては、南部の地価と北部の地価の比較がある。ヘルパーは、1850年の 北部の土地1エーカーを平均で28.07ドルとしている。一方、南部の1エーカーの平均価値 は5.3ドルでしかない。この22.73ドルの差を説明するものは何だろうか? 南部の土地は 「気候の温暖性、土壌の肥沃さ、貴金属の埋蔵、港湾の多さや広さ、水力の圧倒的な優秀 さ」の点で北部の土地に匹敵するかそれを上回るものなので、彼は「奴隷制がなければ、 南部と南西部の州すべてにおける平均的な地価は、北部州の同じものの平均的な価値と、 少なくとも等しくなければならないはずだ」と主張した。ヘルパーの予言では「奴隷が水 曜日の朝に解放されれば、翌木曜日には」南部の土地は「少なくとも平均でエーカーあた り28.07ドルを上回ることになる」。この論点をもとにヘルパーは、奴隷所有者に補償をせずに奴隷を解放した場合ですら、奴隷所有者の経済的な立場は改善するのだと論じた。と いうのも、地価上昇は奴隷の資本価値喪失の二倍も大きいからだ。

ヘルパーの本は奴隷廃止論者たちに「最も簡潔で反論不可能な事実や主張の集まり」としてほめそやされた。この判断は歴史家たちに広く受け入れられている。だがヘルパーの事実も理屈も、反論しがたいものなどではない。 1850年の北部州における乾草作物の価値が、主要な南部州の作物を上回っていたというのは正しくない。彼の北部乾草作物の価値推計は 48%も過大だし、綿花生産の価値推計は 34%も低い。1843年にジョージ・タッカーが、そして 1848年と 1852年にエズラ・シーマンが仕上げた国民所得会計技法をよく知らないヘルパーは、家畜在庫の価値に飼料穀物の価値を加算した。結果として彼は年間の肉生産量を過大に見積もり、飼料穀物を二重計上した。また彼は、年間農業生産と、農業資本の価値を混同して、この二つを足すというまちがいをしている。だから自由州の農業生産が奴隷州をはるかに上回っているはずだという主張は、一連のまちがいに基づいているし、そのまちがいはすべて北部州の農業生産の位置を誇張するものとなっている。現代の推計によると、1850年の奴隷州の農業生産は、自由州の農業生産を数パーセント上回っている。

北部と南部の経済の相対的な業績を示す他の指標も、同じく疑問だらけだ。今日の経済医学者が使う、全体的な経済パフォーマンスの主要司法は「実質国民所得」と「一人あたり実質国民所得」だ。国民所得は、ある一年でその経済が生産したすべての最終財やサービスのドル価値の総額となる。この指数は、国についてだけでなく、国のある地域や、ある産業についても計算できるので「南部州の所得」「ニューヨーク州の所得」「交易からの所得」「農業からの所得」といったものも計算できる。経済学者たちが経済、あるいは経済の産業部門同士の生産能力を二つの年度について比較するときには、所得の指標を物価水準の変化にあわせて補正する。物価水準を一定にしたときの国民所得指数は「実質国民所得」と呼ばれる。この指数は、時間をまたがる財やサービス産出の変化を計測するものとなる。

「一人あたり実質国民所得」は、その年の実質国民所得をその年の人口で割ったものだ。経済学者たちは、一般に、国の経済成長を計測するときには、総所得よりも一人あたり所得を見るほうを好む。一人あたり所得のほうが、経済が経済的厚生を満足させる能力の指標として優れているからだ。たとえば、アメリカの実質国民所得は1930年代の大恐慌の間も上昇したが、一人あたり所得は下がった。これは人口が増えたせいだ。だからその国の各人が経済的な状況が悪化した場合ですら、総所得は増える可能性がある。一人あたり所得はまた、大きな国と小さな国の経済パフォーマンスも比べられるので好まれる。たとえばインドは、1968年にはデンマークの三倍の総所得を持っている。だが経済学者は当然ながら、デンマークの経済パフォーマンスのほうがインドよりよいと考える。というのもデンマークは一人あたり2500ドルの所得を生み出すのに、インドの一人あたり所得はたった80ドルだからだ。デンマークは豊かな小国で、インドは貧しい大国なのだ。

ヘルパーが、北部州と南部州の経済パフォーマンス比較にあたり、地域の一人あたり所得という指標を使ったとは考えにくい。とはいえ、すでに述べた通り、エズラ・シーマンはヘルパーの本が登場する十年近く前の1948年に、かなりよい州ごとの所得推計を出していたのだが。ヘルパーが、比較のために選んだ指標は、州や地域の所得指標としてよい代理指標または代替指標と言えるものだろうか?

ヘルパーが使った各種の指標のうち、最も役にたちそうなものは農業、製造業、都市化、 総資産に関するものだ。残念ながら、それぞれの場合にヘルパーはデータの扱いをまちが えている。二重計上したり(農業の場合)、比率が重要なときに絶対数を使ったり(都市化の 議論の場合)、一人あたりの数字を使うべきところで州や地域の総額をつかったりしている (地域の資産比較の場合など)。

だがヘルパーが集めたデータをすべて正しく処理したとしても、両地域の全体的な経済パフォーマンスの相対水準や相対的な成長率について、彼が行ったような主張はまったく

成り立たなかったはずだ。都市化人口比率や製造業労働比率はどちらも一人あたり所得とかなり相関しているが、その相関はかなりゆるいものなので、ずいぶん幅のある議論しかできない。言い換えると、1850年のこうした数字は、北部が南部よりも所得が多い可能性も、その逆の可能性も棄却できるものではない。いずれにしても、両地域の経済成長率は、ある一年だけの都市化、製造業、一人あたり所得などの絶対水準から導けるものではない。1850年の一人あたり所得が南部より北部で高かったとしても、北部の一人あたり所得のほうが、南部よりも、たとえば1840-1850年で急速に成長していたとか、1790-1850年で急成長していたのだ、などとはいえない(これらの年はヘルパーが特出ししているものだ)。

事実問題として、ヘルパーは 1790-1850 年の両地域における成長率比較について、ほぼ何の証拠も出していないのだ。1790 年について彼が出した唯一の統計は、人口だけだ。 1850 年以前の時期について彼が挙げた唯一の経済統計データは、1791 年のニューヨーク州のヴァージニア州の輸出総額と、1760 年チャールストンでの輸入推計額だけだ。彼の挙げた他の経済統計はすべて、1850 年とそれ以降についてのものだ。ヘルパーはまた、輸出統計の意味も誤解している。それぞれの関税地区は、その地区から外国の港湾への直接の輸出品だけを報告しているというのに気がつかなかった。ヘルパーは、南部の輸出品が北部の港湾を通じて輸出された場合を無視してしまっただけでなく、南部の主要な直接輸出港湾であるニューオーリンズ港の貨物をまったく含めていない。存在するデータを見ると、南部州はアメリカの輸出品の相当部分を占めていたのは明らかだ。綿花だけでも、1850 年のアメリカ輸出すべての 50%を占めている。実際、アメリカの輸出で南部州製品が圧倒的な割合を占めるので、ジェームズ・H・ハモンド上院議員は「綿花こそ王様」という決然たる豪語を放っているほどだ。

ヘルパーは、こう書いている。「どうやらこれまで述べた統計的な事実や議論から見ると、南部は、かつては人生の気高い活動や条件のほとんどすべてにおいて北部を上回っていたのに、競合の後塵を拝するようになり、いまや自由で独立した州の対等な連合としてよりも、母国に依存する存在としての立場が強まっている」。この結論は、彼の「統計的事実」からではなく、1790年にはメイソン=ディクソン線より南の州(奴隷/南部州)が北部に比べて高い所得を享受していたという、裏付けのない想定から出てきたものだ。さらに、1850年の地域所得会計を近似するものを導き出そうという努力の中で、彼が犯した各種の誤りもそれに貢献している。

ヘルパーの効率性に関する議論は、所得水準や成長率についての議論と同じくらいまちがっている。彼は南部の所得が北部と同じくらいの高さになるべきだと信じていた。というのも南部は「土壌、天候、河川、港湾、鉱物、森林、その他ほとんどあらゆる天然資源の面で」優位性を持っているからだ。ヘルパーは南部の地価が北部よりもはるかに低いこ

とに決定的な重要性を与えた。彼によれば「土壌、気候、鉱物、製造業用の水力、領土の面で、ノースカロライナ州はニューヨークより優位で、なぜヤドキン峡谷の土地が、ジェネシー川沿いの土地に匹敵するかそれ以上の価値を持たないかという理由は、奴隷制以外には見あたらないのである」。

まず、南部のほうが北部よりも天然資源が豊富という想定自体がまちがっている。南部は鉱物資源の面では、絶望的なほど北部に劣っていた。ペンシルバニア州やミネソタ、ウィスコンシンの鉄鉱石に比肩するようなものはまったくない。イリノイの鉛鉱山に匹敵するものもない。ペンシルベニア州の炭坑に匹敵するものもない。製造業用の「水力の圧倒的な卓越」という優位性を持っていたのは、南部ではなく北東部だった。南部の河川は、輸送水路としてはきわめて優秀だった。だが航行可能な河川は、水力源としては劣っている。南北戦争以前の主流技術では、水力はニューイングランド地方の小さい河川のほうが活用しやすい。こちらのほうが、既存市場に近い地域で自然の滝がたくさんあるからだ。

ヘルパーが最もヘマをやらかしたのは、地価の議論だ。まず、彼が国勢調査から引き出した数字は、土地の価値ではなく、土地と上物、つまり建物や柵やその他の開発改良行為まで含めた価値なのだった。ヘルパーが「地価」の差と呼ぶもののほとんどは、南部より北部のほうが、建物が高価で、南部よりも北東部のほうが開発済みの土地が多いことからくるものだ。また、南部と北東部の土地投資率の差は、不合理でもなければ非効率でもない。北部や中央部の州の農場もまた、土地改良や建物への投資が北東部に比べると低い。その理由は、北部中央州や南部のどちらでも、労働や資本に比べて土地は安かったからだ。そうした状況では、効率性から考えて土地集約的な農業手法——たとえば放牧やマスト給餌法などのほうが、穀物給餌といった資本集約的、労働集約的な手法よりも優位となる。

ヘルパーはまた、最終市場に対して農場がどんな位置にあるかという影響を考慮し損ねている。ヤドキン峡谷の土地の自然な肥沃度が、ジェネシー峡谷のものと同じだったとしても、市場へのアクセスが容易だからニューヨーク州西部の土地のほうが、価値が高くなる。穀物の市場として全米最大のニューヨーク市――ヨーロッパへの農業のゲートウェイでもある――に近いからだ。そしてエリー運河やハドソン川でニューヨーク市への接続もよい。これは南北戦争以前には、大型貨物の最も有利な輸送手段だ。ヤドキン峡谷の畑は、主要海洋港湾から遠かっただけでなく、あまった穀物はかなり高価な鉄道で輸送しなければならなかった。ヤドキン川は、いかだや小船舶でないと航行できなかったからだ。

また南部の土壌や気候が一般に、農業目的で北部の土地や気候より優れていたというのも事実ではない。もちろん、一部の南部の土壌は、一部の北部の土壌よりも優れていただろう。だが平均で見ると、南部の土壌は北部に劣るものだった。綿花ベルト地帯や、亜熱帯の沿岸地域の土壌は、北部中央州よりも砂が多く、したがって肥沃さを左右するミネラ

ルを保持する能力がかなり限られている。この状況をさらに悪化させるのが、降水の多さにより土壌が流出することと、冬に土壌が凍結することで水分やミネラルを維持することが起こらないという点だ。天候要因は、土壌の肥沃さを減らす形で作用するのみならず、南北戦争以前の技術では、北部より南部のほうが虫害にあいやすいということにもなる。冬の凍結が持つ利点の一つは、作物や家畜や人間に影響する各種の害虫や病気媒介虫を殺したということだからだ。南部の高湿度はまた、サイロができる以前には、この地域で干し草をろくに作れないということでもあったので、家畜の飼育が北部に比べてあまり有利にならなくなっていた。南部の気候に適さない他の作物としては、大麦やある種の小麦などがある。その一方で、亜熱帯気候は暑さもそこそこでしかなく、このため砂糖は周縁的な産物にとどまった。

南部の地価は奴隷制が廃止された翌日には四倍になるという予言は、もちろんまちがっていたことが証明された。それどころか、起きたのはその正反対だった。奴隷制の崩壊は 農地の地価下落をもたらしたのだった。

フレデリック・ロー・オルムステッド:ミクロ経済的な証拠

クレイやヘルパーは、武闘派の南部奴隷廃止論者だったが、フレデリック・ロー・オルムステッドはそれとはちがい、南部人でもないし政治家でもなかった。彼はニューヨークの農民で、精力的な旅行者であり、鋭い観察者として評判を得た作家でもあった。オルムステッドは奴隷制に強く反対はしていたが「連邦の命令による即時の奴隷解放には反対で、これは憲法上の理由だけでなく、それが期待通りのものを実現するか疑問視していたからだった」。1852年に、『ニューヨーク・タイムズ』編集者はオルムステッドを雇い、直接の観察に基づく奴隷南部について一連の論説を用意するよう依頼した。オルムステッドは、この使命を果たすべく三回にわたり南部に旅をした。最初は1852年12月11日からの三ヶ月だった。二回目は1853年11月10日から、1854年5月に及んだ。三回目は1854年5月から8月だ。全体としてオルムステッドは、南部の端から端まで旅をするのに13ヶ月をかけている。そして『タイムズ』紙のために75本の記事を書いた。この記事を元に、4冊の本が書かれた。その最後の最も有名なもの――『綿花の王国』――は南北戦争勃発直後に書かれた。

オルムステッドの論説は南部文化のあらゆる面を扱っている。態度、衣服、住宅、食事、教育、宗教、結婚、家族、道徳、文学、娯楽、健康といった話を、黒人と白人の両方、上流階級だけでなく低層階級についても論じている。観察者としての彼の能力に対する敬意は、南部のあらゆる歴史家が示している。奴隷制についての考えがオルムステッドの影響

を受けた人々としては、ジョン・ケアンズ、カール・マルクス、W・E・B・デュボイス、U・B・フィリップス、W・E・ドッド、ルイス・C・グレイ、チャールズ、シドノア、E・フランクリン・フレーザー、エイヴァリー・O・クレイヴン、リチャード・ホフスタッター、ジョン・ホープ・フランクリン、ケネス・M・スタンプなどがいる。

これほど多様な観点を持つ学者たちが、彼の著書を大量に参照したのは、オルムステッドの赤裸々な書きぶりや細部へのこだわりのためだけではない。オルムステッドは、この特異な制度下での経済生活の、よい面と悪い面の両方を描いた。飢え死に寸前で暮らす極貧白人農民だけでなく、きわめて裕福な小農家も描いた。ひどくつれない扱いを受けている奴隷だけでなく、衣食住が北部の労働者階級のトップに匹敵するほどのッ奴隷たちについても描いた。農園の管理を「雇われ監督たちのほぼ無制限の統治」に譲り渡した怠惰な不在農園主についてだけでなく、農業の傑出した技能や知識を持ち、所領が見事な「お手本のような農園」となっている農園主についても描いた。南部州の北にある、荒廃地や放棄された農園についてだけでなく、新設で反映する南西部の農園活動についても描いた。きわめて低水準の活動しかしなかったり、仕事を完全に放棄したりする無気力な奴隷だけでなく、頑張ってしっかりと作業をこなし、どんな基準で見ても立派な成果を挙げている奴隷たちについても描いた。

オルムステッドは多くの問題についていい面も悪い面も見ることができたが、それでも 奴隷制の経済パフォーマンスについては、全体として極度に否定的な判断を下すことになった。彼は奴隷制という特異な制度が、奴隷だけでなく自由人たちもほぼ全員、極度の貧困に押しとどめているのだと結論した。この極貧者は土地を持たない自由農民だけでなく、かなりの土地を持ち、奴隷を 5 人も所有する農民すら含まれている。オルムステッドに言わせると、「綿花を販売する者の大半」は「北部の日雇い労働者の大半より貧しい」。35 人も奴隷を持つ農園主ですら、ギリギリで糊口をしのいでいるだけで、平均で「ニューヨーク大都市圏警察の警官を少し上回る程度の」稼ぎしか平均で得ていないという。「そこそこ快適な暮らしを送る」ためには、「農園主は少なくとも奴隷 50 人を所有しなければならない。だから奴隷制は、南部の経済ピラミッドの頂点にいる人々にしか有益ではない――奴隷所有者のトップ 2%にしか恩恵がないのだ。

オルムステッドはこの貧相な業績を、直接的に奴隷制のせいだとした。この仕組みの最も深刻な欠点は、奴隷労働が通常は生産性のきわめて低い水準で行われていることだった。ヴァージニア州における状況の調査に基づいて、彼はどんな作業についても、自由な北部労働者 1 人の仕事をやるには、少なくとも二倍の奴隷が必要だと結論した。これは畑仕事でも家事でも同じだ。小麦生産の場合、彼は「通常の農業活動に従事したとき、奴隷四人ですら、平均ではニュージャージー州の一般的な自由農夫一人に匹敵する仕事はできな

い」。家事については、「北部の最も卑しくバカなアイルランド系家事雑役夫に比べても」 奴隷は三分の一から半分の仕事しかこなせない、と彼は推計している。

オルムステッドの見方では、奴隷の低い生産性は、南部の経済生活のあらゆる側面に波及している。それは労働の基準そのものを引き下げている。この低い基準のおかげで、白人労働者たちは「怠惰といい加減さ、技能の結果に関する無関心、無軌道、目的の一貫誠意欠如、尊大さ、過剰に押しやられている」。だから南部の白人労働は、奴隷労働よりさらに効率性が低く、平均では奴隷労働の三分の二程度しか達成しない。あらゆる南部労働が低品質である結果として、リソースの無駄遣いが生じる。土地の自然な肥沃さは急速に台無しにされ、道具はしばしば壊れる。家畜はネグレクトされる。労働技能は衰えるばかり。経営管理技能は軽視される。

低品質労働、リソースの劣悪な使用、いい加減な管理のすべてが組み合わさって、南部の農業は北部の農業よりはるかに非効率なのだ、とオルムステッドは述べた。ニューヨーク州の畑の労働者は、エーカーあたり小麦 20-40 ブッシェルの収量を得ているのに対し、ヴァージニア州では八倍の奴隷労働を使っているのに、ニューヨークと肥沃さではひけをとらない畑から、たった 6 ブッシェルしか得ていない、と彼は述べる。オルムステッドは、南部の農業者たちが全体として、綿花の生産ですらリソースをうまく使っているのか疑問視した。綿花の主要な生産地が北部ではなく南部なのは、気候面での優位性があるおかげでしかないという。奴隷労働は、綿花生産で優位性となるどころか、ここでもむしろ足を引っ張っていたのだという。テキサス州の一部の綿花畑で雇われていた自由なドイツ人労働者たちは、一人あたり奴隷よりも多くの綿花を摘んだだけでなく、オルムステッドによると「ドイツの自由労働者たちが摘んだ綿花は、同じ町の奴隷が摘んだものより、1 ポンドあたり 1-2 セント高い価値を持っていた。そちらのほうがきれいだから、というのがその理由だ」

オルムステッドは、農園が綿花生産ですら相対的に非効率なのだと結論づけた。彼によると

我が国が現在 1 ベールしか生産できていないのを 10 ベールに増やすのに、物理的な障害は何もない。(中略) 南部の人々に、そこそこ密集して定住し、そこそこ知識もあり、そこそこ野心もあり、そこそこ生産的で、たとえばオハイオ州の人々の足下くらいには及ぶ人々を与えたら、なんという事業が可能になることか! メキシコ湾から五大湖まで複線鉄道 20 路線、海洋蒸気船 20 航路あっても、そのニーズには応えきれないほどになるはずだ。これを疑う人は、オハイオ州の現在の事業を調べてほしい。そしてオハイオ州の天然資源やその立地で、

40 年前に現在の富と事業や、現在の需用と供給についてどれだけの予測ができたかを考え、それが西部の綿花州のどれ一つでも保有する商業的なリソースや優位性と比べてどれほどのものだったかを考えてほしい。

では、どんな力が奴隷制の継続を可能にしていたのだろうか?もし奴隷労働が奴隷所有者にとって儲からないものなら、競争の力が作用して、高価で非効率な奴隷労働を、もっと効率的な自由労働で置きかえるはずではないのか?なぜ奴隷労働は市場の圧力により南部から追放されないのだろうか?オルムステッドの答は、経済的でもあり、社会的でもあった。彼によれば需要と供給の法則は確かに奴隷制に反する形で作用はしていたし、「その邪悪に対する絶え間ない対抗力」となっていた。この仕組みが消え去るのを救っていたのは、内的な奴隷貿易であり「これが奴隷を、労働以外のために価値ある財産にしていた」のだ。奴隷労働は、自分を支えるのに必要な分を超える余剰を生産できなかったにもかかわらず、奴隷在庫の価値が高まることで、奴隷育成は儲かる事業となったのだった。さらに、社会学的な要因が「需要と供給の法則に制限をつけた」。南部の白人労働者たちは、奴隷制によりやる気を失った。南部にやってくる白人たちは、「すぐに労働を嫌うようになり、雇われても最低限の仕事しかしなくなり、低劣、臆病、信念喪失状態となってしまう一黒んぼよりひどくなってしまうのだ」。だから雇用者たちが高質な自由労働を獲得するためには、その価値以上に支払う必要が生じてしまうという。

見かけとは逆に、オルムステッドの経済的批判の主要要素は、奴隷農業の実際の働きについて、直接的な観察から生じたものではない。というのも、オルムステッド自身が述べているように、奴隷労働が北部の自由労働と比べて、農業生産においてはるかに非効率で高価だという結論に達したのは、ヴァージニア州の最初の訪問時だったからだ。その訪問でヴァージニア州についたのは12月16日、1853年の作物収穫が終わった後だ。そしてヴァージニア州を離れたのは1月、新作物のための工作が始まるずっと前だ。農園農業における奴隷労働の実際の働きを、多少なりとも十分に観察できたはずがない。実際、最初の訪問中の奴隷の働きをめぐる直接報告はすべて、召使いたちに関するものだ。そんおほとんどはかなり若いかきわめて高齢だ。それ以外の話も非農業労働に関するものだ。圧倒的に多くの部分は、他の人々が奴隷労働の質について語ったことを回想するのに充てられているのだ。

そうした報告に含まれている意見はきわめて幅広い。ほとんどの奴隷所有者たちは、きちんと監督した奴隷労働は明らかに自由労働者よりも優れていると信じていた。一部の人は、自由労働がほぼあらゆる状況において、奴隷労働に勝ると報告していた。人によっては、自分が奴隷労働を使い続けるのは公徳心と慈善的な動機からでしかないと述べている。

こんなに多様な意見があったから、オルムステッドは特に後ろめたい思いをせずに、この幅の中でどんな意見でも採用できた。結果として、彼が採用した見方は南部に移住した北部人のものだった。その人物は、奴隷労働が北部労働よりはるかに劣ると確信していたのだ。そうした状況で、なぜ自由労働が奴隷労働を駆逐しなかったのかという説明として、オルムステッドは南部の白人労働者たちが一般に奴隷労働に劣るという理屈を編み出し他のだった。

ヴァージニア州でオルムステッドが直面した基本的な問題は、南部での13ヶ月滞在の残りの部分でも、解決されなかった。南部での彼の旅のうち、50%は収穫後で集中的な作付けが始まる以前の時期に行われている。それ以外の時期のほとんどは、都市部や移動に費やされている。農園を訪れたときですら、彼は畑よりも、農園主や監督たちの家でずっと多くの時間を過ごしている。結果として、彼が報告できたのは自分自身の直接的な観察ではなく、他人の意見だった。そうした意見は、相変わらずかなりの多様性を持っていた。だが奴隷所有者の大半は、自分たちの労働システムのほうが効率が高いと主張していた。オルムステッドが行い、報告した、畑での労働に関するわずかな直接観察は、きわめて散漫な経験で、どんな農園でもせいぜい数日にとどまっている。その体験も、他人から集めた意見と同様、はっきりしないものだった。

奴隷制の全体的な経済的有効性をめぐり、オルムステッドが判断を下すときに直面した 中心的な問題は、効率的な農園と非効率的な農園との頻度分布だった。というのも、オル ムステッドは大規模でよく管理された農園にお目にかかり、これは壮年作男一人あたり 10 ベール以上の綿花を生産していた。その一方で、一人あたり半ベール未満しか収穫できな い、小規模で運営のまずい農園にも出会ったり読んだりしていた。こうした両極端や、そ の中間の様々な水準の生産性について、どのくらいの相対的な重みをつけるべきだろう か? オルムステッドはこの問題を解決しようとして、1850年国勢調査で発表された総量の 統計に目を向けた。この情報源から彼は、平均的な南部全体の綿花収量が、奴隷一人あた りたった 1.3 ベールだと導出した。50 人以上の奴隷を持つ農園が、奴隷一人あたり少なく とも 2.5 ベールは生産していると想定して、オルムステッドはもっと小さい農園の平均収 量が、「作男一人あたりたった八分の七ベールでしかない。こうした小規模な形で綿花を 植える者たちは通常、穀物とその他少しばかりを育てるだけで、地域全体として見れば、 自分や奴隷たちを一年にわたり喰わせるだけの供給としては不十分であり、平均では間違 いなく十分などといえるほどではない」と結論した。つまりこれこそが、オルムステッド が奴隷労働の全般的な非効率性の主張を掲げるために頼った究極の証拠なのだった。だか らほとんどの奴隷所有者は「惨めなほど貧しいはずだ――北部の日雇い労働者の大半より 貧しい」という結論が出てくる。

ヘルパーの場合と同じく、奴隷経済のパフォーマンスを評価するために国勢調査を活用 しようとするオルムステッドの試みは、ひどく歪んだまちがいだらけのものだった。奴隷 所有者の所得計算は、農園が市場に販売する余剰として、綿花以外に何も生み出さないと いうまちがった想定に基づいていた。砂糖、米、タバコといった明白な換金作物を無視し ただけでなく、主に生産者が自分で消費していた各種の作物や肉も無視している。これら は自家消費とはいえ、農業の奴隷部門では余剰生産となっていた。

オルムステッドの労働総効率の計測は、奴隷所有者の収入計算よりさらにまちがいだらけだった。産出の価値を過小評価しただけでなく、労働投入も大幅に過大推計している。 オルムステッドは効率性の分母として、奴隷人口全員を含めている。その人口の半分は幼すぎたり高齢すぎたりして働けないか、非農業活動に従事していることを無視しているのだ。さらにオルムステッドは、奴隷労働力に占める女性や児童労働の比率が自由労働力よりずっと高いことを考慮していない。このまちがいもまた、奴隷労働の効率性を引き下げるバイアスをもたらしている。

同じくらい深刻なまちがいは、オルムステッドのミクロデータ分析でも見られる。たとえば彼は奴隷雇用料の情報をひどく誤用している。オルムステッドは、雇用料は奴隷の労働が農園主にとって持つ価値を計測しているのだと認識している点では正しい。だが彼は、奴隷に支払われている高いレンタル料から見て、ある活動の労働費用が実は奴隷所有者に北部農民より高く評価されているということだというのを示そうとして、まったく矛盾する結論を引き出してしまっている。この結論を出すために、彼は奴隷が北部の労働者の半分の生産性しかないのに、奴隷の雇用料は北部農家の作男より25%高いという主張を使っている。だが明らかに、奴隷のレンタル料が北部農業労働者の賃金より高く、レンタル価格が農園主にとって奴隷労働の持つ価値を反映しているのであれば、奴隷たちは自由な北部労働者の半分しか生産性がないなどということはあり得ない。

もしオルムステッドの主張した通り、農園の産物と収入のほとんどすべてが奴隷に使われ、奴隷が北部労働者に比べて半分しか生産しないのに、25%近くも多くの収入を得ているのであれば、奴隷たちは北部の労働者より高所得ということになってしまう。そればかりか、農園主が奴隷を収奪していたのではなく、奴隷が農園主を収奪していたことになってしまう。

クレイ、ヘルパー、オルムステッドの根本的な想定

もちろん、これまであげたヘルパーやオルムステッドの研究に対する批判は、どれも決して目新しいものではない。まったく同じ論点が同時代人たちにも指摘されている。1850

年代に北部で最も広く流通した民主党新聞の一つ『バナー・オブ・リバティ(自由の旗印)』編集者ギルバート・J・ビーベと、ニューヨーク州シカネクティディのユニオン大学所属のエリアス・ペイスナーなどは、乾草作物価値の計算や二重計上、地価問題の扱いにおけるヘルパーのまちがいを発表している。こうした人々の攻撃は、単なる奴隷制擁護論として無視できるにしても、オルムステッドに対するダニエル・R・グッドローの批判はそうはいかなかった。というのも、グッドローは、彼のこれまでの文書を凝縮して、後に『綿花の王国』となるものを構築するために、オルムステッド自身が選んだ奴隷廃止論者でジャーナリストだったからだ。自分に与えられた仕事を実施する中で、グッドローはオルムステッドに、彼が綿花以外の作物から農園主たちの得ている収入を過小評価し、奴隷一人あたり1.3 ベールの収量という国勢調査による推計が、大規模農園での収量が一人あたり10 ベールだという記述と整合しておらず、1853年と1854年以降の爆発的な鉄道建設に続く、ヴァージニア州とノースカロライナ州での大規模な開発や改良を考慮していないと指摘した。

こうした批判が一種されたのは、当時の情緒的な雰囲気だけのせいでもないし、反論が 不十分だったせいでもない。奴隷制に対する経済的糾弾をでっちあげる人々は、自分たち の糾弾の「些末な点」に注目した攻撃ではなかなか説得されなかったし、国勢調査などの データの利用や解釈における「ちょっとした」まちがいなどでも納得はしなかった。批判 者のだれも、糾弾の根底にある根本的な主張を否定するような証拠を出さなかった。それ は、黒人奴隷の労働が白人の自由労働より本質的に劣るものなのだ、という主張だ。また、 この明大が対立するイデオロギーの論争における中心となる可能性もほとんどなかった。 というのもごくわずかな例外を除いて、半奴隷派も奴隷制支持派も、黒人が人種的な理由 から、労働者としても人間としても白人より全体に劣るという確信を共有していたからだ。 不思議なことに、奴隷制の経済的糾弾で展開された各種の論争を見て、そうした糾弾が 人種差別的な基盤の上に成り立っている点を真剣に考慮した歴史学者はほとんどいない。 だが、こうした糾弾の構築者の言葉を見れば、人種差別が鮮明に見られるのだ。それが最 も露骨に出ているのは、クレイとヘルパーの著作だ。クレイによると「私はニグロの性質 を研究した。彼らは自立心を欠く。まったく役立たずだ。神は彼らを太陽とバナナのため にお造りになったのだ」。ヘルパーの見方はさらに極端だった。ヘルパーによればニグロ のあらゆる特徴は「大きいものも小さいものも、内的なものも外的なものも、身体的なも のも精神的なものも、道徳的なものも、白人と比べると見劣りするのでる。それは暗闇が 光との対比で負けるのと同じ比率あるいは割合でのことであり、あるいは悪が善との比較 で劣るのと同じ割合でのことなのである」

オルムステッドの場合、黒人と白人の対比はずっと穏やかなものだった。それでも彼の

黒人に対する見方は明らかに歪んでいた。彼は黒人を慢性的なサボり屋、慢性的なこそ泥、慢性的な嘘つきと見なすのだった。「彼らは神への祈りの中ですら嘘をつく」と彼は、匿名の情報源を引用して書いている。経済的糾弾の他の構築者よりも極度に、オルムステッドはインチキ社会学的説明と純粋に人種的な説明を混ぜて、黒人の特性と能力の「欠陥」について語っている。奴隷制を廃止すれば、黒人は「完全に文明化される、完全に独立した個人となり、したがってコモンウェルスにおいて、奴隷だったときよりも自由人として十倍もの価値を持つようになる」と彼は述べた。それでも彼は「一世代や二世代で、何世紀にもわたる野蛮と度お礼制の影響が消し去れる」とは思わず、また黒人が「永遠にチュートン人やケルト人並になれる」とも思わなかった。

オルムステッドの見方では、社会的影響が変えられても黒人の「人種的制約」は残る。 オルムステッドによると「アフリカの人種は、白人と比べると、少なくともチュートン系 と比較した場合、「虚栄心またはほめられたい願望が強く、華々しい顕示的な特性が強く、 興奮しやすく、心の厳密性や分析力が劣り、官能的な性質を持つが (これは単に訓練を受 けていないせいかもしれないが) 洗練度は低い」。続けて彼によるとアフリカ人は「私たち よりも安定した中断のない労働への適応性がはるかに低いが、俊敏性や瞬発的エネルギー を要求する行為においては私たちを上回る。船員として黒人を使うミシシッピー川の蒸気 船は、同数の白人を備えた船よりも、三分の一もすばやく材木を積載できる。だが同じ知 能と同じ刺激を与えられた白人労働者は、黒人に比べて一日で二倍の材木を切り、二倍の 丸太を割り、三分の一多い穀物を耕すのである」

オルムステッドの黒人観は、ヘルパーやクレイのものといっしょにしてはいけない。ヘルパーとクレイは黒人に対して極度に敵対的だった。実はヘルパーは、アメリカから黒人すべてを追放しようとする運動に同じくらい力を注いだのだった。これに対してオルムステッドは、黒人に対してきわめて好意的な人物だった。彼らの運命を深く懸念したオルムステッドは、奴隷制の主にから解放されたら、彼らが「十倍」も改善できると信じていた。オルムステッドは明確に、黒人の人種的制約により彼らが永続的に劣った社会的地位に置かれるべきだという主張を否定している。彼によると「黒人が、その性質や本質から、白人より道徳的に劣っていると考えるべきまともな理由はない。また、もしそうだとしても、私たちと平等な社会的力を黒人に与えるのを永遠に妨げるような人格的要素があるとも考えられない」。

こうした言葉は、オルムステッドをクレイやヘルパーとはっきり隔てるものだ。さらには、当時の他のほとんどの白人とも一線を画する存在にしている。黒人に対する共感と楽観論において、オルムステッドは明らかに時代をはるかに先取りしていた。この人物評価を行うのが狙いだったなら、この啓蒙性はまちがいなく、偏見よりも重視すべきものとさ

れるだろう。

だが、私たちは別の問題も考慮しなくてはならない――それはこの人物その人を考えるにあたっては、かなり狭く些末なものであるのは確かだ。だがその問題は、伝統的な奴隷制解釈を評価するにあたっては、圧倒的な重要性を持っている。黒人労働の質 (潜在力ではなく実際に挙げている成果)が、どのくらい信用できるものか、ということだ。第6章で示すように、彼の判断の一部はまったくのピントはずれで、悲惨なくらいまちがっている。この問題に関する限り、彼の啓蒙性は偏見を乗り越えるほどの強さを持たなかったのは明らかだ。皮肉なことに、オルムステッドの黒人に対する明らかな善意のおかげで、黒人労働の質を彼がどれほど矮小化してしまったかについて、あまり注目されないことになってしまった。それ以上に、奴隷労働が北部の白人労働に比べると、せいぜいが半分の生産性しかないのだという彼の主張に、まちがった信頼性を与えてしまう結果となった。これについては後で示そう。

ジョン・エリオット・ケアンズ:経済学者による再定式化

奴隷制の経済的糾弾論を構築した主要人物の最後の一人は、ジョン・エリオット・ケアンズだ。彼は19世紀半ばで最も有力なイギリス人経済学者の一人であり、まずダブリン大学で教鞭を執り、その後クイーンズ大学、ギャルウェイ、最後にロンドンユニバーシティ大学を歴任した。彼の著書『奴隷の力』は1862年初版で、1863年には新しい序文、補遺、多少の改訂を加えたものが発刊された。『奴隷の力』の副題は、この著作が持つ論争的な性質をあらわにしている。その副題は「アメリカの論争に関わる本当の問題を説明しようとする試み」なのだ。ケアンズは、イギリス人の間で南部の「自決権」を求める闘争への同情論が広まってるのに危機感をおぼえ、この本で道徳的にも経済的な利己性からも、大英帝国は南北戦争で南部軍に肩入れして介入すべきではないことを実証しようとした。このため彼は、『奴隷の力』の「性質、キャリア、考えられる設計」についての分析を提示したのだった。

ケアンズは奴隷州を自分で訪ねたことはなかったので、奴隷制の実際の仕組みに関する 証拠は他人に頼っていた。最も重視したのはオルムステッドの四巻本の最初の二巻で、何 度も引用や参照を行っている。また、ロバート・ラッセル『北アメリカ:その農業と気 候』、アレクシス・ド・トックヴィル『アメリカの民主主義』、ヒントン・ヘルパー『迫る 危機』、J・D・B・デボウ『南部西部州の産業資源など』といった本も参照はしているが、 その主要な議論は明らかにオルムステッドから導出したものだ。それどころか、奴隷制の 経済的性質を扱う限りにおいて、『奴隷の力』はおおむね、オルムステッドが提唱した主

題の緻密でエレガントな再定式化だ――おおむねであって、完全な焼き直しではない。というのもケアンズは、オルムステッドの中心的な主題を改訂し、多くの重要な点でそれを拡充しているからだ。奴隷制の経済的糾弾を完成させるのに貢献したのは、そうした改訂や加筆部分なのだ。

ケアンズは、奴隷労働がきわめて低質だというオルムステッドの主張を鵜呑みにした。彼によると「奴隷労働の経済的欠点は、以下の三つの見出しでまとめられる――その本質的なやる気のなさ、その低技能ぶり、工夫の欠如」。だがオルムステッドとはちがい、ケアンズは奴隷労働の劣等性に関する人種的な説明を受け入れなかった。彼は「手のほどこしようがない黒人の怠惰さという誹謗」を拒絶宇し、「自由状態の黒人は、白人と同じ影響を受けることになる」と論じた。黒人が「仕事をできるかぎりサボろうと」して「多少なりとも注意や配慮や器用さを必要とする産業分野に不適切」にして「最も粗野な労働形態しかできないように」しているのは人種のせいではなく、奴隷制のせいなのだ。実際、「奴隷に何かを教えるのがあまりに大きいので、その労働を利潤に変えられる唯一の可能性は、彼がある教えを身につけたら、その教えを一生やらせておくことしかないのである。したがって奴隷が雇用されているところでは、生産の多様性はあり得ない」

ケアンズはまた、南部の白人労働者が奴隷労働よりも質的に劣るというオルムステッドの主張を鵜呑みにしている。この本の初版で、彼は奴隷を持たない南部白人はすべて「放蕩者の愚衆」であり「野蛮人とほとんど変わらず、狩猟、漁業、日雇い、収奪による惨めなその日暮らしをしている」と述べる。改訂版では、ケアンズはこうした「劣悪な白人」の数を、白人人口の70%に減らした。残り30%は「しっかりした働き者」の自由農民たちだが、その状況でいられるのは単に、彼らが奴隷経済と切り離されていて、そこに一切属していないからだという。この階級はおもに境界部の州にいる。残りの奴隷を持たない白人たちは、あまりにやる気がなく劣化しいているので、奴隷労働とすら競合できない。「『劣悪な白人』の労働は奴隷たちの粗雑な活動と比べてすら、非効率で信頼できず、手の施しようがないことは広く合意されている」とケアンズは述べる。

オルムステッドと同じく、ケアンズも奴隷制の非効率性主張の核心として、奴隷労働の質の低さを置いた。だがオルムステッドは、奴隷労働が土地の肥沃さを減らす傾向をこの制度の持つ多くの欠陥の一つとしてあげただけだったのに対し、ケアンズはそれを中心的な重要性を持つ要因に格上げした。奴隷労働の使用で避けられない結果として、土地の劣化を挙げたのだ。彼によると奴隷労働はあまりに無能だったので、農園主たちは単一作物の生産だけで黒人を雇用するしかなかったのだという。

土壌の性質と奴隷産業の性質に最も適した作物が何だったにせよ、それが綿

花、タバコ、砂糖、米のどれであれ、その作物が耕作され、それ以外の作物はまったく作られない。この場合には輪作は不可能となる。土壌は何度も何度も同じ作物を作るように強いられ、避けがたい結果がやってくる。ほんの数年のうちに、土壌の肥沃さは完全に尽き果て、入植者は――南部の華やかな用語法では「土地の殺し屋」と呼ばれる――無価値にしてしまった土地を放棄して、手持ちの主体を儲かる形で雇用できる唯一の活動が使えるような肥沃さを持つ新しい土壌を探しに出かけるのである。

ケアンズがオルムステッドの議論から最も大きく逸脱したのは、奴隷制の全般的な収益率の問題についてだった。奴隷は、所有者の 2%以外には儲からなかったという主張は、ケアンズには受け入れ難かった。この議論は答えようがない難問を大量に生み出してしまうからだ。そもそもなんでそんな仕組みが根付いたのか、そしいてなぜそれが南部州では二百年以上も続いたのか? そしてこの制度が全般的に儲からないなら、奴隷制廃止論者は市場がこの仕組みを無理にでも潰すのを待っていればすむ話ではないか? だからケアンズはオルムステッドの基本的な経済的批判を再定式化して、農園主が奴隷投資で一般的に利益を得られなかったという主張を入れないようにした。これをやるため、ケアンズは奴隷制が儲からない傾向を持ってはいたが、その傾向はある特別な状況下では曲げられることができたと論じ、その傾向がたまたま南部にはたくさんあったのだ、と論じた。これとの関連で、ケアンズは奴隷制が儲かるために必要な四条件を強調した。

- (1) <u>小規模より大規模のほうが効率的に栽培できる作物への需要があること</u>。大規模生産の経済性が必要だ、とケアンズは述べた。なぜなら奴隷労働が自由労働に対して持っている唯一の優位性は「奴隷の雇用者は労働者に対する絶対的な権力をもっている」からだ。だから大規模操業が有利なときには、奴隷労働は「最も完全な組織化を可能にする。つまりそれは大規模に組み合わせることが可能で、統制する頭脳により単一の目的に振り向けられるからだ」
- (2) **そうした作物の耕作手法は、土地あたり大量の労働を必要とすること**。こうした労働の土地集中は「奴隷監督費用を抑えるため」に必要だった。
- (3) **土壌は高い肥沃さとほぼ無限の広さを持たねばならない**。「土壌の肥沃さがきわめて大きく、耕作の下手さを補えるほどで、自然が仕事の大半をやって人手による部分がまるで残らない場合」にのみ、そしてその場合に限り、奴隷労働は「儲かる形」に変えられるのだ、とケアンズは主張した。そうした土地は、奴隷労働では避けられない土地の酷使により、制度維持に必要な最低限の肥沃さを下回らないようにす

るため、無限の広さを持たねばならなかった。

(4) <u>大量の地域間奴隷取り引きがあること</u>。こうした取引が必要なのは、古い枯渇した 土地の奴隷所有者が、奴隷から収益を得続けられるようにするため必要だった。と いうのも「人間の取引がいったん開始されたら、奴隷制のために新しい利潤源が開 発され、このため奴隷制は土壌資源とはかなり独立したものとなる。奴隷取引がも たらす利潤、これこそ、そしてこれのみが、北米の古い奴隷州における奴隷制が、 それ自身のもたらした荒廃の結果を生き延びられるようにしたのである」

この四条件によりケアンズは、奴隷制が一般に儲からないというオルムステッドの主張を捨てることができて、それでも奴隷制が非効率な仕組みで南部州の成長の足を引っ張ったのだ、という部分は温存できた。さらにケアンズの再定式化は、答えようがない難間を消し去れる。奴隷制が南部の土壌に根付いたのは、砂糖、タバコ、米、綿花の生産における規模の経済と監督の容易さのおかげだ――さらに肥沃な処女地がたくさんあった。だから奴隷たちの粗雑な労働でも儲かるようになったのだ。しばらく運用される中で、奴隷制は確かに自滅傾向を生み出した。奴隷労働の非効率性、特にそうした労働の雇用から生じる土壌の劣化がその方向に作用した。だが避けがたい破滅の日は、地域間奴隷貿易の作用を通じていつまでも先送りにできるのだ。他にも肥沃な処女地が無限に近い形で供給されていればよい。奴隷制の南部州は、まさにそうした方向に向かった。地域的な特価の仕組みを作り上げ、枯渇した土地の領域は奴隷の育成培養に特化し、処女地の領域は主要作物の生産で奴隷労働を使い果たすのに特化するのだ。

ケアンズは、晩期になれば南部の奴隷制が本当に、南西部においてすら主要作物の生産で儲からなくなるという可能性を完全に否定したわけではなかった。ある程度まで彼も譲歩して、奴隷制が顕示的消費への欲望により維持されていると認めた。奴隷制は南部の「人々の魂に入り込み」、奴隷に対する「ファッショナブルな趣味、社会的情熱」を生み出した。「奴隷はつまり南部では作為的な価値を獲得し、彼らのサービスに内在位する効用で説明できるものをはるかに超える熱意を持って渇望されている」。ケアンズはこの見方の根拠を、ある程度はオルムステッドの報告から得ている。テキサス州の土地ですら急激に枯渇しているというのだ。だから、土壌の劣化速度があまりに急速化して、奴隷制は本当に仕組みとしての全般的な利益率を維持するために必要な土地の限界に迫っているかも知れない、というわけだ。

ケアンズはこの可能性意に応えて、奴隷制の確立とこれまでの維持においては利潤が必要条件ではあったが、利潤はいまやその継続のための必要条件ではなくなっているかもしれないと論じている。

奴隷制の成立可能性「の問題について、純粋に経済的な根拠だけから論じるのは怠惰である」

奴隷制はその支持者によって、単なる生産的な道具として支持されているのではない。それははるかに、その社会政治的な結果のためなのだ――奴隷所有者が社会手金阿名声と政治権力の保有者であるような社会形態維持手段となっており、彼らが構築した構築物の「要石」となっている――そのために奴隷制は重視されているのだ。奴隷制を廃止すれば、新しい秩序が導入され、いま南部を支配している人々の高位は終わってしまう。新しい人々が様々な方面から急速に移民してくる。農園主とその支持者たちは、すぐに古い領土における絶望的な少数派になってしまう。新しい利権が根付いて育つ。新しい社会思想が生まれる。新しい政治的な組み合わせが形成される。そして南部連合の政治を昔から動かしいてきた一派の権力と希望、そしていまやその連合から逃れてもっと大胆な設計の成果を目指す自由なキャリアを確保しようとする者たちは、永遠にいなくなってしまう。南部州において本当の奴隷制の強さを構築しているのはこれであり、このために支配派は、奴隷制廃止を目指すどんな提案も、一瞬たりとも認めることはできないのである。

ケアンズは、奴隷制が農園主たちにとって全体として儲かるからといって、奴隷誠意が南部の物質的な厚生を高めているとはいえないことを強調した。奴隷制は実は南部の「総収入」を減らしており、地域の経済成長の障害になっているという。ケアンズによると、奴隷制は製造業と商業の発展を阻害している。製造業は、奴隷の労働があまりに粗雑で低位技能なので「ほとんどの製造業や機械プロセスに必要な、困難で繊細な操作を効率的に奴隷がこなすのはまったく不可能」なために足を引っ張られている。商業が阻害されているのは、「商業の魂は実業精神であり、これは奴隷制が存在する社会ではまったく見られない。そこで広がる特性は、定型作業への従属であり、金儲け活動への蔑視である」。製造業と商業は「町に大量の作業員が集まることが必要となる」。だが「作業員が奴隷なら」そうした都市への集結は「絶え間ない蜂起のリスクを伴わずには実施不可能であり、これが実質的に」奴隷社会における製造業と商業の成長を阻止してしまう。

結果として、奴隷制は実質的に南部をこうした事業分野から排除することになり、南部を農業だけに閉じ込めることになる。ケアンズによれば「奴隷制の自然なキャリアは農業なのである」。だが奴隷農業の性質から見て、一人あたり生産量はやがて、この部門でも低下せざるを得ない。奴隷制は土地を劣化させる傾向があるので、農業での当初の一人あ

たり生産水準は処女地でしか維持できない。そしてそうした土壌が奴隷労働により収奪されると、一人あたり生産量の推移は下降線をたどる。古い奴隷州では、産出低下プロセスがあまりに進みすぎて、普通の事業では奴隷の維持に必要な生産量を生み出す収量すらほとんど維持できなくなっている。結果として、奴隷販売州における農園主への唯一の、あるいは主要な利潤源は、地域間奴隷取引がもたらす収入なのだった。だから「奴隷制はその単純かつ原初的な携帯から、奴隷貿易に支えられた携帯へと発展した――人間の生命にとって拡大的で攻撃的で破壊的で、人間の絆を無視したものへと――その最も危険で残虐な形態の奴隷制へと……」

ケアンズの再定式化は、オルムステッドの議論が持つ最も露骨な難点からは逃れられたが、そうした議論の証拠としての根拠についてケアンズはまったく検討していない。南部の奴隷労働や白人労働は、北部の労働より非効率だというオルムステッドの主張を、証明されたものとして鵜呑みにしている。また奴隷が交錯する土地の肥沃さが急速かつ着実に低下するというのも、証明済みとして受け入れている。こうした「事実」はッ奴隷農業の全般的な非効率性を意味しており、農業部門における一人あたり産出の着実な低下も生じる。だから、彼はその二点についても証明済みとして受け入れてしまった。

こうした各種の事実と称するものが正しいのかを検討しなかったことで、奴隷制の経済についてのケアンズの分析は基本的にまちがったものとなった。オルムステッドの論理を 乱しただけでは、奴隷制の経済的糾弾を正当化するには不十分だった。ケアンズは、その 糾弾の成否を決する基本的な実証的問題に、ついに取り組むことはなかった。

ケアンズが、オルムステッドやヘルパーなど参照した文献に登場する証拠群を拡張しようとしたのは、地域間奴隷取引の問題についてだけだ。1850 年国勢調査の人口データをもとに、この取引の規模を推測しようというケアンズの試みは、ずいぶん素人じみたものだった。白人と黒人の年齢構成のちがいを見て、それが西への奴隷の移動が白人よりもずっと多いことを必然的に意味しているのだというまちがった推測を行っている。また彼は、その差から見て西部に売られた奴隷の大半が市場で売られたということなのだと思い込んでいる。「もし農園主が、家族と従う奴隷たちをつれてヴァージニア州からアーカンソー州に引っ越したのであれば、両人種の老いも若きもいっしょに移動史、二つの人口群の比率は変わらないままであるはずだ」。だが、第2章と3章で示したように、この二つの地域における年齢構成と男女比から見て、取引された奴隷の数は、地域間移動の全体のなかでは、比率として大きいどころかかなり小さかったはずだ。

一部の読者は、一世紀以上も前に書かれた本を私たちがこれほど詳しく検討してきたの を、奇妙に思われるかもしれない。効率性と成長の問題について対決相手として選んだの が、もっと最近の論者ではなくヘルパーやオルムステッドが出した証拠だというのは不思

議だろう。確かに意外かもしれないが、経済的糾弾論の構築者の時代から、数量経済史学者の登場までの間に、効率性と成長に関する証拠で追加されたものはほとんどないのだ。その一世紀の間の議論は、ほとんどがヘルパーとオルムステッドの提供した証拠に追加しようとするものではなく、その側面のあちらこちらを強調したり控えたりすることで、そうした証拠の重要性を再解釈するものだった。

この一世紀で追加された最も重要な経済情報は、アーリッヒ・B・フィリップスや、各種の州における奴隷制についての論者が出したものかもしれない。だがフィリップスによる奴隷価格の時系列情報は、奴隷制が農園主にとって持っていた収益性の問題にむしろ関連するものであり、クレイやヘルパー、オルムステッド、ケアンズが提示した効率性と成長率問題とは関連が薄い。フィリップスと週ごとの研究の著者たちは、大規模農園――般に奴隷を百人以上持っていた農園――の活動についての情報を解明するのに尽力したが、そうした治験は主に、奴隷の生活の物質条件に関する問題に関連するものだった。もちろん、農園主の経営管理能力にも光を当てる部分もあったのだが。これ以外に、数量経済史以前にもたらされた、奴隷経済の働きに関する根拠となる知識体系への重要な追加物は補遺Cにまとめた。こうした他の追加物は、ここで議論したものと同様に、経済的糾弾の構築者たちが行った、奴隷制が効率性と成長に与える劣悪な影響についての主張を根本的に変えるものではなかった。

その結果として、こうした人々の著作、特にオルムステッドとケアンズのものは、思想 史の分野に決して入れてもらえなかった。現代の著述家が彼らの議論や証拠をいまだに論 拠にしているために、この経済的糾弾はいまも継続し、奴隷制の効率性、経済成長、さら には収益性や持続性といった問題についてすら、主要な反対論という地位を維持してきた。 彼らの研究は、伝統的な奴隷制の解釈が形成されてきた中核となっているのだ。

奴隷農業の相対的な効率性

1968年以来、数量経済史研究者たちの一群は、1860年の北部と南部における農業部門の相対的な投入利用比較に取り組んできた。適切な指標の構築は、面倒で複雑な作業だ。こうした指標に入る生データが手に入りにくいせいもあるし、その生データに多くの調整が必要だからだ。五年がかりの作業にもかかわらず、いまや20人超の経済学者とその助手が取り組んでいるこのプロジェクトは、道半ばにすら達していない。それでも、この段階ですら、奴隷制の経済的糾弾における中心的な想定にまっこうから対立する、多くの重要な発見が生まれている。こうした発見の一部はまだ初歩的な段階で、今後の変更もあり得るとはいいえ、将来の改訂が主要な暫定的結論をひっくり返す可能性は低い。

北部と南部の相対的な農業効率性を計測して比較するための主要な道具は「全要素生産性の幾何指数」と呼ばれている。この指数だと、効率性は産出と平均的な投入の量との比率で計測される。平均投入 1 単位あたりの産出が多ければ、効率性はそれだけ高い。全要素生産性の幾何指数はもともと1940年代初頭に考案された。それは有名な1957年論文で、1901-1949年のアメリカ経済の効率性上昇を計測するために使われた指数だった。それ以来、この指数は様々な時点における各種産業部門の経済パフォーマンスを評価比較するのに使われてきたし、また様々な国の経済パフォーマンス比較にも使われた。この指標を出す方程式は補遺 B に示した。あわせてこの指標の特性と、それが奴隷農業の相対的な効率性計測を見極めるのに、どういう形で適用されたかについても論じている。

暫定的な知見は主に以下の通りだ。

- 1. 1860年には、南部の農業は全体として北部より35%ほど効率性が高かった。つまり、 平均すると一定の労働、土地、資本を使う南部の農場は、同じ投入量を使う北部の 農場または農場群よりも35%ほど多くを生産できた。
- 2. 南部の農場は、自由労働を使うところも奴隷労働を使うところも、北部の農場よりも効率が高かった。だが南部の農場を比べると、奴隷農園は自由労働農園よりも効率性が28%高い。北部の農場と比べると、南部の自由労働農園は効率性が9%高く、奴隷農園は40%も効率的だった。

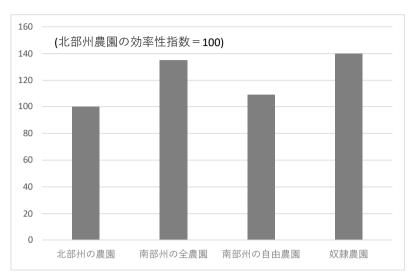


図 42 南部州の農園と北部州の農園の効率性比較、1860年

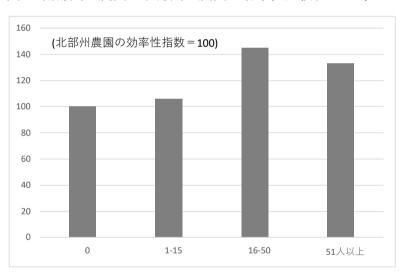


図 43 規模別の南部農園効率性比較、1860年

3. 南部の農業には規模の経済があった。つまりある量の投入財を使う大規模な一つの 農園のほうが、合計で同じ量の投入財を使っている小規模な農場群よりも多くの量 を生産できるということだ。奴隷農園の効率性の高さは、すべてが規模の経済のお かげではなかった。そしてすべての規模の経済は生産に作用したわけではない。私 たちの指標を見ると、新南部の中規模農園(奴隷 16-50人)は大規模な農園に比べて、 何らかの優位性があったことを示している。

だが一般に、農園の規模が大きければ、それだけ規模の経済の役割も大きかった。 奴隷が 1-15 人しかいないかなり小さい農園では、規模の経済は 6%しか効率性を高 めていない。奴隷 16-50 人の中規模農園では、規模のおかげで効率性は 15%高まっ

た。そして最大級の農園——奴隷 50 人以上——での規模だと、効率性は 23%超も高まっている。言い換えると、奴隷が数人しかいない農園は、大規模組織の便益をまともに活用できなかった。中規模農園は、大規模組織の便益をかなり、だが不完全にしか活用していない。そうした便益は、きわめて大規模な農園が獲得していた。

これまでの議論は、生産プロセスにおける規模の経済しか計測していないことは 強調しておこう。補遺 B で示したように、マーケティングなど生産以外の農園の側 面でも規模の経済が働いたと考えるべき理由は少しある。こうした影響はいまの指 標では捉えられていない。

4. 規模の経済は奴隷労働だけで生じた。自由賃金労働に基づく大規模な南部の農園は存在しない。小規模な自由農園は、規模の便益を実現するために合併して大事業体になったりはしなかった。農場が大きければ、それだけ奴隷の比率も増えた。10人以下の農園では、平均で住人の11%ほどが奴隷だった。だが50-100人の農園では、90%が奴隷だった。100人以上がいる農園では94%が奴隷だった。

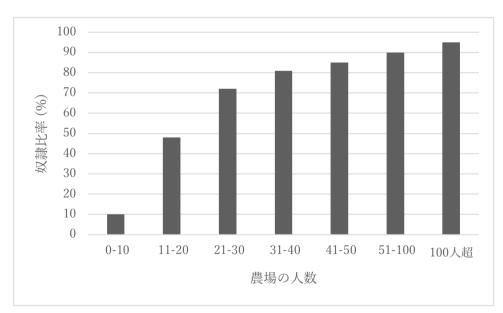


図 44 農園の規模別住民奴隷比率

5. 南部の二つの主要地域の中にある奴隷農園の中でも、効率性には多くの差が見られた。平均でみると、新しい奴隷購入州は、古い奴隷売却州よりも 29%効率的だった。 旧南部の自由労働農園は、北部の自由農園の効率性とほぼ同じだ。旧南部の奴隷農園は、北部の自由農園より 19%効率的だったが、もっと新しい南部州の奴隷農園は、北部の自由農園の平均効率性を 53%も上回っていた。

6.

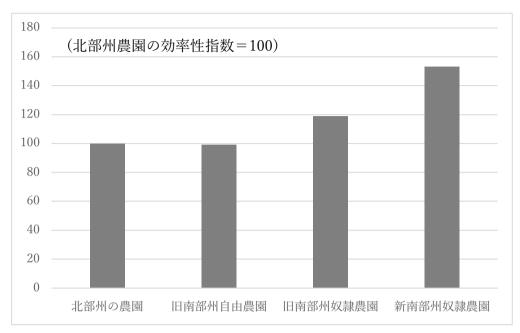


図 45 旧南部州農園と、北部や新南部州農園との効率性比較

ここから見て、奴隷制の経済的糾弾の主要な前提は、事実の基盤を持っていないようだ。 南部の農業は、北部の農業より効率性が低いどころか、むしろ高い。奴隷労働を使う大規 模能研は、自由労働だけに頼る小規模な南部農場よりもリソース活用が上手だったが、そ れは別にこうした小事業所の白人たちが「怠惰と無頓着、技能の結果に対する無関心、不 注意」や「目的の非一貫性」に追いやられたせいではない。家族規模の南部農園や、そこ で働く人々は、1986年には北部の同規模農園よりも効率性が高かった。むしろ重要なのは、 南北戦争以前の時代における大規模な奴隷農園は平均すると、他のアメリカ農業部門のど んな部分と比べても突出した効率性水準に達していたということだ。

同様に奴隷購入州の農園が売却州に比べて優秀だったからといって、古い州の農場が非 効率だったということにはならない。ヴァージニア州、ノースカロライナ州、テネシー州 といった売却州は北部州よりも効率が高かったが、大規模な運営の便益を購入州ほどはう まく捕捉できなかったのだ。

この失敗が、土地の質の差から生じた面は確かにある。だがそれは、オルムステッドやケアンズが強調したような土地の質の差ではなかった。旧州の土地が枯渇していたという明白な証拠はないし、平均的な土壌の質や土地の収量が下がってきたという証拠もない。土地の収量や地価のデータを使ったこれまでの研究は、はっきりした結果を出せていない。だがこうした結果を、オルムステッドやケアンズの仮説に最も都合のいい形で解釈したとしても、農園が古くなるにつれての収量低下はごくわずかだ——年率0.5%程度となる。この劣化は、農場資本、輸送改善など、売却州の農業生産性全体に影響するその他各種要因

への投資で十分以上に埋め合わせがつくものだ。つまりこの点についてのオルムステッドやケアンズの主張は根拠レスだ。三大奴隷輸出州 (ヴァージニア、ノースカロライナ、サウスカロライナ) の農地や上物の平均価値は、1850年から 1860年にかけて、低下するどころか 60%もあがっている。これは三大奴隷輸入州 (アラバマ、ミシシッピー、ルイジアナ)での上昇率 (79%) にかなり迫っている。だからといって、売却州には放棄された農園がなかったというわけではない。南部北部問わず、どこの州にも放棄された農園はあった。経済条件が変わったら、農民たちは収支ギリギリの事業は見捨てることになったのだ。ある相対価格群の下では儲かった農園も、相対価格が変われば儲からなくなったわけだ。オルムステッドやケアンズは、この放棄の規模を誇張し、例外を一般化したのだった。

オルムステッドやケアンズは、南部農園主たちが広く抱いていた土地の肥沃さを維持する問題についての懸念を、いささか誤解した面はある。この懸念は決して不当なものではなかった。というのもすでに述べた通り、南部の土地は砂がちで、雨も多く、冬の凍結があまり起こらなかったので、南部の土壌の肥沃さが損なわれる傾向はあった。だから土地の肥沃さを維持するにはかなりの手間が必要だった。この問題は、主導的な南部の農学者たちや、南部の政治指導者たちによって繰り返し強調された。南部の農業雑誌ではこの問題にかなり注目されていた。多くの農園主は、各種の肥料、工作方法、輪作方式をいろいろと試していた。成功した実験はすぐに報告された。すべての農民がそうしたやり方にしたがうように言われた。それを遵守しない者は激しい非難を受けて、農業や政治の指導者たちにより吊し上げにあった。そうした指導者たちはしばしば、この問題の規模を大げさに述べて誇張した。オルムステッドとケアンズは、この問題について南部人たちの間で展開される議論の性質を完全に誤解した。レトリックと現実を混同した彼らは、農業指導者たちが土地の肥沃さを維持する戦いに敗北しつつあるのだと思い込んだのだ。だが地価や上物の価格のトレンドについての現存する証拠や、収量のデータを見ると、彼らはまちがっていたようだ。

地域を構成する地区ごとの土地の質の差は、地域間の生産性の差や、地域間の奴隷人口 再分配の説明にとって、どのくらい意味があるのだろうか? 各州の土壌や気候は、あらゆ る南部作物にとって、有利さがちがっていた。メイソン=ディクソン線のすぐ南の、大西 洋沿岸平原と、中央ピエドモント平原は、タバコや一般農業には有利だったが、綿花生産 は実施できなかった。ジョージア州やサウスカロライナ州の沿岸低木地域や、メキシコ湾 沿岸平原の南部にある沼地では、米が最も有利だった。砂糖生産は、ミシシッピー川デル タの一握りの地区だけにおおむね限られていた。綿花は、サウスカロライナ州からテキサ ス州まで主に広がる長いベルト地帯でうまく育てられる。このベルト地帯の境界は、それ だけというわけではないが、気候条件におおむね左右されていた。綿花栽培は最低でも、

霜のない日が年に 200 日は必要で、大量の雨もいるからだ。北限を決めたのは温度だし、 西端を決めたのは降雨だ。アラバマ州とテキサスのブラックベルト地は、ピエドモントの 砂がちなロームや沿岸平原の湿地よりは綿花生産に適していたが、長繊維の綿花は例外だ った。中でも最高の綿花栽培地は、ミシシッピー川氾濫平原の沖積土だったらしい。

だから各州での南部労働の分布は、南部作物の需要構造変化により決まっていた部分が大きい。タバコと小麦が主要作物だった間は (18 世紀末はそうだったらしい)、労働その他のリソースを、チェサピーク湾に接した地域に集中させるのが効率的だった。

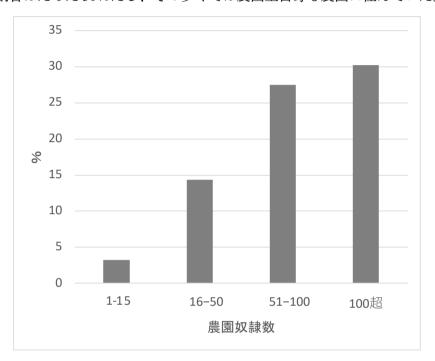
だが他の南部商品に比べて綿花需要が増えるにつれて、労働その他のリソースをアラバマ、ミシシッピー、ルイジアナ、そして後にテキサスに再分配するのが効率的となった。 つまりは南部農業の西移動は、別に土壌枯渇のせいではなく、東よりは西の土壌で有利だった作物への需要が高まったせいなのだ。

この西へのシフトはまた、西部の土地の相対的な生産性を高めたらしき技術進歩にも刺激を受けていた。こうした技術革新の最も重要なもの二つは、農業部門ではなく輸送部門で起きた。一つは蒸気船の開発と、それが 1820 年代と 1830 年代に南部全域に広がったことだった。蒸気船は南部の川沿い内陸部への輸送費用を劇的に引き下げた。そうした部分は、帆船で航行するにはあまりに浅いか、流れが速すぎたのだった。各種州の内陸地へのアクセス改善と、それに伴うそうした土地の経済生産性改善は、鉄道の発展と、それが南部に建設されたことでさらに加速した。これは特に 1950 年代に顕著だった。

1800 年以降の南部農業部門で最も重要な技術進歩は、管理をめぐるものだった。特に南部の農園主が、大規模経営の経済性が持つ便益を活用するための手法開発が大きい。穀物やタバコの生産から綿花、砂糖、米への生産シフトは、奴隷保有の規模が大きく拡大したのと同時期だったことに注意しよう。最適な農園規模は、どうも作物ごとにちがったようだ。穀物生産では、規模の経済が働くという証拠はまったくない。タバコ生産でも、規模の経済はかなり限定的らしい。だからこうした作物に特化した郡に位置する農園は、1790年から 1860年でほとんど成長しなかった。南北戦争前夜、ヴァージニア州の奴隷保有の規模は平均でまだたった 18.8 人だが、短繊維の綿花生産を行う沖積土地域の郡平均は、農園あたり 125人にも達した。南北戦争前の十年になると、最適規模(最も効率の高い農園の最小規模)は、ブラックベルトの綿花生産地では 50人、ミシシッピー川沿いの沖積土の郡では奴隷 200人以上に達した。そして奴隷時代の最後の十年になると、農園の最適規模に対する主要な制約は、効率的なマネジメント能力だったらしい。

この知見をもとに、農園主たちが「怠け者」ばかりで「実直な習慣や倹約能力」を持ち合わせず、農園の主な管理を無能で残酷な監督たちに任せて、自分は南部や北部、ヨーロッパの各種都市で自分の贅沢な趣味を満たしてばかりいたのだ、といったステレオタイプ

が裏付けられたという結論に飛びついてはいけない。もちろん、そういう農園主もまちがいなくいただろう。だがそれは、かなり限られた少数派だ。中規模の奴隷保有 (16-50 人)では、白人の監督を雇っていた農園は六分の一に満たない。大規模な奴隷保有農園 (50 人以上)でも白人監督を使っていたのは四分の一だけだ。100 人以上の奴隷がいる農園ですら。白人監督の割合はたった 30%だし、その多くでは農園主自身も農園に住んでいた。



46 農園規模別の白人監督保有農園比率

南部の雑誌で農園経営の問題をめぐる議論が続いていたのは、別に南部の農園主たちの失敗の証拠ではなく、彼らが自分の事業にどれほど真面目に取り組んだかという証拠だ。いいかげんな洒落者どころか、彼らは一般にきわめて意識の高い起業家階級であり、通常は、自分の統括業務に熟慮と責任を持って取り組んだ——これは彼ら自身の自覚に見合った態度だったのだ。彼らは、当時の科学的な農業文献に詳しくなろうと頑張った。農業の各種側面について「ベストプラクティス」についての情報を広めるため、農業学会を組織して、動物飼育、農学、園芸学など関連分野での実験を奨励し、自分たちの発見を報告して、農園管理で出くわすあらゆる問題について議論するための雑誌も刊行した。

そして何よりも重視された問題が、労働管理だった。農園主は、これが決定的な問題だと認識していた。経済的な成否がそこにかかっていたのだ。奴隷管理のあらゆる側面は、考察され議論されるべきものとして重視された。居住、食事、医療、結婚、育児、休日、褒賞制度や処罰、畑の労働組織のちがうやり方、管理職の責務、さらには農園主が奴隷に対して取るべき態度まで、すべて議論する価値があると見なされた。

食事の議論は、肉、野菜、穀物、乳製品のバランス、赤身と脂身のそれぞれの長所、食物の分配や調理の最適な方法などだ。住居については、農園主たちは世帯毎の住宅と複数世帯住宅のそれぞれの長所、各種建材の費用便益、煙突の設計、奴隷家屋と他の建物との最適な空間配置について議論した。結婚と家族の議論では、奴隷が他の農園の奴隷と結婚するのは許されるべきか、奴隷の家族内および奴隷の家族同士の紛争仲裁において、作業監視人や監督の裁量はどこまで認めるべきか、といった議論が行われた。インセンティブ構造の議論は、贈り物や金銭ボーナスと、農地を割り当てるのとどちらがいいか、奴隷が自分専用の農地で育てていい作物、奴隷が小家畜について財産権もどきを認められるべきか、奴隷が自分の作物や家畜を市場で販売するのは許されるべきか、それとも農園主に時価で販売するよう義務づけるべきか、といった話を含んでいた。

個別問題の解決方法については、農園主たちの間に見解の相違はあった。だが奴隷管理の究極の目標は、きわめて規律のある、専門性の高い、うまく強調した労働力をつくり出すことなのだ、という合意は広く存在した。専門特化と相互依存は、中規模や大規模の農園の旗印とも言うべきものだった。家族規模の農場だと、それぞれの労働者はかなり柔軟で他の人々の活動とはおおむね独立したペースやパターンに基づき、複数の仕事をこなさなくてはならなかった。農園では、農夫たちは工場のようにがっちり組織されていた。各農夫は特定の作業群に割り当てられ、それを一年中(少なくとも一年のある季節はずっと)やることになった。作業監視人、耕作人、鍬担当、まぐわ担当、種まき人、覆い人(coverer)、選り分け人、芯取り人、梱包人、乳搾り婦、家畜担当、大工、鍛冶職人、介護婦、調理人など——これでもほんの一部でしかない。

畑の労働について言えば、それぞれの農夫は集団やチームに分けられ、その中では

労働の相互依存が決定的な要素となった。作付け集団は、五種類の農夫で構成され、それが決まった順番でお互いに続いていた。順番の最初は鋤担当者で、塊の土を左右に盛り上げる。するとまぐわ人が続いて、その土の塊を壊す。そして穴開け人が、種を植えつける穴を作り、その穴の間隔は事前に決まっている。それから種植え人は、その穴に種を入れる。そして最後に熊手担当が、その穴に土をかぶせる。この集団のペースの強度は三つのやり方で維持された。

まず、作付けを先導する役目の鍬担当とまぐわ人には、最も力が強くて有能な農夫があてられる。次に、それぞれの種類の農夫は、他の種類に依存する(これは組立ラインと同じで、相互依存のために集団内で働く者すべてに、先導者のペースに遅れないよう圧力がかかる)。

第三に、作業監視人や職長を指名して、素早い者はほめたたえ、遅れを取っている者は 脅かすようにさせ、各集団のペースや作業の質の両方を確保するために必要なことは何で

もやらせた。

耕作期間には、この相互依存とそれが生み出す生産的な緊張関係は、集団同士の相互作用から生まれた部分も大きかった。農夫たちは二つのグループに分けられた。鍬グループと鋤グループだ。鍬グループは、綿の木を取り巻く雑草を刈り取り、綿の木の余計な芽も払った。鋤グループはその後ろについて、並んだ綿の木のまわりの土をかきまぜて、それを植物の根のまわりに戻した。だから鍬グループと鋤グループは、それぞれ組立ライン的な圧力を相手にかけた。鍬は、鋤の農夫たちが作業にかかるのに間に合うように仕事を終えねばならなかった。同時に、鍬の農夫たちは、鋤よりは必要労働が軽かったが、鋤グループのためのペース設定をした。作業監視人や監督たちは、この二つのグループの間を往き来して、それぞれを励まし、せっつき、相手のペースに遅れを取らないようにしつつ、作業の品質をチェックした。

(農園生活のこうした特徴——奴隷をきわめて規律のとれた相互依存グループに組織して、 安定した集中的な仕事のリズム維持を可能にする――は農園での大規模運営の卓越した効 率性の核心だったらしい。少なくとも農作業に関する限りはそのようだ。これは奴隷所有 者自身がしばしば、農園型の組織システムの優越性が持つ鍵として特出ししたものだ。オ ルムステッドは何度も、農園主たちが白人労働より奴隷労働を好んだと報告している。そ れは奴隷の「やる気を引き出せる」からだと彼は述べているが、この主張がいかに重要な ものか、彼はまったく認識できていなかった。ある農園主によると白人は「安定した労働 になれていない。嫌々しか働かないし、やる気を引きだそうとしてもできない。彼らは奴 隷よりも優れた形では働かせられないし、彼らを別々に働かせるときには、それを監督す るのは面倒だ」。ある奴隷所有者は、オルムステッドがグリスコム (奴隷労働が一日あたり で北部労働者の四分の一しか生産できないと報告した北部人)との会話を報告するのを聞 いて、そうした奴隷が「どう考えてもきちんと『やる気を出させる』ようになっていなか ったはずだ」と答えている。別の奴隷所有者は「白人を一般労働に使うことは絶対無い、 というのもやる気を引き出せないからだ」と報告している。また別の人物はこう言う。 「白人は絶対あてにできないし、やる気も引き出せない。彼らはそういうのに絶えられな い。頼りになる労働者は奴隷だけだ(後略)」。こうした報告をもとにオルムステッドが引き 出した結論は、農園という環境の奴隷労働の質が高いというものではなく、南部の自由労 働者たちが北部の労働者に比べて極度に怠け者で、無能で、質が低かったのだ、というも のだった。

オルムステッドが自分の目で、畑で働くグループを観察したわずかな場合ですら、彼は 奴隷のチームワーク、協調性、活動の集中度をまったく認識できていないが、それでも彼 らの仕事が持つそうした特徴を忠実に記録している。そうしたある例で、彼は鍬グループ

が「農夫二百人近くにのぼり(というのも農園二つの労働力が共同で作業をしていたからだ)、それが畑に並んで列をつくり、かなりの精度で作業をしている。私は何度もその列の間を馬の駆け足で往き来したし、他の馬上の人々もいきなり彼らに近づいたりしたが、労働者たちの頑固な活動にはごくわずかな変化も妨害も生じることなく、それどころか私の見た範囲では、一人として地面から目を上げることさえなかった」。オルムステッドはこの経験からどんな結論を引き出しただろうか?それを黒人労働者たちのチームワークと、彼らの仕事への集中ぶりについての驚異的な実証と考えただろうか?オルムステッドによれば「かれらの愚かでつらそうな、機械じみた働き方は見るのがつらかった」。オルムステッドはそうした奴隷農夫たちが北部の労働者たちよりも「頑張って脇目もふらずに」働くことは認めたものの、それでも「同じ時間で北部の農業労働者たちが通常こなすほどの仕事をこなせる」かどうかは疑問視したのだった。

綿の収穫活動は、どうも作付け期や耕作期に見られたような分業と専門特化の機会はもたらさなかったらしい(ただしサトウキビの収穫ではそうした分業があったようだ)。作業の集中的なリズムを促進するために使えるような相互依存がなければ、農園主たちは同じ狙いを達成するために、集確人たちを競争集団に分けた。毎日、毎週、競争が行われて、勝った集団や最高記録を出した個人には商品(ボーナス)が与えられた。毎日、摘まれた綿の重量計測が行われ、プラスのインセンティブに反応しない人々は、期待ペースよりあまりに劣っていた場合には、言葉や身体的な乱暴を監視人たちから受けることになった。

収穫期に労働の集約性を促進する別の方法が「タスク手法」と呼ばれるものだった。この手法では、奴隷たちはある決まった土地区画を割り当てられ、毎日そこを摘み取らねばならなかった。その仕事が終わったら奴隷は余った時間を自分のために使って良いとすることで、労働の集約性が促進された。この仕組みの下で、仕事がきちんと行われるようにする方法の一つは、摘み取りのラウンドごとに、同じ畑を同じ奴隷に割り当てることだ。毎日綿花の量を測るのもパフォーマンスのチェックとなる。

専門特化と分業は、畑作業に限ったことではなかった。農園生活の屋内の面にも利用された。一部の屋内作業はかなり社会化されていた。これは育児や、程度は劣るが衣服生産や調理についても当てはまる。こうした雇用に特化したのは主に女性だった。ほとんどの大規模農園は託児所を設けていた。

これらを監督するのは、高齢女性 (農園の規模に応じて一人または複数) だった。それを 手伝うのは年長の子供たちだ。畑仕事など他の仕事をする女性は、子供たちをそこに朝預 けて、晩に迎えにいった。育児中の母親たちは、一日に三、四回保育所に戻って授乳した。 衣服の生産は、程度の差はあったが、ほとんどの農園で行われていた。一部は織機小屋 を持ち、そこでその農園で消費される衣服のほとんどが織られた。また一部の農園では、

衣服生産は購入した布を使い、縫製だけに限られていた。ときには、こうした作業は個性が自分自身の家で行った。これは天候が悪かったり農閑期だったりする時期だ。またときには、特別な建物で常任の衣服担当職員が割り振られた。オルムステッドは、あるきわめて大きな農園の織機小屋について描いている。そこで雇用されている一ダースの働き手のうち、一人は「気狂いで、その他のほとんどはかたわであり、慢性的な問題を抱える役立たずか、年齢などの欠点により畑仕事に適さない連中である」と描写している。

オルムステッドの描写は、農園の効率性が持つ別の側面に光を当てている――極度に高い労働参加率 (労働力に含まれる人口の比率) だ。自由経済――北部と南部――では、おおむね人口の三分の一が労働力に含まれる。奴隷の場合、労働参加率は三分の二だった。労働力に参加できる奴隷はほぼ一人残らず働いた。これはおおむね、畑作業や与えられた仕事をやらず、その嗜好に応じて遊んだり、教育を受けたり、家事に専念したりといった選択を行うという道が、奴隷、特に女子供にはなかったせいだ。農園が、自由社会 (特に自由な都市社会) では概ね仕事に就けないような者――精神病者、身障者、高齢者――でも、相当部分を雇用する方法を見つけられたのはこの南部の制度的な仕組みのおかげだ。

農園は、人口の労働力動員比率が高かっただけではない。自由社会で見られるよりも、潜在労働力を「フルキャパシティ」に近い形で稼働できた。これは別に、奴隷が自由農民に比べて、一日あたりの労働時間が長かったせいではないし、週の労働日数が多かったせいでもない。手持ちの最高の証拠を見ると、奴隷も自由農民も、作付け、耕作、収穫という繁忙期には、週にだいたい 70-75 時間働いていたらしい。また奴隷の年間労働日数が多かった様子もない。奴隷たちは日曜は休日だったし、また土曜日の多くも半ドンか全日休みだった。そうした休みは、農閑期に集中することが多かった。また追加の休日が、最大1週間かそこらもらえた。一部は事前に決まった時期に与えられる、クリスマスや、また耕作の終わりから収穫開始までの仕事がない期間の休みだ。また一部は仕事をうまくこしたときの、不定期なごほうびだ。年間に12日ほどは病気休みだった。だから年間の労働日数は265-275日くらいだったらしい。

労働キャパシティ稼働率の高さは、部分的には農民の通常の基準からして、労働の驚くべき集約度から生じたものだった。農園の黒人農夫たちは、「工業化以前の仕事のリズム」に馴染みのない「普通の農民」どころか、南北戦争以前の工場で一般に見られたルーチンよりも、現代の組立ラインに似た労働方式の下で働いていたのだった。

工場労働者にとっては、機械のほうを自分たちの慣れ親しんだリズムにあわせるよう調整するのは簡単だ。だが奴隷たちは、作業監視人が設定したペースを変えさせるわけにはいかなかった。南北戦争以前の製造業は、ほとんどが手工業の作業パターンに基づいていたのだ。分業はまだかなり低水準で、作業の相互依存も限られていた。

ちょうど大農園が初の大規模な科学的に運営された事業組織であり、農園主たちは大規模な科学的人材管理を行った初の集団だったのと同様に、黒人奴隷たちは後に工業化社会の特徴となる労働リズムで訓練を受けた、初の労働者集団となったのだった。「工業化社会以前の農民的発想」を温存していたのは、奴隷たちではなくオルムステッドのような人々だ。だからこそ彼らは、黒人農夫たちが実現していたチームワーク、協調性、活動の強度を見て「かれらの愚かでつらそうな、機械じみた働き方は見るのがつらかった」と思ってしまったのだ。オルムステッドの嫌悪感はわからないでもないが、それでも集団方式が非効率だと結論したのはまちがっているし、奴隷労働の品質をバカにしたのは見識に欠けていた。

労働キャパシティの高い稼働率はまた、別の意味でも農園事業の規模による恩恵を受けていた。仕事と能力とを柔軟にマッチさせやすくなるということだ。これは高齢者の場合に最もはっきり出る。自由農場や農園では、育児は高齢者に任された作業だった。だが自由農場のおばあちゃんは、ほんの数人の子供の面倒しか見なかったが、農園のおばあちゃんは、農園保育所で何十人もの子供たちの面倒を見た。かなり多くの高齢奴隷や、精神や身体の能力で作業に制約を持つ奴隷を抱えていた農園主は、そうした人々の労働を活用するため、機織りなどあまりきつくない事業を促進するほうが有益だった。こうした農園生活の特徴は、第3章の結果の一つ、つまり70代の半ばや末になっても、奴隷たちの平均純益がプラスになっているという現象の理由の一つとなっている。

奴隷労働の質と人種差別

大規模な奴隷農園は、自由南部農園よりも 34%効率性が高かった。この優位性は、土地や機械を使う特別なやり方のおかげではなく、農園労働の性質が特別だったことからきていた。大規模農園は、土地や設備 (価値で見たもの) を労働者一人あたりで多く使っていたのは事実だ。だがこの制膣は効率性指標を計算するときには考慮されている。言い換えると、大規模農園で奴隷が南部の自由農民たちよりもよい土地で作業を行い、設備も多かったことについて補正しても、大規模農園は自由農園よりもまだ 34%も効率が高いのだった。農園の優位性、少なくともこれまで計測されたものは、農園主の優れたマネジメントと、黒人労働の高い品質のおかげだ。ある意味で、優位性のすべては奴隷労働の高い品質のおかげだ。というのもマネジメントの主要な狙いは、労働の品質改善を目指すものだったからだ。この努力の成功のうち、どれだけがマネジメントのおかげで、労働者がそれにきちんと答えたおかげがどの程度かは、重要な問題ではあるが、それを解決するのは現在の技法や手持ちデータの範囲を超える。

だがマネジメントの寄与がどの程度だったにせよ、そのすべてを白人農園主や監督たちの手柄にするべきではない。というのも黒人は——奴隷で、南北戦争以前の時代の経済的なはしごをどれほど登れるかについて、極度に制約されていたにもかかわらず——農園マネジメントの重要な一部であり、その立場から農園の経済的成功にも大きく貢献していたからだ。

奴隷たちは二つの水準で、農園のマネジメントに参加していた。奴隷は作業監視人やグループ長としてどんな農園にでもいた。畑では、作業監視人たちは、それぞれの作業グループが日々の目標を確実に達成するようにしたし、そのグループがタスク方式で活動していたら、それぞれの農夫の日々のタスクを決めるのも監視人だった。作業グループの目標は、ときには農園所有者や監督が決めることもあった。またその他の場合には、そうした目標設定も作業監視人の裁量に任された。

奴隷たちはまた、実際に農園を所有することを除けば農園監督の最高レベルでも活動していた。監督あるいは総マネージャーとして活動したのだ。監督として活動する奴隷は、労働力の全体的な方向性のみならず、各種の事業上の判断についても責任を負った。そこには個別の畑の運営や備品購入も含まれる。そうした場合、農園運営の生産サイドすべての成否は、こうした奴隷の肩にかかっていた。所有者たちの関心のほとんどは、運営の商業的な側面に向けられた——作物のマーケティング、機器の購入、新しい土地の購入など——あるいはたずさわっていた農業以外の事業にも向けられた。

奴隷がときどき、監督や総マネージャーとして働いていたことを認識していた学者は多い。だがそれは珍しいケースで、ほとんどの大規模農園では、生産の総マネジメントは白人監督の手に握られていたと思われていた。白人監督はどこにでも見られるものと想定されており、百人以上の奴隷がいる農園にはほぼすべて、奴隷が 50-100 人の農園でも大半にいるものと思われていた。すでに指摘した通り、国勢調査の手書きデータを見ると、この想定は否定される。奴隷百人以上の農園のうち、白人監督を雇っているのはたった 30%だ。小規模の農園だとその比率はさらに低かった。

大規模農園の多くでは、農園主たち自身が監督の機能を引き受けたのだと思われるかもしれない。国勢調査の手書きスケジュールのデータを見ると、この可能性はほとんどの場合に否定される。監督のいない大規模農園の中で、61%は19歳以上の成人男性が家族に一人しかいない。こうした場合には、現地に住んでいる家族のうち、成人男性は農園主自身しかいない。あるいは父親が不在か他界しており、唯一農園に残った息子がそこを運営していることもある。いずれにしても、監督の仕事を引き受ける二人目の家族はいなかった。最大の農園6%では、19歳以上の成人が二人以上いたが、その二番目は少なくとも70歳以上で、おそらくは農園の事業のビジネス面に積極的に関与するには高齢すぎていただろう。

また農園のうち 9%は、19 歳以上の男子が農園にだれも住んでいなかった。だから監督のいない農園の 75%では、監督の任務を引き受けられる息子などの男性がいなかった。この結果が示唆する結論は驚くべきものだ。大規模農園の大半において、所有者ではないトップ管理職は黒人だったということなのだ。

是非とも答えがほしい質問は、なぜこんなに多くの学者たちがこの問題について、ここまでひどくかんちがいをしてしまったのかということだ。理由の一部は、手法的な問題にある。農園マネジメントの性質をめぐる歴史学者たちの見方は、所有者と監督との間のやりとりに基づいたものだ。だがこうしたやりとり(監督への指示書も含む)は所有者たちが自分の農園で暮らしていないときに生じる場合が最も多い。だからこれまでの歴史学者たちは、偏った標本に基づいて結論を出していた。全体の代表にはなっていない、かなり少数の農園群に基づいて結論を出していたのだ。おそらく不在所有者たちは、在住所有者たちよりも白人監督に頼る場合がずっと多かっただろう。その理由はいろいろあるが、法律で奴隷だけで自分たち自身の監督を行うのが違法とされていたせいも大きいはずだ。

また、多くの歴史研究者たちが、奴隷制の経済的な糾弾論を書く著者たちの議論を受け入れたやり方も一因だろう。農園主たちですらいい加減で怠慢なシステムで、高品質な奴隷マネージャ階級が生まれるなどとはだれも思うまい。また黒人の大半が「最も粗雑な形の労働以外は何もでき」ず「仕事から逃げ」「安定したルーチン」を維持できず、「どうしようもなく怠惰で」「器用さに欠け」、「少しでも配慮、事前の考察、柔軟性」を必要とする活動にはすべて不向きだったなら、有能なマネージャーを少しでも輩出できるはずもない。この仕組みが、奴隷の個人的、知的な発達の機会をすべて潰した、という想定を受け入れるのであれば、単に一貫性だけから考えても、奴隷はあらゆる責任ある役職から排除されていたはずだということになる。

実におもしろいことだが、オルムステッドはこんな考え方の一貫性を示さなかった。黒 人大衆の質については見下していたくせに、作業監視人として働く黒人の質については高 く評価していたのだ。

作業監視人の選出においては、身体の大きさと強さが重視されたようだ――少なくとも私が見た作業監視人のほとんどは、背が高くて屈強な男たちだった――だが通常の奴隷が持ち合わせているとされることの多い水準よりも高い精神能力を必要とする、かなりの判断力がまちがいなく求められる。よい作業監視人はきわめて価値が高く、通常は終身職だ。その権限は、畑での労働指示に限られず、黒人たちの全般的な行動にまで広がっている。彼は警官の仕事、さらには警察署長の仕事までやらされている。たとえば X 氏の農園では、居住地の秩序維持も作業監視人の仕事

だ。そして男女問わず争う二人がいたら、すぐに彼らを引き離して「二人とも鞭打つ」のが彼の仕事だ。

作業グループにより畑作業が始まる前には常に、それを監督する作業監視人が、作業を計測して割り振らねばならない。これを不整形の畑で多少なりとも正確に行うためには、かなりの計算能力が必要だ。作業監視人が、杭を打つ少年を助手に、一日 40 エーカーを半エーカー単位の作業に正確に区切るのだと聞かされた。そこで使われる唯一の道具は、五フィートの計測棒だけだ。作業グループが畑にくると、彼は各人に、その日の仕事を指示して、それからみんなの間を歩いて、それぞれがきちんとやっているかを見張る。もし、一日頑張って仕事をした後で、作業のむずかしさの見極めを誤ってその集団に過大な作業を割り当てたとみれば、その作業が終えられなくても許すこともある。だが作業時間を延長することは認められていない。未完の作業があれば、その作業グループは翌日に新しい作業に移り、そしてその中から必要十分なメンバーたちが選ばれて、その日のうちに前日の未完作業を終える仕事にまわされる。作業監視人と働く農夫たちとの関係は、海軍における甲板長と水夫たちとの関係に似ている。あるいは陸軍における軍曹と二等兵の関係だ。

一般には農園で長く経験を積んでいるので、作業監視員の助言はあらゆる管理運営で利用されており、彼らがしばしば実質的な管理職になっている。農園経済の重要な点についての司令は、しばしば農園主から作業監視人に直接下され、監督はそれについて何の相談もないし、その指令を報されもしないことも多いと聞く。そして米の畑にいつ、どれだけ水を流すかを決めるのも、しばしば彼らに任される――農場主や監督は、彼らのもっと経験豊かな判断に任せるのだ。作業監視人がしっかりして、経験豊かで信頼できると、監督は単なる形式として雇われるだけのことも多い。あらゆる奴隷集団に白人による監視か存在を義務づける法律に準拠するためだけにそうするのだ。そうした監督の仕事は、統括するよりは検分して報告するだけだ。X氏は自分の監督を、異様に効率的で忠実だと考えているが、それでも法律で義務づけられていなければ、自分が数ヶ月留守にする夏の間ですら、彼を雇ったりしない。彼はときに、監督をクビにした後で、作業監視員の一人に農園の世話をかなり長期に任せたことがある。だが、そのときにも普段とまったく遜色ない形で監督されていたと考えている。彼の監督は、あらゆる重要な点で作業監視員たちに相談し彼らの助言に左右されている。

奴隷の監視人たちとしばしば相談して、彼らの判断に従ったり、監督たちにそうするよう固執したりした農園主は「X氏」だけではない。また黒人監視人の質の高さに触れてい

るのはオルムステッドだけではない。ヒッコリー・ヒル農園の所有者マクブライドが長旅に出たとき、各種作物の作付けや耕作手法について、監督官たちに詳細な指示を書き記した。だが米についてだけは、マクブライドはこの作物について自分の知識が乏しすぎて指示を出せないから、監督官は「昔からの米栽培者」である監視人に相談せよと述べている。同様にチャールズ・マニゴールトは監督たちに対し、「それについてはそこを仕切る黒人たちのほうがずっと経験豊か」だから「米の脱穀における打穀と管理にはあまり口だししないよう注意しろ」と指示している。農園主たちが、奴隷の作業監視人など低位の職員たちの知性や判断力を高く評価していたという間接的な証拠は、農園主と作業監視人など尊敬される奴隷たちとが直接相談をするために、自分たちの権威が軽視されているという苦情がしばしば見られることだ。まちがいなく一部の作業監視人は、自分と監督のどっちがえらいかを競うような挑発をわざと仕掛けたはずだ。そうした場合の多くで、黒人監視人のほうが成功し、監督はクビになったり辞職したりした。白人監督を活用した農園の多くでは、監督の回転率はかなり高かった。

奴隷の質が、一般労働者としても管理職としても、南北戦争以前の奴隷制批判者たちによって、これほど完全にまちがった描かれ方をしたというのは、彼らの人種差別的な近視眼がいかに強かったかという証拠だ。黒人労働のまちがったステレオタイプ (今日もなお黒人につきまとうステレオタイプだ)を造り上げたのが、人間家畜を隷属の鎖につないだままにしておこうと苦闘した抑圧者たちばかりではなく、奴隷制への最も激しい反対者たちでもあり、隷属の鎖を破壊するために、きわめて頑張って働いた人々だったというのは、何と苦々しい皮肉であることか。

こうした無能というまちがったステレオタイプが、一世紀以上にわたり黒人におしつけてきた苦しみは十分に承知している。社会科学者としての私たちは、イデオロギーが現実を踏みつけにする力についての、この突出した実例にはどうしても感銘を受けてしまう。そしてこれは、人生の思想と物質的条件との複雑な相互関係を検討する、またとない機会だと思ってしまう。ここでの問題は、こうした黒人についてのまちがったステレオタイプがどうやって生まれたか、というだけでなく、なぜそれがこんなに長続きしたのか、という点でもある。前者の問題を解決するには、奴隷制の批判者と擁護者、北部と南部の白人たち——というのもごくわずかな例外を除いてはみんな人種差別主義者だったからだ——が持っていた各種の人種差別的な観点が、どのように相互作用して、ほとんど鉄壁のような黒人無能イメージをつくり出したのかを検討する必要がある。二番目の問題を解決するには、なぜ奴隷社会を研究してきた数多くの歴史学者や社会科学者たちにとって、このイメージを突破して、それが隠してきた現実を発見するのがなぜそんなに難しかったのか、という検討となる。

こうした問題に決着をつけたいのはやまやまながら、それは不可能だ――単にそれが本 書の範疇を超えるからというだけではないし、私たちの専門領域を超える技能が必要だか らという話にとどまるものでもない。むしろ、こうした問題の様々な側面をきちんと扱う ためには、まだまだ研究が必要だからだ。それでも、最終的な解決で考慮すべきだと考え るいくつかの考察事項を示唆するまたとない機会だし、ここでそれを利用しない手はない。 一つ、ほぼ疑問の余地がないのは、黒人が無能だという信念は、19 世紀前半に脚光を浴 びた人種理論によって強力な刺激を受けたということだ。こうした理論は北部人、南部人 を問わず、奴隷制の批判者だろうと擁護者だろうと採用していた。この理論は、黒人と白 人は生物種として別物か、少なくとも黒人はヒトという種の中で「劣った変種」だと主張 していた。そうした生物学的な欠陥は、彼らがアフリカ起源であるせいが大きいとされた。 人種の差を地理的な要因のせいにする者もいた。だから黒人たちは「鈍重で不活発な脳」 を持つとされた。これは「温暖な気候の住人」の特徴とされていた。またヒトによっては 黒人の後進性をその野蛮な先祖に根差すものと考えた。原因はどうあれ、黒人種の生得的 な劣等性は、怠惰さ、限られた知的能力、子供じみた単純性、従順さ、情欲、かんしゃく 持ちという形であらわれるとされた。こうした人種差別的な見方は、単に世間の通俗的な 見方の中でのみ一般的だったわけではない。それは19世紀半ばの人類学における、有無を 言わさぬ信条であり、それはアメリカだけでなくヨーロッパでも同様だった。

奴隷制の批判者も擁護者も、黒人たちの生得的な劣等性を確信していたが、奴隷制が黒人の自然な生得能力に与えた影響については、両者の間で重要なちがいがある。奴隷制の批判者たちは、隷属が黒人の発達の足を引っ張っただけでなく、その天性が持つ卑しい部分を悪化させたのだと考えた。奴隷制は黒人を不精者に仕立て、生産性よりは怠惰さを好ませ、あらゆるものから逃げようとさせ、ウソをつき、盗むよう仕向ける。奴隷廃止論者たちは、奴隷制が黒人の発展を阻害すると信じていた。それは奴隷制が個人の業績を認知して報酬を与えることができず、努力を引き出すのに鞭に頼り、労働を苦痛と同一視させるからなのだという。彼らはまた農園型の組織は黒人を、白人との接触からかなり切り離してしまうので、優れた白人文化を採り入れる能力が阻害されるのだと考えた。だから彼らは、召使いと農夫とを区別し、前者のほうが知的にも文化的にも発達していると想定した。白人ともっと密接に接触していたから、というわけだ。

奴隷制の擁護者たちは、この仕組みが黒人にとって有益な発展をもたらしただけでなく、彼らをまさに能力の限界にまでおしやっていたのだと主張する。黒人は劣等人種ではあったが、奴隷制という労働組織の下で、黒人は白人労働よりも頑張ってはたらき、もっと多くを生産するように導かれたのだった。このようにして黒人の生来の怠惰さが回避されたばかりか、その中で最も才能ある者たちは、工芸やもっと高次の技能の訓練を受け、奴隷

制の下で「神が最初に彼らをお造りになった条件から引き上げられた」地位を獲得しただけでなく、自由の下で実現できたどんなものよりも、明らかに立派な存在になれたのだった。というのも、奴隷労働が「自由な黒人の労働よりはるかに効率的で生産的」なのはだれでも知っていることだったからだ。

明らかに、この路線で行われた論争は、黒人の無能ぶりというステレオタイプを強化する方向にしか作用しない。というのもどちら側も、黒人の生来の無能ぶりなるものを疑問視することは一切なかったからだ。むしろ論争が重ねられるごとに、生来の無能という主張を文句なしの真実へと高める結果となった。奴隷制の批判者たちは、南部の生産の欠点を強調し、それが劣った人間の労働に基づくだけでなく、あらゆる労働の質を劣化させる仕組みのせいだとして、その仕組みが黒人だけでなく白人の努力の質も劣化させるのだと言う。奴隷制の擁護者たちは生産の傑出した業績について、黒人労働の質の高さではなく、基本的には劣った人材からこれほどの成果を挙げた奴隷制の成功のおかげだと述べる。

オルムステッドが当時の人種観を完全に受け入れていたのは、その著書を見れば明らかだ。奴隷制が白人労働に与える劣化効果に抵抗できるのは、南部の白人の中でもドイツ人たちだけらしい。彼らはまちがいなく、やる気があって効率的だとされる——事業精神に富み、倹約家で、野心ある小地主たちのお手本そのものだ。これに対して、オルムステッドが南部で出くわしたユダヤ人といえば、「没個性的」な金貸しだけで、とんでもない高利貸したちだった(「しばしば(中略)年率25%を上回る金利を課した」)。彼らは薄汚い家に住み、「淡彩暮雲黒人たちを相手に違法取引に」いそしんでいた。

同様に、アイルランド系は「バカな土方」で、労働についての劣化する南部的態度にすぐに影響されてしまい、おかげで彼らは、奴隷よりも望ましからぬ労働の地位にまで低下してしまうのが通例だ。南部と北部の労働者を比べる話になると、オルムステッドの北部人優位主義が必ず前面に出てくる。彼の描いた北部労働者の姿を読んで、自分の従業員たちのことだと思える北部の雇用主はまずいなかったはずだ。北部の労働者たちはほぼ例外なしに、きわめてやる気があり、真面目で、自主性があり、礼儀正しく、通常はきわめて高い行動規範に照らして、わずかな失敗があってクビになったときですら、礼儀を失わない。オルムステッドの、白人労働と比べた黒人に対する歪んだ見方と、北部労働に対する南部の劣等性についての歪んだ見方は、彼が南部旅行に持ち込んだ人種的な思いこみに影響を受けていたのはまちがいない。

だが話をそこでおしまいにしたら、事態をひどく単純化することになってしまう。というのも偏見こそあれ、オルムステッドはきわめて鋭く真面目な観察者で、奴隷労働の仕組みを独得にしている特徴と、それを自由労働の仕組みとちがうものにしている特性を見つけようと苦闘していた。彼の偏見はまちがいなく、観察した事実や報告された話を誤解す

るように仕向けてはいたが、そうした誤解をもっともらしいものにするような、緩和状況がなければ、おそらくそんな誤りには陥らなかったはずだからだ——つまり彼の結論を裏付けるか、少なくとも裏付けているように見える重要な要素があったはずなのだ。

オルムステッドを混乱させた奴隷制の特徴の一つは、きわめて高い労働力参加率だった。 全奴隷の 67%が労働力となっており、労働者の三分の一は訓練もない手元のおぼつかない 子供だった。それよりは少ないがかなりの割合は高齢者や、身障者または何らかの生涯を 持つ奴隷だった。重労働をこなす身体能力が男性よりも限られている女性もまた、自由労 働力と比べた場合、ずっと比率が高かった。双方の年齢、性別、健康構造がここまで大き くちがうので、奴隷労働者の「平均」生産が、「平均」自由労働者の生産量よりも少ない といえる面はある。

オルムステッドは、奴隷と自由労働者の効率性をまともに比較するためには、二つの労働力の年齢、性別、健康のちがいを補正しなければならないことは認識していた。彼は農園主たちによる、子供や高齢者、障害者を壮年の健康な農夫のそれぞれ八分の一、四分の一、その他の比率の労働力として格付けするやり方が正当だというのも受け入れた。自由農民と奴隷労働の相対的な効率性の問題をめぐる彼の公式の議論では、年齢、性別、健康の構成という問題を避けるために、奴隷と自由労働者の「男と男を比較し、単純に筋力と耐久力だけを見ることにした」

オルムステッドは、原理的には補正の必要性を認識していたが、労働力にこれほど多くの女子供や高齢者、障害者がいるのを目撃した心理的な影響は、最後まで克服できなかったようだ。奴隷労働の非効率性の事例として彼が挙げるものの多くは、こうした労働者から採ったものだ。これは特に、「沿海州」への最初の訪問について言える。そこでは奴隷との直接の対面は、多くがホテルや奴隷所有者や監督の自宅で行われた。こうした場所なら、彼の奴隷との接触は、子供と高齢者にかなり偏っていたはずだ。彼はしばしば召使いたちの無能ぶりについて述べる。火をつけようとして手間取り、主人をしばしば遮るという。オルムステッドによれば「彼らはご主人のところに子供のようにやってきた。奴隷たちは何か仕事を与えられるが、絶えず単純かつ自信をもって奨励され指導されたがっている」。だがそれは当然なのだ。そうした召使いの相当部分は、農夫としての活動を始められるほどの歳になっていない子供たちだったのだから。

この最後の点は強調しておくべきだ。というのもそれは、家の召使いと農夫との間の文化的な発展について、ずいぶん重々しい区別をしてみせる人々の議論にある誤謬をあらわにしているからだ。遺言記録や農園登記のデータ分析によれば、15-40歳の男性で家の召使いだった人物はほぼいない。召使いたちは一般に 15 歳未満の若者か、40 代末、50 代、60代、70代の人々だった。だからまず家の召使いとして働き始めた子供たちは、間もなく畑

の労働に加わり、また召使いとなった高齢者はおおむね、農夫たちから出てきたというのがありそうなことだ。壮年で最も傑出した男性奴隷は作業監視人たちだった。男性農夫のトップは、歳を取ると工芸職人へと移行した。傑出した女性は、もっと位の高い屋内作業に回された。もし一部の召使いが、平均的な農夫よりも有能に思えたとしたら、それは過去の畑での実績に対するご褒美として、人気の高い屋内作業を割り当てられた奴隷との遭遇のせいだったかもしれない。南部旅行者の見方はまた、こうした奴隷たちが比較的高齢で成熟していたことに影響された可能性がある。

オルムステッドを他の何よりも混乱させたはずの問題は、奴隷農園への最初の訪問のときに前面に出てきた——メリーランド州の小麦農園で、彼はそこを1852年12月14日に検分している。彼がそこで見た奴隷たちは、農作業には従事しておらず、農園建物のまわりで作業をしていた。その農園の所有者はオルムステッドに、溝掘りに白人労働者を何度か雇ったことはあるが、白人を「一般の農作業のために雇うなど、奴隷との競争において彼らの占める地位を考えれば考えられないと語ってくれた。黒人たちは鍬作業やその他のしっかりした畑作業において、『白人二人分の仕事』をこなしてくれる、と彼は断言した」

オルムステッドは、この農園主をそれ以上問いたださなかった。彼は明らかに、農園主の黒人労働力の質に対する高い評価を受け入れるつもりはなかった。オルムステッドはこの農園の奴隷たちを「愚鈍で与えられたどんな命令を実行するにあたってもグズ」と評している。「作業を見た者は、きわめてゆっくりぎこちなく動いているようで、厩舎で作業をする者たちも同様だった」

このメリーランドの小麦農園は、別に「意地悪な白人」が経営する、おんぼろのみすぼらしい農場ではなかった。それはオルムステッド自身も言うように「立派な農場」で、面積二千エーカー以上で、「優れたマネジメント」の下で運営されていた。母屋は「古いフランスの古城のような趣き」さえあり、「しっかりした針金の柵」と、「見事に砂利をひいて圧し慣らしてある」道を持ち、乳しぼりには「サラブレッドのショートホーン」を揃えていた(「これほど立派な乳搾り部隊にはほとんどお目にかかったことがない」とオルムステッドは述べている)。そして低地の排水設備は実に見事な作りだったから「二十年にわたり故障しらず」だという。農園主の肥料に関する実験にオルムステッドは大いに感心して、それを特筆しているほどだ。どうしてこれほど鋭敏な農園主が、自分の労働者の質についてこれほどひどい自己欺瞞に陥ったりしたのだろうか?この人物は農場マネジメントでの傑出ぶりによって「全国的な評判」を得ていた人物だったのに。そして、「愚かでだらしない」、動きが「きわめてグズで」、「効率的に導くのがきわめて困難だった」のが「まちがいない」労働者たちによって、なぜここまでの繁栄を実現できたのだろうか?

これはオルムステッドのかんちがいだった。彼がこの農園で観察したのは、冬の休耕期

における、奴隷たちの気楽なリズムなのだった。冬小麦の作付けは、オルムステッドがやってくる一ヶ月前に終わっていたし、トウモロコシなど他の作物の収穫も、彼が来る頃にはとっくに済んでいた。これは物事の準備期間なのだった――柵を直し、厩舎を徹底的に掃除して、道路を舗装しなおす――どれも重要な作業だが、集約的な活動を必要とするようなものではない。作付け、耕作、収穫という切迫した作業は、すでに終わっていたか、まだ始まっていなかった。これまで述べたように、最初の旅行でのオルムステッドの旅程は、収穫と作付けの間の休耕期にぴったりはまっている。南部に移動し、さらに西の綿花地域に向かうときも、一般に収穫の終わりが遅く、作付け開始が遅い地域へと向かった。ジョージア州、アラバマ州、ルイジアナ州という、12 月半ばでも綿花摘みが行われている地域に移動したのは、すでに二月になってからだ。ルイジアナ州を発ったのは、新しい作付け季節(三月末から四月頭に始まる)がやってくるずっと前だ。

だから、奴隷の典型的な作業リズムについて、オルムステッドは「沿海州」を旅するにつれてますます自分の見解に自信を深めていったのだが、それはまたもや代表的とはいえない証拠のサンプルに基づいたものだったのだ。オルムステッドはどうやら、南部の農閑期における奴隷たちのゆったりした仕事ぶりが、一年の他の時期にも続いていると思い込む誤りを犯したのだった。その後の二回にわたる旅行で、オルムステッドはもちろん、作付けと耕作の典型的なリズムも目撃した。だがその頃にはすでに、最初の旅行で目撃したペースが普通なのだと思い込んでしまい。このためその後の集約労働との遭遇はすべて、例外扱いしてしまったのだった。

黒人は無能という嘘がしつこく残る理由

アメリカの歴史学で、黒人が無能だというウソがしつこく残る主要な理由は人種差別だ。 20世紀に書かれた本の中で、奴隷生活の解釈に U・B・フィリップス『アメリカ黒人奴隷制』以上に大きな影響をもたらしたものはないだろう。この本が、黒人たちは人種的に劣っているという主張に著者が準拠していたため大きく歪んでといっても、今日の歴史家で反対する人はまずいないはずだ。この論点はフィリップスの批判者のみならず、その擁護者たちでさえ認めている。

だが 1918 年に『アメリカ黒人奴隷制』が刊行されたときには、状況はまったくちがっていた。本書の主要な書評家のうち、フィリップスによる黒人の扱いを攻撃したのはたった二人だった——そしてその二人とも、当時の歴史学の主流にはいなかった。その書評子の一人は N.A.A.C.P.の広報と研究部長でありその機関誌『クライシス』編集者だった W. E. B. デュボイスだ。デュボイスは『アメリカ黒人奴隷制』を「不思議なほど不完全で残念なほ

ど歪んでいる」と評した。

この本では、責任ある人間としての黒人は一切登場しない。確かに個別の黒人があちらこちらで採りあげられてはいる。だがもっぱら例外としてか、あるいは彼ら自身とは関係ない議論を描く例示として出てくるだけだ。普通の人間的な反応をすべてもつ、生計を立てている人間たちの集団としての「クロンボ」「ニガー」「黒人」(本書の中ではこのままの表現がやたらに使われている)についての適切な描写はまったくない。(中略)

フィリップス氏は何度となく、黒人たちの生来の性質に触れている。彼らは「従 属的」で「お調子者」で「恩知らず」(p. 342)であり、「ひけらかすのが大好き」(pp. 1,291) で「迷信に弱く」「従属を受け入れやすい」(p.291); 「おどけておしゃべり」 (p. 292) で「つつましいお気楽さと、悩みや心配からの自由」(p. 416) を備えている。 14世紀から20世紀まで、フィリップス氏は黒人のほとんどについて、主な特性は本 質的にまったく変わっていないという。そして南部の YMCA 陸軍小屋でこの本を脱 稿している間も、彼が黒人兵に見出すのは「相変わらずお気楽で天真爛漫なおふざ けまみれの従属 | であり彼の耳に入るのはサイコロを投げる音だけだ (pp. viii, ix)。 この黒人の性質はフィリップス氏にとっては、固定した不変のものなのだ。一世代 にわたる自由もなんら変化をもたらしていない (p. ix)。彼が言及する少数の例外的 な黒人ですら、主にその意外な「野心」のために関心の対象となっているだけで、 何か特別の業績を挙げたためではない (p. 432)。けんかする黒人盗賊たちは「恐怖」 に襲われ (p. 466)、革命などに公的な運動における黒人の役割は「ほとんどないも同 然」(p. II6)。実際、彼の主要な描き方では「やる気のない黒人の大半は、自由人に なっても、その祖先たちが奴隷として示した効率すら実現できそうにない」(p. 396) そうだ!

これは見事な書評だったが、デュボイスの批判はほとんど無視された。当時の人類学を 支配していた、疑似科学じみた人種理論が学会でまだ広く受け入れられていた時代だから、 それも仕方ないのかもしれない。実際、デュボイスの指摘した主題が歴史学主流の学者た ちに広く受け入れられるようになったのは、二十年以上後のことだった。

他にも同じことを考えた人はいなかったわけではないが、フィリップス学派に対する一般反乱の旗印を掲げたのはリチャード・ホフスタッターの「U・B・フィリップスと農園の伝説」と題した1944年論文だった。ホフスタッターはフィリップスに対して、農園主たちの温情主義的な衝動を誇張し、奴隷生活の物質的条件をあまりに「バラ色」に描きすぎ、

黒人を「単細胞的に満足しきったおとなしい『まじめ滑稽な』生き物」として描いたという非難を投げかけた。ホフスタッターによると奴隷の扱いの本当の性質はフィリップスが認めたよりはるかに劣悪で、奴隷は不在農園主が仕事を丸投げした、過酷な監督官たちの気まぐれに曝される度合いがフィリップスの主張よりはるかに多かったのだという。ホフスタッターはまた、「奴隷たちの奴隷制に対する抵抗」の度合いを過小に評価し、その性質を歪めたとフィリップスを糾弾した。またフィリップスが優しい「主人と奴隷の間のギブ&テイクプロセス」を強調したと嘲笑した。「奴隷の条件改善が、ご主人の慈愛からではなく、奴隷の抵抗から生まれた」度合いを理解していないのだという。

ホフスタッターは論説の最後で、奴隷制の歴史を「現代の文化人類学の観点から」書き直そうと呼びかけた。これはつまり、フランク・ボアズが先鞭をつけた、人種に関する新しい見方ということだ。この見方では、知的能力を決めるにあたり人種要因は重要ではないとされている。

ホフスタッターの反乱は、一見したほど包括的なものではまったくない。ホフスタッターはフィリップスを、一般的な収益性や奴隷制の収支については疑問視していない。また奴隷労働の質、奴隷制の経済効率性、奴隷制が南部の経済成長に与えた影響については、フィリップスを疑問視していない。それどころかホフスタッターは、『アメリカ黒人奴隷制』全23章のうち、攻撃にはたった4章しか使っていない。そして収益性、効率性、成長を扱ったものについては、明確に検討から外している。

フィリップスに対するホフスタッターの攻撃が限定的だったのは、簡単に説明がつく。その他大勢と同様に、ホフスタッターの奴隷制理解は、オルムステッドを読んで構築された部分がほとんどだった。ホフスタッターはフィリップスに対し、この証人にして批判者たる人物の著作をあまり使わなかったと非難している。「オルムステッドは、正直なだけでなく、異様に鋭い観察者だった。だから南北戦争以前の末期における南部について、もっと十全で正確な知識が、フィリップス教授自身の著作よりもオルムステッドの著作から得られるのだ」とホフスタッターは書く。だがフィリップスは、オルムステッドを慎重に読んで大量に利用している。ただ、不信感は抱いていた。奴隷制の収益性や効率性の問題、さらには奴隷労働の品質と奴隷制が南部の経済成長に与えた影響について、フィリップスはオルムステッドを完全に踏襲していた。そしてこうした問題の一部について、フィリップスはゴルムステッドを完全に踏襲していた。そしてこうした問題の一部について、フィリップスは単にオルムステッドの主張を言い換えているだけだ(オルムステッド:「奴隷はこのように、『コーナリング』された株のような実態に合わない価値をつけられる」。フィリップス:「奴隷の供給が『コーナリング』されると、その価格が競り上げられて過大な価値評価となるのは避けがたい」)。フィリップスは、彼が大学院生だった頃の南部奴隷制の解

釈における歴史学の支配的権威たるジェイムズ・フォード・ローズと、革命的な決別を行ったのだというポーズは取ったし、ホフスタッターはフィリップスと革命的な決別を遂げたと主張はしたが、この三人とも――さらには彼らが象徴する、南北戦争以前の南部に関する歴史記述学派は――私たちが奴隷経済の「伝統的解釈」と名付けたものの信奉者だったのだった。この解釈は、第5章で述べたような奴隷制の経済的な糾弾からくるものだ。その主張は主に5つ:

- 1. 奴隷制は一般に投資として儲からないか、儲かるためには奴隷を取引するしかなく、それが成り立たないのは新しいきわめて肥沃な土地だけである。
- 2. 奴隷制は経済的に絶滅寸前だった。
- 3. 奴隷労働と、それに基づく農業生産は経済的に非効率だった。
- 4. 奴隷制のおかげで南北戦争以前の南部経済は停滞したか、少なくとも成長が抑えられた。
- 5. 奴隷制は平均的な奴隷の生活に極度に劣悪な物質的条件をもたらした。

フィリップスは、最後のものを以外のこれらの主張をすべて受け入れた。南北戦争以前 の南部についての解釈に革命を起こすと主張したとき、かれはこの五番目について話して いただけだ。つまり、奴隷の過酷な扱いと、その扱いが奴隷保有者の人格に投げかけた暗 い影を疑問視したのだ。フィリップスは、黒人の性格やその労働の質についてローズの主 張を覆す必要はなかった。奴隷の性格その労働の質に関するローズの見解は、フィリップ スと完全に一致していた。ローズは奴隷を「怠惰で不潔」と評した。彼らの表現は「低俗 で一般に嫌悪を催す」。その「蛮人めいた顔つきには (中略) 愚かさ、鈍重さ、怠惰さ、情 欲が刻まれている」; その労働は「愚かで怠惰で機械じみている」。淫蕩さと貞節への無関 心は「アフリカ人種の自然な傾向であり」、それをさらに奴隷制が強化した。女性が「貞 節の完全な欠如を示していた」ように男は「まったく正直さを持ち合わせていない」。そ して奴隷女性は「限られた場合を除けば何も逆らうことなしに、主人の情欲に実を任せ た」。ローズの見方によると南部擁護者たちの誤りは、黒人が劣っているという主張にあ るのではない。彼らがこの劣等性の生み出す問題に対処しようとしたやり方なのだ。「南 部の擁護者たちが、ニグロ人種は白人種に比べて劣っていると主張する限り、これは科学 的な真実に基づいている。だがこの事実が奴隷制を正当化するという主張をそこから導く のは、残酷であると同時に非論理的である」

奴隷の扱いをめぐるフィリップスの立場を否定しようというホフスタッターの呼びかけ が皮肉なのは、それが他の四つの点を同時に攻撃しなかったために、フィリップス以前の、

奴隷制の経済学をめぐる伝統的な解釈の「純粋」版再確立の方向に向かったということだった。歴史家たちが、奴隷の処遇をめぐってばかり争い、奴隷制の経済的な糾弾についての他の側面ははっきりを受け入れてしまったために、黒人は無能だというおとぎ話はずっと、金科玉条のごとくに祭り上げられる。これは南北戦争前の時代に、奴隷制の批判者と擁護者たちが、奴隷制は黒人の「自然な」劣等性を煽るのか軽減するのかをめぐって議論していたのとまったく同じなのだ。

別にホッフスタッターや、その呼びかけに応えた学者たちがローズやクレイ、ヘルパー、オルムステッドに見られたような黒人の人種的劣等性理論再確立を目指していた、というのではない。その正反対だ。ホフスタッターもその旗印のもとに集った人々も明言していたように、彼らの狙いは南北戦争以前の南部をめぐる歴史記述にしつこく残る、人種差別的名デタラメを議論の余地なく完全に根こそぎにすることだった。だが彼らが認識しなかったのは、そうした人種差別的なデタラメが生きながらえたのは、単に伝統的な奴隷制解釈の5つの要点のうちたった一つのおかげではないということだ。そのすべてがデタラメの延命に貢献していたのだった。

これはケネス・スタンプの場合にすら当てはまる。スタンプは補遺 C で指摘した通り、フィリップス以後のどんな学者 (ルイス・C・グレイは例外かもしれないが) よりも、奴隷背の伝統的解釈拒絶で突出していた。『特異な制度』でスタンプは、奴隷への投資はかなり一般的に儲かるもので、ほとんどの農園主にとってはきわめて儲かるものだったと指摘した。また、経済的な力がそれ自体だけで奴隷制の滅亡につながったはずだという考えを、南部の北の地域についてすら否定する。またスタンプは、奴隷制が工業化と経済成長を阻害したという主張を支持する証拠もまったく見つけられなかった。彼は「儲かる形で奴隷を工場で雇用できると実証できる」ような「無数の実験」を指摘し、奴隷所有者たちが農業部門で活動するのを好んだのは、南部では農業が「金融的成功への最も確実な道に思えた」からだ。

スタンプは、伝統的な解釈における四番目の主張にすら疑念を表明している――つまり、 奴隷制は自由労働に基づくものよりも経済システムとして非効率だ、という主張だ。「奴 隷制の経済的な批判者たちは、物理的な強制やそれに基づく恫喝は、インセンティブとし てかなり有効だという点を見すごしている。さらにこの仕組みがあるからといって、ご主 人たちは割り当てた作業をきちんとこなしたことについて、魅力的な報酬を提供してはい けないわけではないことも見落としている」

だがここまできて、スタンプは急に勢いを失う。奴隷は労働効率の綿で自由人と同じだという結論を出すのを、彼はためらってしまう。奴隷の生産性は「奴隷が自分の仕事に無関心というありがちな態度と、自分の隷属状態に抵抗するために考案した無数の手口とが

あいまって」、大幅に低下していたと彼は結論する。スタンプが、奴隷制は儲かるものだったという主張を維持できたのは、「自由労働が効率性の面で持っていた優位性をすべて 圧倒してしまうような」、各種の「利点」があったのだと主張したからでしかなかった。 そうした「利点」というのは、長い労働時間、女子供をもっと徹底して収奪したこと、自由人よりも奴隷のほうが実質賃金が低かったことなどだ。

スタンプは、伝統的な解釈の実に多くの部分を否定し、奴隷労働の無能ぶりというデタラメを拒否する寸前まできたのに、なぜ最後の一歩を踏み出せなかったのか? なぜ彼は、まさにその一歩を踏み出そうとしたところで、言わば急にきびすを返したのか? 答は、スタンプがフィリップスに対し、五番目の論点である奴隷の処遇の性質について反論するのにこだわりすぎたことだった。確かに、フィリップスの怠惰な描き方は糺す必要があった。農園は残虐でしかも腐敗した男たちの運営する、不道徳と無軌道な恐怖に支配された場所だったというローズの描き方に反発して、フィリップスはほとんど天国のような場所を描きだした——少なくとも「野蛮な」本能を抑えねばならない「原始的」な人種で「天然の無能ぶり」と「怠惰さ」を克服するために訓練されねばならない連中からまともに期待できるものとしては、これ以上はないほどの天国だったという。フィリップスの再構築によれば、農園主は単に善人にとどまらず、デュボイスの表現を借りるなら、超人だ。奴隷は「ビジネスというよりは生き様」になった。農園主の狙いは、儲けることよりはむしろ人間を育むこととなる。

こんな擁護論に反発したスタンプは、奴隷の処遇において残虐性が確かに不可分の特徴だったと言う証言を提供した。フィリップスが例外だと考え、ご主人階級の不文律に反するものだとした残虐性の事例は『特異な制度』では一般的なパターンとして登場する。スタンプによれば残虐性は「あらゆる奴隷保有コミュニティに蔓延していた」。「奴隷の福祉に配慮していた場所ですら、残虐行為と、奴隷制と不可分な物理的力の行使との間にはっきりした一線を引くのに苦労した」。スタンプにとって、残虐性は奴隷所有者の邪悪な性質から生じたのではなく、その仕組み自体の邪悪さから生じたのだった――というのもご主人たるもの、奴隷たちから「完全な」従属以外のものを求めるわけにはいかなかったからだ。この目標を実現するため、ご主人たちは他の面でどれほど人間的であろうとも、黒人たちに「白人に対する震え上がるような恐怖」を植えつけ、「その生来の劣等性を否が応でも自覚させ」、「完全な依存感覚をたたき込む」しかなかったのだという。スタンプは、後にスタンリー・エルキンスが持ち出す強制収容所のアナロジーは使わなかったものの、彼の描く農園は、残酷な看守のいる監獄を強く連想させるものだった。

ここからは議論として 2 種類の展開が考えられる——そして実際に、どちらの展開も見られた。一つは、エルキンスが採用した方向で、スタンプが描いたほど残酷な仕組みは、

奴隷の人格に壮絶な影響を与えたはずだと述べる。こんな残虐なレジーム下では、ひたすら這いつくばる以外に生き残ることはでいない。ヒトラーの強制収容所に入れられたユダヤ人と同様に、黒人だってスーパーマンではない。農園は収容所ではなかったが、農園を運営するご主人たちは、ユダヤ人に対するヒトラーの看守たちと同じくらいの絶対権力を、黒人に対して保有していた。そして、奴隷たちの意志を砕いてやろうという決意も同じくらい強かった。このプロセスから出現したのは「サンパ、つまり典型的な農園奴隷だ(中略)おとなしいが無責任、忠実だが怠け者で、慎ましいが慢性的に嘘つきと泥棒に走る」。サンバの「行動は子供じみた愚かさまみれ」であり「ご主人との関係は完全な依存と子供じみた執着なのだった」

スタンプは、表面的にはエルキンスとはまったくちがうように見える方向に向かうことにした。奴隷は屈服しなかったとスタンプは考えた。抵抗はした。抵抗は、革命やストライキという形は取らなかったのだ。

こんな公然とした反乱形態は自殺行為だった。アメリカの奴隷ではジャマイカやブラジルに比肩するような反乱は起きなかった。長引くゲリラ戦もなかった。アメリカでの抵抗はずっと細やかな形を採った。それは実に無邪気な形を採ったので、ご主人も監督官たちも、それを認識すらできなかった。この抵抗運動の参加者たちは「満足しているが無責任なだけだと多くの人に思われていた。弱々しいニコニコした連中だったのだ」。

彼らは自由のために命を犠牲にするような、無謀な反逆者ではなかった。反乱の考えが彼らの脳裏を横切ったにしても、成功のハードルはあまりに圧倒的だったから、そんなのを試みる必要もなかったようだ。だがその隷属の不可避性のため、それでも反乱は魅力的ではあった。だから彼らは、可能な時には仕事をさぼったり、作物をダメにしたり、仮病を使ったり、ルーチンを乱したりすることで反乱した。こうした行為は、部分的には「日常的な奴隷制への抵抗」という華々しからぬ形なのだった。

もちろん、スタンプとエルキンスの双方に共通するのは、奴隷行動の特性についての合意だ。奴隷は嘘つきで、手癖が悪く、仮病を使い、子供っぽいふるまいをして、仕事をさぼる。実際、こうした性格は奴隷制文献で、しつこい紋切り型であり続けた。どんな方向性に向かうにしても、奴隷制についての著者たちは通常、奴隷労働の劣等性という主題に戻ってきた。オルムステッド、ローズ、フィリップスにとって、この劣等性は人種要因によるものだった。ケアンズの場合、その劣等性は社会学的な起源を持つ。エルキンスだと、その原因は心理的なものだった。スタンプの場合、劣等性は「日々の抵抗」からくる。パ

ラドックスめいてはいるが、黒人が白人よりもよい働き手だと認めるにあたり、最も思い こみに囚われなかったのは奴隷保有者たちだった。だが彼らも、その優越性は自分の影だ として、その奴隷たちの能力のよるのではないと考えた。

スタンプは、奴隷労働の質が高いことを認めるための跳躍をためらった。というのも彼は、奴隷制の批判者と擁護者との論争にあまりに深入りしていたので、奴隷制の残虐性を過大に評価していたからだ。一般的な奴隷が真面目な労働者になれるし、そのご主人たちと同じくらいプロテスタントの倫理を身につけられ、彼らが自由を渇望していたとはいえ、彼らに可能だった唯一のやり方で能力を発展させ、それを向上させようと頑張った、と言う事実があっても、彼の立場の背景にあった理屈のおかげで、それをなかなか認められなくなっていたのだった。

それでも、スタンプは奴隷システムの本当の性質を解明する寸前に迫った。南北戦争以前の社会を支配していた農業資本家たちにとって、奴隷制がどんな利点を持っていたかも解明寸前だった。そのシステムにとって決定的だったのは、残虐性ではなく、暴力だった。暴力は残虐性につながることはあるし、実際にそうなったのだが、スタンプが当時信じていたほどの残虐性は生じなかった。というのもほとんどの農園主が求めていたのは「完全な」従属ではなく「最適な」従属だったからだ。この二つは概念としてまったくちがう。スタンプがそのちがいを曖昧にしたのは、以前の多くの人々同様に、レトリックと現実とを混同する傾向があったからだ。「完全」な従属は、ご主人階級におけるレトリック的な立場であり、実務的な狙いではなかった。奴隷農園を運営していた、抜け目ない資本家ビジネスマンたちは、通常は無限の暴力行使自体に陶酔するような、心理的倒錯者たちではなかった。一般には、暴力を使うのはポジティブなインセンティブを使うのと同じ目的のためだった――最低の費用で最大の生産量を実現するためだ。その他すべてと同様に、彼らは暴力を残虐性のためではなく、最適性のために使おうと苦労したのだった。

人間に財産権を設定する経済的な意味

経済学者たちは最近、資本という概念をその通常の機会や建物など動かない物体への適用から、さらに広げるようになった。資本の概念を、人間の労働を行う能力に内在する富にまで適用して、それを「人的資本」と呼ぶようになった。この概念の拡張は、最初は奇妙に思えた。というのも、それは19世紀の奴隷社会のふるまいを説明するのに使われたのではなく、20世紀の自由社会の説明に使われたからだ。奴隷社会では人間が資本の一種だったことを疑う者はいない。取引される奴隷は、土地、建物、機械と同じように具体的でしっかり定義された価格がついている。奴隷の価格は年齢、健康、技能水準、地理的な場

所によって変わったから、奴隷の職業訓練や地域間の移動は、建物の建設や柵の敷設と同じくらい投資の一形態だった。

自由社会への人的資本概念の適用が奇妙に思えるのは、自由な人間はしっかり定義された市場では取引されず、したがって市場価格を持たないからだ。だが人間に明示的な市場価格がないからといって、自由人に本当に資本価値がないということにはならない。単に、人間の取引がないから人々の資本価値が明示的にならないのが普通だと言うだけだ。自由人が資本価値を持つという事実は、産業事故で殺された人の遺族に法廷が金銭の授与を認めるときにいつも生じる。そうした支払い金額は通常、死者がその死亡時点でどのくらい資本価値を持っていたかという議論に基づくものとなる。

この観点からすれば、奴隷社会と自由社会との決定的なちがいは、人間の財産権有無にあるのではなく、そうした財産権をだれが保有できるのかという点にある。自由の下では、各人はおおむね自分自身の人的資本についての権利を持つ。法律によって、その資本の所有権を売ることは禁じられている。ただしかなり限られた期間ならそれができるが、その場合もきわめて制限された条件の下でしか認められない。さらに、人は一般に他人の人的資本の所有権を売ることはできないし、そんな販売が許されても(たとえば映画スターやスポーツ選手の契約、あるいは未成年の親や保護者の場合など)、その所有権は比較的短期間だけ譲渡され、しかも厳密に定められた制約がある。だが奴隷社会では、多数の個人が永続的に、自分自身の人的資本についての所有権を奪われていた。その所有権を保有する人々(ご主人様たち)はそれを売却する能力について、法律で何の制限も受けないに等しかった。そして女性奴隷の所有権は、その子孫すべてに対する所有権も永遠に含んでいた。

南北戦争以前の南部が人間の財産権という問題を扱った特別なやり方は、どのようにその社会の経済的なふるまいに影響しただろうか? 奴隷性の下で実施されていた財産権システムは、特別な経済的優位性を奴隷所有者に与えただろうか、そしてそれはどんなものだったのか? この財産権の仕組みは、ご主人、奴隷、自由な南部人、自由な北部人の実質所得にどう影響しただろうか? これらは目新しい質問ではないが、数量経済史研究者たちの研究結果の一部は、新しい回答を示唆している。特に重要な二つの結果は以下の通り:

- 1. 南部農業の規模の経済は、奴隷制だけによって実現した。
- 2. 奴隷労働に対する都市需要はかなり弾性的だったが、農業需要はきわめて非弾性的だった。

この最初の結果は目新しいものではない。オルムステッドは、規模の経済は奴隷制でのみ実現されたことに気がついていたし、この問題にはっきりと取り組んだ。実に彼らしい

ことだが、オルムステッドの結論は、小規模の自由農家が「共同株式綿農園」という方式を通じて大規模農園へと合併しなかったのは、彼らが無知で事業精神がなかったからだというものだ。だがすでに見た通り、小規模自由農民は別にまぬけではなかった。また事業精神が欠けていたわけでもない。多くの小規模自由農家は、大規模奴隷農園の農場主になった。奴隷労働に特に優位性がなかったなら、そうした事業精神のある個人の少なくとも一部は、自分たちの農園を自由労働に基づくものにしたはずだ。規模の経済が奴隷労働によってしか実現できなかったという事実は、明らかに大規模生産においては奴隷の使用に特別な優位性が存在するのだと示している。

なかなかおもしろいことだが、都市産業での大規模生産においては、奴隷が特に優れたり劣ったりしていたという証拠はない。一部の大規模工場は奴隷労働だけに頼っていたし、また自由労働だけに頼っていたところもあった。多くの都市企業、おそらくそのほとんどは、その両方を組み合わせて使っていた。たとえば南部最大の製鉄所で、全米四位の製鉄所だったトレデガー鉄工場では、奴隷がときに労働力の半分を占めていた。二番目の結果——奴隷に対する都市の需要は弾性がかなり高かったというもの——は、都市の文脈では奴隷と自由労働者がかなりよい代替物だったことを物語っている。自由人の賃金に比べて奴隷価格が上がったら、都市企業は奴隷労働の雇用を減らして、自由労働の雇用を増やした。そして自由賃金に比べて奴隷価格が下がったら、こうした都市企業は奴隷労働に戻った。

だが農業では、奴隷需要はきわめて弾性が低かった。つまり奴隷を使う農業部門においては、自由労働は奴隷労働の代替にはまったくならなかったということだ。奴隷価格と自由賃金の比率が変わっても、大規模農場の奴隷労働選好にはまったく影響がないも同然だった。奴隷価格が自由賃金に比べて急上昇したときでも、大規模農園の労働力は圧倒的に奴隷のままだった。だから奴隷労働にどんな特別な優位性があったにしても、それは大規模農業事業での利用に限られるものだったわけだ。

奴隷が大規模農業事業で持っていた独得な優位性を見極めるためには、経済学者の言う「金銭」所得と「非金銭」所得の区別が必要になる。金銭所得は、金銭あるいは現物による、何らかの物質的な所得だ。金銭所得は国民所得会計に計上され、したがって「計測」所得とも呼ばれる。非金銭所得は、物理的な実体はなく、国民所得会計に計上されない。非金銭所得は、プラスにもなるしマイナスにもなる。たとえば、ハーバード大学の教授陣が稼ぐ非金銭的な所得は、大規模なプラスだと思われている。というのも他の大学がずっと大きな金銭収入を提示しても、教授陣は通常はハーバードに残るほうを選ぶからだ。ハーバードの教授が実際に受けとる金銭的な所得と、他のところで彼らが得られる稼ぎとの差は、こうした学者たちがハーバードにいることで得ている非金銭的な便益の評価の、大

まかな目安となる。

農園で集団作業をするのは、自由人にとってかなり大きな非金銭的費用がかかったのは、ことさら説明するまでもないだろう。それでも、もし農園主たちが自由労働者たちに十分な金銭支払いを提示したら、十分な自由労働者たちを農園運営に惹きつけられたと考えてよさそうだ。自由な農民たちに、小農家のテンポやライフスタイルをあきらめて、もっと激しい、強く統制され、もっと相互依存の高い作業方式を受け入れさせるためには、どのくらいのプレミアムを提示する必要があったのだろうか?そして農園にはそんなプレミアムを支払う余裕があっただろうか?というのも競争的な企業として、支払えるプレミアムには明確な限度があるからだ。農園作業に自由労働を惹きつけるために支払える潜在的なプレミアムの上限は、小規模農場を東ねて大規模農場にしたら実現できる、産出の増分で与えられる。だから農園主志望者が典型的な白人農民の集団をまとめて、作業グループに基づく大規模農園を形成させるためにお金で釣ろうとしても、小規模農場での労働を通じて彼らがすでに稼いでいる金額から、5割増し以上の金額は提示できないことになる。自由な小規模農家が合併して大規模な農園になれないというのは、集団労働――そしてそれに伴うすべて――の非金銭的な費用が、自由農場労働者の賃金の5割よりも大きかったという明確な証拠だ。

いまの議論を見て、奴隷は農園で働いていたのだから、集団労働が彼らにもたらした非金銭的な損害は、自由労働の賃金の50%未満だったということなのだ、と思われるかもしれない。この結論が正しいためには、奴隷から労働を引き出すときの条件が、自由人から労働を得るときの条件と同じでなければならない。だがこの二つは明らかにちがった。一般に、自由人の労働を引き出すためには、賃金交渉をするしかなかった。だが黒人の人的資本の所有権には、労働を引き出すために暴力を使う権利もついてきた。奴隷の所有権によりご主人様には、農園の一般的な作業ルーチンを奴隷にやらせるため、必要ならどんな暴力でも行使する権利が与えられた——これは奴隷が死んでしまうほどの暴力すら含む。ご主人様の観点からすれば、適切に行使する暴力の利点は、それが活動のある部分については、金銭的な誘因で実現するよりも低コストで、望んだ行動を引き起こせるということだった。今日の、親による暴力利用のアナロジーは示唆的だ。両親はしばしば、子供がある時間に寝るよう仕向けるためには、お仕置きを使うほうが、ワイロを使って子供をその気にさせるよりも安上がり(お手軽)だと考えることが多い。だがこのアナロジーから、暴力が必然的に成人奴隷を子供扱いすることになったのだ、というまちがった結論に飛びついてはならない。

暴力は奴隷制において、偶発的な特徴ではない。暴力がなければ、黒人の人的資本に対する所有権の不可侵性など何の価値もなかった。少なくとも、農園の生産能力に影響する

範囲では、暴力が使えることこそが重要だったのだ。というのも、黒人に集団労働を受け入れさせつつ、規模の経済による利得を上回るプレミアムを支払わずにすむためには、暴力を行使するしかなかったからだ。この主張の有効性を裏付けるのは、奴隷解放直後の経験だ。奴隷たちが解放されたら、多くの農園主たちは賃金支払いに基づいて、作業グループを再構築しようとした。だが、解放された元奴隷たちに提示された賃金は、彼らが奴隷時代に受けとっていた所得の100%超も高かったのに、そうした試みは一般に破綻した。これほどのプレミアムをつけても、農園主たちは暴力行使の権利を奪われたら、作業グループ方式を維持するのは不可能だった。解放された元奴隷たちは一般に、集団として働くよりも土地を借りてそれを耕作する方を好んだ。集団労働で提示された支払いは、小作により解放奴隷たちが得た平均的な稼ぎより100%以上高くても、彼らはそれを受け入れなかったのだ。

だから戦後すぐの集団賃金を、小作賃金からの収入と比べても、戦前の金銭報酬と比べても、手持ちの証拠から見る限り、暴力の行使のおかげで暴力なしの場合と比べ、奴隷からは半額くらいで労働を引き出せたらしい。集団労働の非金銭的な損失は、白人に比べて黒人でも劣ることはなかった。つまり農業生産における奴隷制の特別な利点とは、集団労働における非金銭的な損失に対して奴隷に「補償する」きわめて安上がりなやり方になっていたということだ。

この発見のおかげで、なぜ奴隷労働の優位性が、農業よりも都市産業ではずっと低かったのかを説明できる。単調で集中的な工場のルーチンを受け入れる、非金銭的な不利は、 黒人や白人の労働者が都市生活に見出した、非金銭的な便益により相殺されたようだ。言い換えると、都市産業で働く非金銭的な不利はかなり小さく、ヘタをするとマイナスだったかもしれないということだ (補遺 B 参照)。だから都市産業では農園農業に比べて、暴力の行使により得られる便益の規模は、ずっと限られていたのだ。

ある量の労働に対して、最適な暴力の量がある――望んだ労働量を生み出すための費用 (暴力の費用と奴隷への金銭支払い)を最低限に抑えるものだ。農園主たちは、その最適値 がどこかを心配した。金銭支払いのために暴力を使える量には限界があることを彼らは認識した。あまりに暴力に頼り過ぎると、労働費用は減るどころかかえって増える。だからこそ、彼らは一般に監督や作業監視人たちが農夫に行使できる暴力の量を制限したのだった。そして、暴力を使ってよいのがいつ、どんな形で、どの程度の度合いまでなのかについて、はっきりと指示する必要があると彼らが考えたのもそのせいだ。

奴隷保有者たちが暴力を使ったのは、それにより金銭的支払いをギリギリ命がつなげる 水準かそれに近いものに抑えられたからだ、と広く信じられている。この思いこみはまち がっている。奇妙に聞こえるかもしれないが、暴力と金銭収入の最適な組み合わせにおい

ては、大規模農園の奴隷たちは、自由な小農家として稼ぐよりも多くの一人あたり所得を獲得できた。このパラドックスめいた結果は、暴力を生み出すにも明確に費用がかかるという事実で説明できる。ある水準を超えると、暴力によって追加の労働を一単位得るための費用は、それを金銭支払いにより得るよりも高くついてしまうのだ。経済学者の用語を使うなら——暴力は急激な収穫逓減を示すのだ。暴力と金銭支払いのどちらを選ぶかにおいて農園主たちが直面したトレードオフの分析は、複雑ながらも経済学の標準的な問題だ。複雑なのでこの説明は補遺 B にまわしたが、そこでは壮年の農夫が実際に受けとった平均的な金銭収入が、自由な農業労働者としての労働対価で彼が受けとったはずの金額よりも、ざっと 15%高かったことが示されている。言い換えると、奴隷たちは餓死寸前の状態に置かれるどころか、規模の経済の利得の分け前に預かっていたのだ——少なくとも金銭収入に関する限りは。奴隷たちは、大規模耕作に起因する生産増分のうち、およそ 20%を受けとっている。

この結果は、第 4 章で論じた金銭インセンティブの仕組みが以下に重要かを改めて裏付けている。ある歴史学者がやったように、金銭的な「報酬はたくさん使われてはいたが」、奴隷に仕事をさせるための「主要な基盤」は暴力だった、などと主張するのは正しくない。金銭インセンティブは、暴力と比べて些末な特徴だったなどということはない。どちらも農園システムの存在には不可欠だった。どちらが欠けても、農園システムに基づく生産費用は、大規模生産の利得より大きなものになってしまっただろう。

農園主たちは、どちらの経済的な動因も不可欠だと認識しており、自分の監督員たちが その両方の利用に長けているよう求めた。広く使われていた農園解説書の、監督員への指 示には次のようにある。

黒人の正しい統治以上に重要なものはない。そして監督員が奴隷に対して示す気持ちと態度以上に重要なものもないのである。そして、自分のルールの施行と、彼らの労働パフォーマンス達成の要求に当たっては、厳格でえこひいきなしを貫かねばならないものの、彼らが仕事をこした場合には優しさを持って扱い、ときには楽をさせてやることですら、公正かつ人道的なことである。あらゆる統治においては報酬と奨励が罰と同じくらい不可欠であり、ときには罰よりも効果が高い。よって、心得よ。最も職務を果たす者は、奨励し報酬を与えること。優しい言葉だけでも、適切に使えば、大きな効果を挙げる。またときには、どんな日でも一日数時間は労働から休ませ、あるいは週末には休みを与えるべし。さらに、時間の損失が農園の運営にはっきりと影響しないときにも休みを与えよう。そしてときには、休日などにおいて追加の物資や嗜好品などを与えることも検討すべし。

黒人たちは常に、よいご主人のよい意見を求めている。だから監督員は、忠実に 任務を遵守しており賞賛されるべき者の名前と性質を、農場主にすべて報告するよ う心がけるべきである。(中略)

あらゆる処罰の目的は、まずはその違反者が違反を繰り返さないようにするための抑止としての矯正である。その者が同じような確実な処罰を恐れるようにするのだ。そして二つめは、他のみんなへの見せしめである。他の者が違反しても、同じように確実に処罰を受けるのだと示すのである。そしてこうした公正な処罰の狙いや目的はすべて、その処罰の厳しさよりは、処罰の確実性によりうまく達成できるのである。

したがって確立したルールの違反は決して見すごしてはいけないし、違反者は常に必ず公正に処罰しなくてはならない。これはその違反の性質と状況にもよる。頭に血がのぼっているときには処罰を実施したり、脅したりしてはいけない。完全に冷静になるまで待つべし。そしてその処罰を、怒りよりは悲しみをもって行えるようになるまで待つべし。

オルムステッドは、奴隷所有者による金銭インセンティブが多用されている事例に何度も出くわしたし、そうしたインセンティブの有効性も見ている。ルイジアナ州のサトウキビ農園で、彼は奴隷が他のどんな季節よりも圧搾期に「最大の喜びをもって」働くと知って驚いている。この季節に奴隷たちは、一日平均18時間も働かされていたのだ。彼が発見したその理由は、圧搾期には農夫たちは「報酬が増えた」というものだった。ノースカロライナとサウスカロライナで、彼は潜水夫として漁業に貸し出された奴隷たちが、びっくりするようなプロテスタント倫理を示したと報告している。「何と!熱心に働く奴隷、喜んで正直で技能を発揮しつつ働く奴隷とは!」

その理由は、オルムステッドが再び報告しているように、彼らが「技能」と「忍耐」について追加の支払いを受けていることだった。オルムステッドはまた、そうした追加の支払いがどれほど高額になるかも知っていた。奴隷労働が自由労働よりどれほど高いかを実証しようとする過程で彼は、ヴァージニア州のタバコの「最大級の製造業者が話してくれたところでは、使役する奴隷一人あたり、ご主人に払う年額 100-150 ドルのレンタル料に加え、最低でもほぼ年に 60 ドル、ときには 300 ドルを各人に支払っているのだと教えてくれた」。ジョージア州の米農園で、オルムステッドは「白人の監督よりも [贈り物という形で] かなり高い賃金を」受けとっている奴隷エンジニアに出くわした。

だが他の多くの問題と同じく金銭インセンティブについても、オルムステッドは証拠を ひどく誤解した。いま出てきたそれぞれの事例で、彼が奴隷労働の実質費用が高いのだと

論じている事例を除けば、オルムステッドは金銭インセンティブの使用を例外扱いして、「奴隷から傑出した活動を引き出したければ、鞭で打つよりも報酬を提供し、無理強いするよりやる気を出させるほうがいいのだということを発見」した、「正気を持った人々」だけが使っているものだとしているのだ。オルムステッドはその思いこみのおかげで、金銭報酬は処罰と同じくらい奴隷制に不可欠な一部なのだと認識できなくなっていた。

奴隷に対する、比較的高水準の平均金銭支払いの発見は、インセンティブ方式の伝統的な解釈を疑問に附すだけでなく、奴隷の反乱が比較的少なかったことに対する伝統的な説明をも疑問視するものだ。奴隷システムの柔軟で多面的な性質を認識し損ねたことと、系統的な暴力行使が大きな形での金銭インセンティブ使用を排除したという、広く普及した思いこみのため、歴史研究者たちは奴隷性の残虐性を誇張することになった。それがさらに、奴隷たちがひんぱんに、いや継続的に処罰されていて、反乱に押しやられるはずだという期待につながった。だから反乱が比較的まれだったのはジレンマとなる。このジレンマを解決するために、一部の歴史学者たちは反乱の試みが成功するためのハードルが圧倒的に高すぎたと強調し、南部は武装キャンプだったと描いて見せたり、そう示唆したりするのだった。

手に入る証拠を見ても、こんな仮説は裏付けられない。もし物理的暴力が反乱不在の説明になるなら、奴隷人口密度にあわせて政府支出が増えるはずだ。国勢調査データの分析は、そんな相関を示していない。警察力は国ではなく農園主自身が提供したのだ、という主張もあるだろう。もしそうなら、農園規模にともない農園あたりの白人男性数が増えそうなものだ。そんな相関も存在しない。農園の規模とは関係なく、農園あたりの白人はだいたい六人――平均的な世帯規模より少し多いほどだ。奴隷百人の農園では、成人奴隷と白人成人男性の比率は、ざっと30対1だ。拳銃で武装しただけの男たちが、反乱寸前まで追い詰められた奴隷たちをそこまで脅かし、圧政者に刃向かえなくしてしまうというのは、なかなか鵜呑みにはしがたい。白人農園主や白人監督たちはスーパーマンではない。頑強で若い奴隷たちが二、三人、建物の後ろにでも隠れていれば、残虐な監督や農園主を始末することは可能だし、実際にそういう事件はあった。その下手人がだれかわからないようにすることも可能だっただろう。

農園主たちが「奴隷廃止論の扇動者たち」を懸念していたのは、被害妄想ではなく計算高いビジネス上の配慮だ。農園主たちは、自分たちの仕組みを極度に低費用で維持するための暴力を生み出せた。決然として革命家の小集団は、その暴力の費用を手に負えない水準にまで高めかねない。同様に、監督への指示書のなかで、暴力の行使はほどほどにすべきだという議論がしばしば見られるのは、それ自体としては残虐行為が広まっていた――過大な暴力が本当に行使されていた――という証拠ではない。第4章で見たように、監督

への指示書は農園主たちが、成功する農園運営において決定的と考える問題に絞られていた。そこで暴力の濫用を戒めていたのが、奴隷たちが一般に監督に残虐な扱いを受けていたという証拠だというなら、家畜にきちんとエサをやれという指示も、動物たちが飢え死にしそうだったという証拠になってしまう。興味深いことだが、そうした指示書は暴力濫用をめぐる農園主の最大の恐れは、それが費用を上げることだったのを示している。そしてなぜそれが費用を上げるかといえば、別に全般的な反乱の引き金になるからではなく、ひどい扱いを受けた奴隷個人が逃げ出しかねないから、なのだ。

奴隷制を維持するために必要な暴力の費用をまちがいなく引き下げた要因の一つは、白人の間で人種差別的な態度が行き渡っていたこと、そしてそうした態度が黒人にとっての自由の価値を著しく引き下げる法律に反映されていたことだ。黒人にとって、奴隷制以外の選択とは自由ではなく、ある学者の表現を借りれば「自由もどき」なのだった。この用語は南部だけでなく、北部にもあてはまる。アメリカのどちらの部分でも、自由な黒人はかなり危うい生活を余儀なくされた。北部の黒人は通常、法律の介入により再奴隷化の脅威にはさらされなかったが、十州では証言が禁止されたし、二州では集会の自由がなく、十州で投票権がなかった。「リンカーンの土地」たるイリノイ州では、黒人の移住は禁止された。州にきて十日以上滞在した者は「重い軽犯罪」で有罪となった。1850 年国勢調査のデータを見ると、北部の自由黒人の平均的な経済状況は、南部の自由国人の平均よりもひどかったかもしれない。ニューヨークとニューオーリンズを比べると、ニューヨークの黒人のほうが住宅は狭苦しく、職人の比率は低く、一人あたりの資産もニューオーリンズの自由な黒人より少なかった。

つまり南北戦争以前の時代において、黒人たちにとって奴隷制と自由は明確に白黒つけられるものではなかった。その間には無数の移行段階があった。一部の黒人、特に才能があり、機会が奴隷制によって最も大きく制約されていた人々にとっては、自由もどきですら、どんな代償を払ってでも手に入れる価値があった——そしてそのために彼らはすべてを賭けた。だが平均的な奴隷にとって、どのみち労働者となるつもりであれば、革命のコストはおろか逃亡のリスクですら、自由もどきから得られる利得に見合ったものではなかった——ただし、男が妻と引き裂かれたり、親が子供と引き裂かれたりする特殊な場合は例外だが。

奴隷たちが、自由農業労働者としてよりも高い金銭収入を得たからといって、彼らの実質所得が高かったということではない。というのもすでに指摘したように、集団システムにはかなり巨額の非金銭的な不利があったからで、これは成人男性農夫一人あたり、少なくとも年75ドルに相当した。表3でわかるように南部の奴隷人口全体として、この集団労働は非金銭的な損失を少なくとも9千万ドル引き起こしている。この巨額の損失に対して、

それを相殺するために奴隷たちが受けとる金額はかなり小さく、600 万ドルだ。つまり純損失は8400万ドルということだ。

意外に思う読者もいるかもしれないが、集団システムから主に利益を得たのは奴隷所有者ではなく、綿の消費者たちなのだった。綿農園は競争産業の性質を持っていたから、生産性向上の利得のうち、賃金増にならなかったものは通常は、綿の価格テイアという形で消費者たちに転嫁された。実際、通常の状況であれば、集団システムから生じる奴隷所有者への追加利潤は、一時的なものにとどまる。それが長続きしたのは、別に農園主たちが特別なふるまいをしたからではない。消費者の行動によるものだ。彼らの綿繊維に対する需要は、労働力と全要素生産性の増加よりも急激に高まったからだ。この意味で、奴隷所有者の追加利潤ですら、綿消費者の行動のおかげだ。表3を見れば、集団動労の総金銭利得のうち、消費者が半分近くの1400万ドルを受け取り、奴隷所有者は1000万ドルほどを懐に入れている。

表 3 1850年大規模運営による収入損益概算 (単位 1850年百万ドル)

		· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
	1	2	3
	金銭利得	非金銭的損失	純益 (1-2)
奴隷	6	90	-84
綿の消費者	14	0	14
奴隷保有者	10	0	10
合計	30	90	-60

^{*} 算出方法は補遺 B 参照

つまり階級としての奴隷は 1850 年には少なくとも 8400 万ドルの純損失を被り、それによりその他世界は 2400 万ドルの便益を享受できた (「その他世界」という用語の利用は意図的なものだ。というのもアメリカの綿はアメリカ国内ではなく外国で消費されていたからだ)。集団生産の金銭的な便益は、奴隷が苦しんだ損失よりもずっと広く薄く広がっていた。綿花畑で働く奴隷一人につき、綿の消費者は何百人もいた。これはつまり、消費者一人への平均的な年間利得はかなり小さいということだ。実際、綿布の典型的な消費者が獲得した一ドルにつき、南部のどこかの熱い太陽の下で艱難辛苦する奴隷は、少なくとも400ドルの損失を被っていたのだ。

南北戦争以前の批判者の中にはこの仕組みを永続化させているのは消費者の貪欲さだと 気がついた人もいた。南部に旅したイギリス旅行者の中で最も鋭い一人ロバート・ラッセ ルは、奴隷制は「やすい綿花という大いなる善に奉仕する必要悪なのだ」と信じていた。 オルムステッドはこの物言いに、激怒した。こんな主張はまったくのナンセンスだと彼は 反発した。『綿花の王国』で彼は丸ごと一章を使ってラッセルに反駁し、奴隷は綿価格を

下げるどころか上げたと論じた。こんな自己欺瞞がどれほど広がっていたかは、みきわめるのがむずかしい。南部の奴隷制に反対した反奴隷政治家は、綿を消費したしそれに課税しようとする試みには反対し続けたが、バカではなかった。少なくともこうした一部の政治家は、南部の綿、砂糖、タバコ、米を完全にボイコットしたら奴隷制は終わると考えていた。こうした見方をしていたのはラッセルだけではなかった。ジェームズ・H・ハモンド上院議員はまちがいなく、戦争にならない範囲でどこまで南部を締め上げられるかについては過大評価していたが、それでも南部批判者の採用した立場がいかに偽善的なものかははっきり理解しており、次のように述べている。

いや、綿に宣戦布告などしてはいけない。この世のどんな力であろうと、綿に戦いを挑んではいけない。綿こそ王だ。最近までは、イングランド銀行こそが王だったが、連中はいつものように、綿作物に対して締め付けを行おうとした。一つ前の価格下落がそれだ。だがその試みは完全に潰された。最後の力が征服された。最近の出来事を見た者であれば、綿こそ至高であることを誰が疑えようか?

南部における経済成長の道筋 1840-1860 年

19世紀の地域別所得会計を構築するのは、地域の効率性指標をつくる場合と同じく、面倒な作業だ。こうした所得会計について、1840年と1860年の国勢調査年について構築するという作業は、1950年代初頭に始まったが、今日なお続いている。表 4 は、いまや半世紀にわたり使われてきた地域所得の推定値を示したものだ。最近の論文によれば1840年の南部所得水希有は低すぎるのではないかという。1860年の数字についても同様だ。もしこうした補正が適切なら、以下の分析の細部は、少し変更が必要となる。だが議論の主要な部分には影響がない。むしろ、そうした補正は以下の議論をかえって強化するものとなる。

表4を見ると、1840年と1860年のどちらでも、北部の一人あたり所得は南部より高かったことがわかる。1840年には、南部の平均所得は北部のたった69%でしかない。1860年になっても、南部の一人あたり所得は北部の73%でしかない。

こうした数字を見ると、南部は貧困まみれの停滞した経済で「比較的愚鈍な埋没状態」に陥りかけていたというヘルパーの主張が裏付けられたように見える。つまり奴隷制の重荷の下で、南部は植民地国家の状態に陥ってしまったというわけだ――「母国への依存状態」におかれたということだ。だがこんな主張は、単に1860年に南部と北部の一人あたり所得に25%の開きがあったという事実だけでは、まったく導けるものではない。どんな結論を引き出すにしても、このギャップというのが当時の基準からして、南部が貧しかった

ということなのか、北部が極端に豊かだったということなのかを見極める必要がある。

	1840年	1860年	平均年変化率
全米平均	\$96	\$128	1.4%
北部	109	141	1.3%
北東部	129	181	1.7%
北部中央	65	89	1.6%
南部	74	103	1.7%
南部大西洋岸	66	84	1.2%
東南部中央	69	89	1.3%
西南部中央	151	184	1.0%

表 4 1840 年と 1860 年の地域別一人あたり所得 (1860 年価格)



*推計値構築手法の議論は補遺B参照。一人あたり所得は自由人と奴隷双方を含む全人口について。

この問題を解決するための第一歩として、北部を二つに分けよう。北東部と、北部中央地域だ。これをやったのが表 4 で、これを見ると北部が南部より優位にあったのは、北東部の収入が極度に高いせいでしかないことがわかる。北部中央州の一人あたり所得は、北東部の半分に満たないだけではない。南部の一人あたり収入に比べても、14%も低いのだ。

南部が貧困まみれの「植民地依存症」だったなら、ペンシルバニア州の東境界からネブラスカ州の西境界の間の地域をどう考えるべきだろうか――そうした州は通常、南北戦争前の時代には、高い繁栄と急成長の美穂と思われているのだ。

南部は貧困のどん底などではなかった。むしろ南北戦争以前の基準からすれば、かなり豊かだった。南部と北部を別の国として扱うなら、南部は1860年で世界四位の富裕国となる。南部はフランスよりも豊かで、ドイツよりも豊か、デンマークよりも豊か、イギリスを除けばヨーロッパのどんな国よりも豊かなのだ(表 5)。南部の一人あたり所得を、1973年ドルに換算せず、1860年ドルのまま示すと、南部の経済的な成果は見えにくくなってしまう。南部は南北戦争以前の基準で豊かだったにとどまらず、かなり最近の基準から見ても豊かだ。実際、イタリアほどの先進国ですら、当時の南部並の一人あたり所得を達成したのは、第二次世界大戦直前になってからだった。

この最後の論点を見ると、南部を「植民地的な依存状態」に分類しようとする試みがいかに怪しげなものかが強調される。南部が北部から大量の工業製品を購入したからといって、別に植民地的な依存状態とはいえない。北部がイギリスから大量の鉄道を購入しても、別に植民地的な依存状態ではなかったのと同じだ。真の植民地的な依存状態というのはインド'やメキシコのような国で、1860年には一人あたり所得がアメリカ南部の十分の一にも満たなかった。南部が貧困地域だったというまちがったイメージは、1850年代の南部指導者たちが繰り広げた、経済政策論争から生じたものだ。派閥抗争が強まるにつれて、南部人たちはますます、北部に経済的優位性をもたらしていると考えた連邦の政策に危機感をつのらせた。また自分たちの州や地元政府が、内部の改善を促進して、南部の経済成長率を加速するような政策を採り入れる積極的な役割をあまり果たしていないと思って、ますます苛立つようになっていた。危機感を煽るために南部の深部や雑誌、経済指導者や政治家たちは絶えず、北部のあらゆる経済的な業績と、南部のあらゆる未達の目標、あらゆる北部の優位性とあらゆる南部の不利な点を誇張するようになった。発展をめぐる奴隷廃止論者の批判は、丸ごと南部の論説記事や演説や商業的な主張の受けうりで、それを明記した人もいれば(オルムステッドなど)、出所に言及しなかった人もいる(ヘルパーなど)。

南部が後進的で停滞していたというデタラメは、このように南部が経済的に成果をあげていなかったから生じたわけではない。北部の成果があまりにすごすぎたことと、南部と北部の絶え間ない比較が、常に南部に不利に働いたことがその理由だ。だがイギリス以外のヨーロッパのどの国と比べても、南部の経済パフォーマンスはかなり優秀だったのだ。奴隷廃止論者は、この比較を持ち出すことは決して無かった。望ましからぬ印象を与えるからだ。そして南部人もめったにこれを持ち出さなかった。政府に行動を求めていたのに、これでは手をこまねいていてよいと思われてしまうからだ。

(南部の一人あたり所得水準 = 100)						
オーストラリア	144	ベルギー	92	イタリア	49	
北部	140	フランス	82	オーストリア	41	
イギリス	126	アイルランド	71	スウェーデン	41	
南部	100	デンマーク	70	日本	14	
スイス	100	ドイツ	67	メキシコ	10	
カナダ	96	ノルウェー	54	インド	9	
オランダ	93					

表 5 1860 年南部の一人あたり所得の相対水準

表 4 はまた、南部は停滞するどころか、一人あたり所得の増加率は南部のほうが北部より3割も急速だったことを示している。南部の成長率はあまりに高くて(年率 1.7%)これだけで奴隷制が南部の成長の足を引っ張ったという説を否定する証拠となる。長期にわたり1.7%もの高い成長率を持続させた国などないも同然だから、いまだに奴隷制が成長の足を引っ張ったという主張を掲げる人々は、奴隷制がなければ南北戦争以前の南部の発展は、過去150年で記録されたあらゆる国の成長率を上回るものになっていたはずだ、と論じていることになる。たとえばフランスは、1960年までの103年で、年率1.55%の平均成長率を実現している。似たような時期のイギリスの成長率は1.2%で、ドイツは1.43%だ。アメリカ全体の長期年間成長率は平均で1.6%だ。1840年から1860年にかけて南北戦争以前の南部が実現した以上の長期の経済成長を維持できたのは、スウェーデンと日本だけだ。

南部の成長率を地域毎に分解すると、それぞれの下位地域の成長率は、南部全体の成長率より低いことがわかる。この理由は、南部の成長は南部人口を古い州から新しい州に再分配することで実現していたからだ。特に、テキサスなど西部中央地域の豊かな州への移住は大きかった。この下位地域は、一人あたり所得の伸びが北部東地域よりも大きかったことには留意しよう。一人あたり所得増加率のうち、およそ3割は下位地域の間での人口再分配によるもので、残りはそれぞれの下位地域における一人あたり所得の増加による。

最近になって、ある学者は下位地域内の成長率にしか意味はなく、東から西への人口再分配による成長の部分は統計的な見せかけでしかないから、除外すべきだと論じている。 彼によるとそれぞれの下位地域の人々は「そんな経済発展の現実も長所も、いささかの意味すらも実感できなかった」のだと言う。

この観点は、経済成長プロセスに関する根本的な誤解を反映している。ある国の下位地域の各種産業は、決して同じ比率で成長したりはしない。たとえば鉄の需要が変わったことで、1842-1848年にはアメリカの製鉄産業は綿繊維産業よりもずっと急成長をとげた。だが 1848-1858 年には繊維産業よりもずっと低成長だった。技術変化も、産業や地域ごとに

不均等に進む。経済の成長能力は、市場でのツキにもよるし、技術ブレークスルーについての創造性におけるツキにも左右されるが、そうした発展に経済がどこまで応答できるかという能力にもよるのだ。経済が労働などのリソースを、ある産業部門や地域から別のところに移せるというのは、常に成長の大きな決定要因なのだ。これは北部でも南部でも同じだ。1840-1860年の北部の成長のうち、ざっと16%は労働などのリソースを農業から製造業にシフトさせたおかげで生じた。言い換えると、産業部門内部での成長率だけを考えたら、1840-1860年の北部の一人あたり所得増加率は、年平均で1.3%ではなく、1.1%にとどまったはずだ。

下位地域内の人々が、そうした地域の間での移転を通じて実現できた成長の「現実を実感できなかった」というのは、図 11 の意味を完全に誤解するに等しい。図 11 は、奴隷人口が1790年にはチェサピーク湾沿いに集中していたのが、1860年には綿花ベルトに集中するようになったことを示している。地域間の移住で実現できる便益を南部人たちが実感できたからこそ、かれらが「そうした経済発展の意味を実感」できたからこそ、多くの人が実際に移住したのだ。南部の成長の中で、地域間移動によるものの割合が大きいのは、第2章の最後で行った論点をさらに裏付ける証拠でもある。それは、奴隷経済がきわめて柔軟であり、「各種の南部企業や地域の激変する労働要件に」いかに易々と適応できたかを示すものなのだ。

同じく誤っているのは、南部での歪んだ (不平等な) 所得分配のおかげで南部の市場は小さくなってしまい、大規模で近代的な製造業を支えられず、貯蓄が減ったことで物理資本への投資率も抑えられてしまった、という説だ。南部の所得分配格差がその総貯蓄率を引き下げたという想定は、おそらくまちがっている。この想定は、金持ちによる大規模な消費支出は、必然的に低貯蓄を意味するというまちがった信念に基づいている。かなり典型的な年だった 1925 年を見ても、アメリカにおける所得トップ 1%の一人あたり消費は 4800ドルほどで、残り 99%の一人あたり消費は 550ドルに満たなかった。確かにこれはすさまじい差だし、人情としてこれは金持ちによる無駄な消費という議論につながりかねない(実際につながった)。だが 1925 年には所得のトップ 1%の貯蓄所得比率は 42.9%で、推定個人貯蓄の 50%以上を占めていた。これは、大規模消費支出が南部の資本形成に与えた影響は大げさに言われている可能性を示唆するものだ。顕示的消費が多少存在したにしても、それはおそらく当時の基準からして豊かだった農園主たちが行ったものだろう。彼らの顕示的消費はおそらく、所得の一部を吸収しただけだし、その貯蓄率は全国平均をはるかに上回っていたはずだ。収入と貯蓄の関係についての現在の知見に基づけば、南部の貯蓄は所得分配がこれほど歪んでいなければ、もう少し低くなっていただろう。

いずれにしても、南部の資産分配をめぐる最近の研究では、これまでの学者たちが一般

に格差の度合いを誇張してきたことが明らかになっている。非奴隷保有の白人の 70%が餓死寸前の暮らしだったというケアンズの主張は、明らかにまともなものではない。南部の農民の間の資産分配は、北部の農民たちに比べれば格差が大きかったとはいえ、都市部での資産分配に比べれば不平等は低かった。北部は都市人口比率がずっと大きかったから、資産分配の全体的な格差は、自由人口について見ると、メイソン=ディクソン線の上下でだいたい同じだった。

こうした結果は、南部の所得分配が歪んでいたために、南部市場は小さすぎて、北東部に存在したような大規模製造業企業を支えられなかったのだ、という主張の核心をひっくり返すものだ。所得分配が実際よりかなり不平等だったにしても、農園主たちが奴隷たちのために、北部企業から大量の衣服や靴を買っていたという事実は、農園でも製造業財の大きな市場が存在していたことを示唆するものだ。それどころか、農園主の注文した製品はもっと標準化されており、奴隷たち自身が需要の源だった場合に比べて、大量生産技術に適していたとすら主張できる。

物理的資本形成において、南部が北部より大幅に遅れをとった唯一の分野は製造業だけのようだ。南部は鉄道建設への出資では遅れを取らなかった。この地域は全米の鉄道路線総延長の31%を有しており、一人あたりの路線延長は全米平均より少し下なだけだ。このネットワークは主に現地資本により資金調達された。路線延長の面積比は、アメリカの他の部分より南部のほうが低かったが、南部経済は航行可能な河川や水路の異様に有利な水系に恵まれていた。また農園主たちは、農業機械化においてアメリカの他の地域に遅れを取ってはいなかった。改良土地面積あたりの農業設備や機械への支出額は、全国平均に比べて七大綿花生産州のほうが25%も高かった。

単に北部と比べれば劣っていたというだけで、南部が工業では後進的だったという結論を出すというのは、所得水準の議論で述べたまちがいを繰り返すに等しい。表 6 を見ると、工業地域としての南部の位置づけがもっと広い視野で捕らえられる。一人あたりの鉄道路線延長では北部とほぼ同列だったし、どちらも次点の競争相手をはるかに引き離していた。綿繊維製品の製造地域として、南部は世界第六位でギリスやアメリカ北部よりはずっと下だが、ドイツ、オーストリア=ハンガリー、ロシアよりは上だった。工業生産の指標として手に入るものを見ると、南部があまりいい成績をあげていないのは、鋳鉄生産だけで、これについては他の西欧主要国すべてに劣っている。鉄の生産における劣位はもちろん、南部に鉄鉱石や石炭が比較的乏しかったからだ。南部のこうした鉱物資源は、北部やイギリス、フランス、ベルギーの足下にも及ばない。だから南部が北部に比べて工業化で遅れをとったのは、南北戦争以前の時代に南部の比較優位が製造業よりも農業にあったのだという主張と完全に整合している。

表 6 3 つの指標で見る 1860 年南部の工業化相対水準

	(南部一人あたり指数=100)			
	鉄道延長	綿製品生産	鋳鉄生産	
南部	100	100	100	
北部	108	401	637	
イギリス	43	1,055	2,728	
フランス	16	136	425	
ドイツ	21	87	231	
ロシア	1	26	60	
オーストリア=ハンガリー	9	64	152	
イタリア	6	23	16	
オランダ	7	41		
ベルギー	25	142	1,191	
デンマーク	5			
スウェーデン	9	92	779	
スイス	28	270		
スペイン	8	74		
カナダ	68			
インド	1	2		
オーストラリア	21			

ほとんどの場合、農業における比較優位を南部にもたらしたのは、天然リソースの賦存だ。だが奴隷制の存在も一役買ったかもしれない。奴隷制が規模の経済を可能にして農業生産性を引き上げたら、リソースを工業から農業に振り向ける経済インセンティブが生まれたかもしれない。だがこれは、生産性上昇の必然的な結果ではない。同様に、生産性上昇で南部の一人あたり所得は上がったかもしれないが、これも規模の経済の必然的な結果ではない。こうした問題を解決するには、綿などの交易品の需給方程式におけるいくつかのパラメータを見なければならない。だがこのパラメータ推計はかなりむずかしい。概算推計によれば、奴隷制は工業化の足を引っ張り、一人あたり所得を増やしたようだ。だがこうした概算結果がどこまで有効かわかるまでには、おそらくあと数年の追加作業が必要となる。

過去十年の間に、私たちはしばしば内外の学会や学内勉強会で論文を発表し、奴隷制の 経済学に関する自分たちの研究の様々な側面を報告した。時には、議論の終わりに同僚た ちの一人がやってきて、不安そうな笑顔を浮かべつつ、こう尋ねる。「あなたたち、何を したいんですか? 奴隷制を売り込もうとでも?」 私たちはそれに対してこう答えた。「い いえ。そして売り込むつもりだったとしても、あなたは買わないでしょう? だれもそんな ものは買いません」

私たちが奴隷制の伝統的な解釈を攻撃したのは、破綻した仕組みを復活させるためではなく、黒人史歪曲を糺すためだ——黒人アメリカ人がアメリカに'やってきた最初の 250 年では文化を持たず、成果もあげず、発展もしなかったという見方を打倒したかったのだ。この黒人史のまちがった描き方は、もともと奴隷制の批判者と擁護者の議論の結果だったのだということを示そうとした。この論争は、黒人は白人より劣っているという人種差別的な想定に基づいていた。南部の歴史を書いたのが北部人だろうと南部人だろうと、この想定はごく少数の歴史学者以外のみんなに温存され、それが南北戦争以後から第二次世界大戦前夜まで続いた。

人種差別に対する嫌悪感は、第二次世界大戦と同時に生じたが、それでも黒人史の人種差別的な描き方を拒絶するには到らず、その最も愚かしい部分を排除するにとどまった。 そこから出てきたのは伝統的な解釈を巧妙に手直ししたもので、それによると黒人は相変わらず文化的、知的、社会的、個人的な発達の機会を 250 年にわたり奪われてきた人々なのだった。

だが現在では、この発達停滞の説明は生物学的な劣等性ではなく、不幸な社会的状況となった。黒人は、極度に抑圧的な奴隷制の哀れな被害者であり、それがあまりにひどすぎたために、彼らの家族観、上昇志向、生産的な意欲、独立の判断力、自律能力が破壊されてしまったのだ、とされる。黒人の劣等性に関する、すでに否定された生物学的な正当化のかわりに、ご立派で容認可能な社会的正統性がまつりあげられたわけだ。

一部の歴史家は、この新しい方向のギロが持つ最悪の意味合いを回避しようとして、奴隷制の残虐性と抑圧は壮絶なものだったとはいえ、黒人たちはその抑圧よりも強かったのだ、と主張する。だが大規模反乱の証拠もない状況では、この議論はほとんど説得力を持たなかった。この見方の支持者たちがでっちあげられたのは、せいぜいが支離滅裂な陰謀

論や、「日常的な抵抗」といった無力な説明の試みでしかなかった。だから黒人は抵抗すらまともにできない失敗者に仕立て上げられる——同情すべき失敗者ではあるが、それでも失敗者にはちがいない。黒人は無能だというイメージは、意図せずして人生のさらに別の側面にまで拡大されてしまったのだった。

この焼き直しの解釈で、黒人たちはどの程度の成果水準にまで上るのを許されたのだろうか? 白人アメリカは、正直で勇敢で生産的な闘争のヒーローを生み出した。だが焼き直し解釈がもたらした黒人反乱者は、その最大の業績というのが泥棒上手だの責任逃れが上手いだの、仮病が上手だのという人物だ――そして実に小ずるいウソつき能力もある。おかげでご主人様たちをだまして、自分たちが満足しているように思い込ませられたとのことだ。そして大規模農園を「どんな白人よりも」うまく経営できたレーヴェンスたちや、興産ぶりにより巨額の資本を蓄積できたアハムたち、自分の職業が実に得意で、所得が白人監督を上回った奴隷エンジニアたちはどうだろうか? 焼き直しバージョンでは、彼らはもちろん極度にまれな存在とされたし、どのみち白人にへつらってみせる「アンクル・トム」扱いされたのだった (そうでなければそんなにめざましい地位に上り詰められたわけがないではないか?)

奴隷制の伝統的な解釈が持つ最悪の影響の一つは、それが南北戦争終結に続く数十年で、 黒人生活の物質的条件に対して行われた攻撃から目をそらす結果になったことだ。奴隷制 の過酷さを誇張することで、それ以降に起こったことはすべて、以前の状態からの改善に 見えるように歪められた。解放された黒人たちのかなり低水準の賃金、黒人労働力のかな り低技能な構成、黒人の健康のかなりひどい状態、黒人期待寿命の短さ——これらをはじ めとする南北戦争以後の数十年に見られた各種条件は、おおむね奴隷時代の不幸な名残だ として説明された。多くの人は、自己改善に苦闘する黒人たちの行く手を遮り続けたハー ドルに気がついていた。だが進歩を緩慢にしている主要な要因は、黒人が奴隷制から逃れ たときに残っていた障害だと広く思い込まれていた。黒人技能の欠如と、仕事や道徳に対 する残念な習慣は、奴隷制の条件によって黒人に植えつけられたのだった。南北戦争以後 の黒人の不満足な状態についての責めはすべて、もはや存在しない階級 (ご主人様階級) か、残念ながら黒人たち自身のせいにされてしまった。

過去数年で、数量経済史家たちの関心は、南北戦争以前から以後へと移りつつある。いまのところの結果はきわめて速報的なものにとどまるが、積み上がる証拠から見ると、南北戦争以後の黒人生活の物質条件は、それ以前のものと比べて熾烈なばかりか、ある意味でもっと残酷でもあった。どうやら黒人の期待寿命は、南北戦争以前の四半世紀から、19世紀の最後の20年の間に、10%も短くなったらしい。黒人の食生活も劣化した。1890年代半ばの小作農の食事研究によれば、タンパク質とビタミンが極度に少なかったようだ。黒

人たちの健康も劣化した。1890年代の疾病率は、奴隷農園よりも20%も高かった。黒人労働力の技能構成も劣化した。黒人は、奴隷時代には大いに活躍していた工芸分野からは閉め出され、19世紀後半と20世紀初頭の技術変化で生じた新しい技能には参入を阻止されていた。黒人への賃金支払いと、同じような仕事を持つ白人の賃金とのギャップは、ポスト南北戦争の数十年から第二次世界大戦前夜まで着実に開いた。このトレンドが逆転したのは、やっと第二次世界大戦になってからだった。そして黒人と白人との似たような職業における支払賃金格差の低下が加速して、両者の平等が再び視野に入ってきたのは、やっと過去15年に入ってからだ。

自分たちの発見がまったく新しいものだと主張するつもりはない。おおむね忘れ去られたとはいえ、同じ主張の一部は1944年にスウェーデンの経済学者グンナー・ミュルダールも行っている。「アメリカのジレンマ」についての分析に見られる洞察は、彼がアメリカという現場から距離を置いていたおかげかもしれない。

見方にもよるが、未だに残るカースト制度は、奴隷制よりはるかに根深いものとなっている。奴隷制の主な経済的意義は、雇用者が本当に労働力を所有していたということだ。 雇用者はそのせいで、最も利潤の高い奴隷活用に強い利益関係を持っていた。こうした資本と労働の根本的な利害の一致は——というのも労働が資本だったからだ——奴隷制支持理論の中心部分となっていた。

確かに、奴隷は自分の意志で移動する自由を奪われていた。だが生産要素として、彼らは所有者の経済的利益により「最も有利な使途」へと移動された。奴隷解放以前の黒人たちは、生産と人間の西移動の一部となった。この観点からすると、南部が南北戦争前に、アメリカにおける奴隷制の地域を広げようと戦ったのは、黒人労働をそれが最も有利な使徒に振り向けられるような場所へともたらすための戦いでもあった。奴隷解放以後、彼らがすでに定着した地域へと彼らは自由に移動できた。だが彼らは集団として、部分的に南西部の新しい地方領土に引っ越すのを阻止されていた。移住先としては、南部の都市と北部しかなかったのだ。

奴隷解放以前には、奴隷所有者としては黒人を最も儲かる、手工芸や製造業などで使役するのが利益にかなっていた。奴隷解放以後は、そうした所有権に基づく利害で奴隷労働者が守られなくなり、白人労働者が彼らを技能労働から締め出そうとするのを抑えるものはなくなった。彼らは次第に追い出されて底辺へと追いやられ「黒人仕事」に押し込められた。これはますます狭く定められていった職業分類なのだった。

当時のカースト制度に比べ、奴隷制は経済的調整を実施する能力が高かったのはまちがいないところだ。これはその利益を懐に入れたのが、奴隷たちではなく奴隷所有者だったにしても同じことだ。当の黒人たちの多くですら、限られた意味でとはいえ、奴隷制は奴

隷解放によって彼らが投げ込まれた、危ういカースト地位に比べれば、経済的な仕組みと して有利だったのだ。

なぜそんなことが起こり得たのか? どうして金銭的な収入、食生活、健康、技能獲得など、生活の物質的条件は、黒人たちにとって奴隷解放以前よりもその後のほうが実に長きに渡りひどかったのだろうか? この主張がばかげて見える理由の一部は、本書で私たちが示そうと試みたように、奴隷制の厳しさが誇張されてきたせいだ。だがそれは、半奴隷の十字軍たちが求めてきた道徳改革の規模が誇張されてきたせいでもある。反奴隷制の批判者たちのうち、その救世活動の目標として各人種の機会平等を掲げた者はいないも同然だ。彼らは黒人を劣った人種として捉えていたので、彼らにとって機会平等など何の意味もなかったのだ。そうした人々のほとんどは、解放された黒人たちは、「秩序ある」社会の維持のためには様々な方法で制約されねばならないと考えていた。というのもオルムステッドが述べたように「一世代や二世代で、何世紀にもわたる野蛮と奴隷制の影響が消え去ると考える」のは不可能だったからだ。

反奴隷制の批判者たちが一般に批判したのは、奴隷制が黒人に開かれた機会を制約したということではなく、そうした制約がとった形だ。物理的な暴力はもちろん容認できないが、法的な制約はちがう。だから一次は奴隷制反対の十字軍の旗を掲げた人々は、黒人を犠牲に白人の経済的立場を改善する各種の法律が可決されるときには、手をこまねいていたか、積極的に協力さえしたのだった。許認可法により、一部の職能から黒人は閉め出された。また他の職能からは、教育的な制約で黒人が排除された。一方、課税と財政政策を使って、黒人から白人に所得移転が行われた。これは奴隷制の下よりも効率的かつ、まちがいなくもっとエレガントな形で行われた。

アメリカ黒人にとっての十字架にかけられた時代は、ある特定の制度が崩壊しても終わったわけではなかった。というのも彼らを十字架に縛り付けていたのは、奴隷制の鎖だけではなく、人種差別主義のくさびでもあったからだ。そうした鎖を断ち切るためにあれほど頑張った反奴隷制の批判者たちが、他のどんな集団にも負けず劣らず、いやそれにもまして、自由の世紀の間に彼らを人種差別の苦悶に押し込めるくさびを強化するのに貢献したというのは、歴史の最も苦々しいアイロニーの一つだ。そうしたくさびは、まじめで効率的な労働者を、怠惰なのらくら者やおっちょこちょいの集団にしてしまい、家族愛をその軽視に変え、唯一可能な形で自己成長のために苦闘した人々を「アンクルトム」に仕立ててしまう、デタラメなおとぎ話で造り上げられてきた。十字架に350年もかけられていたら、もうたくさんだ。そろそろ黒人だけでなく白人に対しても、彼らから隠されてきたアメリカ史のこの一部を見せる頃合いだろう——逆境の中で、黒人たちがどれほどのことをなしとげたのか、という記録を明らかにしようではないか。

謝辞

奴隷システムの経済分析に関連する挑戦しがいのある問題に興味を抱いたのは、ジョンズ・ホプキンス大学の院生時代だった。1958年にコンラッドとマイヤーの論説が登場したことで、経済学部では大論争が巻き起こり、それが何週間も続いて、ほとんどの大学院生たちや経済学教授陣も巻き込まれた。この刺激的な論争の一つの産物が、安場保吉の鋭い論文で、刊行は1961年だが実際には1959年に書かれたものだった。別の産物は、奴隷経済の活動が提起する、各種の分析的、実証的な問題についての、私たち自身の深く持続的な関心だった——その関心は、研究と教育の両方を通じて絶えずそそられ続けてきた。

だが 1965 年になるまで、こうした問題を再び集中的に考えて見ることはなかった。この年に私たちは、やがて『アメリカ経済発展の再考察』に収録した論説の作業を開始した。それ以来、奴隷制の経済学をめぐる私たちの検討は、ほとんどすべての時間を注ぐ関心事へと発展したのだった。

過去 15 年にわたり、私たちは多くの借りを負った。中には本書に直接関連するものもあれば、本書執筆で活用した各種の研究プロジェクトに関連する借りもある。一部はかなり一般的な性質のものだが、それでも本書で検討した各種の問題へのアプローチに大きく影響したものもある。以下の一覧は長いが、それでも不完全だろう。奴隷制の経済学をめぐる私たちの研究に対する一部の貢献は、おそらく私たちが失念したものもあるはずだ。

ここでその支援に感謝しいている人々が、私たちの結論に賛成しているとは思わないでほしい。中には、私たちの研究の主要な方向性にきわめて批判的な人もいる――かなり激しく反対した人もいた。その一方で、私たちの結論や手法の両方を喜んでくれた人々は、それまで考えていなかったような問題にも取り組めと奨めてくれた。私たちはこのどちらの反応からも恩恵を受けている。

感謝を述べるべき最古の義務は、故アルフレッド・H・コンラッドとジョン・R・マイヤー、およびジョンズ・ホプキンスの先生や学生仲間たち、特に G. Heberton Evans, Jr.、James K. Kindahl, Fritz Machlup, Edwin S. Mills, 安場保吉だ。長年にわたり、Eugene Genoveseと Herbert Gutman との議論や論争からは多くを学んだ。二人は絶えず、研究を狭義の経済問題より広げるように背中を押してくれた。

本書の元となったデータの収集、処理、分析という面倒な作業に取り組んでくれた数量 経済史研究者たちには最も大きな借りを負っている。 主要なデータ収集プロジェクトとその監督者は、補遺巻の表 B1 に挙げた。未公表データや知見をたくさん提供してくれた人としては William Calderhead, Robert Evans, Jr., Barry W. Higman, Abigail Curlee Holbrook, Alice Hanson Jones がいる。そうした研究プロジェクトのほとんどは、私たちの自由人ど奴隷による農業効率比較プロジェクトも含め、その全体または一部が全米科学財団の資金支援を受けている。

多くの学者たちは、原稿の各種草稿について詳細なコメントを提供してくれたので、私たちは個別問題へのアプローチをしばしば変えざるを得なくなり、軽視していた問題を調べ、証拠や議論に見られた矛盾を解決するための探索も行えた。そうしたコメントをくれたのは Robert McC. Adams, Carl Degler, Albert Fishlow, Richard Freeman, Robert E. Gallman, Louis Gottschalk, Zvi Griliches, Ronald W. Jones, Stanley N. Katz, Donald N. McCloskey, Lionel W. McKenzie, Arthur Mann, Richard N. Rosett, Morton Rothstein, T. W. Schultz, Ri~d B. Sheridan°CJlarold Woodman, C. Vann Woodward, and Gavin Wright などがいる。特に41ページにもわたるシングルスペースのコメントをくれた Kenneth M. Stampp には感謝する。彼の鋭く詳細な批判で、初期の草稿におけるまちがいや曖昧さに気がつくことができた。たとえば、きちんと制限をつけていない主張や、主張と、かなりしっかりと裏付けられた浸けんとの区別が不十分だった場合などだ。こうした問題を指摘することで、彼は私たちの議論を強化する手助けをしてくれた。それは、私たちの議論が彼自身の研究と対立する場合にも当てはまる。これにより彼は、学術研究の満たすべき基準を示してくれた。私たちが同僚たちの批判に直面する番になっても、その態度は是非とも見習いたい。

原稿のすべてまたは一部についてコメントをくれたり、まちがいを指摘したり、理論的な問題の解決を支援したり、なんらかの論文や証拠を教えてくれたり、主張の改善を指示したり、研究グループ設立を助けたり、文書館の調べ方に助言をくれたりしたのは: H. gh G. J. Aitken, Fred Bateman, Gary Becker, Lee Benson, Woodrow Borah, N. G. Butlin, Rondo Cameron, Loftus Carson, Elisabeth Case, Richard Caves, John Coatsworth, Bernard S. Cohn, Philip D. Curtin, Paul A. David, David B. Davis, Charles B. Dew, David Donald, Douglas F. Dowd, Seymour rescher, Richard Easterlin, Clement Eaton, Stanley Elkirts, Lloyd Fallers, Margaret Fallers, ~nid M. Fogel, Charlotte Fogel, Ephim G. Fogel, Michael P. Fogel, Steven D. Fogel, James D. Foust, John Hope Franklin, Joe B. Frantz, Herman Freudenberger, James Friedman, Eli Ginzberg, Richard Graham, Diane Griliches, H. J. Habakkuk, Neil Harris, R. M. Hartwell, D. Gale Johnson, Harry G. Johnson, Catherine Jones, Mary Karasch, Herbert Klein, Peter Laslett, Ronald Lee, Nathaniel H. Leff, H. Gregg Lewis, Richard C. Lewontin, Henry Manne, Edward Meeker, Sidney Mintz, Micha~ussa, Manning Nash, Marc Nerlove, Douglass C. North, Donald O'Hara, Walter Oi, William N. Parker, Douglas Price, Jacob Price, John Price, Laura Randall, Albert Rees, George Rieg, Jr., William Riker, Willie ~e Rose,

Sherwin Rosen, Madelon Rosett, Henry Rosovsky, Jerome Rudolph, Barbara Solow, the late Rober~. Starobin, Stanley J. Stein, George Stigler, Richard Sutch, Dale vwan, Richard Sylla, Peter Temin, Stephan Thernstrom, Virginia Thurner, Charles Tilly, Thomas J. Weiss, John White, Harold Williamson, Joel Williamson, Larry Wimmer, E. A. Wrigley, Lionel Young, Joseph R. Zecher, Wilbur Zelinsky, and Joseph Zitomersky.

学生との長きにわたる議論から多くを学んだ。そうした議論の中ではしばしば教師と生徒の立場が逆転していることも多かった。

最も多くを教えてくれた人々としては Claudia D. Goldin, David Haddock, Thomas Huertas, Phillip LeVeen: Jorge Marquez-Ruarte, Pedro de Mello, Jacob Metzer, Clayne Pope, Joe D. Reid, Jr., Ralph Shlomowitz, Richard Steckel がいる。

私たちの研究グループで、Marilyn Gore Coopersmith.ほど欠かせない存在はいなかった。 奴隷制の効率性比較をめぐり研究プロジェクトの事務アシスタントを務めてくれただけで なく国立文書館のデータ収集チーム設立にも責任を負い、議会図書館やヴァージニア州の いくつかの文書館におけるデータリソースの事前調査も行ってくれた。多くの面で彼女は、手が届かないと思われた目標を実現するためのやる気と決意を提供してくれた。

Keith Allred と Edwin Andrus はソルトレークシティにおける系譜学会のデータ収集を先導した。ニューオーリンズのデータ収集チーム責任者は David King であり、国立文書館で同じ役割を果たしたのは Nancy Jo Lestina だった。ラレーの州文書歴史局に登録されたデータの収集を担当したのは John Russel Daniel である。Susan Groth は書誌調査を支援した。Forrest Nelson は主要な計算のほとんどを見事にプログラミングした。他にプログラミングを手伝ってくれのは Marjorie Crump, Chak Karuturi and John Olson だ。ほとんどのキーパンチを効率的にこなしてくれたのは Stephania Zalitacz だ。他の研究助手として Allan Boles, Gary Eriksen, Tapan Mitra, and Allen Sanderson がいる。ほとんどの一次草稿と、最終草稿のほぼすべての手書き原稿をタイプしてくれたのは、Marjorie Adams である。また Martha Colburn も各種手書き草稿のかなりの部分をタイプしてくれた。追加の秘書支援を提供してくれたのはロチェスター大学の Carol Bennett, Jane Chapin, Janet Wood と、シカゴ大学社会科学部門の秘書プールのメンバーたちだった。

データ探索を手伝ってくれたのは、国立文書館の Meyer Fishbein と William Lind、ヴァージニア大学図書館の Frederick D. Nichols、ヴァージニア歴史学会の John M. Jennings、ヴァージニア州立図書館の Randolph W. Church、ノースカロライナ州文書歴史部門の Paul Hoffman と George Stevenson、デューク大学パーキンス図書館の故 Virginia Gray、サウスカロライナ州文書歴史部門の Charles S. Lee、エモリー大学ウッドラフ図書館の David E. Estes、アラバマ州文書歴史部門の Milo B. Howard, Jr.、ジョージア州歴史学会の L. M. Hawes と

鉗撻

Charles Johnson 、アラバマ大学図書館の W. Stanley Hoole 、テキサス大学文書館 Chester Kielman 、ノースカロライナ大学南部歴史コレクション、ジョージア州文書歴史部門、サウスカロライナ州歴史学会、ミシシッピー州文書歴史部門、ルイジアナ州立大学文書館部門の会員や職員だ。

本書の完成は、フォード財団による研究フェローシップとシカゴ大学とロチェスター大学の研究補助金により加速された。

図表の引用や転載を許可してくれた以下の出版社や著者たちに感謝する (カッコ内の数字は、本書と補巻でその引用や図表が登場するページである): アメリカ政治学会 (I, 223-224), Hawthorn Books, Inc. (II, 173-174), Carnegie Institution of Washington (I, 45; II, 144, 146-148), Claudia Goldin (II, 152-155), Harper and Row, Publishers, Inc. (I, 261-262), アメリカ農業省 (II, 92-93),シカゴ大学出版局 (II, 205-206, 211-212).

本書では、奴隷制の経済学についての数量経済史研究者たちの成果を、なるべく冷静な形で提示しようとしてきた――とはいえ、「はじめに」と「おわりに」では、多少の個人的な気持も入り込むのを許しはしたが。とはいえ、アメリカの黒人奴隷制につきまとったイデオロギー的な圧力を、数量経済史研究者たちは受けていないという印象を与えたとすれば、それは読者を誤解させたことになる。個人的な偏見と客観的知識を選り分けようとする戦いは、終わりがないものだ。その戦いは、自然科学においてすら、必ずしも勝利をおさめてきたわけではない。まして社会科学では、その勝利はずっとむずかしいものとなる。そこでは研究対象は原子ではなく、人間だからだ。

知識と信念を選り分けるという問題は、歴史分野ではなおさら厳しいものとなる。歴史研究者が自らに設定した作業は、社会科学だけでは実現できない。歴史研究者は人間行動の全体像を理解しようとするので、その考察は社会科学の研究対象を超え、道徳や美学の領域に入り込む。社会科学の範疇に入るような問題についてすら、歴史学者たちは社会科学が答えられる以上のものを要求する。歴史学者たちが、社会科学者——経済学、社会学、政治学、心理学、文化研究——の取り組む人間行動の要素すべてを組み合わせて「シームレスな網の目」にしようとすればなおさらそうなる。

社会科学はそんなシームレスな網の目は提供できない。むしろ特定の知識体系を作り出す。たとえば、あらゆる経済活動を含むような理論はない。あるのは、所得分配、リソース配分、経済成長といった経済行動の特定側面を扱う、いろいろな理論だけだし、それもかなり限定された状況群の下についての理論でしかない。

科学知識の特定化された性質は、社会科学に限った制約ではない。当然ながら、物理行動すべての包括理論などは存在しない。単に流体、気体、光、エネルギーといった、おおむね個別性のある理論しかない。物理学者たちは、各種の個別理論をもっと一般化された理論に(少なくともある次元に沿って)統合しようと頑張ってはいるが、いまのところ限られた(とはいえ重要な)成功しか得られていない。こうした努力の最も野心的なものは、たとえばアインシュタインらによる統一場理論構築の試みなど、いまのところははっきりした成果につながっていない。

奴隷制の経済学の検討を、社会科学の手法で実現できるものだけに限定していたら、本書は補遺 B だけか、それをちょっと拡張したものに成りはてていただろう。この補遺は、奴隷制をめぐる数量経済史研究者たちの主要な結果の多くをまとめ、この分野の定量研究が持つ、対象限定的な性格を実証してみせる。

本文では、そうした新しい結果を、奴隷経済の性質に関するかなり包括的な再解釈へと まとめあげようとした。そのためには、もっともらしくはあるが現時点では確認はできな い想定を持ち出す必要も出てきたし、系統的な統計検定にかけるには断片的すぎるような、 追加の証拠にも頼らざるをえなかった。これは特に、奴隷制が黒人の性的道徳性に与えた 影響や、黒人が無能だというデタラメが生まれるにあたり人種偏見がどんな役割を果たし たかといった議論では顕著だ。

奴隷制の解釈において、しっかりした証拠が存在しないときには、先人たる歴史学者たち同様に、憶測を余儀なくされた。だが数量経済史研究者たちによる、包括的な定量研究を利用することで、憶測するしかない問題の数は大幅に減らせた。また証拠がしっかりしていて憶測が限定的な問題と、証拠が弱くて憶測に頼った部分が大半の問題とを、一般に行われているよりも明示的に仕分けしようとした。

解釈がイデオロギーの影響に最も左右されやすくなるのは、証拠が弱くて憶測部分の影響が最も大きい問題の場合だ。新奴隷廃止主義や南部歴史改変主義はかなり魅力的だ。というのもそれは、解釈問題に簡単な解決策を与えてくれるからだ。そうした理論は、不完全な歴史研究における粗雑で不整形な縫い目を覆い隠すための内容を提供してくれて、きれいでシームレスな網の目という印象をもたらしてくれる。そうした誘惑には抵抗しようとはしたが、自分たちが本書からイデオロギー的な影響をすべて排除できたなどとは主張するまい(そして実際にそんな主張はしない)²。

歴史学でしばしば見られる大理論(イデオロギー)は、実証的に有効な仮説の力を持つと自称するが、実

² 私たちの用法では、「イデオロギー」とは信念体系を意味する。そして「信念」とは、真実とされるが 未確認の主張であり、「知識」とは統計や各種の科学分野で使われているような客観的基準にしたがい検 証された主張を指す。

こうした定義から「イデオロギー」というのは歴史的行動についての未確認の理論や、関連し合った理論群の同義語だということになる。主要なイデオロギーは、一般に巨大で、複雑で、かなりいい加減に構築されている。そしてしばしば論理的に不完全だ。

したがって私たちの考えでは、南部の歴史修正主義と新奴隷廃止主義は、南北戦争以前の社会に関する、複雑でいい加減に構築された、未確認の理論でしかない。どちらのイデオロギーも、その主要な提唱者たちにより厳密な実証検定にかけられてはいない。彼らがデータを探すときにも、イデオロギーの有効性を検定するためであることはめったにない。ときには、イデオロギーのもっともらしさを強化するためにデータが探される。あるいは集めたデータをイデオロギーと組み合わせることで、行動についての新しい結論を導く為にデータ収集が行われたりする。言い換えると、こうしたイデオロギー主義者たちは、自分の理論が正しいという前提から出発しており、その上でイデオロギーと、彼らが発見したデータによってどんな含意が導き出せるかを考えているのだ。

イデオロギーはたとえば、立証責任をだれかに負わせるやり方に関係してくる。だから 奴隷の間には安定した核家族が発達しており、それはかなりの部分が黒人自身のニーズの 結果であり、単なるご主人様の圧力への対応ではなかったのだと示唆したとき、私たちは 逸れ威勢が独立黒人文化の発達を阻止したという伝統的な見方に挑んでいただけではない。 私たちは実質的に、黒人は南北戦争以前の時代に独立文化を構成していたと主張する人々 から立証責任をシフトさせて、奴隷がそんな役割を果たせたことを否定する人々に立証責任を負わせたことになる。こんなイデオロギー対立に首を突っ込まずにいることもできたが、そうはしなかった。首を突っ込んだのは、数量経済史研究者たちの様々な重要成果が、奴隷家族を巡る伝統的なパラダイムの中心的な想定に反するものであり、そうしたパラダイムが広範に受け入れられていることで、学者たちが奴隷制下の黒人文化の性質研究から目を背けることになったという可能性が明らかになってきたからだ。立証責任を、このパラダイムの支持者たちにシフトさせるのは、新しい証拠により正当化されるだけでなく、新しい洞察を得る方法としても適していると私たちは考える。

いまの数段落は、歴史執筆は単なる科学には還元できないと認めるものだ。だがそれは同時に、歴史研究は科学の手法と人文学の配慮を組み合わせる事で進歩するという主張でもある。私たちは、これが望ましいし、科学と人文学との間に残る分裂を終わらせられると信じている。この分裂は、少なくともビクトリア時代にまでさかのぼるものだ。この分裂は、ライオネル・トリリングが実に洞察に満ちた形で指摘した通り、当時の最も有力な知識人二人、T・H・ハックスレーとマシュー・アーノルドによって認知され、公式に述べられた。「理性的な真実と物質的な実務に根差す時代に必要な知識を供給すべき」なのは、文学ではなく科学なのだ、とハックスレーは論じた。これに対してアーノルドは、科学の提供する知識は、人間に関わるものでなければ役に立たないと答えた。そして、「科学知識を人間の全生活に関連づけるサービスは、文化により実施されるが、これは文学――純文学や文芸――に限られるものではなくあらゆる人間の知的分野で構成されるのである」と述べた。

この数十年にわたり、この問題は火山のようにほとんどの期間は休眠状態だったが、いつ噴火してもおかしくなかった。そして 1959 年、C・P・スノウが有名なリード講義「二つの文化と科学革命」を発表したことで、それが一気に爆発した。スノウは、科学行政官と小説家を兼ねていたことで、人文学と科学との間に生まれた断絶の規模について嫌と言うほどわかっていた。彼の見方では、人文学者と化学者たちは、職業集団として別々だと

はそんなものを持っていない。こうした競合イデオロギーの信奉者たちは、あれやこれやの事実群の解釈をめぐる壮絶な議論に入り込むのだが、そうした議論は証明されるべきもの――対立解釈の基盤となるイデオロギーの、実装的な有効性――を前提にしてしまっているから、決着がつくはずもないのだ。

いうだけでなく、まったくちがう二つの文化を構成していた。こうした文化を構成する 人々は、同じくらいの知性と社会的出自を持っていても、知的、道徳的、心理的な環境が あまりに隔絶しているので、もはや話も通じなくなっている。スノウによれば「彼らはあ まりに共通点がないので、まったく別世界に暮らしているとさえ言える」

スノウによる科学と人文学の分裂の扱いは、様々な批判を受けてきた。彼が描いた「二 つの文化」は、まちがいなくかなり浅はかすぎた。一つには、彼の言う科学はほとんどが 物理学と化学だけだ。また、それぞれの学問領域における専門特化の度合いにきちんと触 れていない。だからスノウの批判者の一部は、無限の文化があるのだ、とすら論じている。 だが科学と人文学の乖離を誇張するのがまちがいなら、それを見くびるのもまちがいだ。 確かに物理科学での専門分化はきわめて激しい。そして高エネルギー素粒子、マイクロ 波スペクトル分析、イオン輸送といったきわめて絞られた探究分野で研究する人々は、通 常は自分たちの専門分野の狭い範囲を、専門家として敢えて逸脱しようとはしない。それ でも、物理科学者たちは一方で、彼らを結びつけて人文学研究者たちと袂を分かつ、共通 の言語と手法を持っている。科学の共通言語は数学だ。それが採用されたのは、その制度 が一般言語の特徴であるあいまいさを取りのぞくからだ。一部の科学論考は言葉をほとん ど使わないから、外国の物理学者でも、アメリカ人の学者がかいた複雑な論文を理解でき てしまう。その外国の学者が、アメリカ人の著者と天気について世間話ができる程度の英 語すら使えなくても、それが可能なのだ。手法について言うなら、物理科学の旗印二つと いえば、変数の間の関係をめぐる厳密な記述 (しばしば方程式の形を採る) と、そうした仮 説的な関係をデータで検証することだ。

これに対して人文学は、自然現象などまったく考慮しない。人間の慣習、性質、制度、言語、思想、芸術表現を対象としている。こうした注目事項は、古典文学、英文学、ロマンス語、美術、音楽といった昔から確立された分野で追求されている。人文学が専門分野に分かれたことで、代償も生じた。ルネサンス美術の専門家は、スラブ文献学の専門的な側面についてはまったくわからないかもしれない。これはアミノ酸の専門家がパルサーについてまったくわからないのと同じだ。それでも、人文学研究者たちは、道徳と美的価値の重視を強調する点で結束している。ペロポネソス戦争を研究する場合でも現代音楽を研究する場合でも、その狙いは「経験と理解を豊かに」することであり、そのために「よいものの性質と人の善とは何かについて」考察する。人文学の言語は比喩や複数の意味合いを持つ言語で繊細に構築されている。これらは表現の美しさに大いに貢献し、読者の中に広範なアイデアやイメージを喚起する。そうした「不正確さ」は通常は、自己ではない。「豊かな含蓄のオーラ」を持って書ける能力は、若き書き手が目指す高等技能だ。人文学の特徴と言うべき単一の手法は存在しない。どれも経験の伝達に取り組んではいるが、伝

達という意味は様々だ。語り、執筆、四角、音楽、そうした基本形の何らかの組み合わせなどだ。こうしたコミュニケーションに必要な技能は、通常は年齢と共に高まる。小説家、作曲家、画家、哲学者は、その力量の頂点に達するのは中年か晩年だ。だから科学は若者の分野だが——数学者や物理学者はしばしば三十代ですでに「峠を越えている」——人文学はしばしば高齢の学者だらけだ。

リード講義の不思議な側面の一つは、スノウが社会科学を無視したことだった。この分野で頑張る学者たちは、スノウがあれほど懸念した断絶の橋渡しをしようとしている。彼らは、科学的手法を人間活動の研究に適用しようとしているのだ。社会科学の起源は、18世紀末と 19世紀にさかのぼる。だがこうした分野が確立したのは、20世紀になってからだ。現在ですら、各種の社会研究で科学的手法が適用されている水準はかなり不均等だ。たとえば経済学は、比較的「ハード」科学になった。経済行動について、大量の厳密な記述を開発している。そうした行動を数学化するという困難な問題は、驚異的なほど解決されてきた。そしてそうした方程式の係数推計にデータを使うための技法や、そうした方程式が適用できる分野を決める技法も考案されてきた。その一方で、社会学や政治学といった分野は相変わらずかなり「ソフト」だ。こうした分野では、「事実と評価」との区別は必ずしもはっきりしたものではない。行動モデルは必ずしも明示的ではない。そして、数式化して厳密な統計検定にかけられるほどきちんと記述されていることはほとんどない。

科学的な手法と人文学的な配慮をブレンドしてみても、スノーの二つの文化を一つにま とめることにはならなかった。むしろそれは「第三の文化」を生み出した。それが社会科 学だ。そして多くの人文学者たちは、自然科学からだけでなく、この第三の文化からも疎 外されている。おそらく、人文学者は自然科学者よりは社会科学者と話をするほうが多い だろう。また社会科学の中にも、人文学の伝統を使って研究を進める集団もいるのも事実 だ。だが少数派だし、科学の猛攻を完全には防ぎきれていない。だから人文学と社会科学 の間の対話は存在するものの、決して最高の形でそれが行われるわけではない。多くの人 文学者にとって、「ソフトな」社会科学の研究はしばしばお高くとまっているように見え る。社会科学者の専門用語を解読するにはえらく頑張らねばならないし、その結果として 得られるのは、すでにシェイクスピアが指摘したような人間行動の一般論でしかない。そ れならシェイクスピアのほうが脚注も少ないうえ、ずっとウィットに富んだ優雅な形で行 っている。さらに呆れたこととして、「ハード」社会科学者たちは、学習、言語発達、親 族、政治紛争といったきわめて複雑な人間滑動を、方程式やその群れで解決しようとして いる。多くの人文学者にとって、人をまるで原子のように扱おうとするこの滑動は、究極 の愚行だ。彼らとしてはそんなくだらないおしゃべりなど、無視して一向にかまわないこ とになる。そして多くの人文学者はまさにそうする。唯一の例外はといえば、だれかがま

ちがってフランス革命の数式モデルを含む論文を送りつけてきたときに、たまに書斎の奥 でこっそりせせら笑ってみせるときくらいだ。

だが無視できないときもある。社会科学の文化から孤立して生きるためには、そこに済む人たちから多少なりとも協力が必要だ。そして人文学で最も重要な分野の一つ——歴史学——の場合、その最低限の抑制すら見られない状態だ。1950年代にこの分野を侵略したのは経済学者たちだけではなかった。社会学者、政治学者なども乗り込んできた。その全員が統計手法やコンピュータプログラム、人間行動の数式モデルでガチガチに武装していた。歴史学者の主流は、この侵攻を無視しようとした。敵の手強さがわかれば侵略者どもはすぐに逃げ出すと思ったのだ。あるいは、これまでの数多くの蛮人侵略と同様に、彼らもやがて同化されてしまうと思っていたのだった。

1950 年代末の侵略は、歴史学者たちが科学の軍門に降れと言われた最初の機会ではなか った。19世紀最後の十年では、ヘンリー・アダムズやハーバート・バクスター・アダムズ といった傑出した人々が、生物学での革命的な発見、特にダーウィンの業績に深く影響さ れ、さらに生物学が熱力学の法則により物理学と統合された様子にも感銘を受け、「歴史 は自然の宇宙との連続性を示すのであり、自然と同様に (中略) 法則に支配されている」と いう見方を提唱するようになった。だが歴史の法則を発見する活動に全面的に取り組もう という彼らの訴えはほぼ黙殺された。彼らやその生徒たちの活動は、いくつかおもしろい 研究も生み出したが、主張していた目標にはとうてい及ばなかった。もちろん、それは失 敗を余儀なくされていた。まだ社会科学が幼かった時代に活動していたというのもある。 現代統計手法もなく、コンピュータもなく、人間行動の厳密に定式化されたモデル開花も まだ到来していなかった時代なのだから。だがそれだけではなく、人間行動が物理学で見 つかるものほど安定した方程式で記述できるという彼らの想定自体が、まったくのまちが いだったのだ。人間行動の系統的な部分が極度に制約されているのを彼らは理解していな かった。そして、政治、経済、社会生活において、系統的な要因と偶発的な要因とが相互 作用する複雑なやり方も理解していなかった。また新しい数理体系の開発において、どれ ほど壮絶な作業が待ち構えているかもわかっていなかった。というのも、19 世紀半ばの物 理科学者たちには実に公的だった数学論理は、社会科学のニーズには不十分だからだ。

19世紀末の体験は、20世紀半ばに繰り返されることはなかった。新しい数学と統計的な技法の助けを借りて、さらには行動モデルの適切な利用を通じ新世代の科学的歴史研究者たちは、歴史研究のいくつか重要な分野について大きく貢献した。その例としては、はるか17世紀までさかのぼる、欧米における各種階級の社会移動性研究、19世紀の議会行動の分析、人口史、革命など各種の集合的暴力の研究、都市史、経済史などがある。数量経済史の実績が増えると、こうした研究は歴史学の主要な人文学者たちからかなりの注目を集

めただけでなく、彼らから指示されることにもなった。

残念ながら、数量経済史研究者たちは、必ずしも人文主義の伝統に連なる先輩歴史研究 者たちから受けた恩恵について、感謝してきたとはいえない。自分の関心にばかり専念し て傲慢だったため、私たちの一部は先人たちの肩にどれほど自分たちが立っているかが見 えなくなっていた。これは特に経済史の分野で顕著だった。この分野では多くの先輩歴史 学者たちが、学生たちに数学手法を試すよう奨めていたのだった。そうした支援がたまに 認知されることもあったが、多くの数量経済史研究者たちは、先人たちの失敗にばかり中 毛する傾向があった。古参の経済史研究者たち、人文学の伝統に最も入り込んでいる人々 は、大量の罵倒に曝されることとなった。アメリカ経済発展の伝統的な解釈は、一連の暗 黙かつ未確認の前提に基づいているのだ、と私たちは述べた。そうした前提の中には、経 済活動の重要な側面の規模についての、暗黙・明示的な見方もあった。だがそうした人文 学の説教師たちは、実際の計測を行うために必要な面倒な作業にはまったく取り組まなか った。さらに、数式を嫌うかれらは、自著や論文に複雑な行動モデルをこっそり持ち込ん でいるという事実に鈍感になっていた。こうした暗黙のモデルの多様は特にひどいものだ った。というのも最も評価の高い伝統的研究の一部が根底に持っている、数学的な性格は、 言葉によって巧妙に覆い隠されていたからだ。高齢者たちがそうしたモデルへの依存を明 示的に認めたがらないことで、おめでたい、ときには卑しいほどの、科学や論理的な手順 の濫用が引き起こされたのだった。

こうした批判がどれほど有効だったにしても、それが実に尊大な形で行われたために、 人文研究者たちと数量経済史研究者たちのコミュニケーションにはまったく役に立たなかった。残念ながら、歴史上の定量手法の役割をめぐる多くの論争は、学者よりも政治イデオロギーの対立主張者にふさわしいような、党派性とドグマ性に蝕まれてしまった。「人文学」と「社会科学」が、ある程度はイデオロギーの性格を帯びてしまったのだ。

このイデオロギー的、または準イデオロギー的な献身が、科学手法を人文学的な懸念と混ぜる障害になるという点は、1967 年 9 月にフィラデルフィアで開催された、経済史学会の第 27 回年次総会における異様なできごとで強調されることになった。そこでの主要パネルディスカッション「経済成長の障害としての奴隷制」は、奴隷制の経済学を再解釈しようという数量経済史の結果を評価する、という使命を与えられた。コンラッドとマイヤーが、新経済史と、奴隷制の伝統的な分析のレビューを立ち上げる二つの論文を提示したのは、ちょうど十年前だった。最初の論文は手法的なものだった。それは歴史問題への経済学の数学統計モデルを適用するための、一般的ながら系統的な方法を提示していた。二本目の論文「南北戦争以前の南部における奴隷制の経済学」は、そうしたモデルのいくつかを活用して、奴隷所有者にとって奴隷の購入が儲かる投資だったかを見極めた。

この論説は、大いに話題となった。1958 年 4 月にそれが発表されると、この分野の歴史で最も広範かつ熾烈な論争の一つが引き起こされた。そしてそれに刺激を受けて、新たな宗教改革に参加しようとする、大量の新進経済学者たちを経済史に参入させることとなった。こうした後の偶像破壊者たちは、コンラッドとマイヤーが抽出した問題に注目した。その結果は、奴隷制の経済的な働きをめぐる、「科学的」再解釈を生み出そうとする大量の論文だった。フィラデルフィアの瓦解は、この新しい様式における研究が十年続いた後だったから、それを振り返る絶好の機会だった。また数量経済史研究者たちが、自分たちのアプローチの有効性を検証するための最大の分野として何よりも重視した話題を使い、その評価をしようというのも、適切な話だった。

「経済成長の障害としての奴隷制」のセッションを開始したのは、議長モーゼス・アブラモヴィッツ (スタンフォード大学) だった。アブラモヴィッツはまず、議事次第を慎重に説明した。コンラッドとマイヤーがまず 20分の基調講演をして、彼らの論説がもたらした十年にわたり論争を振り返る。このオープニングに続いて、コメンテーター六人が主張を行う。その三人は数量経済史のアプローチに好意的で、三人は批判的だ。批判者の一人、コーネル大学のダグラス・ダウドは、二十分与えられる。他のコメンテーターたちは、十分ずつだ。一通り主張が終わったら、パネルの各人は、一巡目の好きな論点について、コメントまたは回答が許される。そして会場からも手短な意見が許される。

このセッションの計画には、きわめて慎重な配慮が伴った。それはコメンテーターの選択を見ればわかる。新経済史の批判者と支持者との間でバランスが採られただけでなく、それぞれの中でも視点の多様性が確保された。批判者のうち二人、コロンビア大学のダグラス・ダウドとエリ・ギンズバーグは、人文学の伝統に連なる経済学者だ。彼らは現代経済学の大きな特徴となった数学モデルへの傾倒を大いに批判しており、そんなモデルを歴史に適用する試みを叱責していた。だがそうした点について合意しているからといって、他の点で合意しているわけではない。ダウドはマルクス主義者で急進活動家だが、ギンズバーグはそのキャリアの大半を、アメリカ陸軍、国防省、国務省、労働省といった政府機関への助言に捧げてきた。第三の批判者、ダートマス大学のハリー・シーバーは、伝統的な訓練を受けた歴史学者で、幅広い関心を持つ。数量経済史をちょっとばかりかじってから、彼は定量アプローチの有効性に懐疑的となり、当時は研究を、法律と経済変化の相互関係に向けていた。シーバーは32歳で、批判者三人の中で最年少だった。ギンズバーグは56歳、ダウドは48歳だった。

数量経済史の批判者と擁護者の年齢差は顕著だった。支持者三人のうち二人は、まだ大学院生だった。リチャード・サッチは早熟な 25 歳の若者で、学部生時代にすでに、奴隷制の経済学再解釈に大きく貢献する論文を一本書いていた。その三年後の当時、MIT で博士

論文を完成させようとしているところで、カリフォルニア大学バークレー校で、経済学助教授としての最初の仕事を始めるところだった。もう一人の大学院生はマーティン・ケルソで、ハーバード大学で博士論文に取り組んでいた。彼は22歳で、まだ就職するほどの訓練は受けていなかった。本書の著者の一人エンガーマンは、パネルの三人目の数量経済史研究者で、31歳だが三人の中で最年長だった。

基調発言を行ったのはアルフレッド・コンラッドで、ジョン・メイヤーとコンラッド自身の共同の立場を述べたものだった。奴隷制の収益性に関する分析を含む論文を最初に提示したとき、この問題を「一気に解決した」と思っていたそうだ。ところが、彼らは新たな論争を引き起こした。それはその論文の以前に見られたものよりもはるかに強烈な論争を引き起こしたのだった。彼らの元の論文 2 対する批判は三種類にわかれた。事実関係のまちがいと称するもの、理論モデルの何らかの専門的な側面についての疑念、そしてそのモデルが、専門的に見て正しかったとしても、奴隷制の根本的な問題理解にはどうでもよいものであり、こうした問題の解決には使い物にならない、というものだ。

コンラッドは、いくつかの事実関係のまちがいをあっさり認めた。だがそれを修正しても、奴隷投資の収益性推計値にはわずかな影響しかないか、むしろそうした投資が儲かるものだったという結論がさらに強化される結果になるだけだった。技法的な批判は一般に、収益性の問題を扱うときの別の、おそらくはもっと優れたやり方を提案するという形を採った。コンラッドは、こうした別のモデルが自分とマイヤーの採用したものよりもいくつか長所を持っていることも認めた。だがそうした代替アプローチも、自分たちと同じ結論に到達するものだったから、その新しい研究は、当初の発見を裏付け、高度化して敷衍するプロセスの一部として見るのが適切だった。

コンラッドの最大の反発は、批判の第三種類目についてだった――奴隷制は「ただのビジネスの一つ」などではなく、農園主たちの行動は、普通の資本家の行動を説明するために開発されたモデルで説明などできないから、という理由で彼らの研究を一蹴する批判だ。コンラッドは、南部の農業を非効率にしている社会、政治、心理的な奴隷制の影響を無視しているから、彼らのモデルは無意味なのだという主張に反発した。そのモデルでは、奴隷制が支配階級を腐敗させ、資本を顕示消費に浪費するよう誘惑した話が反映されていないというのだ。また、奴隷制が現代工業に対する不合理な忌避を生み出し、それが南部の停滞に直結した様子も反映されていないという。こういう議論をする人々は的外れだ、とコンラッドは述べた。

私たちは奴隷保有が「単なる一事業」だなどと証明しようとしているのではない。 (中略) 私たちが利潤についての証拠を探していたのは、それが存在しないとされて

いるのを理由として、アメリカ南北戦争が実は不要だった、という議論が行われているからだ。私たちは、奴隷制における競争的な利潤の証拠を見つけたと思っているし、それをもとに、まずそうした利潤こそが、南部の蛮勇やゴシック的想像力といった話だけでなく、南部が戦おうとした意欲を説明する追加の重要な根拠だと思っている。そして二番目に、そうした利潤はさらなる成長の資本を提供できた。(中略)さて、経済的な現象がすべてを説明できるわけではないと認めたからといって、物質的な条件の検証を歴史研究の外部に追いやるべきだということにはならない。私たちは奴隷が単なる資本でしかなかったとは思わないし、南部の真摯が単にホモ・ジャーベル[創り出す人]に過ぎないとも思っていない。だがだからといって、資本モデルがどうでもいいということにはならない。(中略)また奴隷からの所得ストリームの資本化が単なる妄想や作り話だということにもならない。歴史はホモ・ジャーベルを通って生じるし、物質的な条件の生産、法律や習慣、信念、文明様式、意識の中身の生産や改変すら経由して生じる――こうしたすべては相互に貫通し合い、完全に相互的なのだ。

このコンラッドとマイヤーによる主張を聞いても、ダグラス・ダウドはまったく納得し なかった。彼の最初の発言は、かなり露骨な侮蔑をこめたものに聞こえた。「新経済史の 研究者たちは、何やら心軽やかな伝道師のような心構えをもたらすらしい。彼らのイノベ ーションに異議を唱える者たちはそれと比べると、鈍重で古くさく、新たな真実に怯え、 ヘタをすると真実そのものを恐れているように見えてしまう」。もちろん、ダウドは自分 を頑固な反対者の役割に置いた。奴隷制の収益性など、どうでもいい問題だと彼は糾弾し た。そんなものにこだわることで、コンラッドとマイヤーは、奴隷制が南部経済の成長と 発展に与えた影響という決定的な問題から関心をそらしてしまったのだという。彼らのモ デルは「拡大し、深め、拡張された関与の感覚を必要とする探究分野を断片化」するだけ のものだ。ダウドにとって、南北戦争以前の南部が持つ中心的な特徴は、奴隷制と綿への 依存だった。南北戦争以前ですら、この依存が地域の経済的な利益に反するものだという しるしは見られた。1870年代になると、南部は綿価格の急落に直面していたはずだ。この 問題はさらに、この仕組みが奴隷労働の供給を「経済的に有効な規模の範囲」に維持でき ないことで悪化したはずだ。ダウドにとって、この結論は不可避だった。1860 年以降の経 済発展と持続的成長は、奴隷制の下ではあり得なかった。コンラッドとマイヤーなどの数 量経済史研究者たちは、この論点を見落としているのだという。

他の批判者二人のコメントもダウドの議論を補強するものだった。ギンズバーグとシーバーは彼の主張を補う議論として、五つの論点を追加した。まず、奴隷制は南部連合の破

壊につながった。第二に、奴隷制は南部できわめて不平等な所得分配を作り出した。第三に、奴隷制は奴隷教育を犯罪にすることで、人的資源の開発を阻害または阻止した。結果として、教育を受けた奴隷はきわめて少数であり「南部の黒人人口の大半には、己を向上させるインセンティブがなかった。それどころか、彼らは最大限の強制がなかぎりできるだけサボるというきわめて劣悪な習慣に陥ったのだ」。第四に、長期でも短期でも、「労働と社会統制のカースト制度」は南部労働の生産性を引き下げた。第五に、奴隷は「工場では使えなかった。なぜなら工場雇用と奴隷制は相容れないからだ」

三人の数量経済史研究者たちは、コンラッドとマイヤーの研究を擁護するかわりに、奴隷制の定量分析をこの新しい問題に拡張した。サッチは奴隷に大量の資本を割いたことで、南部の資本が工業工場への投資が奪われたかを推計しようとする論文について説明した。ケルソは、奴隷の雇用分析を綿の生産からタバコ、砂糖、米の生産に拡張しようとする試みについて述べた。彼らの計算の結果によると、奴隷所有者たちはコンラッドとマイヤーが綿について得たのと同じ収益率を、他の作物でも得ていた。ここからケルソは、南部の経済は資本を各種の活動の間で効率的に配分できたのだと結論した。この結論は、各生産分野での似たような投資が同じような収益率をもたらしたという事実だけでなく、「初期投資が他より大きく、したがってリスクの高いプロジェクトで、収益率が高かったという事実」からも導かれるものだった。

エンガーマンは、所得や資産の分配をめぐる研究について報告した。南北戦争以前に、南部の所得分布が北部に比べてことさら不平等だったという証拠は見つからなかった、と私たちは述べた。私たちの推計では、アメリカにおける資産分配は、最近の方が南北戦争以前のミシシッピー州よりも偏っている。エンガーマンはまた、奴隷制が南部白人の大半を貧困に追いやったという主張も否定した。私たちの計算によれば、南部の一人あたり所得は、ずいぶんと誉めそやされている北部中央地域よりも高い。また奴隷制は南部を停滞させていたわけでもない。1840-1860年には、南部は全米平均よりも高い成長率を示していた。午後になって、私たちの研究の別の側面も発表された。フォーゲルが観客席から、南北戦争がなくても、世界市場の綿需要低迷と、奴隷労働が土地に与える圧力のために、南部経済は1870年代に危機に陥っていたはずだというダウドの主張を疑問視してみせたのだ。フォーゲル曰く、私たちの分析では19世紀を通じて世界的な綿花需要はまったく衰えを見せていない。それどころか、南北戦争後60年間にわたり、世界の面需要は南部の供給をはるかに上回っていた。

午後遅くになるにつれて、私たち二人は数量経済史分析に対する批判が的を外している と、ますます確信するようになった。というのもそうした批判は、定量手法は収益性の問 題を扱うときにしか使えないという思いこみに基づいていたからだ。批判者たちは、収益

性の問題などどうでもいいのだと一蹴していたのだ。だが討論によって、経済モデルは批 判者たちが投げかけた実に様々な問題にも適用できるし、まさに目下適用されつつあることを示した。

私たちが手遅れになるまで気がつかなかったのは、議論の調子と性格が変わったことだった。会合の開始時に感じられたちょっとした緊張関係が、次第にお互いへの苛立ちに変わった。批判者の一部は、数量経済史研究者たちの、冷たい距離をおいた態度が気に入らなかった。奴隷は汚い事業であり、まともな人間なら必然的に頭に血が上る。だが彼らの前にあらわれた私たちは、奴隷制への怒りを示すどころか、人間隷属の残酷な仕組みに対してほとんど魅了されているようにすら見えたのだった。逆に当方は、批判者たちがあまりに感情的すぎて脊髄反射でしかものを言っていないように感じた。批判者たちは「実際にどうだったか」よりも「どうあるべきだったか」にばかりこだわっていた。後進的な政治システム、ひどい社会システム、唾棄すべき道徳システムが、それでも画期を持ち、深く根を下ろした急成長する経済システムだったという可能性に対し、彼らが青ざめてしまうのは、純粋なロマン主義のせいでしかない、と私たちは確信していた。

苛立ちはすぐに激昂へと変わった。奴隷制が儲かるなどと主張するだけでも十分ひどいのに、いまやこちらは、奴隷制が効率的で、高い経済成長率をもたらし、所得分配も目に見えて歪めたりはしなかった、と論じているようだった。次には、黒人は自由になるより奴隷制のほうがよかったとでも言い出すつもりか?奴隷制廃止はまちがだったと納得させようとするのでは?わけのわからないモデルで、証拠をあれやこれやと歪曲して、自分たちを手玉に取っているのでは?自分たちの主張を本気で信じているのか、それともバカなリベラル派を驚かせようとしているだけなのか?人種差別思想に染まってしまったのか?1967年に生きる人間ともあろう者が、三百年にわたる残虐な収奪をなぜここまで軽視できるのか?

こちらの一派も同じくらい激昂していた。どうして私たちの動機などを詮索されねばならないのか? どうして科学研究における客観性が「鈍感」だの「冷酷」だの言われねばならないのだ?数量経済史研究者の特有の貢献は、社会科学の統計手法や行動モデルを、関係した歴史問題の解剖と分析に適用できることだ。この活動の成功は、現代の病院の手術室と同様に、冷静で客観的な形でその専門技能をうまく利用できるかどうかにかかっている。1967年の状況では、必要な客観性を維持するだけでもむずかしく、ましてその魂胆だの善意だのをしつこく証明しろと言われるようならなおさらだ。糾弾者たちは、ここまで己の正しさを確信しきれるほどのすごい行いをしているのだろうか?

こうしたお互いに対する非難の思いが、ついに表に噴出した。恐ろしい表情でにらみつけたり、人種差別だという糾弾がほとんど露骨に述べられたり、そんなのはおめでたいロ

マン主義だという辛辣な糾弾が飛び出したりした。みんな紅潮し、声を張り上げた。証拠の理性的な検討は、情熱的な演説の噴出に埋もれてしまった。身ぶり手ぶりがあまりに激しくなって、ほとんど険悪になった。共通の問題について長年研究してきたことで得られた仲間意識はボロボロになり、私たちは怒りでお互いから顔を背けた。学術的な議論が、当時の感情主義に負けてしまった。

この崩壊をもたらしたのは何だろうか?

一つ影響した要因としては、人種関係をめぐる全国的な緊張があった。1967年には、人種暴動で放火、暴力、死がアメリカ都市をのみこんだのをお忘れなく。最初の大きな戦いは、1965年8月にロサンゼルスのワッツ地区で起きた。そこでは一万人以上の黒人が一夜のうちに街頭に繰り出して、50平方マイルの地域に無秩序をつくり出した。当初はワッツは単独の事件だと思われていたが、これは暴動の波となって、後に1966年にはオマハ、ミネアポリス、シカゴ、クリーブランド、アトランタに広がり、1967年夏のニューアークとデトロイトで頂点を迎えた。1967年に人種紛争で荒れた都市の一覧は百都市を優に超え、死傷者——ほとんど黒人——は死者83人で負傷者1897人にのぼった。

当然ながら、9月8日に「経済成長の障害としての奴隷制」を議論するためにフィラデルフィアに集まった私たちは、アメリカのまとまりを再び脅かしたこの騒乱を知らないわけではなかった。アポマトックスでの南軍降伏から一世紀たって、アメリカは全面的な内戦寸前にまで行き着くかのようだった。今回戦旗をひるがえしているのは奴隷所有者たちではなく、三百年にわたる不正を糺すために革命も辞さない奴隷の子孫たちだった。「我々は解放を得るためにまず銃から始める」と黒人武闘派ストークレー・カーマイケルは宣言した。「我々の唯一の答は政府を破壊するか、破壊されるかだ」。フィラデルフィアの廊下ではこの危機についての話が大量に聞かれたし、危機についての懸念は学術論争専用のはずの会場にもしっかり浸透してきた。

フィラデルフィアでの議論に先立つ三ヵ月のできごとは、その議論にことさら角を立てるものではあった。だが激しい感情的な爆発が、右派と左派、急進派と保守派といった、通常の政治分類に沿った分裂の結果だと考えるのはまちがっている。 数量経済史の立場に対する攻撃を率いたのは、有名な急進派たるダウドだが、彼の主要な仲間はエスタブリッシュメントの文句なしの一員だ。さらに数量経済史研究者たちは、決してガチガチの反動主義者などではなかった。マイヤーは、経済史研究に加え、都市経済学の専門家でもあり、黒人ゲットーの問題に長く取り組んできた。だがアメリカで最も権威ある経済学研究組織たる NBER 会長という地位が、左派にとっては肩書きとして受け入れ難いものだったとしても、その共著者についてはそんな疑念を抱く余地はなかった。コンラッドは武闘派急進主義への傾倒においてダウドに負けないほどの実績を持っていた。この事実は彼が後に二

ューヨーク・シティ大学で「オープン入学」キャンペーンの指導者として得たかなりの悪名により、強調されることとなる――これは黒人やプエルトリコ人の学生に対して、通常の学業基準を満たさなくても入学を認めさせようというキャンペーンだ。この問題をめぐる公式方針に対する彼の妥協知らずの反対や、ストやデモを率いる過激派学生に対する主要な教授会顧問としての役割は、教授会のもっと保守的な人々の反対をあまりにかきたてたので、コンラッドはやがて経済学部長の職を辞した。

両サイドを分裂させてきた問題は、単に通常の政治分類で仕分けることはできない。なぜなら急進派も反動派も、その中間のあらゆる政治グループは、奴隷制の伝統的な解釈を受け入れていたからだ。それぞれのグループはこのおとぎ話から、自分たちの政治綱領を正当化するのに必要なものをつまみ食いしている。急進派は、内部の経済的矛盾を指摘することで、奴隷制の糾弾を強調し、労働の劣悪な条件を、黒人アメリカ人に対して負う賠償金請求に上乗せしようとする。別の政治色を持つ集団は、奴隷制の崩壊が不可避だったという議論を使って、拙速で浅はかな政治的介入の結果として国に災厄が起こりかねないぞと警告してみせる。また別の一派は、黒人労働の非効率性に関する「歴史的記録」を使って、雇用差別を正当化しようとする。

数量経済史による再解釈は、こうした各種の立場の根本基盤を、実に無遠慮に攻撃したので、あらゆる政治的な立場の代表者たちの不興を買ったのだった。それぞれの派閥の所属者たちは、自分たちの大切なプログラムについて、新しい正当化方法を見つける必要性に迫られた。それぞれの派閥の多くの人は、歴史とのつながりを再構築するための新しい合理化を探すよりも、歓迎されざる発見を糾弾するほうが適切だと思ってしまった。

つまり、フィラデルフィアにおける激しい感情的な爆発は、各種のちがった要素の相互作用によって生じたものだった。私たち定量研究者たちは、あまりに多くのものを疑問視して、ほとんど妥協しようとしなかったので、奴隷制の伝統的な解釈になじんだ歴史学者であれば、だれでも頭にくるのは当然だ。人生の実に長い年月を捧げて、伝統的な南部史の織物を編み上げてきた人々は、私たちの攻撃に対していい顔をするはずもなかった。私たちは、人文学者たちの理解できない言語にしばしば頼り、あまり関係がなさそうに見える行動モデルを持ち出し、最も情熱的で個人的な人間の問題を、跡形もないまでに冷酷かつ生気の無い用語に置きかえることで、彼らの傷口に塩を塗ることになった。そして何よりも、これは若き新参者にありがちな傲慢さをもって行われた。

だが奴隷制の経済学を再構築しようとする私たちの試みが投げかける知的問題にとっては、失礼かどうかなど関係ないし、伝統的な解釈に基づく著者たちが礼儀正しいかどうかも、どうでもよいのだ。本当の問題は、定量手法がこれまで提示されていたものよりも、奴隷制について正確でしっかりした全体像を生み出せたか、ということなのだから。